博文館創業二十週年紀念

女學世界増刊第七巻第九號

現代婦人成功立志談



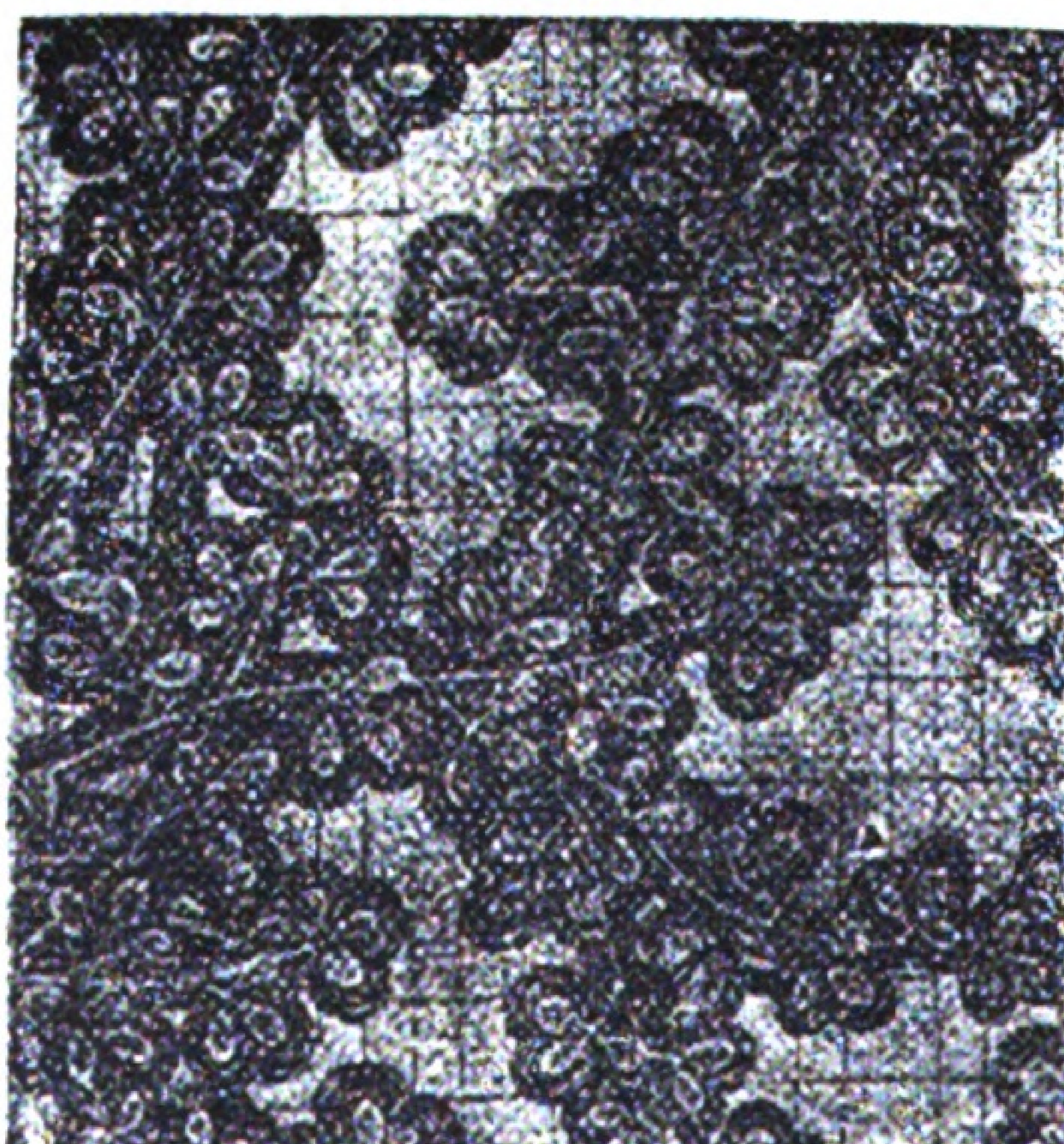
新柄中形浴衣地

東京市日本橋區駿河町

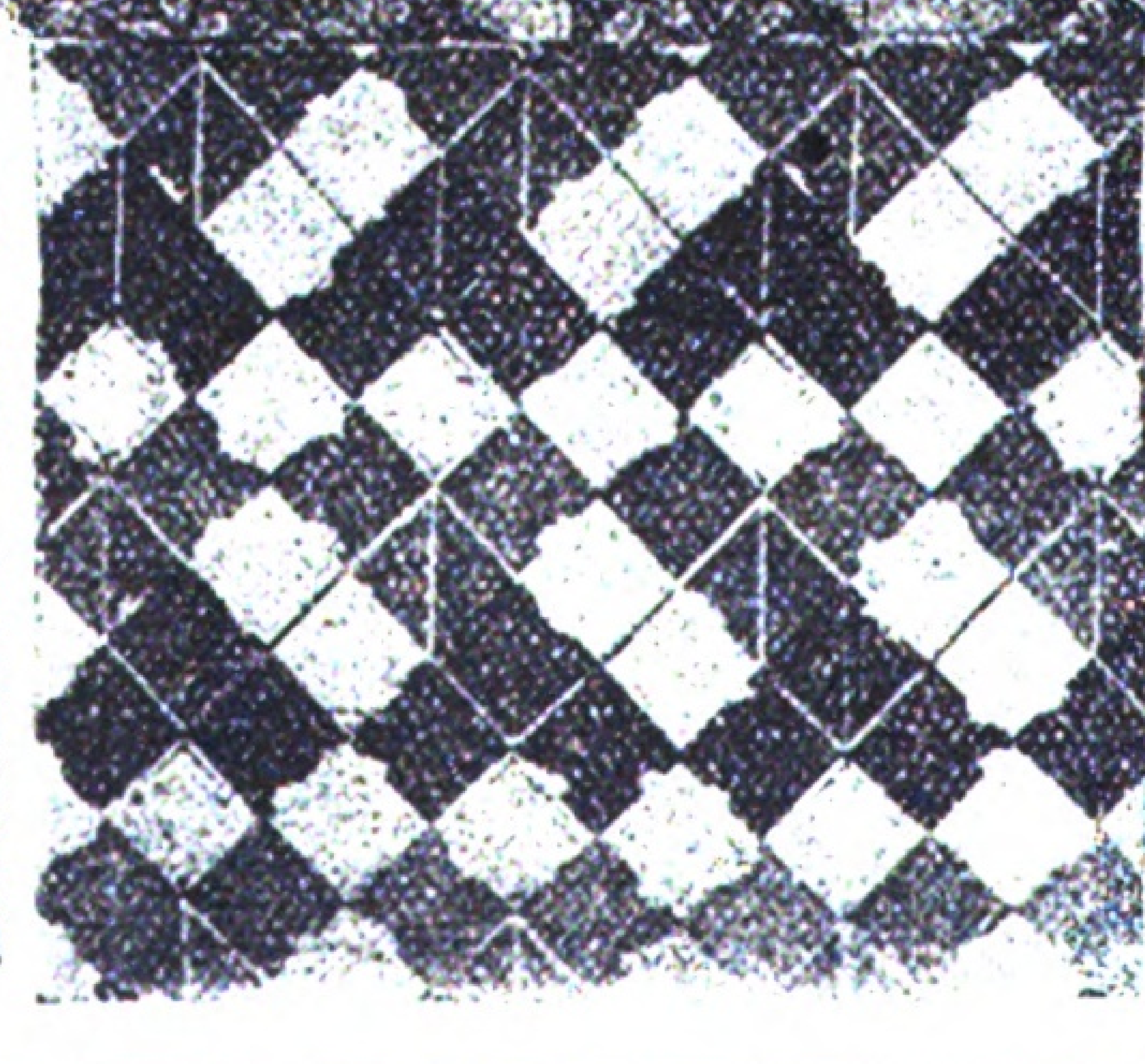
三越呉服店

（振替貯金番號三〇〇番）

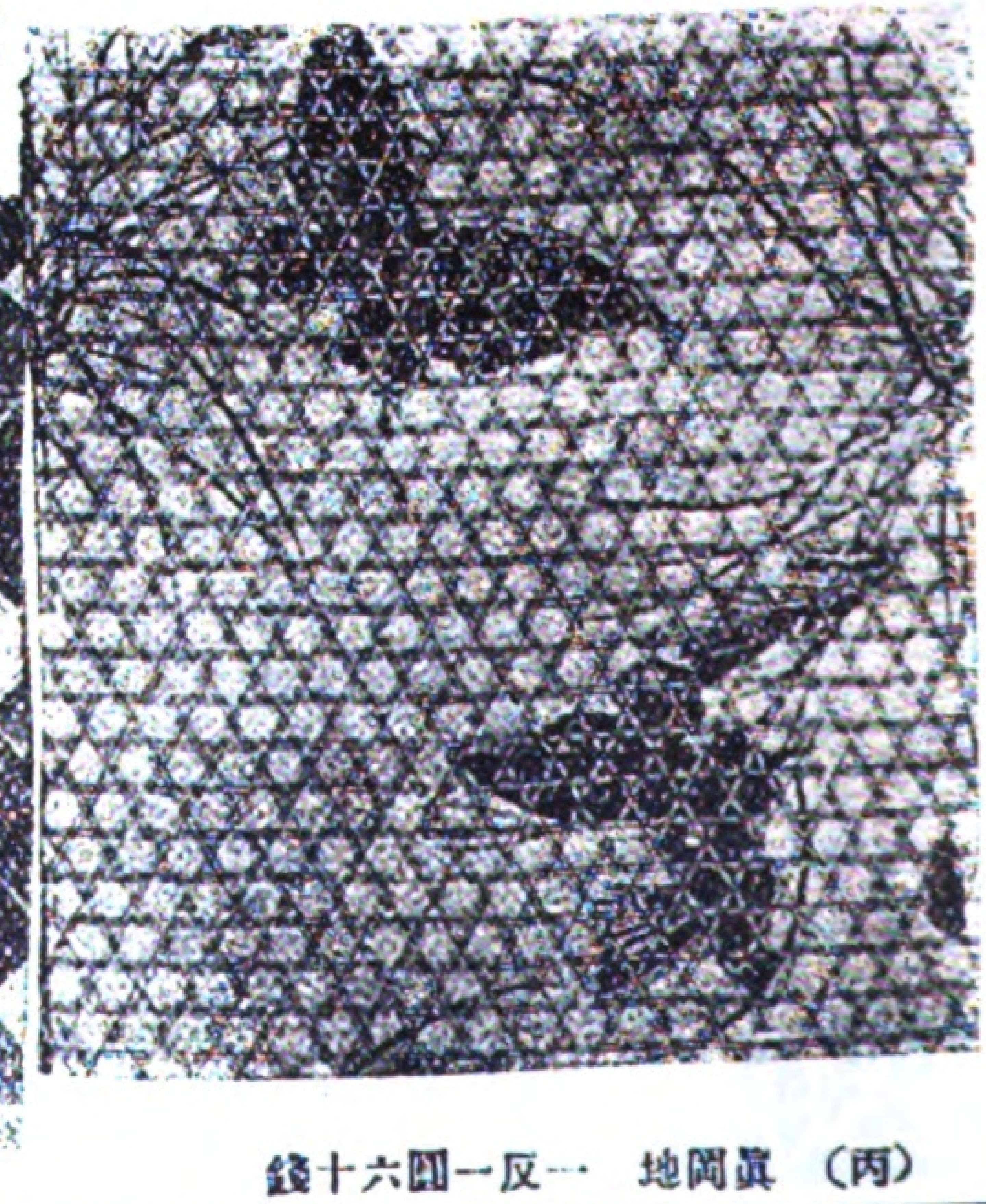
本年流行せる新柄中形浴衣地種々取揃置申候間御注文被下度候。尚夏衣裳の調製を詳細に記せる極て美麗なる圖入り「夏衣裳の巻」と題する册子は御一報次第早速進呈可仕候



（甲） 眞岡地　一反一圓四十五錢



（乙） 眞岡地　一反一圓七十五錢



（丙） 眞岡地　一反一圓六十錢

女學世界紀念增刊 現代婦人成功立志談 第七卷第九號 目次

口繪

寫眞版


美術造花
附屬品材料
装飾一式
◀營業品目▶
●内外草木美術造花●室内及屋外装
飾造花●花籠●花輪●ポンチツト用
造花
●寒冷紗●ブラシ●羽二重●道具●
紙細●蕊●萼●針金●管類●光澤色
素其他藥品類
●染色器械●打拔●押形●鏝●其他
器具類
◎營業目錄は御申越次第進呈可仕候
東京市神田區鍋町拾番地
日本造花株式會社
電話本局一二六五
振替貯金口座八一三三
◎製品は材料を精選し染色法を改め最新式スターペタルを應用し不變色色素を使用す故に在來製品とは全く其趣を異にせり
◎材料は獨逸マヤー、グース會社と全國一手販賣の特約を結び直輸入を爲す故に品質優等價格低廉なり
◎器具類は弊社鐵工場に於て製作し試驗の上販賣を爲す故に正確廉價請合なり

女(いの一)

袴乃親玉



御（み）部

東京日本橋長谷川町

美濃磯本店

（電話浪花二八五九番）

本郷五丁目　美濃磯支店

淺草區諏訪町　美濃磯支店（電話下谷一四一五番）

日本橋佐内町　美濃磯支店

深川區高橋際　美濃磯支店

神田區小川町　美濃磯支店

芝區新櫻田町　小田商店

牛込區神樂坂　伊澤商店

四谷傳馬町一丁目　伊澤支店

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子



肺病者救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療法は醫界**新紀元**也我國に傳へ公私病院長二十七名の醫家實驗**不思議**の効果を確認せる全治報告並根治療法根治薬名詳説の雑誌を同胞患者救濟の為**無代**ハガキで申込次第進上

東京市京橋區越前堀

樂天堂藥房

女（いの二）

◁清新なる家庭に備ふべき高潔純良の新著▷

新刊發賣

文學博士 桑木嚴翼先生序
文學士 木村猪久次先生序
大鳥居弃三君
澤田順次郎君 共著

婦人論

附錄社會的色情衛生論

本書は總兩面より婦人を研究し生理的狀態、先天的特長、心意的識能等を説示し過去、現在及び未來に於ける婦人の地位、境遇より社會の進歩に伴ふ婦人の責任等を論述したる者にして紛糾せる現時の社會に根本的解決を與ふるの新著として教育家、經世家、及び父兄、學生、家庭に向つて速に繙き見るべく一本を薦む。

洋裝美本全壹冊
斬新挿圖貳拾餘
正價金五拾錢
郵稅金八錢

好評 増補十版

理學博士 坪井正五郎先生序
師範學校長 遠藤正先生序
大鳥居弃三君
澤田順次郎君 共著

男女之研究

男女の起源、發達、生殖上の差異及び現象、發生發育、形質上の差異、生活上の差異、地位、關係等諸方面より男女を研究せるものなり。家庭の讀物として好評嘖々たり。

第十版の紀念として増補せる性愛論は有數の出色文字なり

洋裝美本全壹冊
色刷寫眞圖數葉
正價金五拾錢
郵稅金八錢

再版 好評嘖々

文學士 樋口秀雄君序
文學士 小山東助君序
文學士 徳谷豐之助君序
文學士 内田旭君著

愛之進化

人類の愛情、男女の愛情の要素、愛の歴史、夫婦の愛情と男女の愛情、老孃、未婚男子、天才と結婚、天才と愛、狂氣と愛等の拾餘章に分ち最も眞面目に説述せる最近の快著なり。

挿圖（ダンテの夢、愛と心 愛と人生、天の愛と地の愛）

洋裝美本全壹冊
泰西名畫四葉入
正價金五拾錢
郵稅金八錢

人類界之現象

定價壹圓貳拾錢
小包郵稅金八錢

人と猿

定價金八拾錢
小包郵稅八錢

女（いの）三

發行所 東京市神田區裏神保町 振替貯金口座二三七番 光風館書店

滋養新劑 グリコナール錠

本劑は醫學博士北里柴三郎氏指導の下に佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究の結果創製せるものなり本劑は滋養劑として病者及一般衰弱者に有効なるのみならず心臟を強め盜汗を治し速かに體力を恢復し元氣を旺盛ならしむる特異の効能ある事を多數の醫學者に證明せられたり……本劑の説明書は御申越に從ひ呈送す

消化新劑 タカヂアスターゼ

本劑は工學博士藥學博士高峰讓吉氏の發見に係る澱粉消化新藥なり
我醫學諸大家が治療上に於ける本劑の効果に就き發表せられたる實驗報告を集載せる説明書は御希望に依り無代郵送す
本劑は粉末及錠劑各大小容器入として各地藥舗に販賣す類似品あり必ず高峰氏タカヂアスターゼと御指定を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區南茅場町貳番地 三共藥品合資會社

女(いの四)

四季枝折



一条成美筆



瓦斯引用の大御便利

燈火用（白熱燈は少量の瓦斯にて強大の光力を發し費用は石油ランプより低廉にして火災の憂なく最も經濟且つ安全なり）

熱用（瓦斯竈、瓦斯七輪を臺所に用ゆるときは場所を取らず灰を散せず費用は薪炭よりも遙に安く最も徳用にして便利なり殊に晝夜何時にても煮焚き自由にして且つ迅速なるに付甚だ重寶なり）

機關用（小は半馬力より大は數十馬力あり人手を省き賃銀を節し如何なる工業にも應用せられ甚だ便利なり代價は割安にして月賦拂の便法あり）

●**取附費用**は會社にて負擔し器具のみ御買取相願候に付瓦斯引用は最も手輕に出來ます●**出張所**は淺草、本郷、牛込、本所、芝等に設けあり瓦斯引用修理共最も迅速に運びます●**瓦斯器陳列所**は本社及各出張所に設けあり隨意御來觀を願ひます●**瓦斯引用申込**は電話、端書又は口頭にて御通知次第直に係員を差出し御用を伺ひます

明治四十年六月

東京神田區錦町三丁目
東京瓦斯株式會社
一三番、二五六番、五四八番、五七〇番
二三〇三番、三四一番、六六四番

本所區相生町三丁目二十七番地　本所出張所（浪花二、五六一番）
芝區濱崎町第一製造所內　芝出張所（新橋一、二五〇番）

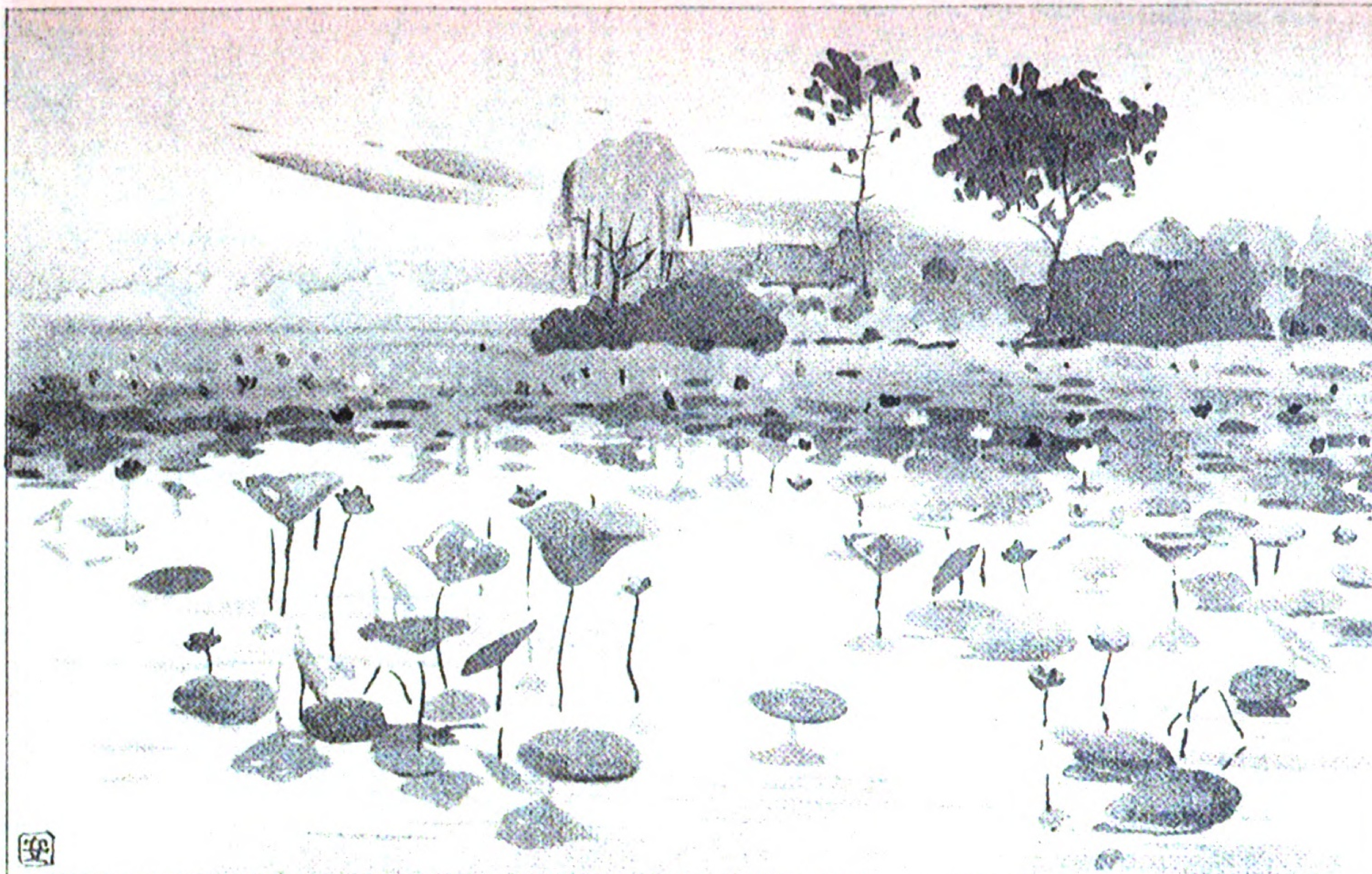
淺草區並木町十八番地　淺草出張所（下谷一、七九二番）
本郷區森川町十九番地　本郷出張所（下谷一、四九四番）
牛込區下宮比町二番地　牛込出張所（番町七三七番）

（ろの三）


THE GEM
衛生家必携懐中良薬
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用ひて終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入 十錢
百六十粒入 廿錢
四百卅粒入 五十錢
九百粒入 一圓
容器入ゼム 二十錢
東京馬喰町二丁目
日本一手發賣 愛國堂 山崎榮三郎
大阪高麗橋二丁目
支舗 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(ろの四)

蓮



宮川安信筆

松みどり香油



松みどり香油は原料を吟味し製法を注意いたし候者にて優雅高尚なる香氣を長く有ち頭髪の光澤を増す特効ありて世に有り觸れたる香油とは大に趣きを異にいたし居候へば貴夫人令孃方には缺くべからざる逸品に御座候御試用の上御高評願上候

定價　○大壜 四十五錢　○中壜 二十錢　○小壜 十二錢　○一合 三十五錢

製造本舗　東京上野廣小路　**山崎屋油店**　電話下谷一七三五番

◉販賣所は各化粧品店にあり

◉梅毒◉淋病◉僂麻質斯

を悩みて唯一丸あるを知らざる人の不幸を弔す

其病理を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり故に梅毒淋病僂麻質斯等を根本的に治療するには唯一丸に限るなり

登録商標

根治完能　**唯一丸**

藥價　三日分 四十錢　七日分 八十錢　十四日分 一圓五十錢　三十日分 三圓　（內國遞送無料）

◉本病患者の爲に其病理養生及治療法を懇切に詳述したる冊子無代施本送料三錢要す

發行所　東京市本郷區湯島天神表門中坂上　藥劑士 中西莊吉　（電話下谷五四七番）振替貯金口座（千五百番）

女（廿の一）

（はの二）

女(はの三)

人間一生之大問題

如何にして百歳の健康を保つべき乎

醫學博士遠山椿吉君選

報知新聞懸賞 長壽法

全壹册

正價四拾五錢　郵稅六錢　郵劵代用一割增

(目次)

此活世界に處して事業を成さんとする者は健康と長壽とを併有せざる可からず此健康長壽の秘訣は悉く之を本書に收む

發行所 東京丸の内 報知新聞社出版部

大賣捌 東京堂 新橋堂 東海堂 上田堂 北隆館 良明堂

女(はの四)

後園



河崎蘭香筆

新刊

裁縫手藝科用書

發賣

讀みて習へよ

小學校高等女學校
實業補習學校
及家庭婦女の嗜好に適應す

裁縫科補習教科書

（東京女子手藝教育會編）

袋物手藝教科書 附圖切形

本書は袋物の秘傳を公にしたるのみにして其教材の如きわ勉めて初學者の學び易きものを撰びたり。元來裁縫に堪能なる素人の此技を能くするあるも秘訣に依らざるを以て遂に素人拔けせざるは當に然るべき所なり若し夫れ此缺を補ふは只此書に據るのみ。學校に於ける裁縫科或は手工科の教職にあるものは勿論生徒又素人と雖も一本を座右に供へば大いに得る所あるべし。

全壹冊 定價金四十錢
貳十七種 袋入定價金三十錢
送料不要 郵券一割增

高等女學校用 造花手藝教科書 附圖切形

本書は在來の造花法の複雜を避け極めて簡單に如何なる花にても造り得る方法を說きたる書にして卷首には美麗なる着色畫を挿み造花圖案を添へ又染色圖見本幷に器具圖を入れ其造り方染方組立方は最も平易に說明したれば何人にも了解し得らるべし又附圖には花の瓣葉蕚等の切形を最も正しき風致ある形を得る樣になしたるを以て何人と雖も容易く製作し得らる又應用として花簪製作法室內裝飾法を記述せり而して其程度は高等女學校手藝科に適應し凡そ一ヶ月間に結了の目的とせり家庭に於いて夫人淑女方の粧飾娛樂に供せば實益と興味とを併せ得られんことを疑はず。

全壹冊 定價金五十錢
二十葉一組 定價金貳拾五錢
送料不要 郵券壹割增

大阪積文社
全國書籍雜誌店

發行所 東京市通旅籠町十一番地
學海指針社
電話浪 一四二

市內賣捌所
坂赤書社
田東京堂

女(にの二)

登錄 商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及常用者諸彥の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入
和洋酒食料品商

東京新橋竹川町
三組屋 大塚琢造
電話新橋七三六番

男女 ちゞれ くせ 毛 赤毛

は何程の難毛も直に根治黒髪し良き艶の出る奇術を郵劵封入申込の方に無料教授致て美髪にして差上げます

東京 本鄉區丸山福山町 岩阪澄子

はいどく妙藥

如何なる慢性の重症梅毒と雖も偉大の効を顯し誓て根治する最新獨逸輸入實驗確證新藥あり同病にて苦まるゝ諸氏へ慈善の爲詳細說明書進呈す望の方は端書にて東京神田錦町一ノ十四野村絹江宛續々御申込あれ

内科

健康診斷

細胞診斷
衛生顧問

ドクトル メヂチーネ 渡邊熙

日本橋區濱花町二二、電話交換局横へ入ル

石版 活版 コルミニユーム版 寫眞製版及印刷

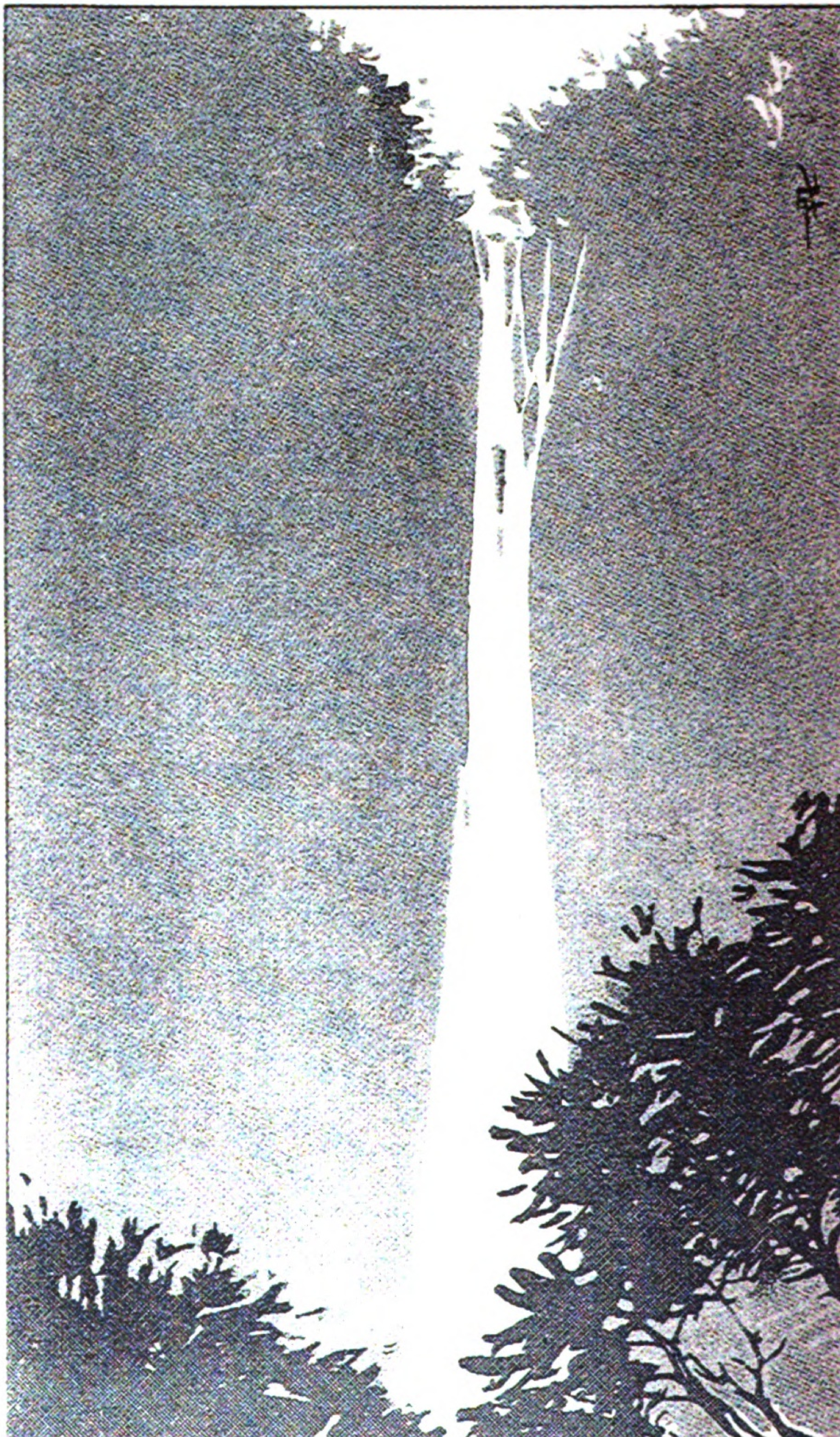
精美堂

小石川區久堅町
電話番町九三二

女(にの二)

（この三）

瀧



一條成美筆

上野山

大口鯛二筆

うへのは時となくよろつ花の盛なれと
なかきこのときはおほよそあちこちよりわするゝ嵐山
おもへてなつかし夜はとしふるゝあれ
てらのかねうちならしつゝほかあるのにほひわ
不忍の池のはちすところせうせきしころちるころ
ほのそゆるまおもひのきいとまをしうく
さとにあひするいとのみしさつみ比
まつゝいとらむつゝなり

◎東洋ニ於ケル唯一ノ山葉風琴◎

◎山葉洋琴金參百參拾圓以上各種

（雛形及詳細目錄御申越次第進呈ス）



山葉風琴

＊保險附＊

品名	價格
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	三五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	三七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二二〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇



鈴木ヴァイオリン

品名	價格
號外A品	二、〇〇
同B品	三、〇〇
同C品	四、〇〇
壹號品	五、〇〇
貳號品	六、〇〇
參號品	七、〇〇
四號品	八、〇〇
五號品	一〇、〇〇
六號品	一三、〇〇
七號品	一五、〇〇
八號品	一八、〇〇
九號品	二二、〇〇
拾號品	二六、〇〇
拾壹號品	三〇、〇〇
拾貳號品	三五、〇〇
拾參號品	四〇、〇〇
特製品	五十圓以上百廿圓迄

弓　金七拾錢以上金拾圓迄各種

箱　金壹圓五拾錢以上金八圓迄各種

○和製、舶來ヴァイオリン　各種

○同糸卷、緒締、駒、弱音器、脂、腮當、緒締掛各種

○舶來調叉、調子笛各種

○樂隊用吹奏樂器各種

○簡易樂隊用鍮印手風琴各種

○同國旗印フラジョーレット各種

○八人組織簡易吹奏樂器　一組金參拾圓

○譜面臺　各種

○樂譜用紙　各種

○和洋音樂書　各種

○ピアノ、オルガン調律修繕應需

右ノ外各樂器並ニ附屬品各種郵券貳錢御送附アラバ詳細ナル雛形及代價目錄ヲ進呈ス



◎舶來洋琴、舶來風琴、舶來ヴァイオリン各種

（其の一）

東京市京橋區竹川町十二番地　合資會社　共益商社樂器店　電話新橋五二九　電信略號キヨ

女(ほの二)

数年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗ろ多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的藥式製劑のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる精新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて效驗なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を[illegible]に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて確實顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の大盛を奏み近時續々怪しき無効なる類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上二藥專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

（其の三）

最上醬油

キハク印

香

釀造元

茂木七郎右衛門

千葉縣野田町

電信略號ハク又キハク

東京支店

中野長兵衛

日本橋小網町三丁目

電話浪花百七十七番

最新藥ハロールは數年前獨逸國皮膚病專門醫學博士シュワインゲル氏の發明せられ歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇效ありとの賞贊好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奧なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有效成分を檢明し之に最近の發見に係るドクトルベンザム等の生毛に關する新說を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其效能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らずされば普通に醫師の處方する斑蝥丁幾、レゾルチン、サリシール酸

毛はへ

昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて效なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ヘツボー、キヤギス跡の禿に生毛せしむる事請合

藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割增の事

らい病

最新藥

ゲノサール　一ケ月分　貳圓

複方ゲノサール　一ケ月分　參圓

此のらい病藥は永年ハンイ國に在留して癩病の研究に從事し世界に雷名を轟かしたる醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病源菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に趣き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無效なる藥品に非常なる高價を貪り大音を吐て其效能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

從七位 勳六等 **中島龜之丞鑑製**

大嶋大將の一族

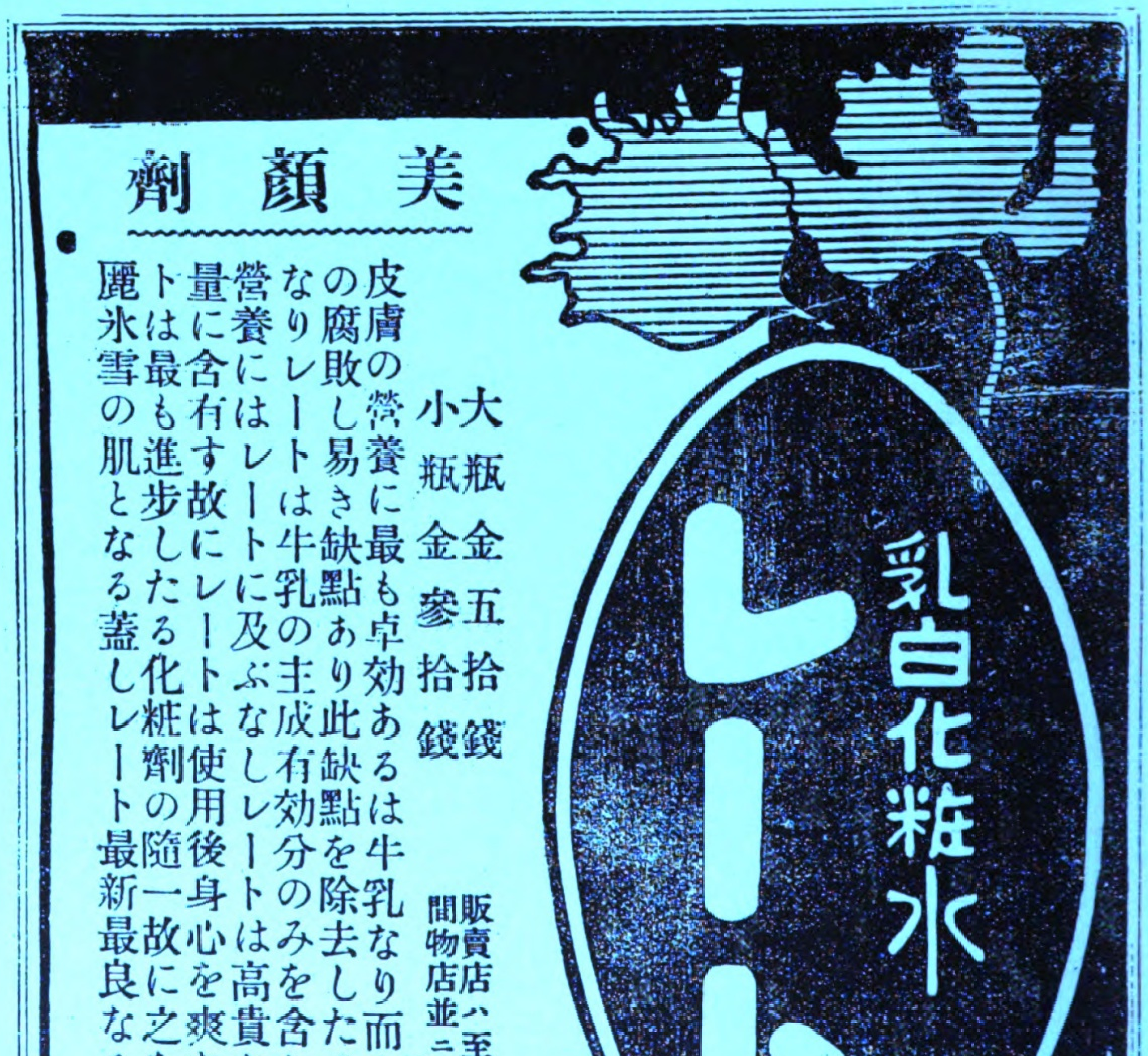
後列左より次令息陸太郎氏○大將閣下○[illegible]令息[illegible]氏○令婿本堂恒次郎氏



前列左より佐久間政子○本堂氏息女靜子○本堂氏母堂○次令孃二三子○本堂氏息女くに子○大將夫人初子○本堂氏令息洋太郎○本堂秀子（大將令孃）

海濱の高木




美顔剤
大瓶金五拾錢
小瓶金參拾錢
皮膚の營養に最も卓効あるは牛乳なり而も牛乳は水分の腐敗し易き缺點あり此缺點を除去したる者はレートなりレートは牛乳の主成有効分のみを含む故に皮膚の營養にはレートに及ぶなしレートは高貴なる香料を多量に含有す故にレートは使用後身心を爽ならしむレートは最も進歩したる化粧剤の随一故に之を用ひれば艶麗氷雪の肌となる蓋しレート最新最良なる美貌剤なり
販賣店ハ至ル所ノ和洋小間物店並ニ賣藥店ニアリ
發賣元
東京 平尾贊平 大阪
乳白化粧水
レート

女（への一）

女(の三)

神戸又新日報

神戸又新日報は最新式色刷輪轉機を使用し種々の彩色畫を日々の紙上に現はす

神戸又新日報は明治十七年五月の創刊にして爾來年を閲する二十四、號を重ぬる七千五百餘、其間世運の進歩と共に着々紙面の改良を施し現下七段八頁の色刷最良の新聞紙なり

神戸又新日報は神戸港に位置するが故に海外貿易上に最も注意し神戸稅關輸出入表及び內外船舶出入表を日々の紙上に詳錄して商工業家の指針たらんことを期す蓋し是等の記事は他新聞の到底企及すべからざる所にして獨り本紙に於てのみ之を見るを得べし

神戸又新日報は政治、經濟、社交、文學備らざるは莫く殊に海の內外を問はず樞要の地に社員を特派し若くは通信員を配置し以て重要の出來事は電話に電信に之を速報し讀者をして坐ら宇內の形勢を知悉せしむ

神戸又新日報は日々畫入小說と講談を揭ぐるの外面白き實事譚と奇警なる諷刺畫とを時々揭載して讀者の娛樂に供しつゝあり若し夫れ家庭談に至りては本紙の最も得意とする所にして常に婦人社會の歡迎を受く其他總て嶄新の記事を以て紙面を滿たし一讀三嘆の稱あり

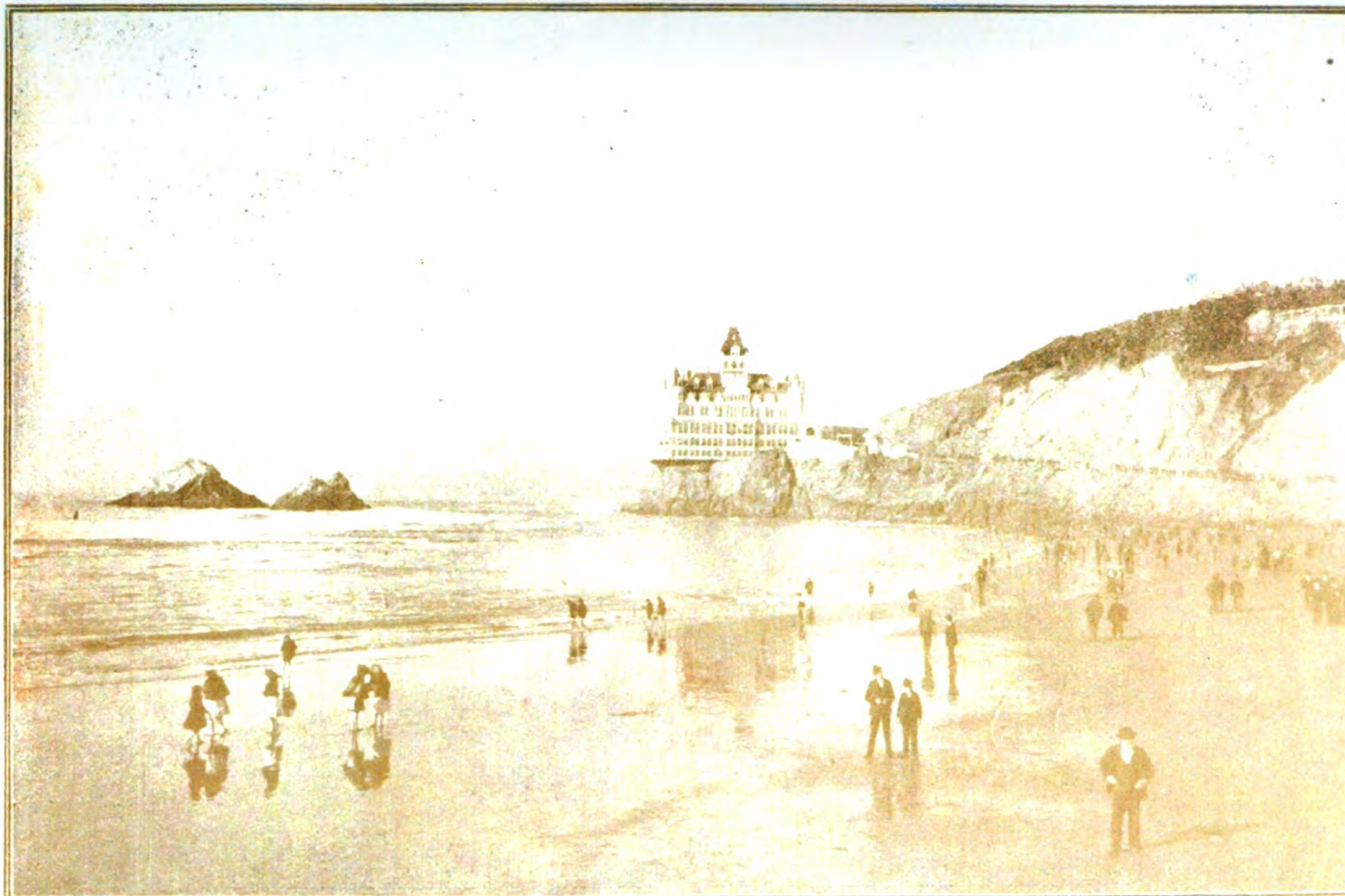
神戸又新日報　一ケ月定價三十五錢

神戸又新日報五州社

女(への三)


醤油
ヒゲタ
宮内省御用
HIGETA SHOYU.
下総銚子港
田中玄蕃醸造
元和二年創業

濱海の夏



（桑港クリッフハウス）

北米アラスカの新市街



女(その一)

面白いこどもの歌

新刊（毎頁木版刷彩色畫美本 クロス綴製本堅牢洋裝）

薄田泣菫作

子守唄

中澤弘光畫

定價金壹圓小包料拾錢

美麗なる彩色畫本

子守唄は兒童唱歌です、或は調子を民謠から拾つて來たり、或は情味を西歐の詩から借りて來たり、色々な方面に材料を選んで清新な趣味を兒女の上に開發したいと思つて試みられたのがこの本です、花の歌やら、馬のあくびやら豚の居ねむりやら、猿のいたづらやら、つい目の前に現はれてゐる日常の事柄がどれ程にか面白い調子で聞かれる事でせう。それに中澤弘光先生の苦心の筆になつた挿畫七十枚は單に畫本としても、この本の價値を語つてゐます體裁は美し、印刷は良し、學校、家庭の小供さん達の御褒美やら其他贈物などゝして此上もないよい本で何を措いても之をお勸めしたいものです。左樣なら

發兌元 東京日本橋區五郎兵衛町廿二 振替貯金口座三八一七番 金尾文淵堂

女との二）

女(その三)



○高貴の御賞讃
御愛用を賜はる

日乃出はみがき

内務省東京衛生試驗所御試驗濟
內外齒科專門大家實驗證明

本品は歐米齒科大家最近の學說と實驗とに據りて調劑せられたる最も完全なる藥齒磨にして

▲齒牙を純白にし口內の惡臭を去り口腔を清潔ならしむるは勿論

▲殺菌防腐の殊効を有し齒牙齒齦及び口腔の疾患を豫防するは本品の特色とする所にして常に用ひ玉はゞ

▲齒痛其他齒患に罹ることなし且

▲馥郁たる芳香と愛すべき佳味を有して口腔を清涼にし心神を爽快ならしむる等

家庭の衛生上最も必要なる文明的齒磨でムひます衛生を重じ玉ふ紳士貴女は是非本品の御愛用を願ひます

發賣元 東京下谷練塀町 松鳥商會

特約店

京橋區銀座一 佐々木玄兵衛
日本橋横山町 天野源七
同 通鹽町 大和屋小兵衛
日本橋馬喰町 田中花王堂
同橋町四丁目 島村商店
淺草區材木町 石川伊勢松
日本橋横山町 武居萬年堂
神田區猿樂町 九州屋商店
同 花房町 山崎帝國堂

有名なる小間物化粧品店、雜貨店、賣藥店にあり升



栗塚龍子夫人



鷲山彌生夫人



井深花子夫人

前東京音樂學校講師
清國兩江師範學堂敎授 石野巍氏著

ヴァイオリン練習曲

（製本既成）

▲大判美裝全一冊 解說書數葉挿入 ▲正價金六拾五錢 ▲郵送料六錢

著者多年の經驗に依り、專ら平易通俗を旨とし先づ、多くの繪畫を挿みて、極めてやさしく使用法を說き、更らに趣味豐富なる壹百有餘の練習曲を集め、演奏の難易によりて、繁簡の順序を正しく排列し、手指使ひ方の記號、弓使ひ方の記號等を初めとして、種々注意すべき事項を懇切に示し、以て初學の士女が練習の手引としたれば、これについて學ぶ人は、ヴァイオリンの取扱ひ方、彈き方等より、能く自在に獨奏するの堂奧に至る迄、容易に會得するを得べし。

太田三郎氏著並畫

スケッチ画法

（好評四版）

郊外寫生の好時季來る

▲袖珍全一冊▲正價金五拾五錢▲郵稅六錢

特色―實際と相俟つて、組織的に統一す。
說明―平易にして、初學者も解し得べし。
價値―挿畫五十餘面、一面畫帖をも兼ぬ。
挿畫―各種の製版を用ふ。興趣更に多樣。
附錄―繪ハガキの描き方、挿畫の描き方。
裝釘―繼合クロース、稀に見るの美本也。

三宅克己氏畫並解說

描法解說 風景水彩畫集

（好評再版）

綠蔭習畫の絶好伴侶也

▲大判全一冊▲正價金六拾錢▲郵稅六錢

特色―とするところは、質問券を添附して習畫上の疑義を明答するの外、更に
解說―を附して一々描法を細まかに說明し以て初學者に其依る所を悟らしむ。
印刷―鮮明無比、毫も原書と異る事なし。
裝釘―大判羅紗紙、リボン綴、體裁頗美。

金子薰園氏作

歌集 わがおもひ

▲川村清雄氏畫▲空前美裝▲正價金六拾錢▲郵稅六錢

著者が近業の漸しき發展の跡は、此歌卷の至る所に、濃艶なる芬香を放ちて、思の華を現せしむ。

發兌 弘成館書店

女（ちの一）

東京印刷株式會社

도 꾀 닌 사 쓰 가 ᄲᅮ 시 긔 가 이 싸

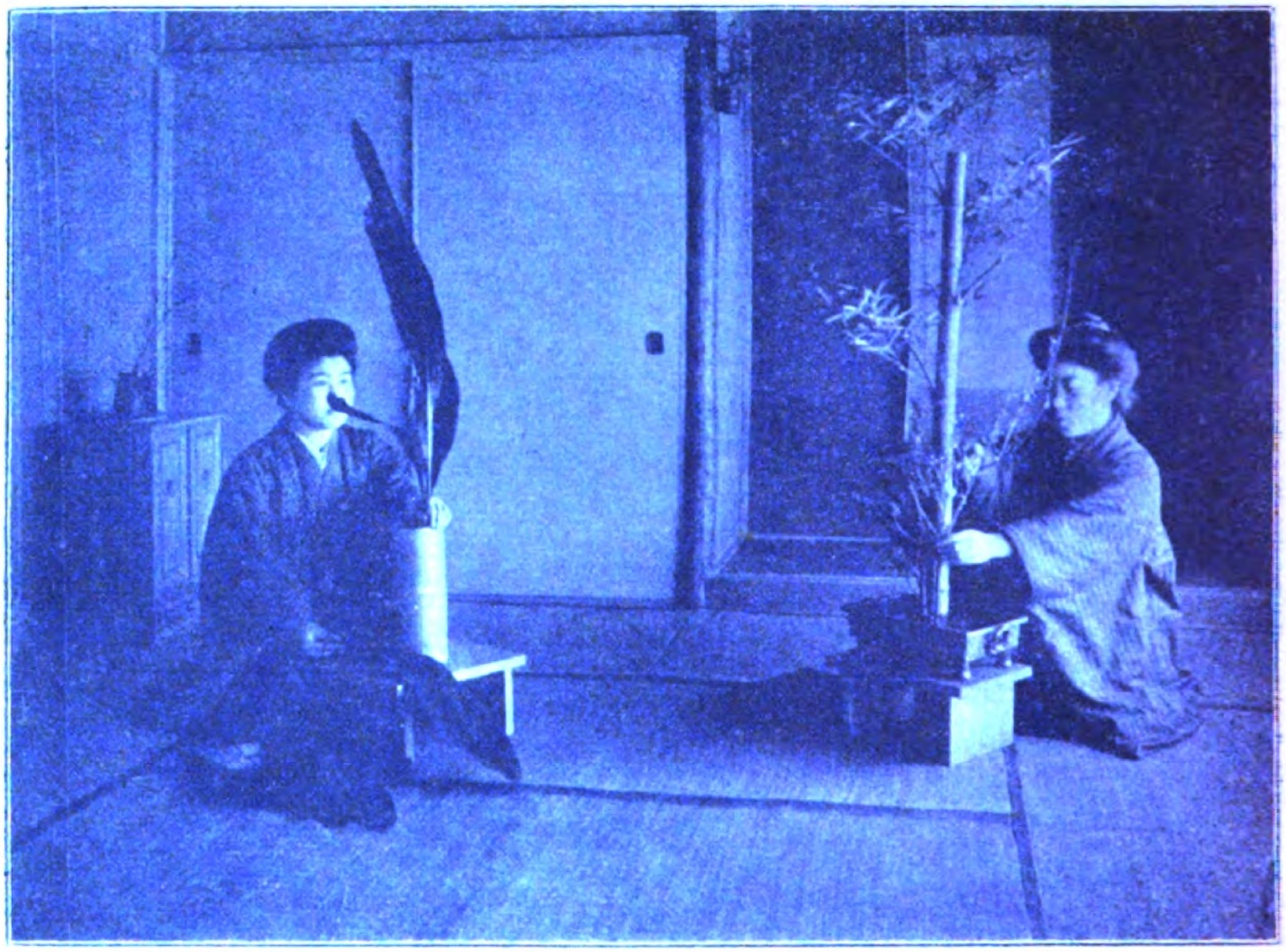
The Tokyo Printing Company, Ltd.

Imprimerie de la Sociéte en commandite de Tokyo.

Tokyo Actien-Gesellschaft Buchdruckerei.

Типографія Tokiйскаго Акціонернаго Общества.

女子高等實習學校



挿花



彈琴

宮内省御買上の光榮を得



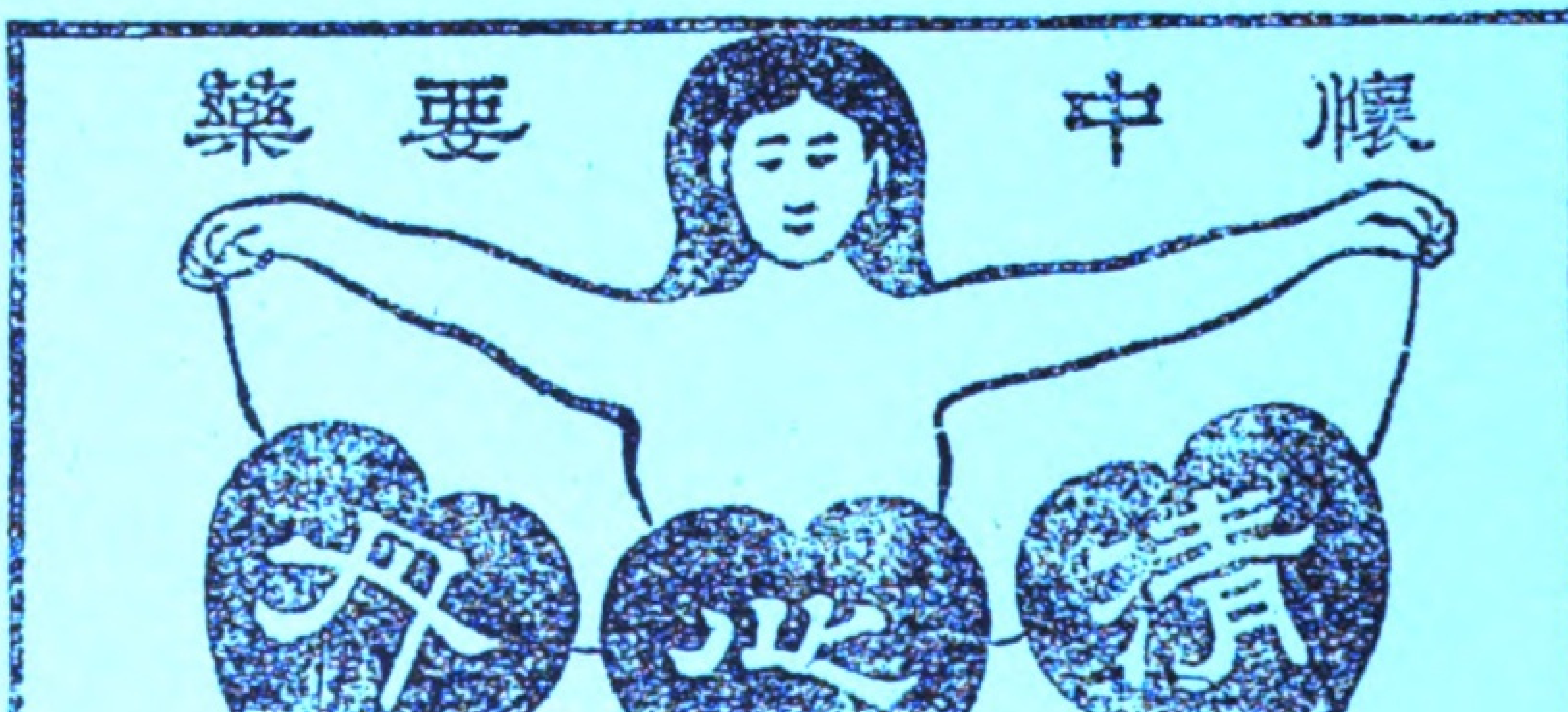
世界ニ冠タル逸品ニシテ
毛髪ノ凡テニ特効ヲ有ス



定價

箱入 金一圓
同 金五十錢
同（ニッケルカン入） 金三十錢
同 金十五錢

紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢



近來同名類似之品数多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名に御注意被下度候

女（りの一）

POST CARD ALBUM

獨逸シェフェル會社製

繪葉書帖（えはがきブック）

▲意匠嶄新――裝釘堅牢

▲價格　金六拾錢より金五拾圓迄

右數十種新着仕候に付店内に陳列仕置候間御來觀の程奉希候

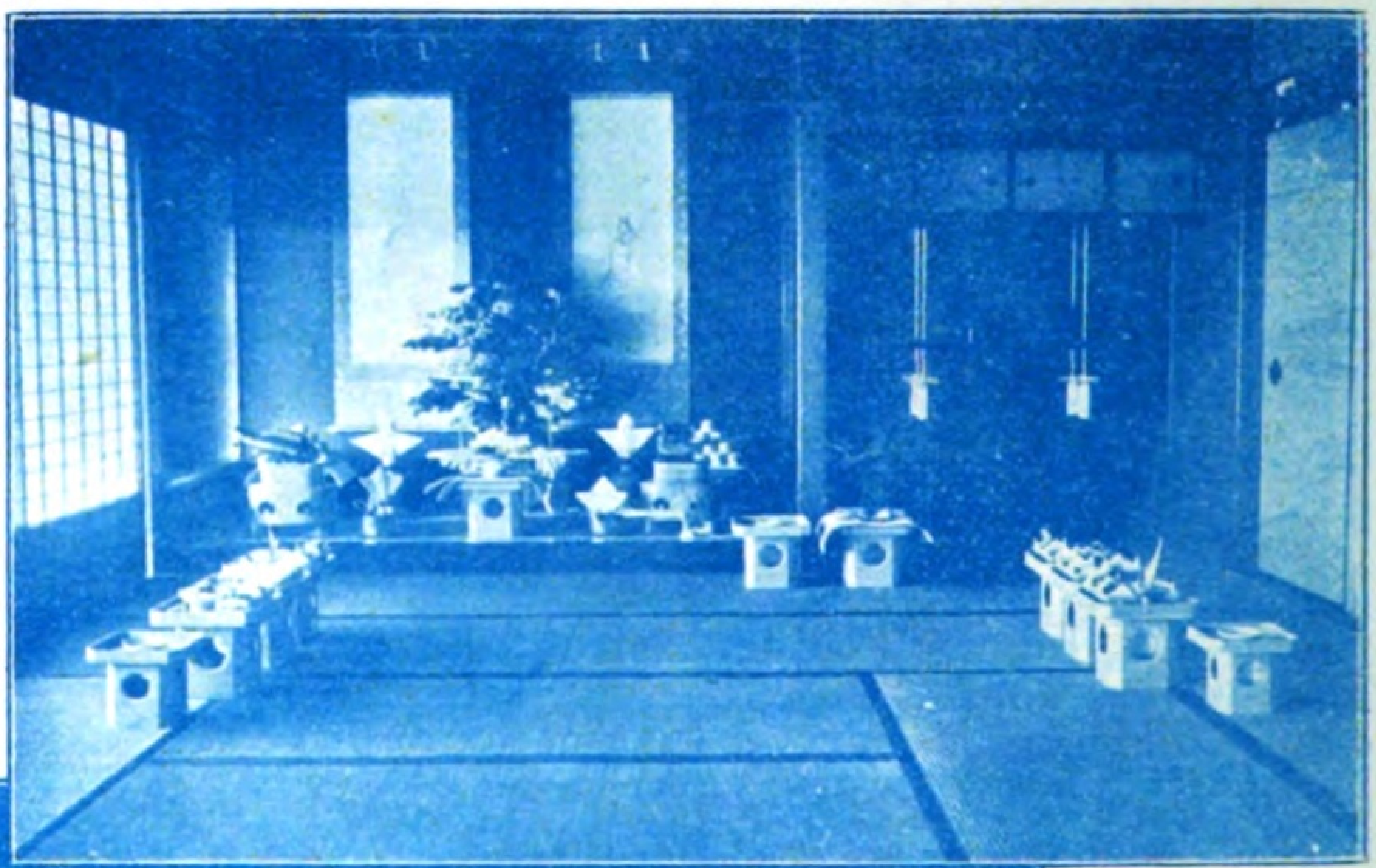
地方より御送金は……（振替貯金口座二一八一六番）

神田區東神保町貳番

中西屋書店



小笠原流婚姻式

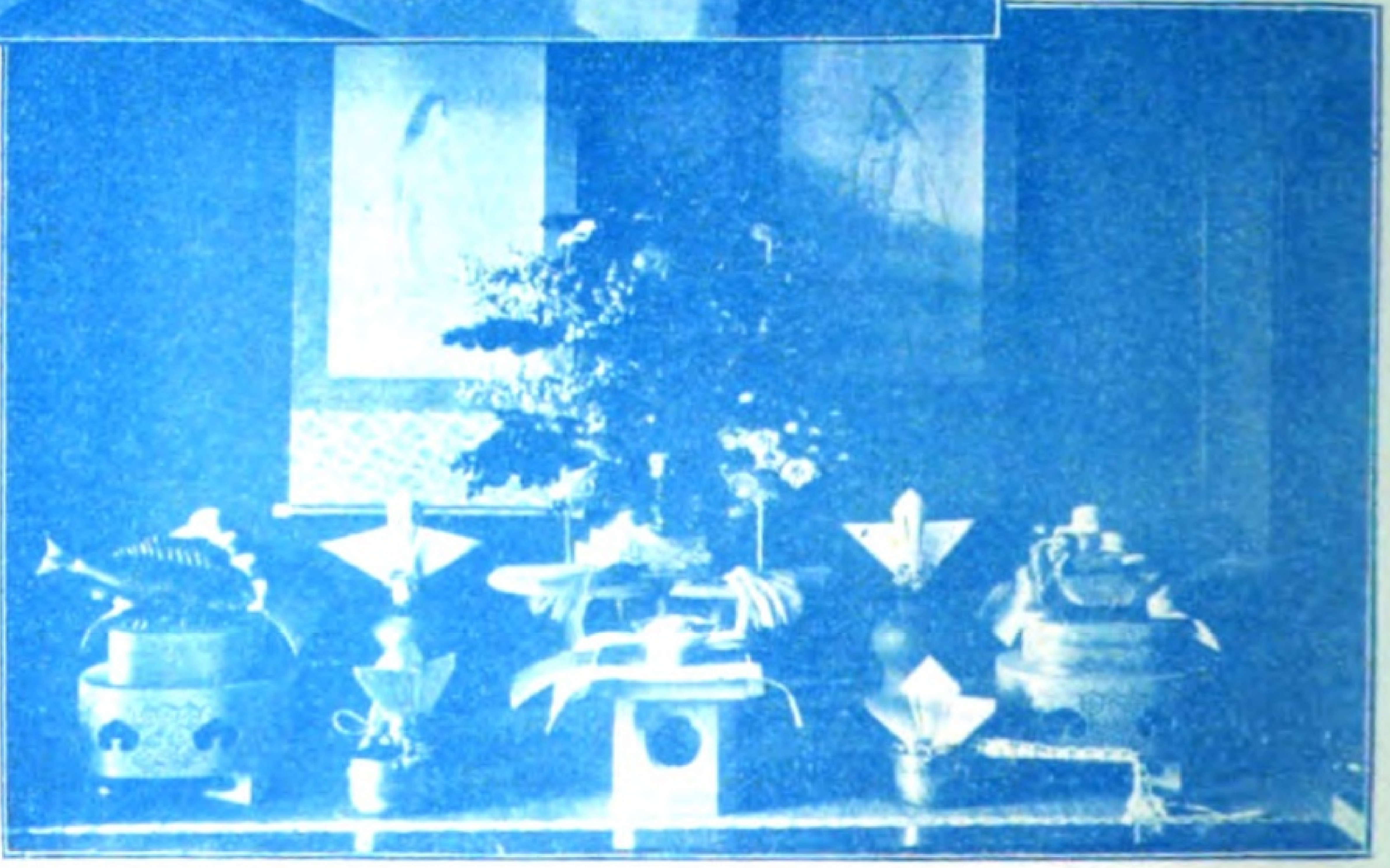


大橋家結婚式場

式場



同土器三寶



同上床飾



全國到る處の紙店に販賣せり

女（その一）

改正内外圖書目録

無代進呈
御入用の方は郵券一錢御送被下度候

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生著　増訂六版

文鑑 千草の錦

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の聲あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語辭等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、

菊判和裝
定價六拾錢
郵稅拾錢

新編書簡文法式

（男子用）
總クロース金字入
定價五十錢
郵稅六錢

新編女子書簡文法式

書簡文の法式男女に涉ちて大成せるものは古來未だ嘗て有らず蓋し書簡に法式のなからざるは尙人に禮儀なく書簡に法式なからんか其人如何に貴しと雖又如何に富めりと雖一日も交際場裡に立つこと能はざるべし　中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ即ち男女に就て各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け今日の現狀に依り舊習を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

洋裝美本
定價六十錢
郵稅六錢

宮中御歌所寄人　中邨秋香先生作
學習院女子部教授　小野鵞堂先生書

新編手紙

（男子用）
木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵稅四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）
木版半紙摺
頗高尙優美
男女各一册
定價六拾錢
郵稅六錢

新編女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を揭げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

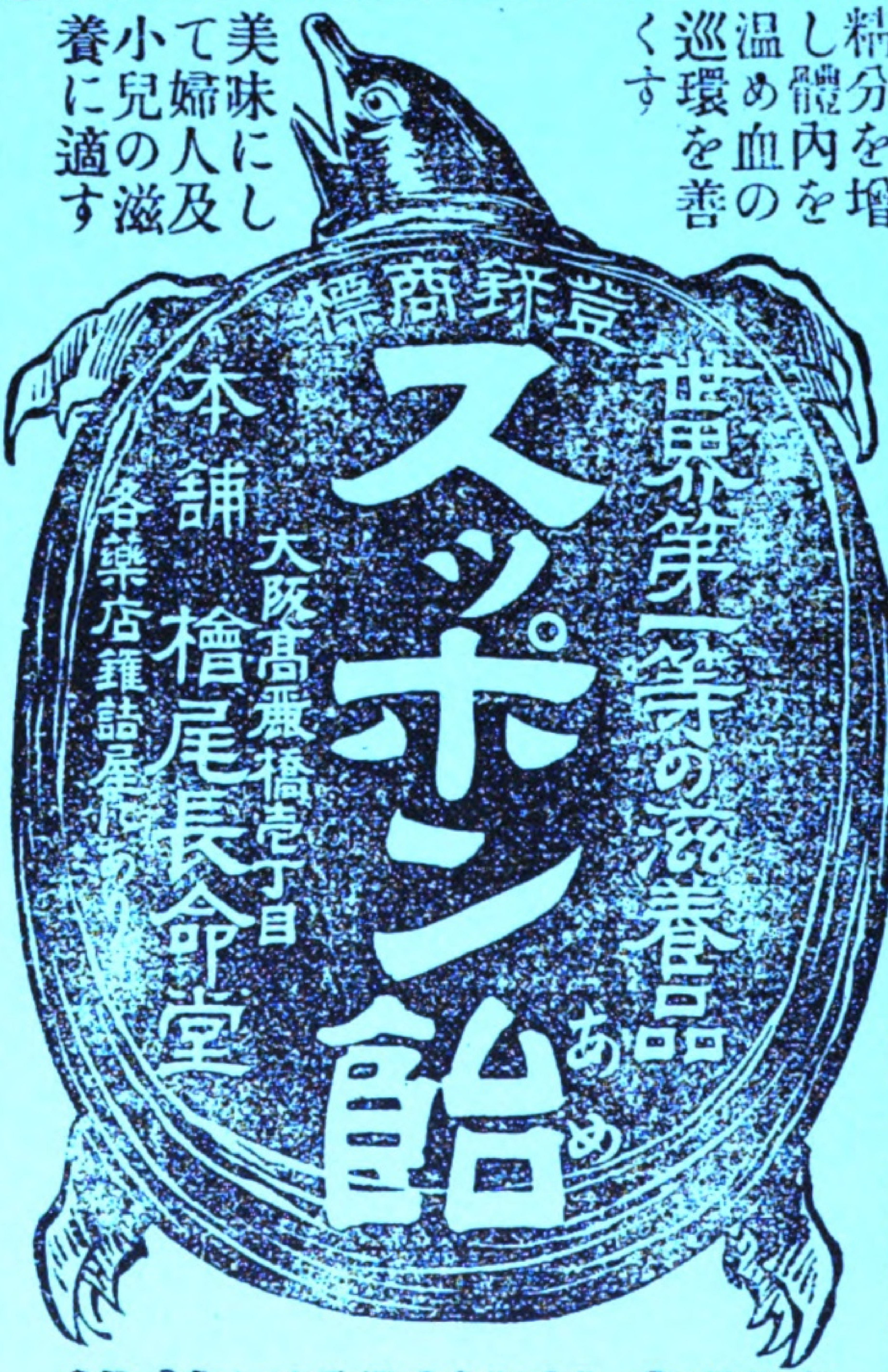
（其の二）

發兌元
東京市京橋區中橋廣小路六
振替貯金口座四千百〇九番
前川文榮閣

婦人の滋養強壯品

精分を増し體内を温め血の巡環を善くす

美味にして婦人及小兒の滋養に適す



壹週分小罐　參拾錢　貳週分大罐　五拾錢

からだのつよくなる藥飴

東京　大木　福井　玉置　中田　山﨑　吉田　大阪　高橋　丹平　谷　舍社　部　京都　田中　川杉　神戸　村上　西村　中田　三浦

各地有名藥舖にあり無き時は本舖へ注文を乞ふ

病氣見舞は此飴に限る

子宮病血の道は

何程年久しき難治の症にても必ず根治する不思議の妙藥あり……人助けの爲め其妙藥を敎へてあげます望みの方は御遠慮なく返信用三錢の郵券封入御申込あれ

河内國北河内郡庭窪村大字八雲　野口しげ

醫科大學講學專攻　藥學得業士金澤興著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

每月壹回
一日發行

女鑑

定價郵稅共
壹册金貳拾錢

女鑑の大大的發展

女鑑は讀者諸孃と相見る事茲に十七年、時勢の推移と共に改善また改善幾何か體裁を革め內容を新にし、而も女鑑が第一號以來唱道したる主義は始終一貫して今日に及び、時流の外に超然として、いさゝか女子教育、家庭改良の爲に力を致したることを信ず然るに社會はますく複雜となり、人事ますく多忙を極むるに至れるを以て、本誌もまた更に奮勵して、大に發展を試みざるべからず、而して如何に發展すべきか、即ち女鑑の本領を發揮して人事複雜なる社會の要求に負かざらしむるに在り、次號の誌上より之を實行せんとす次號即ち七月號に掲載すべき確定の要目左の如し

▽井上文學博士の女子修養談
▽幸田露伴君の小說『加減』
▽村井弦齋君の料理實驗談
▽吳醫學博士の精神病談
▽鹽井雨江君の新體詩斷雲
▽岩村男爵の美術における婦人の勢力
▽井伊直方君の寫眞實驗談
▽高島平三郎君の家庭に於ける心理學の應用
▽長與醫學博士の胃の養生法
▽下田次郎君の父母の教育
▽楠田病院長の婦人衞生談
▽佐々木信綱君の萬葉なる杜鵑のうた
▽吉松醫學士の育兒法
▽嘉悅孝子君の支那料理法

右の外、從來本誌に執筆せる諸大家の文に談に、ますく本誌の面目を新にすべく、之に加ふるに本誌編輯局が時々催すべき、女子教育講演會にかける諸名家の筆記を以てし、記事嶄新にして豐富に、殊に家事經濟衞生の事に重きを置き、衞生談の如きも、すべて專門家の術語を用ひずして、何人にも容易に會得せらるゝやうにし、實用に適することを主として、從來掲載せらるゝものゝ外に、西洋料理實驗談、菓子製造法等、有益なる記事、殆んど應接に遑あらざるべし、

これと同時に詞藻欄を擴張し、撰者には左の諸先生、之に當らるゝことゝなれり、誌友諸孃は奮つて投稿あらんことを望む。

文學博士本居豐穎君　雜題和歌　佐々木信綱君　兼題和歌
文學士鹽井雨江君　短文、新體詩　內藤鳴雪君　俳句

女鑑の大大的發展
女鑑の大大的發展
女鑑の大大的發展

發行所　東京市京橋區築地二丁目　（電話特八八 新橋二六九三）　國光社　（振替貯金口座一一七八番）

跡見花蹊女史





三輪田眞佐子女史



棚橋絢子女史

女(その二)

田口掬汀氏著

小説 伯爵夫人

（口繪 鏑木清方氏
裝畫 平福百穗氏）

前編 八版 出來
後編 六版 出來

クロース製最美本定價一冊金八十錢 送費一冊八錢

夏季鎖閑の友として書册を手にする人々は必ず此書を一讀せられよ、此書は婦人心裡の光明を寫せる大作にして又現代社會人情の反射鏡也、海濱の村閭に身を起して交際社會の女王となりし彼女の生涯には婦人立志の教訓となるべき美徳が詩趣横溢の筆もて描かれたり生活の眞意義を知り清新の思想に觸れんとする人は必ず此書を讀め

▲新作小説 心の波 上下二卷再版發行

洋布製定價一冊金七十錢 送費上卷八錢下卷六錢

父子の愛と友愛とを描けるものは是なり、富と力との爭ひを寫せるものは是なり、此書を讀む人は必ず生活の意義に就いて會得する處あらん。

女（ろの三）

發賣元 東京 東京堂 上田屋

大阪 杉本 吉岡 久留米市 菊竹

韓國大官の家族

韓門中樞顧問官李址鎔氏と其夫人



隨官朴漢城氏夫人と李氏の家庭教師

代々家傳の藥

經通丸

月やく楽

調劑元

東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滑りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ解症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ

定價廿五錢五拾錢壹圓

特製貳圓小包料は八錢

有樂町二ノ二

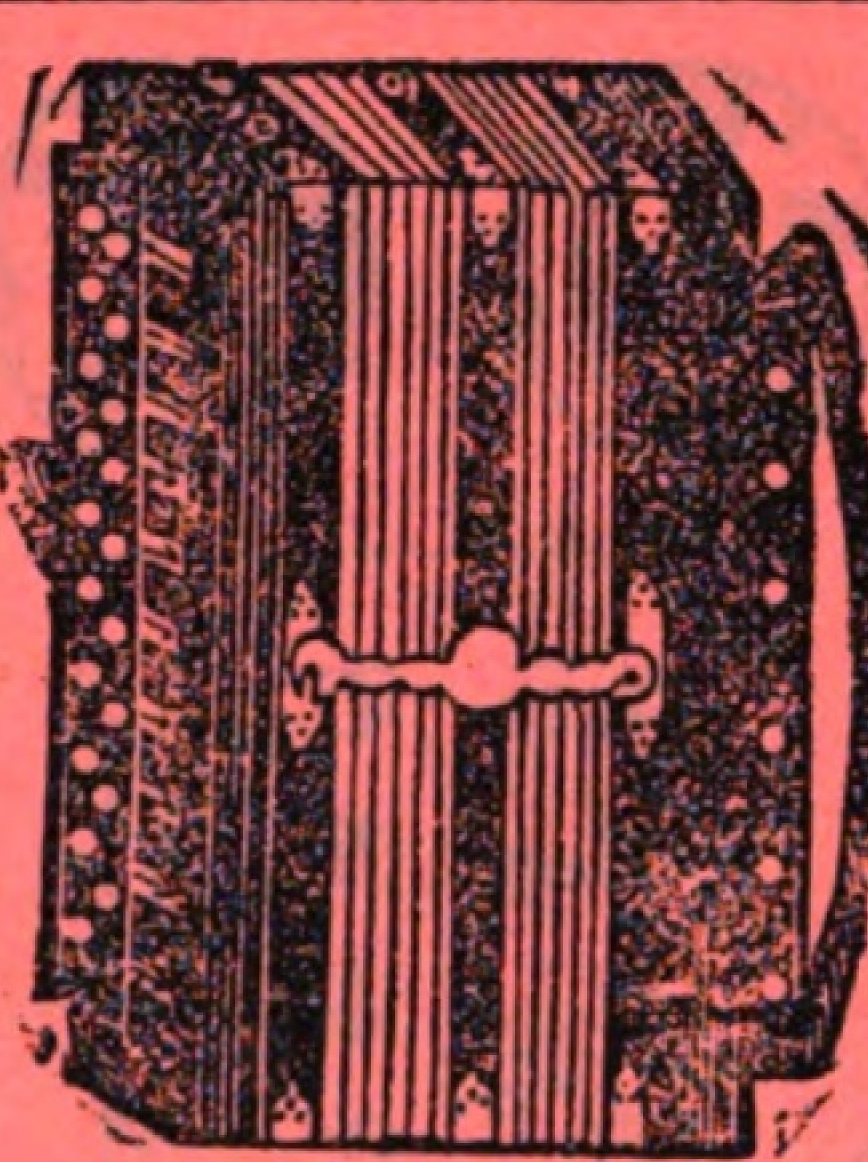
江戸屋

◉圖書目錄

東京本町

御入用の方は往復葉書にて御申越あれ直ちに送る

博文館



◉堅牢無比 懐中

手風琴

本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の強大なる事舶來手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり(獨習書附屬す)

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割増

大阪市東區和泉町貳丁目

發賣元 覗商店

内藤鳴雪翁題句

高濱虚子先生序文

峯青嵐先生編著

俳句資料解釋

全一冊和裝菊半截美本紙數三百頁

本書は古今の俳人が如何に俳句の材料を求むるに苦心し、如何に其推敲に意を用ひしかを審にし、以て句作上の參考に供せん爲、句中に引用せる和漢の**人物人倫**を始とし**雅言漢語故事**の出處を明にし**名所舊迹**由來勝景は勿論、著名なる神社佛閣の所在縁起を詳にし**宮闕殿樓**の結構、**高山大嶽河海湖郊**の形勝を叙し**飛禽虫介花卉百木**の奇を説き、衣服飲食の調度**漁農百工の器具**に至るまで一々其例句を擧げ十類に分ち親切叮嚀に解釋したるものにして未だ嘗て俳書界に見ざるの珍本にして實に座右の一大寶典たり眞師友たるべし。

◉正價三拾錢 郵税六錢

發兌元 東京本町 博文館

六(その二)

女(その三)



●賣捌所は全國到る處にあり

小樽新聞

小樽新聞は北海道唯一の大新聞にして發賣紙數最も多く議論穩健記事豐富にして拓殖の指針實業の良友なり

(來る)七月より輪轉機使用

北海道小樽區 小樽新聞社

東京市日本橋區小舟町三丁目

株式會社 第三銀行

電話 浪花四四二 浪花四五一番

預金利子

定期預金 六ヶ月以上 年五分
當座預金 百圓に付日歩 八厘
別口當座 同日歩 壹錢
全國送金無手數料
其他銀行一般の業務便宜ニ取扱可申候

星美人香水

●本品は馥郁たる芳香を永く保つ特色を有す

日本政府 登錄商標



(定價)
大瓶 壹圓
中瓶 五十錢
小瓶 貳拾錢
ニツケル口金付 懐中用 廿五錢

ヒナ洗粉本舖 御幸香油
東京市日本橋區本石町十軒店八番地
中岡太洋堂

女(その四)



津田梅子女史



山脇房子夫人



鳩山春子夫人

讀ませ給へや

山崎兼子著

萬有可解人事可悟

洋装美本 全一冊 定價金三拾錢 送料金四錢

あらゆる哲學あらゆる宗教を罵倒し盡して、著者獨特の意見を宣傳せんとす。殊に、道徳の根底を、自尊心にありとせしが如きは、以て、本書の如何に偉なるかを知るに足らん。この大膽なる宇宙人生觀や、これ妙齢一佳人の産なりとは、亦奇ならずや。

服部躬治著

新様 女子書翰文

洋装美本全壹冊 定價金四拾五錢 郵税金六錢

●新なる趣味、新なる様式●

●題材珍しく文體風姿あり●

●切に淑女諸君の繙讀を乞ふ●

文學士、内海月杖作

われから

上製美本全壹冊 定價金六拾五錢 郵税金六錢

▲集むるところ美本十六篇▼

▲歌ひ得たり戀と人生と▼

▲冀くば諸姉の愛讀を須つ▼

發兌 東京本石町二 大阪備後町四 寶文館



學藝叢書

既刊

理學博士坪井正五郎先生著
人類學叢話
全一册

要目

▲考古學遺蹟研究に於ける人類學的方法▲石器時代遺蹟の實踐は人類學上如何なる利益ありや▲如何にせば人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉飾の起原▲何なか人種の別と云ふ▲野蠻未開人種の知慧▲諸人種に於ける衣食住の比較▲土俗品と古器物▲古墳調査と人類學外に十數項

理學博士三好學先生著
植物學叢話
全一册

要目

▲植物と美術四項▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て八項▲園藝と學理▲植物體に於ける氷雪の影響▲植物と降雨▲紅葉の話▲楓の生態

學藝叢書新たに出でんとす、筆を執るの士は皆當代一流の博士、說く所は深奥の學術を平易明快にして趣味實益兼備のものたらしむ、思ふに科學的思想の幼稚なるは邦人の通弊なり、而して之が普及を圖るに適する書籍の刊行乏しきもの實に其一因たらずや、本館茲に見る所あり即ち各斯道專門の大家に乞ふて萬有科學の趣味を一般國民に鼓吹せんと欲す、之れ豈聖代の一缺陥を補ふものにあらずや、希くは目次に徵して續々御注文あらんことを。

續刊

●**水產叢話** 理學博士岡村金太郎先生著 六月下旬發行

●**動物學叢話** 理學博士石川千代松先生著

●**國文學叢話** 文學博士上田萬年先生著

●**歷史叢話** 文學博士箕作元八先生著

●**植物叢話** 理學博士松村任三先生著

每月一回發行

洋裝美本
紙數二百數十頁
寫眞版五頁及
挿畫數十個挿入
定價各金四拾錢
郵稅六錢

東京 博文館 本町

販賣用電話 本局二六二〇番

振替貯金口座 第二百四十番

（わの二）

木村小舟君著

少年訓

全一冊袖珍美本
紙數二百五十頁
寫眞版四葉挿入
正價金貳拾五錢
郵税金四錢
(既刊發行)

講堂に於ける修身教授以外、家庭に於ける趣味豐富なる教材として茲に本書出づ、著者は多年少年教育に經驗ある人、巧みに現代少年社會の風潮を列記したれば、父兄教師は之に由つて、よく修身倫理の大綱を授くるを得べく、少年諸氏は之に由つて、よく品性美心の養成に資するを得ん、加ふるに著者一流の典雅流麗の筆致は、少年文を學ぶ士も、日夕座右の友となさば、得る所決して尠少ならざるべし、戰捷國の少年は須く之を讀め、二十世紀の少年は必ず之を繙け、而して後將來發展の基礎を定めんか、成効の花は正に其頭上に滿開せん。



正價金九十錢
郵税八錢

題して『小供心』と云ふ。内容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小説總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑中作の傑作を集め、更に子供書を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色挿畫七葉を添えたるもの、苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可らず。

(わの三)

東京 博文館 本町

名譽總裁博恭王妃經子殿下　會長侯爵夫人鍋島榮子

女（わの四）

大日本女學會

本會は女學通信敎授に從事すると玆に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科幷に講義囑托講師左の如し

○修身（後閑菊野）○禮法（佐方鎭子）○國文（同人）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香、桂湖邨）○歷史（大森文學士）○地理（喜田文學士）○地文（脇水理學士）○數學（藤野了祐）○博物（脇水理學士）○理化（同人）○生理衞生（三宅博士）○家事（後閑菊野）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○書學（武村千佐子）○史傳（下田歌子）其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數菊判百五十頁以上之に對する會費は僅かに一個月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へざる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし（尚此外に高等科もあり入學を許す）

新學期開始會員募集

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會（電話番町一三三〇）

貴婦人の小集



前列右より三輪田女史、毛利公母堂鍋島侯夫人、千家男夫人、

女(かの一)

巖谷小波君監修　少年世界部編纂

既刊發行

少年百科事彙

全一册中判
クロース美本
紙數約八百頁
正價壹圓六拾錢
郵税拾貳錢

學生諸君が期待措く能はざりし少年百科事彙は出でたり、本書に收錄する所は、**修身**、**地理**、**歷史**、**科學**、**產業**、**軍事**、**風俗**、**遊戲**、**法制**等凡そ日本國民として知らざるべからざる事は、悉く之を網羅して一卷に盡せり、加ふるに卷頭には極彩色石版刷を以て、**天文**、**地形**、**人種**、**風俗**等の着色**眞**に**迫**るもの**數葉**を附し、更に各部門に分類したる**實物寫生**の**密畵約三百個**を挿入して、說明の足らざる所を補へり、故に天下の學生諸君は、只此の一卷を備へて机邊に繙かば、恰も囊中の物を探るが如く、便利此上もなき寶典なりとす、殊に本書は**國定教科書**の**教材**に重きを置きて編纂したれば、學生諸君は元より、小學校教員及び父兄の參考書としても。又不可缺の好册子たるを信ず。言の眞僞は、請ふ實物に就て判せよ。

販賣用電話 本局二千六百廿六番

東京本町 **博文館**

振替貯金口座 第二百四十番

（その二）

法學博士 文學士 有賀長雄先生著

大日本歷史

全部上下二卷
菊判背皮總クロース金押美本函入
紙數各約壹千百頁

▲上卷
●正價金貳圓（既成發行）
●小包料拾六錢

特價（六月廿日迄の申込に限り）金壹圓七拾錢 外に要郵稅

有賀博士の帝國史略は本邦史籍中の覇王にして國體の完壁なるに均しく多大の聲價を有すること海内無比なり宜なる哉同史の歡迎せらるゝや累刊既に數十版戰勝國の紀念として玆に帝國史略の舊版を改訂し其缺陷を增補して大日本歷史上下二編の大著述を世に公にせらる。

博士筆を神代の太古に起して皇統連綿の國體を祖述し征露詔勅の煥發に至つて擱筆す其間事實の排列順序より日本社會の文明進步に於ける原因結果の次第を掲示し努て新說奇論を避け成るべく正史傳來の事實を紹述し處々に博士卓越の識見を加へらる例せば大化以前の血族社會の編制は博士が社會學の原則に依り特別研究を以て立てられたる見解多く又た中古戰國の狀態は憂ふべきに似たれ共其結果として地方到處に文化の中心を生じ所謂城下町なるものは今日の地方文明の起源なり是れ封建の餘澤なりとする說も博士の始めて本史に唱導せし所にして今日は通論となれり此他博士の創見に懸れる高論少なしとせず是れ本史か史界唯一の寶典として社會に濶步する所以なり殊に博士の謙譲なる更に本史の正確を得ん爲め閱を國學の諸大家に請ふて根抵的の修訂を加へられたるを以て綿上花を添ふの完全を得たり故に世上幾多の國史ありと雖も之を本史に對すれば其優劣月鼈も啻ならずと謂ふも決して誣妄にあらざるなり。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（かの三）

女子大學曉星寮々生



登録商標

◉二十世紀唯一新發見◉古今無比善良洗濯粉◉衛生經濟兼備之親玉◉石鹼曹以外之優品◉衛生無害内務省御試驗濟



●衣服洗浄 **玉川**（一名シヤボンイラズ）

▲代價▼金貳錢五厘ヨリ金拾五錢マデ

●殺菌力に富むでゐます●衛生上最必要の品です●經濟上徳用です些少の粉で何枚も洗へます●絹毛織物綿布等を洗つて地質がいたみません●手があれさゝくれの出來る心配がありません●洗石鹼と違ひておちがよいから汚が遲うございます●洗ふに容易で奇麗になり手間がかゝりません

使用法

盥に湯（熱湯に及ばず）を四五升入れ其中に猪口一杯程の粉を入れて溶しそれに洗濯物をつけ一時間計浸し置きてよくふりだし其から清水でよくおゆすぎなさいどんな汚れたのでも新しいやうになります、なみの洗濯の樣にもみ出すには及びません

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 合名會社 玉屋商店支店 電話本局一七九四

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價（一週）七十錢（三週）二圓五週三圓廿錢送費十錢



皮膚病專門藥

あまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あざ
ぜにがさ	ひぜん	わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舖 東京本郷區本郷三丁目 新宮藥館

（その二）

文藝月刊雜誌

ハガキ文學

●建全なる文學と清新なる美術の鼓吹は本誌の特色なり

●五月一日發行 第四卷第六號

一冊定價金十錢八冊前金七十五錢郵税不要

要目

（表紙）和田三造（繪葉書）橋本邦助（口繪）聖母と耶蘇、アンゲル筆（口繪色刷寫眞）帝國大學後庭の初夏（口繪木版色刷）俗謠十二題の六太田三郎（木版挿繪）岡野榮、佐藤生蠻 其他懸賞支、和歌、俳句、川柳、一口噺、繪葉書圖案、スケッチ、漫畫等紙上滿載

發行所 東京小石川 日本葉書會 賣捌 全國各書林

中村不折先生著

鉛筆畫法

新刊發賣定價金六十五錢 郵税八錢

（石版手本及木版手本挿入）

◎スケッチ流行の時に當り斯道の大家中村不折先生此新著あり挿繪口繪甚だ多く文章平易にして小學卒業者は一度熟讀玩味せば直に其畫法の秘訣を悉し思ふが儘に寫生し得べし重なる要目左の如し

○動物○植物○物體○人物○景色○裸體

總クロース製金書金文字表裝頗美本

鉛筆スケッチ習畫帖

大田三郎著 第二輯

石版彩色刷羅紗紙臺紙付繪畫十二頁説明二十四頁頗美裝一冊金二十五錢郵税二錢全部十二冊郵税共金二圓五十錢

◎お待ち兼ねの第二輯愈發刊せられたり本帖の眞價は第一輯に於て既に諸彦が認められ斯道に志を有する人にとりて此の上なき良師父たるを信ず乞ふ本帖を繙き十二分に其眞體を探り腕を鍛へられんことを希ふ

新案

ポケットブックス

◎是れ迄の有り觸れたるものとは全く趣を異にし本會の意匠になれる者也品質精良體裁温雅にして附錄に郵便規則印紙税法凡ての日常節用を掲げ日曜表汽車發着時間表かート郵券入名刺入を附せしを以て極めて重寶なり幸に購求の上其便利なるを試みられことを乞ふ

總革製金線換帖付 ○定價金三十錢

クロース製 ○定價金十五錢

發賣元 東京本町 博文館 發行所 東京小石川 日本葉書會

女（その二）

大町桂月君著

翰墨林

大町桂月先生の文名天下を動すこと久し抒情に叙事に議論に何くに往くとして可ならざる無し或は雍容或は洒脱或は豪放或は悲凉氣宇寛裕にして情感痛切區々たる技巧の域を超脱して人格の美直に文字の美となる文の仙なる者なり

全一册

洋裝菊半截紙數三百頁
正價金貳拾八錢
郵稅金四錢
◎近日發行

東京 本町 博文館

讀賣新聞記者 足立北鷗君序
文學士 大町桂月君序

讀賣新聞記者 田村逆水君著

成功と人格

成功とは何ぞ人格とは何ぞ是れ研究すべき疑問なり顧ふに人、生を天地の間に受く能く其人格の適する所に從ひ其人格を磨き上げ努力して人格の達し得る所まで人格を大たらしめ高からしむれば是れ眞の大成功なり今の世多くは成功を誤解し人格の努力を外にせり此書の記する所實に人格と成功を得るの羅針盤たり志士須らく精讀して飜然自得する所あるべし

(再版)

全一册

洋裝菊判並製
紙數百八拾餘頁
正價參拾五錢
郵稅八錢

東京 本町 博文館

(其の三)

毎巻醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎巻洋装菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

（その四）

第一編 一般救急法

醫學博士 三輪德寛先生講述

正價金參拾五錢 郵税金六錢 既刊發行

此書は三輪博士が素人にわかり易く親切丁寧に講述せられたるものであつて書中には家庭にて身體に急な變常の起つた場合に醫師の來るのを待つ暇なく臨機に處置すべき方法が一切網羅して載せてある。

假令へば急に卒倒した場合・創を受けた場合・痛の起つた場合・毒な物を食べた場合・水に溺れた場合・火傷をした場合・毒虫に螫された場合などにどう云ふ處置をするがよいかと云ふことを述べてあるのであるから一般の家庭并に殊に**旅行家工場の事務員學校教師警官航海者消防夫**などに甚必要な心得である。毎戸一本を備へて不時の急に應ずる用意とせられんことを希望するのである。

第二編 衛生學大意

醫學博士 森林太郎先生著

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 譯述

衛生指針

姙産婦の務

全一冊和装美本
紙數四百五拾頁
密畫數十個挿入
正價七拾五錢
郵税拾錢

姙産は妻たる者の第一の天職であるから、淑女諸君は必ず此知識を得なければならぬ。世間には此知識を疎略にする爲め、免れる事の出來る困難や危險などに陷る者が多いのは、甚だ遺憾である。されば、一家の主母たる者は、是非とも本書一冊を家庭に備へ置きて參考に供し、新婚せんとする令孃は、約束を極め衣服調度などを支度する以前に、豫め本書を一讀して、自己の身體が其天職を完くするに足るや否やを詳かにするが宜しい。本書は姙産に關する身體の適否、姙娠の有無、分娩の難易、産後母子の手當等に就きて、姙産婦又は産婆の心得べき總ての事項を親切平易に委しく說明したものである。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（よの五）

家庭整理の指導◎婦女必讀の大全書

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾册
毎月一回發行

和装頗美本 ◎紙數三百頁 ◎石版彩色口繪一葉。挿畫十數個

▲定價一册金四拾五錢══郵税八錢

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生の爲にも如何に裨益の多かるべきは、敢て多言を須ゐざることなから、人ことに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

三輪田高等女學校長
三輪田眞佐子女史著

新家庭訓

全一册紙數三百〇九頁
石版極彩色口繪及密畫九面入
══(既刊發行)══

大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

四季料理

全一册紙數約三百頁
石版極彩色口繪及密畫十數面入
══(近日發行)══

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(その六)

大日本淑女學會

會員募集 規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

第四回新學期開始

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉博覽會開會中入會金全免す

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の處なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

本會機關雜誌 **姬百合** を發行し會員に限り進呈す

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

女（よの八）


博文館創業
二十週年紀念
現代婦人
成功立志談
女學世界定期增刊
第七卷第九號
六月十五日發行



談叢

光榮ある月桂冠

△勤儉力行して一家を治めし寡婦の實話

△逆境より奮つて幸運に轉じたる婦人の實話

△獨力にて事業を經營せし主婦の實話

婦人記者

三井信託會社の家職兼、三井男爵家の取締りを勤め、精勤家として信用篤き植松好仁氏の母堂うた子刀自は、早く良人に先立たれ姑御と五人の御子さんを抱えて維新改革に遭はれたので、苦心一方ならざるに、其上にも洪水の災厄に罹つて家財悉く流失せる等、悲惨極まる間に立つて、奮然志を決し一家の維持、子女の養育を一身に引き受け丈夫に優る働きをせられたのです。刀自が堅忍刻苦の功空しからず、一人の令息は累進して三井家の顯職となり、令孃もそれぞれ名望ある良人を得られました。今や七十一歳の高齢に達し孝順の子女達と愛らしき多くの御孫達に圍繞せらるゝ境遇になつて居られます、刀自の滿足は如何ばかりでせう。併し乍ら昔忘れぬ刀自の志は儉素自から奉じ常に教會に出入して精神修養に餘念なく暮して居られます。左に其經歴談を御紹介申しませう。

▲刀自の家系

私の實家は但馬豐岡で、父は京極の藩士で御座いました、實母には五歳の時死別れましたが、幸ひに優しい後妻に育てられ、十七歳の時出石仙石の藩で御用人を勤めて居る植松と申す人に嫁しました。此家は順養

子でしたから姑は未だ三十二歳の若盛り、良人は二十九歳で御座いました。仙石家は十二萬石でしたが、彼の左京騷動の爲め六萬石に減じ、維新間際には三萬石に減じたのです。石高の斯く減じた上に元から家臣の多い大名ですから影響は家中の面々に及ぼし、植松の家でも二百八十石の取高が義兄の代には百五十石に減じたのです。夫故石高の上では五人の男女は召仕へる處を二人に致し成る可く質素に暮して居ましたから、別に生活には不足も無かつたのですが、良人の同胞もあり、私も一男四女を設けて多勢の家族ですから隨分忙しふ御座いました。昔の風習で家内中の衣類は糸取から致しますし味噌醬油の造り込みなぞ當今より餘分な用事があり、且皆御酒を頂くので夕の仕舞も遲くなり勝でした。私は髮結ふのも夕飯後一寸の暇に致し鏡にも向はず三櫛半で手早く結ひ上て了つたのです。姑は善い人ではありましたけれども、子を持たぬ人ですから子供を五月蠅がり自分の幟の際は子供を外へ連れ出して呉れと申されたので、私は夏の日中に小さい子供を皆引連れて庭の笹藪へ入つて暮した事など今だに覺えて居ます。



▲良人の死去と維新の變

義兄に當る舅左太夫は御城內奧方の御前で御蕎麥を頂きましたが、物當り致して俄かに亡りました。舅は

私の子供達を愛しましたので亡つた際は子供達が非常に愁傷致しました。良人は一體病身でありましたが、維新の前年から床に就き永々患つて遂に翌年の七月に死去致したのは私が三十五歳の時、殘つた子供は十六歳の娘を頭に十一歳の男兒(此間に一人流産)八歳六歳、三歳の女兒で御座いました。良人死去の前年より大名方は維新改革の警戒と見えまして家來の扶持を大減いたし、私の家なぞも僅か二十石に減じられて居つたのです。斯樣時世であるから各々油斷なく職を求めて自活すべしと上から御旨意が下り、力と賴む義兄は沒し良人は病身ですから自分が一奮發して維持せねばならぬと存じ、庭園も畑に潰し、雇人も廢せし上尚僅かなりとも扶持ある間に商業に取付て多勢の家族を何とか過さなければならぬと心を痛めて居りました内愈良人にも死別れ世の形勢も日一日と穩かならぬ所から、益々商業研究の必要を感じましたが、扨て此道には暗闇の武士の妻、如何して稽古致さうぞと考へまして先づ諸方から荷を背負て雜呉服商人なぞが參ると、品の出場所から直段等を一々巨細に尋ねて見ました。序に商人達に女の商ひには何が宜からうと聞ましたら、左樣ですネ御婦人方には先づ宿屋などが適當でせうと申す者が多ふ御座いました。斯樣研究を致すのを『おうたはよく商人達と長話を仕ますネ』と姑が不審がつて居りました。其内懇意先の或る反物問屋から少しづゝ受けて賣つて見ました處、最初ちつとは賣れましたけれども、後に問屋から惡い品を寄越し初めたのを目が利かぬため平氣で賣り、薩張賣れなくなりました。

▲洪水の災厄

良人死去の翌年七月八日に殆んど軒に着く程の大水が出まして家財悉く流失して了いました。私共一家は二階に登つて避難致しましたが、梯子段も流され繩で釣つて漸く支へて居つた位、幸ひに一人の怪我もありませんでしたけれども、後で二階の戸棚から蛇が出ると云ふ始末、何より惜しかつたのは拜領の刀劒類を流した事でした。懇意にした近所の或寺では家族悉く溺

死いたし、住持唯獨り私宅の門前へ泳ぎ着き高い松の木につかまつて漸く助かつたので實に目も當てられぬ慘狀でありました。斯樣に俄乞食のやうになつた私共一家は唯途方に暮れ天井を眺めては溜息致すばかりで御座いましたが、力と頼む主人は無し、老たる姑、幼き子供に寄られて居る自分が、此際盆やりと致したなら家族は路頭に迷ひ代々續きし植松家は滅びて了いませう。植松家の浮沈は實に此時である、僅かながら未だ二十石と云ふ扶持ある間に商業を始めねばならぬと決心いたし、改革の際少々頂いた御別れ金を資本として豊岡の方へ宿屋店を開いて見る事に定めました。

▲刀自の自重

良人は存生中多病でありましたから男兒を母親が監督して甘やかすより確乎とした家に預けた方が宜しいと存じ、九歲の時から私塾を開いて居つた親戚へ預けて置きました、良人死去の後も矢張り其儘入塾させて御座いましたが、私は何卒此兒に商業の道を學ばせたいものと考へて居りました。或人が或商店の小僧に周旋しやうと申されましたけれども、幼くとも今は植松家の主人、奉公はさせたくない、二人扶持だけは此兒に付けるから商業見習生として遣したいと存じ奉公口は斷りました。其頃の私はどうも武士氣質が強く家の體面を非常に重んじて居ましたから隨分頑固で分らなかつたのです。彼の家族が溺死した寺の住職は、水難後空家同然の邸に私共が落膽して居るのを氣の毒がり、『拙僧が此邸を悉皆買ひ受けますから、貴女方は寺へ御引移りなさらぬか。幸ひ拙僧も無人で寂しふ御座いますから』と勸められたのがグッと癪に障り、例令水に廢れた家でも植松家累代の邸宅で御座います。是を人手に渡して他家へ同居するやうな事は餓死するとも出來ません。左樣な卑劣な事を勸める御方は以來門前も通行して下さるなと刎ね付けました。隣家の人は是を聞いて『親切より申出た住職に左樣怒り付けなさるのは餘り酷いでせう』と云はれましたが、唯今考へると全く怒るべき筋もないのに妙に片意地張つたもの

で御座います。

▲宿屋營業

私の生地豊岡の町はづれ一寸した空家が在つたのを借り受け覺束なくも宿屋を始めました。何に致せ女主人の士族商法で、客が在れば狼狽し、客が無ければ心配、其内雇ふた下男には酒を持出して賣られ、下女も思ふやうに參らず、面倒ですから雇人は廢して了いました。此土地は用水が極不自由で井戸はなく川から汲み上げねばならず人手のない折は甚だ困つたのを、隣家の盬屋伊衛門と申す大商人が當時豊岡で大參事を奉職して居る私の實兄に恩顧を受けた關係から私共に大層親切を盡して呉れ、毎朝水を一荷づゝ勝手元へ置いて呉れたり致しました。父の頃から人に知られた役柄でしたので、私共の境遇に同情して呉れる者が隨分あり、私は熟々親の光は七光の諺を感じました。其頃穢多と知らずに宿泊させて居た事が御座いました處舊若黨が之れを他から聞込み、御家の汚れであるから若し彼が素直に立たすば私が繩に掛ても引立てますと十手を腰に挾み躍起となつて參りました。私は已に新平民となつた彼を左程にせずともと存じましたが、若黨がいつかな承知しませんから私が穩に彼穢多を說いて立退せた事が御座いました。總て宿泊賃は無茶苦茶に安價に致し且つ一夜泊も一日七錢、永泊りも七錢にして一夜泊は高く取らねばならぬと人から敎へられたり、舊家來が無代で泊り込んだり、算用に疎い士族の商法は割の惡い事ばかり致して居ました。兎に角此營業は樣々な流れ者に接するため子供達も自然宜い事は覺えません。私は熟々孟母の敎を思せ合せうか〱して は居られぬと感じました、其上此家は窒扶斯患者の出たあとだ相で、長女と末の娘が感染いたしたのです。衞生上の考へもない其頃の事とて苦しむまゝに熱ある末兒を負ふて川邊の風に當てたり、長女は親戚へ預けて放擲して置きましたが、御方便に双方とも助かり、長女は其儘親戚の養女に遣はせて了いました。斯樣風で思はしくない事而已續きましたから半年ばかり

で遂に閉店致したのです。

▲貸蒲團を始む

今度は一層邊僻な所の二間ある小家を借りて引移り、貸蒲團を致し始めました。私は蒲團へ成る可く良い綿を入れ置き、若し旨くゆかなければ綿を紡いで木綿を織り賣つて了うと考へましたが、前々の損失もあり、數多い蒲團を作る資本に困りまして、紺屋や綿屋には利を得た上少しづゝ拂ひ込む事に頼みました處、快よく承知して呉れ先づ何樣か斯樣か都合が付きました。貸賃は一枚五厘づゝと致し他の半減で貸し始めた處、諸方から隨分借りに參り、利は僅かでも數でこなして前の宿屋より却つて工合宜しく、而して心配も大きに少なくなつたのです。



▲雪を踏んで催促に廻る

私方の蒲團を借りて又他へ一錢づゝで貸し儲ける者が多ふ御座いましたが、内々綿を取かへたものもあり、借賃を滯らせるものもあり、質入する横着者も御座いました。女主人と侮つてずるい事を致されますから却却油斷は出來ません。或る藥種屋へ三拾枚借した蒲團を質置したと聞き込みましたから早速談判に出掛けましたが、丁度雪の強く降る日で私は脚袢をはき

草鞋がけで三里程隔たつた藥種屋へ參り、態々と其不心得を責めました處、雪中參つた私を氣の毒に思ひ早速質受して返却致しました。此家へ參る途中當時可なりの官員になつて居た舊知已が、二人曳の人力車に乘つて來かゝるに出遇ひ、『ヤ伯母さん此雪に少し車にでも乘つたら宜いでせう』と云はれました。私は『歩くために備はつて在る二本の足で何處までも參るのです。貴君は大の男でありながら何故二人曳になぞ乘りなさる』とやり込めた滑稽が御座いました。

▲頭髪衣服の規定

良人の在る頃から前に申上げた通り三櫛半で鏡も見ずに結つた位で極構はぬ方で御座いました。寡婦となつて切髪に致してから子供を背負ひ歩くのが見苦しいと姑が厭がりますので、おばこに卷きましたが元結も用ひず苧をよつて根をしばり、飴色の馬爪笄を差し、下駄は燒杉の日和下駄へ手製の鼻緒をすげて何處へでも參る事を自分の規律に致して居りました、衣服も水で悉く流し殘つたのは手織紬一枚、是は丈夫な品でしたから冬は綿入と致し、夏は裏を剝して單衣に直し一張羅の晴着として居りましたが、黒木綿の紐で子供を背負ひ歩くので肩を擦り切らして了いました。

▲人目を忍ぶ水汲と米搗

唯今では良家の婦人が勞力するのは名譽の位で御座いますが、其頃は奥樣と呼ばるゝものが餘り暴業を致すと家名を汚すやうに噂され、自身も幾分か耻入ると云ふ風でしたから、隨分人目を忍んで働きました。夜が白んで流し元の窓がチラと明るくなると直ぐに後の川へ水を汲に參つたのですが、同じ出石の中でも此處は川水に砂が多く交つて居り、大荷へ一杯汲むには却却手間取れ、寒中なぞ他で起き出ぬ内大急ぎで汲み上げるのが厄介で御座いました。又其頃は扶持米が呼聲より半ば減じて渡るやうになつたので、人に搗せる日雇賃でも節儉致さうと存じ、近所で寢鎭つた頃を待ち夜遲くから音を忍んで米搗を致しました。

▲手内職

貸蒲團の方でどうにか食べるだけは出來ましたけれども、子供は夫々教育せねばならず、又丸裸になつた揚句で常着の一枚づゝも着せなければなりません。親類が親切に云ふて與れたとて若し一厘でも借錢など致したなら植松家の面目を汚す事と存じ、手内職を致して不足を補ひました。木綿糸で編む肌着や針仕事何でも手に適ふ事を致しましたが、白無垢一枚の縫賃七錢と云ふ安相塲で誠に細いものでした。姑は私より針仕事が上手でしたから兩人で縫ひ、一枚仕上ると賴手から賃を寄越しても寄越さんでも先づ姑には半額を拂ふて上げたので、喜んで助けて與れました。

▲子女の敎導

私は學問算術等の素養がないため、時世の變遷に處して頗る不自由を感じましたから、子供達には力の及ぶだけ仕込んで置きたいと存じ、毎日學校へ出る前に川向の親戚の學塾へ稽古に遣はせました。毎朝例の水汲を濟せ行燈で子供に御飯を頂かせ直に出してやりましたが、『御母さん毎朝私の通る路で起きて居るのは利巧な家だけですよ』と娘がよく申しました。手堅い商家なぞが起きて居つたものと見へます。體育とか衞生とか申す考のなかつた頃でしたから、學問を詰め込むばかりを專要として居り、當人も又好な道とて出精いたし、讀本の修身談なぞ私が夜業する傍で話しますのは私は樂しく聽いて居りました。男兒は學塾で少しづゝ英學の敎授を手傳ふやうになり、僅かながら手當を貰ふて居りましたが、私は忰の參る度に『未だ十三位の御前に敎授が出來ると云ふのは、他に豪い人のない證據だ、其な中に居て豪い積りになると大きな間違ひだから、もつと進んだ廣い處へ出て揉れなければならぬ』と申し聞せて居りました。忰は元來優し過て小心でありましたから、勉めて引立てやつたのです。

▲驕奢と勤儉の裏面

私の志をよく知らぬ御知己なぞは、私の身なりや働き方を見て、『世の成行とは申しながら令兄は大變事で御妹御が斯樣御體裁とは誠に御氣の毒千萬』と涙をこぼす方も御座いました。併し是れは自分の好で働くので、決して兄が冷淡なためでは無いのです。幼少の頃から己れの身を節約して他に依賴するなと父親に教へ込れて居ますから、何卒是だけは守りたく、且子供等にも此精神を吹き込みたいと存じて居ました。其頃の官員方は、競爭して娘さんに分外な盛裝をさせる事が流行致し、式日には娘の學校友達が縮緬の重ねに美事な帶を結び、銀鎖の下つた鼻紙入を挾んで誘ひに來られましたが、宅の娘は例の丸裸で、漸く私が丹精して買つた唐糸入の着物に祖母から持傳へた呉絽の帶是れが一帳羅で立並んでは見る影も在りませんでした。親戚の者が可愛想に嘸肩身が狹からうと申しましたが可笑い事とは此盛裝した娘さんの家へは少し許り私共から金が用立て御座いましたのを、宅の娘は知つて居ますので、『御母さん彼樣に立派に高慢な顔して居るけれど、家の御金を借りて居ますのネ』と後で笑ひました。『平常衣服其他を質素にして難儀に堪へて居る者と、身分不相應に飾る者とはよく斯樣な裏表が在るものだ』と娘に申し聞かせたので御座いました。

▲病める男兒の初旅立

伜を東京へ出して商業を覺えさせたいと云ふ私の希望は兼て私の兄弟達にも話して置きました處、豐岡に居る弟から明日出京する際連れて往かうと申す手紙を寄越しました。私は餘り突然で當惑いたしましたが、此好機會をはづしてはならぬと存じ、早速塾へ參り話しますと、僅かでも俸給を受けて居るのだから一通りの順序を以て辭さねばならぬとの事、私は種々歎願して辭職の許しを得夫から二里程先の弟の家へ參つて委細を賴み、日暮に歸宅いたした時は伜が最早宅に戻つて居りました。足元から鳥の立つやうな旅立で仕度を致してやる暇もありませんから、父の殘した絹の羽織と裏付袴、十三の子にゆき丈は合ずともせめて餞の

印にと遣はせなぞ致して居る内夜に入りて忰は發熱いたし翌朝になつても熱はさめず、朝飯も喉に通りません。誠に生憎の事と心配最中弟は最早出掛て參り。此體を見て迚も旅立はむづかしからうと申しました。私も無論心配では在りますが、無理に辭職させた忰を一日でも家へ留いては學塾の方へ濟まぬ次第命を天に任せて旅立せようと決心致し、弟や姑が危ぶむのも聽かず忰の手を引いて宿驛のはづれまで見送りました。斯樣に氣強くは申せしもの〻年もゆかぬ獨りの男兒、特に病氣の身體を初の旅立致させる私の心苦しさ、熱ある忰の手を引いた時の感じは唯今以て忘れられません。丁度夏の初で私はぺんぺらの袷を着て居ましたが、氣を張て夢中に歩いたので裾は裂て汗かいた足元へからみ付き、見る目も哀れな樣子は恰で芝居の子別れのやうで在つたと、見送られた人達が今以て一つ話しに致して居ります。



▲令息は三井銀行に精勤

未だ良人の在つた頃から親戚にも増して近しく致した隣家の人は疾に出京して三井へ勤めて居られました。其縁故で忰の事萬端を世話いたし、其頃創立の三井家に隱居附として忰を仕込ませて呉れました。三井へ入りましてから二十日斗り經と瘧疾を患つたさうですが、全く旅立の際から催して居たものと見へ

ます。病氣全快の後はよく精勤いたし八年間一度も歸國いたしませんでした。私は最初の內勤の暇に讀書算術を習ふ費用が要るなら送らうかと手紙で申遣はしたのですが一向返事がありません。是は一厘送らぬ方が宜らうと存じ、唯御主人を大事に、番頭によく從へと云ふ定り文句の手紙だけ折々遣はして居りました。

▲八年振りに令息の歸鄕

父の年回のため八年振で歸鄕致した悴は何時の間にやら頼もしき壯丁となつて私初め親類一統へ夫々相當な襦袢の襟など土產に持ち參りました。悴は是までに小遣錢のないため隨分苦心致したのだ相で、筆紙や書物等を僅かな給金の內より買ひ求め、朋輩達は休日に遠方へ遊びに出掛ても自分は晝飯代がないから一度も出た事はなかつたと話しました。私が前に小遣を送らうと云ふてやつた時何故返事せなんだと申しましたら彼の頃は未だ草書がよく分らないで御母さんの手紙が讀めませんでしたと答へましたが、遠方の事で總てが行違ひ氣の毒であつたと存じました。併し不自由を致させたのが藥となつて辛抱仕通したので御座います。其後も矢張り勤續致して二十六歲の時一家を持つ事になり、嫁に遣はした娘達や、親戚も大抵東京住居となりましたので、永年の貸蒲團業を止め姑と末女を連れて出京致しました。悴も其頃は未だ薄給ではあり田舍とは經濟法が一寸變つた東京住居は却々骨が折れましたが、御蔭樣で追々悴も御引立に預り今日は先づ差當りの心配も無くなりました。併し悴は全く幼少から自分一己の勞力で是迄になつたのですから、私は親らしい顏は出來ぬので御座います。

令息の御出世は申すまでもなく、長女は洋畫家松井昇氏に、二女は有力な軍醫、(但し此令孃は夭折されたのです)三女は眼科で有名な河本國手に四女は虔信なる基督教の司祭に配され、何れも幸福な家庭を作られてあります。刀自は誠に克己と精勵を以て素志を貫かれた重なる御方と存じます。



閨秀苦心談

學問修養の話　跡見女史

書畫の道は私も天性嗜好する處ろでありましたから幼少の時より、今に至るまで、多年の間研究して參りましたが、之れに上達するといふ事は中々容易でありません、けれども本統に好でやるなれば趣味もあります、又研究しつゝある間には段々上手になるものであります、書を學ぶの心得と申しては一と口にも言へますまいが、まづ極く簡明に述べませうなれば古來書道に就てはいろ〳〵の議論もありますが、私はそれ等の書論

をも見、又年來の實驗に照らして見まするに、どうしても書を正しく書くには心から正しくせなければなりませぬ、心が正しくなければ決して書は正しく出來るものではありません、即ち心の正しきもの歪めるもの、それは皆書に顯はれて來るものであります、心正しからざれば書も又正しからずとはどうしても爭はれない、昔しから書道の人々が「書は心印なり」と申して居るのはよくも言つたものです、ですからいろ〳〵の書論もありますけれども要は精神を正しく持つがよいといふ一點に歸するのであると私は信ずる、そこで心を正しくして正しい書を書くといふ事は、書を學ぶものゝ第一の用意です、さて一般の人々が書を學ぶの手本として適當なのは王羲之でせう、他の人のはよい處もあれば癖もありますが羲之の書には癖がありません、そうしてこの正しいといふ處ろは殆んど學び難いものである。故に羲之を習ふにはまづ其の精神から眞似てかゝらねばなりません、只其の書風のみを眞似やうと思ふたとて到底羲之の樣な書が出來るものでない

昔し蘇東坡が羲之の書を好み熱心に習ふたけれどどうも旨く行かない、ところが、其母が注意して、羲之は書が上手なばかりでなく、所謂精神を以て勝た人であるから、お前などが、幾干羲之を習ふたとて、とても出來るものでなし、いつそ自分の流儀でも始むるがよひと言つたれば、東坡は大いに其言に感じ、爾來及び難き羲之を廢めて自己流の書風を始めやうとつとめた話がある、といふ樣なものです、私なども天性書が好でいろ〳〵な法帖も習つて見ましたが、どうも王羲之がよいので、ついこれに私淑する樣になりました、つまり私もこれを習ふた一人ですけれども、東坡の如き奇才でさい、習つて出來なかつたのを我々如きものが出來樣筈はなし、やはり或點までは習ひましたが廢めて後は自家の書風を立てる樣にと努めて居ります、けれど羲之に依つて得た所ろは決して少くはないと思ひます、羲之の法帖には實に立派なものがあります。

話の序に私が書を學んだ事を一言申しませう、私は始めに圓山風の書を習ひましたが、これが即ち寫生

派で言はゞ實物の形體其儘を寫し取る様なものであります、南宗派を習ひましたが、南宗は別に文人派と申しまして、言はゞ氣韻や風格を表はすもので寫生畫とは餘程違ふのです、私はこの二派を習ひましたが、頑固一方に偏するのは、どうも面白くないから今ではこの二派を折衷して書に於ける如く、矢張自己流にやつて居ります、私は書も好ですから隨分書いたのもあります。

棚橋女史　克己耐忍の話

女史は大阪の人、牛尾田庄右衛門の長女、祖先は北畠氏に仕へたが、顯家戰死の後は民伍に下り、世々酒商を營んで居た、其の父祖蘭陵、及父庄右は共に越高州の門人で相應の學藝ある人であつた。

絢子刀自は父祖の性を受けて幼より中々利巧の氣象



を備へて居られた、六才の時習字及び八算、見一を授けられたるに其の習練殆んど大人に異ならなかつた爲めに、人皆神童と唱へて居つた、八歳にして音曲を習ひ、傍ら裁縫をも學び、十三歳の時心學道話を聞き、孟子無名の指云々に至り、豁然として悟る處ろあり、それより心を潛めて典籍を講究された、けれども當時京阪の風俗として女子の讀書するを惡む風があつた爲めに、父母は堅くこれを禁じたが、屢々乞ふに及んで僅かに大學の句讀を授け且つ戒めて言ふ、女子の書を讀むもの往往にして驕慢にして人を凌ぐ

を悪む、汝よく謹み、人をして讀書生たるを知らしむる勿れと、女史よりて朝は未明に起き、夜は燈下に就て、人知れず孜々として勉强したが、其功積りて粗ぼゞ四書五經を通讀し了つた、茲に於て讀書の素養は一と通りこれを得られたのである。

已にして謂へらく予家事を助くるの傍ら幸に聖賢の遺訓一斑を窺ふを得たれど、未だ獨力にて口を糊するの技能はない、古來の諺に女子は三界に家なしと賤しむ所以のものは一般女子に獨立生活を營むの資力なきによるとそこで力を専ら裁縫に用ひて、他日に備へ又自から其身一切の事を處理し、上は頭髮より下は布襪に至るまで、いつも人の力を借らず、こゝに於て父母もこれを異とし、殊に弟に從つて奥野小山の門に入る事を許され又書道を三瓶信安に學ばしめた、時に刀自の齡稍く十七歲であつた。

偶々美濃の人棚橋大作といふ人、其父の二本松藩倉邸の留主たるに隨つて大阪に往來し、奥野小山に親密に交つて居たが、大作氏は洛閩の學を好み、詩歌を嗜み學問に篤實なる人なるも不幸にして壯歲眼疾に罹りたれば潜かに良妻の典籍を代讀すべきを望む由を小山が聞いて之れを憐み、爲めに女史を媒介したのである、女史時に歲十九であつたが、生來商業を厭ひ、詞人の家に嫁して讀書の餘暇を得んと欲したれば、父母は少しく意見もありたれど、終に婚する事となつた。

女史は棚橋家へ嫁ぎて以來は家政の困難と良人の不明の爲めに、一方ならぬ難儀をされた、嫁ぎてより三年間は、琴瑟相和し、讀書筆研の樂みをも得られたが其後倉屋敷の廢絶の爲めに美濃に移住する事となつた時に夫家屢々世變を經て家道大に衰へ儋石の貯へもなしといふ有樣であつたから女史は都會の富家に育つた身の上にも拘はらず、薪水、臼杵を勞とも厭はず、傍ら句讀を地方の子弟に授け以て家政を維持し、又失明の良人に讀書の樂みを廢せしめなかつた、既にして其一男一女を擧げたる頃世は維新の政變に際會し、夫家の二弟皆志士の間に往來し家產益々墮ちて又如何ともすべからざるに至り、家を提げて尾州高田村の親戚

内國勸業博覽會
全國五二會品評會
名譽賞牌受領

従三位前田正名君大澤緒方樫村三宅實吉等諸博士の賛評あり



大宮内省御用達
金線銀線赤線の三種あり

大黒天印甲斐產葡萄酒

帝國醫科大學御用

金線十年、銀線六年、赤線三年、醸造經過年限により區別せり

大黒天印甲斐產葡萄酒ノ名譽　本品ハ純粹生葡萄酒ニシテ本邦釀造ノ嚆矢多數ノ葡萄酒中獨リ本葡萄酒ノミ宮内省御用達ノ恩命ヲ蒙リ且ツ全國各病院ノ御用品タリ

新發明

宮崎葡萄液

葡萄液ハ體の血色素

葡萄液の消化力を助け血を増し肉を肥すに偉大の効力あるは醫家の唱導する處なり、されば醫士は常に衰弱せる患者に對して葡萄酒の飲用を薦め、亦自らも其の藥劑中に葡萄酒を配合せるとは既に世人の知る處の如し、然れども葡萄酒中には幾分の酒精分を含めるを以て平素全く飲酒を欲せざる人、酒精の身體に適せざる者に對しては尚は多少の缺點を有す、不肖多年葡萄の栽培葡萄酒の醸造に從事し幾多の苦心經驗を重ね今回理學藥學博士長井長義藥學博士下山順一郎兩先生指導の下に創製したる宮崎葡萄液は些の酒精分を含ます純粹の葡萄液なれば、芳香美味にして何人の口舌にも適す。平素此葡萄液を飲用せば

食物の消化を助け血を増し肉を肥し血色を能す

宮内省御用達

東京市日本橋區通旅籠町二番地

甲斐產商店

宮崎光太郎

振替貯金口座一九三七番
電話浪花八七〇番

太陽 第十三巻第九號 定期増刊

博文館創業二十週年紀念

明治名著集

六月十五日發行

全一冊洋裝四六判二倍
紙數五百十二頁
正價金六拾錢
郵税金六錢

●明治の思想界を導きたる大著述集也
●維新後の文明を師導したる大家の著述集也
●今日の文明は如何にして發展せしか、本書は政治法律文學教育經濟其他總ての方面に亘りて文明の先驅者たりし大家の著述を集む
●明治年間に於て新時代を作りたる名論集也
●諸先輩の一世を動かせし名著は容易に求め難し
●本書は悉く此れを網羅す
●思想界の一大紀念の書籍也
●本書無くして思想界を研究するは極て困難也
●口繪は二十に因みて珍奇なる寫眞を登載す
●本書頁數は定期太陽の二倍也紙質優等製本美麗
●思想界の大著述を最も廉に最も多く蒐集せんとする機會は此時也

(其の二)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

文藝倶樂部の増刊

ふた昔

博文館創業二十週年紀念

全一册洋裝菊判　正價五十錢
紙數六百四十頁　郵税五錢

来る六月十五日博文館創業第廿週年の吉日を紀念する爲東洋文藝雜誌の覇王「文藝倶樂部」は、左記現代廿名家の傑作を網羅し普通號の二倍大——菊版六百四十頁の日本に於ける雜誌界未曾有の大册を發刊し、表紙に、繪畫に、用紙に、裝釘に、出來得る限りの善美を競ふのみか、愛讀者諸氏より募集せる名什佳作をも披露し、尙雜錄以下また例號に倍せる趣味と實益との向上を期す。發刊の日を待ち賣切れざる内に愛誦を賜はらん事を祈る。

——(六月十五日發行)——

紀念號執筆者

饗庭篁村君　須藤南翠君　塚原澁柿君　幸田露伴君
幸堂得知君　宮崎三昧君　川上眉山君　廣津柳浪君
江見水蔭君　巖谷小波君　山田美妙君　遲塚麗水君
渡邊霞亭君　泉鏡花君　柳川春葉君　德田秋聲君
國木田獨歩君　島崎藤村君　田山花袋君　石橋思案君

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(たの三)

英語世界

▲第壹號三版　▲毎月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
毎號寫眞版及密書數頁挿入

第一號要目

發刊の辭
講讀＝▲英國史談…熊本學習院教授▲ウンベルト王…南日學習院教授
講師▲名家逸話三則…増田早稲田大學講師▲笑話三則…深澤由次郎
講話＝▲英文中の否定語に就て…佐久間東京高等師範學校講師▲アルハベットの話…岸本早稲田大學講師▲英語と英文…畔柳第一高等學校教授
遊戯＝▲ベースボール用語…安部早稲田大學講師
發音及綴字＝岡倉東京第一高等師範學校教授
詩歌＝▲ランゲテニスン等の名作評釋…太田太陽英文記者
時文研究
會話＝▲子供の對話▲會話資料…東京帝國文科大學講師アーサーロイド氏
文法及作文◎名家訪問◎懸賞文募集
口繪〔○第一高等學校址新渡戸校長○ケンブリッヂ大學○世界に於ける英語分布地圖〕
寫眞版〔○神田男爵の筆蹟○英國皇帝の肖像○ランゲの肖像○其他英學名家の肖像〕九面

第二號要目

▲英國史譚…熊本學習院教授▲伊國在郷兵ウンベルト王を迎ふ…南日學習院教授▲輪講會…長井氏嚴▲フース大將の演說▲英語を學ぶ心得…高島高等商業學校教授▲Alphabetの話…岸本早稲田大學講師▲發音及綴字…岡倉高等師範教授▲英習字を學ぶ心得…磯部國民英學會長▲詩歌評釋…太田文學士▲解釋練習…増田早稲田大學講師▲會話：ロイド文科大學講師▲桂月回顧錄英譯…武信早稲田大學講師▲野球用語…安部早稲田大學講師▲懸賞文二種▲日常用語（博覧會語彙）▲和文英譯…武信早稲田大學講師▲英和語法叢話…喜安雅太郎▲言葉の使ひ分け▲Dictationの練習▲時文研究▲英國新兵の滑稽談▲訪問（高商教授村井知至氏の會話熟達法）▲雜錄（英語會評判記、編輯餘錄）▲新刊紹介▲讀者と記者

口繪　東京外國語學校及高楠校長。エール大學。

寫眞版及木版彫刻畫　ストウンヘンジー　龜井戸の藤―高島捨太氏肖像―堀切の菖蒲―三高對早稲田野球試合―博覧會―共進會―プース大將―村井知至氏肖像―早稲田英語會―慶應義塾同上―新兵練兵漫畫―

第三號要目（既刊）

口繪　オックスフォード大學―第二高等學校及中川校長

寫眞銅版　熊本學習院教授―高橋ジャパン、タイムス記者―日比谷公園―ウォーターシュート―桑港南岸―オックスフォード端艇競漕―田植―シンガポール植物園―ポンチ畫二枚

▲英國史譚…熊本學習院教授▲異聞百種…深澤姫路中學教諭▲英譯桂月回顧談…武信早稲田大學講師▲輪講會…長井記者▲Alphabetの話…岸本早稲田大學講師▲英吉利の風俗…平田東京高等師範教授▲Rudyard Kiplingの詩…片上天弦▲會話（電車）…高橋ジャパンタイムス記者▲對話（臆病者は誰）…きし▲英詩評釋（ひかり）…熊本學習院教授▲同（小島の歌）…太田文學士▲解釋練習…増田早稲田大學講師▲受驗參考英語の公式…佐川正則英語學校講師▲日常用語（試驗語彙）▲英和語法叢話…喜安璉太郎▲言葉の遣ひ分け…S.K.▲時文研究▲萬年筆…長井青郊△懸賞文披露▲懸賞文課題▲雜錄▲新刊紹介

▲第貳號再版　▲正價金拾錢　郵税壹錢　前金（十二冊金壹圓拾錢　六冊金六拾六錢外要郵税）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

に寄食し、幾くもなく居を同國一の宮に卜して其の美濃を去る時、人に托して剩す處ろの田宅を賣りしが不幸にもそれが爲めに奪ひ取られ、囊底又一錢をも剩さず、そこで女史其の衣奩を鬻ぎて僅かに百餘金を得たれば、以て不時の備へとなし又子弟の敎授と他人の衣裳裁縫とによりて得る處ろを以て一家數口を糊するの料として居た、偶々東光寺の住職某師其情を見て之を憐み、人に告げて曩に失ふた金若干を返さしめた、女史大に喜び、前の百金と併せてこれを某富商に托そうとおもつたが、富商は他日累の及ばん事を恐れて受けざりしかば、女史に益々奮發して長子をば大阪の實母に托し、只管に家事につとめられた、其後村内の子弟を集めて讀書を敎へ、又名古屋幅下の小學校に敎鞭を取りしも、一の宮に在ること前後六年ばかりは最も貧困に迫られた時であつて、勞役服せざる處ろなく、辛酸嘗めざる處ろなかりしも、女史は安如として之に耐へ忍んで居られた、少暇ある每に直ちに其夫に侍讀し一家の經營、兒女の鞠育一もこれを親戚故舊に仰がず其の精勵勤勉によりて家計稍や支ふるを得るに至つた是れ女史が前半生の生涯である。

女史當時の情況を語つていふ。

其頃尾張の高田村に農と材木商とを兼ねた親類がありまして、子女の敎師に私共夫婦を預からうと申しましたが、弟も盲目の兄に家計の心配事を聞かせるのは心苦しいから丁度宜からうと相談に乘りました、併し良人所有の田地は賣却し食扶持として後から送らうと約束を定めて住み馴れた故鄕を離れ尾張へ辿り着きましたのは、私が二十九歲の時で、六歲の長男と二歲の娘とを携へて居つたのです、兎角する內に鄕里の方は種々不幸な境遇が續いて田地も人手に渡り、約束の金も寄越すことが出來なくなりました、所で私共夫婦を預つて居る家の主人は極好人物でしたが妻は全くの商人風で、少々遣り過ぎる方でしたから、不具な者や幼い子供を連れて居ながら何時までも送金のない私に對し、自然迷惑の目顏を見せ、何となく

氣まづくなつて、參つたのです。良人は勿論私も此に始めて世帶の苦を知り郷里より送金の道絕へた以上は親子四人厄介物に相違なし、一日たりとも厄介になつて過すのは心苦しい限りである、切て此家の針仕事でも手傳ふて謝禮の幾分かにしたいと考へ、召使から家族二十餘人の仕立物を引受けて致しました、私は元來裁縫が大好きで速いから、澤山の仕立物をズン／＼片付けて遣りました、そこで待遇も大きに宜しくりなましたが、さて私の骨折は一と通りでありませんので良人や子供二人の洗濯物もあり、乳呑兒を抱へての針仕事ですから、夜も一時頃まで縫ひました、併し不具の良人に心配を掛けるのは忍びませんし、又心配させたとてどうする術もないので、良人には一言も此境遇を話しませんでした、それで良人は何時も太平の心地で一室に靜坐し、詩文を考へて私に書けと命じたり、讀書して呉れと命じたり致しましたから私も隨分弱りましたが、終日無聊に苦しむ良人の煩悶を思ひ遣れば、私の忙しい勞苦は何でも無い、良人が一日の中生命と賴むは私の讀書を耳にするのでありますから隨分無理な時でも命ずる儘に讀んで聽かせました。

立志談

三輪田女史

刀自の學問好は天性で五六才の頃菅丞相の詩を讀んで大いに感じてそれが立志の動機となつたといふ事である、又十二三歲の頃石山寺に參詣した時、丁度月の良い夜で紫式部の故事を思ひ浮べ、自分も何卒式部の才學にあやかりたいといふ志を起された。

其後梁川星巖の門人等の組織した詩作會へ出席されたが、妙齡の女史にして秀逸の詩が出來る處ろから人々に愛され特に神山鳳陽といふ書家は非常に感歎したといふ事である。

妙齡時代の女史は專心一意學問に身を委ね、殆んど他を顧みぬといふ有樣で若し其儘で推して往くと男性

的の變り者となつたかも知れなかつたのです、所ろが紅蘭女史に親炙して其薫陶を受け、こゝに心機一轉した紅蘭女史は學問に秀でゝ居らるゝ上に婦人の常道を正しく踏み行ふ人で、良人の留守に機を織りながら三體詩を暗誦したといふ賢婦人であつたから三輪田女史も其の感化を受けて大に悟る所ありて、所謂婦人らしいといふ事を己れの立場として勉學されたのである。

其後女史は聖堂に入つて學びたいといふの熱心でしたが、勿論女子の入學は許されなかつたが、岡本黄石に伴はれて已に行李まで整へて支度して居る時丁度長州征伐の變亂が



始まつて、折角の希望も水泡に歸したのは畢生の恨みであつたと申されます。

其後岩倉公の媒酌で三輪田家へ嫁がれたが、婚後の女史は家政經理と良人奉仕とに意を専らにして寸暇を得れば書見する位でした、當時良人は外務省へ奉職して居られたが故あつて辭職し地方巡歴中古い槍傷より脊髓を侵され、爲めに精神病の氣味で遂に逝去された當時女史の齡三十六歳、家に借財のあつたのを悉く公債を賣つて消却し、親戚が再婚をすゝめるのを斷然謝絶して、一子を引つれ、金も書籍もない素手で伊豫の松山へ出て明倫學舍といふ漢學の私塾を開かれた、それが抑も女史

が寡婦となつて獨立の道を立てられた始めであつた。當時入塾生二十人、倔強の男子ばかりであつたが、皆共に女史の訓誡に服從して居ました。

女史は熱心誠實なる教育家であると同時に又文藝の嗜み淺からざる御方でムいます、女史曰く

私は雜駁に書物を讀む事は嫌で大家の傑作、志士の言行錄など愛讀致します、詩は元來好で、重に梁川星巖の春雷餘響や三體詩を愛讀します、和歌は小澤蘆庵の家集など好で見ますので、すべて志氣を確かにする樣なのを取ります、戀愛にばかり流れたのや、厭世がゝつたのは嫌ひで小野の小町の歌も宅にありはありますが、氣を腐らせる歌ばかりですから景色を詠じた歌ばかり見ます、俳諧は少し嚙つた事がありまして芭蕉や其角の名句に心醉した事も御座いましたが、近年はまあ緣遠い方でムいます、書は紅蘭に學んで紅蘭の手本を澤山持つて居ます、書は今でも頼まれて書きますが、間違へると一寸そこ丈消して傍へ少く書きます、有難い事には皆さんが却て飾りのないのを喜んで下さいます骨董を部屋に並べる事は大嫌で此間も嫁が花瓶の下へ敷て置いたレースを取除て仕舞いましたので、悴に笑はれました、斯う言ふ氣質ですから座敷には何にもありません、勿論今は學校を擴げる爲めに家族の住所は極く手狹でムいます、又何事も質素を守るのを家憲と致して居ります。

奥村五百子刀自の立志談

山水の秀麗なる處ろ偉なる人物を生むとの套語あり、西海の松浦半島は風光明媚の地なるが其東南に當りて浩洋たる玄海の波濤深く地を穿ちて松浦潟となり一面には崔嵬たる青巒連りて一面には漂渺たる彩波岸を洗ふほとりに所謂唐津の城市あり、而して其の城下近き所ろに高德寺といふ巨刹あり、こゝぞ六十年の昔一世の女丈夫奥村五百子が呱々の產聲を揚げたる地な

り、この高徳寺は今を距ること二百餘年前織田信長の臣奥村掃部之介の開山にて其後子孫相承けしが第十二代目に丁寛といふ人あり女史は其の長女なり妙齢にして水戸の藩士阪田彦五郎に嫁し、軈て二女一男を生みぬ。

女史は生來蒲柳の質なれども先考の遺風と父の感化に浴した爲ならんか、氣力常に勇健、丹心公に奉せんとするの志あり。明治廿年より二十九年に至るまで約十年間地方産業



に就て大に奔走盡力する處ろありしが、進んで力を海外に伸さんと欲し、まづ韓國へ渡り光州なる本願寺支院の境内に一學校を建て、韓國の女子を教育し頗る好成績を擧げしが、更に本願寺の命により南清地方に航し實地の視察を爲し次で北清事變の起るに際し親しく兵士の疾苦を慰問し歸來愛國婦人會を主唱し、大方貴婦人の賛成を得て之を創立したり。當時女史はこの一生の事業たり、將た其の身の化身

たる愛國婦人會を主唱するに當り說いていふ「皆さんが半襟一掛を買ふの資を節して之を積みて會費に充てられよ」と其言や誠に眞率にして且つ愷切なり、彼れや熱情あり、誠意あり、又忍耐力に富む、故に事を行ふや燃ゆるが如き熱心と切々たる正意とを以てし、而して一旦思ひ立ちし事は必らず仕遂げずんば止まざる其勇氣や眞に愛すべし、其忍耐は喜ぶべし、女史や愛國憂世の念甚だ壯んにして或は韓國の衰運を悲しみては親しく韓民教育の事業に手を着け、或は自から北清の野を踏んで屍を原野に曝らせる同胞の慘狀を見るに忍びずとしてその戰死者の遺族の救恤を目的とせる愛國婦人會を組織し、遂に婦人に稀なる大事業を成功するに至れり。

女史の演說は巧みなりといふべからざるも言葉の中に熱誠籠り聽者をして感動せしめずんば止ます、而して其の勸誘に出づるや日本全國山間僻邑足跡の至らぬ限なく、而かも數年間南船北馬、東西に遊說して遂に全國十數萬の會員を有する一大會團を組織するに至れり、兎に角その實行力と勇氣とは婦人社會の珍とすべきなり。

繪畫修業談　小蘋女史

私は四歳の時極く輕い天然痘に罹りまして、其の肥立の際から慰みに筆を持始め、好な道とて暇さいあれば畫ばかり畫て居りましたが、父、春岱氏は醫師で畫畫の道も好むところから、七歳の時に大阪の東山といふ人に就かせました、此の師は別に聞こへた人でもムいませんでしたが、この師が歿してから、京都の日根對山に就きました時はまづい乍ら少しは筆が動いて參つたのでムいました、私はどうかして畫家となり遂げたいといふ熱心が止まりせんで可なり、勉强は致したが、其頃の女子は只家庭で婦人一通りの嗜を敎へられるだけで何か專門に致そうといふものは稀でしたから割合に歡迎されまして遊歷などに參ると可なり求もムいました、私が父を亡ひましたるは十五歳の折で、そ

れから母と二人で、長らく暮して居りましたが、私のかねて獨身で一生を送りたいといふ望みは男子と交際する場合の多いと同時に人の噂のうるさきを感ずる原因になりました、其後母を失ひましてからは、此の邊の配慮が多いので婦人の獨身は或は人倫に背く事かとも存じ三十歳の時、野口家へ嫁したので厶います。

婦人が一事を成し遂げるには中々容易な事ではありません、斯道で一家を成そうと志すものは熱心と勉强は元より必要ですが第一に天禀を考へなくてはならぬ事です、此頃美術が盛んですから自分の娘も一ッ畫家にしたいとか、娘の方でも畫家は氣樂でよさそうだ位で始めましても畫才のないものは、むづかしう厶いまして、如何ほど熱心に勉强致したとて、どこまでも拙いのです、宅へ御出の方は皆中流以上の上流方で元より御嗜みだけの事ですから、御緣付になつてお子樣でも御出來になれば全然御捨になるので、どうでも宜う厶いますが、これを專門の業にと志す人で天才のない方には遠慮なくむづかしからうと思ふのであります、大抵少しの間敎へて見れば分りますからそうして是非畫の傍らに漢學と書を學ばねばなりません。

學問修業の話

井深花子女史

私の父は進歩主義の人でして、早くから家祿を奉還して浸害地の埋立を企てたといふ風でしたから、私の幼時は家計が非常に傾きましたのです、其上私の九歲の時から母親が中風に罹り、私が十七歲の時に亡なりましたので、私は小さい內から病人の看護にも慣れ、隨つて世帶の苦勞も致しました、小學校をやつと卒業してから三年間ばかりは炊事の間に糸も紡ぎ機も織つて働いて居ましたが、半襟一ッ買ふにも不自由な家計でしたから女ながらも小遣を得る仕事を致して親の助をしたいものと始終考へて居りました內、圖らず、神戶の學校へ入る機會を得て寄宿生となりましたが、家からはほんの小遣を送つて呉れるのが漸〻ですから、月謝や賄料は學校內で働きました、それは裁縫などの

時間には出ないで、齒科の生徒を敎へたり病人があれば其介抱をしたり、其樣な役目を受持つて學費を免じて貰ふたのです、私はとても卒業は出來ないと諦めて居ましたが、意外にも卒業が出來、加之米國へまで參り得られる事になつて實に望外の幸福でした、私の母は極嚴格な武士氣質で、幼い子供にも武士の娘たる道德を敎へること親切でしたから、九歲頃までに聞覺へた訓誡が今以て頭腦に泌み込んで居り、聊か米國風の敎育を受けた身でありながら、矢張り母の訓戒によつて心靈を益する事が少くありません、唯母は餘り嚴格な氣質であつた爲めに同情とか慈愛とかは乏しかつたかとも考へますが、恤まれた近所の者が敬慕するのを見ますと同情は確かにあつたのでせう、基督敎の道德に涵養された外國婦人になりますと勉めて人を愉快にさせやうといふ積極的同情が勝つて居るかと思ひます、日本の武士氣質も基督敎徒の同情も歸する處ろは同じ道ですが、私は何卒此武士氣質が消滅しない内に基敎を泌み込ませたいと考へます、宗敎も國の習慣によつて多少變化を要しませうから、日本魂の美質へ基督敎を混合したならば必ず完全な日本の宗敎が出來るでせうと存じます。

女史は更に學問活用に就て左の如く話されました。

私はこの暑中休暇前に年長の生徒に向つて斯う申しました、貴女方は暑中休暇といふ靜養の際に高等女學校時代から今日迄費やした學資の結算と今日まで習得した總ての敎科書の名目と、今日まで學校に費やした時間と此二つを調査して明細に書いて御覽なさい、其學費は多額に上つたのに驚くでせう、敎科書の積つた割に記臆の少いのを悟るでせう、又時間の積つて莫大になつたのを知つて此間に如何に利益ある事を爲したかを顧みるに違ひありません、親御を煩はした少からぬ學資に依つて習ひ得たる書物は多いやうでも專門學者の藏書に比べては書齋の一隅に置くにも足りない位ですが、それだけの書物でも悉く諳んじて居られゝば可いが、恐らく其十分の一も諳んじて居られぬでせう是れは誰でも同じ事で、私が米國女子大學に在學中、

美術史に頗る趣味を持つて居り、日本へ歸つては參考書も乏しいし、又買ふにしては高いものですから、成可く調べて歸りたいと思ひ、他人が一ページ、筆記する處を二ページ三ページも筆記し、手帳も永久に保存する目的で丈夫な立派のを用ゐ熱心に抄錄したので其際は一寸記臆もして居ましたが、歸朝後他の學科や世事に追はれる內全然忘れて了ひ、時に蟲干に出した際開いて見ても何の事やら自分で書いた事が分りませんやつと有名な建築の名稱とか彫刻師の名とかをパラリ〳〵と拾ひ出す位



實に遺憾で御話しになりません、若し此手帳が灰燼になつたら美術史といふ名さい頭腦から消へて了ふに違ひないので、まづ女の學問は斯樣な事が多いやうです扨又時間の點を申すと學校で費やしたゞけを家に居たなら、母の手助けも充分出來たでせうし、裁縫も可なり、熟練したでせう、斯ふ考へると高等な學校敎育は女に無用であるかといふに、これは學問を其儘に解釋するからで、一度學問を消化する事に心づけば益々敎育の必要を感じられます、例令ば理化學を修めたによつて自然頭腦が

明断になり、幾何を修めた爲めに事に處するに緻密となり、倫理を學んだ結果は今まで母や祖母が泣いて堪へた憂苦も、笑ひて天命を樂しむの胸懐を得られるといふ風でありましたら、一々女子の眞價を顯はす素養となりませう、若し生嚙りの理化學を振廻して舊知識の年長者をへこませ、倫理を主張して不如意の家庭を嘆じ、僅かの煩悶に堪へ兼ねて忽ち家を飛び出す樣な事があるとすれば數年の學問は無用の長物のみならず却て學問の中毒と申すべきです、學問は丁度食べ物と同じで、如何に滋養分ある食物でも、咀嚼もせず、消化もさせず、牛肉は脊にくッつき、野菜は手について居ては、身體の榮養が出來ぬのと同じですから、各科の學問はどうぞ此の注意を以て心靈の榮養を取りたいものでありますと生徒に話したのでムいます。

苦學談

小崎千代子女史

私は當年四十四歳になります、元治元年に小石川で生れました、親は舊幕臣でしたから、維新の際靜岡に轉住致し、再び出京致したのは私が八歳の時でした、小學校は草創の際でしたから甚だ不完全な教育を受けたので十二歳から今の青山學院へ通ひ後に寄宿致しました、父は中々女子教育に熱心でしたが、母は其頃德川士族風の人で、三味線や踊を仕込まふと致し兩人の意見が衝突致しました、併し私は極々遊藝が嫌ひで學校へ出ましてから、只今ピアノやオルガンにかゝつても唯譜を辿るだけで耳の働きがなくて困る位です、其頃の女學生の中には獨身主義を唱へる人もありましたが一般に家庭主義の人が多うございまして、殊に私などは、女は人に頼らねばならぬものと常に信じて居つたのです、生活は至つて質素なもので只今の學生方の不斷着がお晴衣でして、メレンスの帶を他所行として貴重した位でした、偶の奢り較にもお薩か炒り豆位が關の山でしたが只今は衛生が喧ましくなつた丈けに西洋菓子でも買はねばならず、女學生を子に持つた親御は隨分骨の折れる事でせう。其頃は交通機關が不便で

あつたから、乗り物は決して用ひず、私などは本郷の宅から築地の學校まで、いつもちびけた下駄でポクポク歩いたものですが、只今は電車といゝ便利があるだけに、學生も徒歩が馬鹿らしくて出來なくなつたといふ按排ですから萬事入費が嵩んで堪りますまい、私は十五歳で父に別れましたので母の困苦を案じて學校の休日には始終手傳を致して居りました、結婚は十八歳の時でしたが其頃の女學校では裁縫も料理も學びませんから單衣がやつと出來る位、御飯も滿足には炊けず、實にお恥かしい樣でした幸にやさしい姑を持ちましたので家事を學ぶ事が出來たのです。



私は嫁に參りたてに萬事姑を師匠と頼みました針仕事も御飯焚も、丸で知りませんからどうぞ教へて下さいとすがりついたので、それは學校にばかり居たのだから無理はないと申して子供のやうに面倒を見て呉れました、それですから折合もよく永の年月少しも姑を厭ふ心が起らぬのみならず、亡き今日に至るまで姑の恩は忘れぬ位でムいます、すべて知らぬ事は最初から一々白狀して姑の

教を乞ふ方がよろしいので。姑の有無を嫁入の一問題とするなどは、馬鹿〳〵しいとおもひます併し老人にも新聞一つ手に取らず、家の外は少しも知らない、分らずやの方が隨分ある事を毎々實見致し立派な教育あるお嫁が自由を妨げられて定めし煩悶さるゝだらうとも想像致します、けれども是は最初が肝腎で、たとへば教會へ日曜日毎に出る事の如きも最初に約束して置けばどうにか通せるものを、最初あまり心弱く體裁を繕ふて履行しないと、終に外出が出來難くなるといふ事實が幾らもあります。

それから一寸御序までに申して置きますが、一體日本の御婦人方は體裁といふ事にあまり御注意が疎そかかと存じます、それは私しの身に顧みて大いに後悔した次第でムいます、米國の婦人が交際上に體裁を注意することは實に周到なもので、唯他人の前ばかりでなく良人や我が子の前にも體裁を繕ふことにつとめ、朝起ると直ぐに容儀を整へて接しますから子供は母親の素足を見た事が少いそうです、尤も中流以下ではこんなではありますまいが、體裁を亂さぬ事はどんな下等社會にも行はれ、乞食でもそうどろ〳〵な姿は致して居りません、日本人は家屋や衣服の異るからでもムいませうが一般に淡泊すぎて體裁を構はなさすぎるかとも思ひます、體裁を繕ふといふて別に金を使ふて飾らんでも宜しいから朝の中手早く髪を取あげ、不斷着をちやんとつけて取亂してさい居らなければ、不意の來客にも少しも狼狽せず直に出向ひが出來ませう、來客が見へてから奥様がお化粧に時を費やし、客に欠伸をさせてから應接間へ出るといふ風では實に困ると存じます。

醫學修業談

鷲山彌生女史

立身なんぞと申して別に申上るほどの事もムいませんが、私は明治四年に遠州掛川在に生れましたので、父は醫師なり、兄兩人も矢張この道に志して居つたのでムいます、そこで私も物心つく頃から東京へ出て何

か一つ修めたいといふ望が頻りに起りました、丁度明治二十年頃女子教育論が盛になつて居りましたが地方ではまだなか〳〵反對者多く殊に女子が醫學を修めるなど申しては一人も賛成者は厶いませんでしたそれで私は稍く十九歳の時、出京して本郷に居る兄の家から濟生學舍へ通ひ始めました、其頃醫學生は男子七百人ばかりの中に女子は僅か二十人足らずでしたが、男子も女子も混合で敎授するのですから唯學科の講究ばかりで、品性の監督なぞといふことは少しも無かつたのです、それで其弊害は實に甚だしいものでした、其頃の學生は雜駁な種類の人が集まつて居りまして中には小學を修めただけの者もあり、方々まごついて來た人もあり、申さば摺れた學生が隨分多かつたので、女生徒に對する禮は全で缺いて居りました、毎朝授業時間前に女生徒が敎場へ入つて來ると下駄で板の間をたゝいて囃し立てるといふ風でしたから餘程剛情な婦人でなければ通學しきれなかつたのです、此輕蔑されるは未だ可いですが、中には艶書など贈る者あり其誘惑も隨分甚しう厶いました、私が卒業後、宅から二人ほど女學生を通學させました處ろ、宅まで男學生が跟けて來ることなぞ厶いました、それで長谷川(泰)さんが追々此點に心付かれて女生の通學を一時中止されました、そして私が入學したのは明治二十二年で後期の試驗を終りましたのは二十五年でした。

婦人の職業といふ事に就て大分八釜しい議論が起りまして爲めに家庭の整理を亂すとか、良人や子供の世話が行屆かぬとか、或は姑舅の折合がおもしろからぬとか、弊害ばかり多い樣に言はれますが、私は婦人の職業は毫も差支へないと考へます、一體我國の細君方は閑暇が多過ぎる樣におもひます、家事向一方の細君ばかりが完全に家政を修めて居るのかと申すと、決してそうでありません、閑暇が多ければ油斷が伴ひますから却て一の職業を執つて居る方の內幕がよく整理して居ります、畢竟用務が多いほど工夫を善く運らすのみならず職業の爲めに社會の事情も判るので、良人に對する同情も深くなるのでせう、尤も良人の氣風に

より唯だ外貌を奇麗にすることを望まれるのは特別ですが、互に精神上の快樂さへ得らるれば睦じい家庭を作れるに相違ないと信じます、又衞生上から申しても多忙は身體諸機關の働きを盛んにしますので、多忙な婦人は大抵壯健で厶います、長火鉢の前に坐つて一日ブラ〳〵して居る婦人は迚も此幸福は得られません、私は山家育ちですから、斯うして居ても、米麥の事が頭を離れません位で農家の家庭も善く知つて居ります農家の婦人は良人と一緒に田甫に出て終日働き家に歸れば飲食から子供の世話まで致し農業の隙には糸取機織から裁縫まで致して居るのは皆樣が御承知でせう、併し私は女子の獨身といふことには大反對で獨身では事を成すのが六ケしいと存じます、獨身は我儘が多く、又忍耐力に乏しいものですが是は寂寥の爲めばかりでなく、全く生理上から精神に影響するものと存じます、獨身の婦人は脳が始終緊張して居つて融和する事がありませんから自然偏屈や我儘に傾くのでせう、それで私は職業の爲めに婦人が獨身で終るといふ事は宜しからぬ事、又職業は妻となるの妨害にはあらぬ事と信じます。

立志談

櫻井近子女史

私が英語を習ひ始めましたのは明治三年頃でしたが最早嫁した後でした、私の通學致したのは神田佐柄木町の芳英舍といふ女子英學塾で、生徒は百名あまりも厶ひましたが、敎師はウイルソンといふ英人と齋藤といふ婦人でした、この婦人は神田田町の青物問屋の娘で中々學力のある人でしたが只今はどうして居られますか、一向消息がわかりません、授業法は丁度昔の私塾の樣で、先進の生徒が後進生に敎へ敎科書は重にウイルソンリーダーを用ゐて居ました、其後は續いて竹橋の高等女學校が起り女子の英學は一時隆盛でしたがそれから又ずつと衰へました、私は芳英舍を退いてから家へ敎師を聘したり、又宅から世話して學校へ通學させて居る學生に敎へて貰つたり、いろ〳〵樣々の質

似をして勉強しました。

女子は決心が必要です、女の方を世話致すのは隨分久しい間ですからいろ〳〵な人のいろ〳〵な履歷を見ましたが、いつも思ひ出して感じますのは虎の門の女子學院時代に塾の賄を致しながら苦學した一婦人の經歷です、此婦人は其後札幌まで參つていろ〳〵の辛酸を嘗め、彼の地の骨董屋へ緣付きましたところ、不幸にして良人に死別れ、幼兒を抱へて牛乳配達となり、



非常の困難に堪へ忍んで居りましたが、遂に牛乳搾取場を開いて、息子達と諸共に商業に從事する身分となりました、此の婦人の感心な事は如何なる不幸の境遇に際會しても忽ち諦めをつけて、ズン〳〵處置をつけて、決して愚痴な考を出して落膽する事はありません私は女子にこの決心を養はせる事が、實に必要だとつら〳〵考へて居ります。

精神修養談

日野西伯爵夫人

御承知の通り父は坊さんと許さるゝほど佛法に凝り固まつて居りました上に、母も信心者で、私は幼少から始終父の話を聞きましたり、母と說敎を聽聞に參つたり、そんな事ばかり致して育ちましたから只今以て信仰が精神の基礎になつて居り、何に依らずこれに依つて考へて見るのが、一つの樂しみの樣になりました、其癖よい考へも出ないので御座ます、只樂み極つて哀みの來るのを忘れず、歡樂に溺れませんければ哀みに出逢ふた時格別驚きませんし、又悲哀極つて必らず慰藉が來ると思へば心が迫らずに居りますので喜ばしい時只もう有頂天に喜んで居ると悲みに出會ふ時全く失望に陷つて仕舞ふと存じます、一生の中の喜憂は始終循環するといふ事を始終考へて居るので、よく理屈ばかりいふと叱られますが、思ふた丈けを何人の前でも言つて仕舞ふ性質です。(夫人の父君は故鳥尾子爵です)併し佛敎でも耶蘇敎でもすべて宗敎に熱心な御方は何處かしつかりとしたところがあると存じます、宗敎と道德とは離れないもので、信仰のない道德は腹にたへのない樣な氣が致します、尤も日々に進んで行く社會ですから、婦人もくすんでばかり居られません、智識才藝を以て活潑に働らかねばならぬのは自然の必要ですが、只頭へばかり血が上つて腹にこたへがないと足許がふら〳〵して、倒れそうになりますまいかと存じます、一つの宗敎に依て信仰を固めたならば、心の底から勇氣が出て、堅固な働きも出來ませうし、不慮の不仕合に遭ひましても騷がずに工夫をする事が出來ませう。

先年私の父が私の心得の爲めに認めました兒戀草といふ者が御座います、これは隨分私などの耳の痛い事が書て御座います、其一節を一寸讀みあげて見ませう。

婦人日々の行は家事の外なし、家に其の婢僕を召使ふは家事の手傳人と心得べし、必らず〳〵己が氣儘に使役すべからず、其事を命ずるにも、言葉遣を丁寧にして禮義あるべし、苟くも男子の語辭をなすべからず、

其非を斯くせよ、其物を斯くなせよなどと言はず、斯くして異れよ、斯くありたし、斯くては惡しからんなどいふべし、彼等の身の上を思ひやりて萬事いたわり行先の爲をも圖りて世話すべし、これ皆人の主たるもの丶當然の務めなれば相かまへて恩にかくべからず、たとへ不調法なる事あるとも、遉がは我れに從ひ使はる丶ほどのものなれば、前世の果報拙く、魯鈍に生れつきしものよと、勘辨すべし、ゆめ〳〵不足の心を生すべからず、主人を蔑ろにし、己が働き振をほこり、さし出がましきものは敎へなきもの丶常なれど、斯るもの丶其爲すが儘に任せ置かば、終には禮義を猥り萬づの事をすさめる方にのみ、家風を失ひ、一家の中、賤民の有樣になりぬべし、斯樣のものはよく〳〵言ひ諭して改めざる時は、速に暇を遣はすべし、殊に幼稚の子供ある内は此事尤も大事なり、古き諺に人多ければ煩ひ多し、又人を使へば心を使ふべしと如何にも諺の通なれば、人多く使ふよりは成可く自から立働き、家事を調へるが心易かるべし。



天野博士夫人　家事經營苦心談

私の良人は九歳の時父を失ひましたので、母親が宅と其時四歳であつた弟とを育て丶隨分難儀致したので御座います、主人は十三歳の時出京して苦學したのですが、其から二年ばかり立つて上京した母親は非常の奮發で人の洗濯まで致して生活を立て、僅かの公債の利子で大學に通はせましたので、實に一と通りの苦勞ではなかつたそうです卒業致

してから其公債を賣て今川小路へ小い家を求めやつと安心の糸口を開きましたので私の參つたのもこの今川小路で、其頃家族は少し、物價は廉し、お米杯二圓で一ケ月あつた事も御座いました、今考ると可笑しい樣です其上宅で專門學校の外嘱托の學校もありましたので別途の收入もありましたから、まづ此時は平和な生活で御座いました、其後專門校の外が政府の干涉で追々都合がわるくなり敎師は時間給といふ極にされましたので、休みの多かつた月は收入に大層相違が生じて參りました、其から明治廿三年の總撰擧に佐賀縣から推されたのが生活の困難を惹起した最初で御座ました、斯いふ事に關係して居ると、肝腎な務はお留守で休み勝になり、例の時間給で引れますし、來客があつて、交際費がかゝりますから出入は大層な狂ひで、負債も此の撰擧の際に出來たのです、併し此の時に當選しましたが、二十四年十二月に解散になつてから、もう自分では止めるつもりにして居たところを事情の爲め又爭ふ事になり、前年の負債のある上に又何千圓といふ負債が出來ました、其上彼の時は非常な干涉で撰擧の前に壯士に身體の利かぬほど叩かれました、それから後はすつかり斷念致しましたが、この負債の爲め生活の困難はお話になりません、暇を潰した爲めに二ケ月も三ケ月も丸で收入のない事もあつた爲めに、月々拂ふ利金ばかりも中々大變で、月末に諸支出を濟すと跡は稍く月半ば位までの小遣外殘りませんから月末になると、齒磨代にも差支る事がありましたので、其節は一錢五厘で三日間暮らした事さいありました、家計が傾くと病人も伴ふもので、私も產後身體衰弱の爲に、臥せつて居る時、宅が一寸用達に出た時、人車が突當つて跳ね飛ばされて大怪我を致し、私も病中ながら其介抱でいろ〳〵氣を揉み腦がぼんやりして今言つた事を直ぐ忘れる樣な事がありました、それから其養生やら何やらで隨分難儀致し、お恥しい事乍ら自分の衣類はホンの買物に出る位の着替一枚丈け殘して懇意の老人を賴んで與けた位で、私はもう何の經驗でも致しました、其頃は若い勢でしたか、以前讀んだ物など、思ひ

出しこの困難を切抜けて見るのが却つておもしろい事だ位におもつて居りました、それに宅も一心に働いて無益な小費は一切つかひませず、専ら回復に熱心になつて居りましたから、私も母には惡い事を一切聞かせぬ様に遣繰して居りました、衣類などもつぎはぎして算段を致すので夜分一時二時頃まで夜業致したことが幾夜もありました。

一體私共の性分として人様のものを借料して居るうちは一日も安い心が御座いません、漸く明治三十年までに全然借財を濟して了ひまして暢々致しました、それから次第に生活も樂になり收入も少しづゝ増へて參るといふ具合で唯今ではまづ餘裕の出來た方で御座います、人様がよく今一度若くなつて見たいと仰やいますが私共は若い時の辛酸が浸み込んで居ますから直に彼様な辛い目は厭なこと、眞平御免といふ感じが浮びます、併し唯今になつて幾分か人様の御苦勞も解り、少も油斷しない様になつたのは、一時難儀致した結果なので、私に取つては大きな學問であつたと存じます。

學問修養談

瓜生繁子女史

近頃女學生の墮落とか何とか隨分非難がある様ですが、これは寄宿舎の不完全なのが重なる原因でせう、米國などではどんな私立女學校でも必らず寄宿舎の設けがありますが、日本では、まだ寄宿舎のない女學校がありますから地方から出て來る學生は、親類でもないと據なく下宿屋とか素人屋の二階を住居と致して居ります、こんな處ではとても家庭の樂を味ふ事は出來ないので、淋しさに堪へませんからつい〱横道に誘惑され易いので氣の毒で堪りません、女學生ばかり世話する完全な下宿でも出來たらよろしからうと存じます、一體地方の父兄は何でも早く東京に出せばよいと考へて居る様ですが、まだ少し地方で勉強した方がよからうと考へる女學生が隨分御座います、道理の分らぬ學生は、米國の女學生がどんなに自由であらうかと思ひ違へて居りますが、實際は中々嚴重なもので、夜分獨りで出歩いたり、一人で男子を訪問致したりする

事は決して出來ませんので、必らず年寄とか、しつかりした監督者とかゞ附添ふて出るので御座います、其上宗教が頭に浸み込んで居るのも、堅固に身を守る利器だと存じます、文明の外部ばかり輕卒に眞似て、肝腎の神髓を知らないと大きな間違を生じませう。

米國の女學生はチヨツト暇があれば衣服の繕をするのが手まめで袖が切れゝば袖だけ他の切れで拵らへて縫ひつけるとか飾りの繕をするとか、又は帽子の破れを繕ふとか致すのです、帽子など帽子屋へ遣つて直させると直ぐに十圓位かゝりますからね、日本の女學生はどうも裁縫が不性で嫌ひの傾がある樣に見へます、これは必竟學科の數が多過ぎて、腦力がその方へばかり費されて居る所爲もありませう、尤もそれのみならず日本服の裁縫は何處か縫ひ始めると一時間や二時間は坐り込んで縫つて仕舞はなければ都合が惡いので、自然おつくうになる道理でせう。洋服ですと裁縫の時は中々氣を落付ねば出來ませんが、跡はチヨコ〳〵の繕ひ丈で便ずるので、手輕に始末されるのであります、日本服は洗張や、つぎ物などで、隨分主婦の一ト仕事でありますが、西洋でも小供の多い家では中々裁縫が澤山で、始終ミシンを動かして居る位です、それでも西洋の主婦は外に多くの仕事を取る餘裕があります、それは全く時間の規律が正しい所爲でせう。

苦學談

島貫しか子女史

私は伊豆の三島で生れました、不幸にして小學の教育も順當に踏まれず、勉學の希望も却々達する機會もなかつたのですが、圖らず、神に導かれて基督教徒となり、其緣故で橫濱の共立女學校に入り得る事となりました、鄕里から橫濱まで徒歩で辿りついた位、其後の苦學も隨分でしたが、其お蔭で今日苦學生に對する同情は切で又能く事情を了解する事が出來るので御座います、卒業後島貫に嫁しましたのは明治廿七年でしたが俸給少き牧師の身分なので、世帶の苦勞も隨分嘗め盡しました、且つ良人は當初から苦學生の爲めに

盡力して居りましたので家計は一層窮乏を來しましたのです、私は始終乳呑兒を背負つて苦學生の賄を致し其間に自宅で英語を教へ、夜は針仕事に二時の時計を聞くことが常でした、唯今でこそ事業の奔走に時間を惜んで車にも乘りますけれど、其頃は乘物には一厘の錢も費さず、一錢二錢さい容易に費ひ得ぬのでした殊に一昨々年頃は此事業の爲めに困厄の極に達し明日の米さへ心配する事もありましたが、神の愛護の深き爲めに追々同胞の助けを得まして逐次擴張の緒を開きました。

私共が渡米に就て苦勞致しました次第は毎度雜誌等へ申上げて置きましたが、昨年の春私が在米の同胞を實地に訪問致して同情の念に堪えませんでしたのは、家庭の慰藉者たる婦人の缺乏でムいました、滿腔の企業心を抱いて故國を離れ、朝より夕まで働き寄宿に歸りましても溫き言葉にて慰る妻なく、寂寥の極は挫折の基となり墮落の緒となる事が多いので、何卒志の確かな婦人を送つて殖民の成功を助けたいものと感じたのみならず、現に私共の會（力行會）員の中にも頻りに妻君の周旋を私に依賴された人が多うムいましたので歸朝後直ちに女子渡米部の擴張に從事致した處却〱希望者が多く此周旋に忙しくなりました、で、一時の好奇心や、射利的の者を避け本當の我が國民を愛し、貞操で勉强で、良人を補佐しやうといふ、獻身的の婦人を送りたい考であります、でなくては迎ふる者も失望し、迎へらるゝ者も失望し果は忌はしい墮落に陷るのであります。

孤島生活談

郡司大尉夫人

私共が占守へ參つてからは早十四五年にもなります、彼樣な孤島でどんなに生活が不便だらうと人樣は想像なさるでせうが、最初の中は事業の爲とはいへ、情けない事だとおもひましたもの〻、住めば都と諺に申す通り、十二年も暮して見れば、それ相應に便利な點も見出され、只今では、結句住よい土地と思ふやうになりました、總ての者が勞力さへすれば一文いら

ずに得られますから、志の堅固な人がミッシリ働いたなら乾度面白い結果があるに相違ないと思ひます、久々にて東京へ歸りました處ろ、何から何まで金錢がかゝり殊に炭薪の高いので氣が引けまして、占守で山のやうに積んで用つたのを考へると勿體ないと存じます、島にははんの木と五葉松が多いのですが、風が烈しいので皆な丈が低う御座ます、燃料は是等の木を伐つて用ひますから、澤山圍爐裡の傍に積んで焚きますし、炭も銘々に燒いて造り、冬ごもりの際には大きな炬燵へ大きな十能へ四五杯も入れて寒さを凌ぎますが山は木を伐る爲めに、段々遠くなるので厶います、島には又流木が可なり寄りますから乾かして薪木に用ひますが、船で搜しに出ると中々大きいのを拾つて來ます、これは北海道から流れて來るのもあり、時として外國から流れて來たらしいのもありますので、會の倉庫は此の流木を集めて建てました。

　それから食料に致す肉と魚類で厶いますが、海馬の肉、海豹の肉も食べつけますと中々美味です、熊の肉が一番味がよろしいので、罐詰にするとゝんと牛肉のやうです、熊は雪解の前でよく捕れるのです、偶には白熊もありますが、重に羆で厶います、魚の漁れます事は實に非常なもので、三里ほど隔つたベットブ河で鮭、鱒、紅鱒など澤山漁れますので、鰈、海鹿などの雜魚はいくらでも漁れるのです、飲料に使ふ流へも押されて出て參りますから、お晝飯のお菜などは小供が一寸鉾で突漁つて來る位で實におもしろい樣に取れます、ですから、鹽に漬けたり、干物にしたりする外に鰹節、紅鱒を三枚に卸し四つに切つてゆで、皮を取つて製しました、少し下品ではありますがだしもよく利きますし、中々風味がよろしいので、これに馴れてからは、本統の鰹節はあまり上品過ぎて味がない樣におもはれました。

某夫人の家事經營談

私は今より二十年前始めて日本橋龜澤町へ六疊に二疊で一ヶ月二圓五十錢の家を持ち、主人は某會社に

通勤し、丁度其時の月俸は十五圓で、家族は二人の外、給金五十錢の小女一人を使つて居ました或日の事肥つたお客樣が入らしたので、主人は玄關へお通し申せと、いひますし、僅か一疊の玄關ですからお客樣が大きいので、横に坐られました、又或時お客樣が入らつしやいました、私は出る事も出來ずして、臺所の板の間に三時間ばかり居た事がありまして、この晩には水甕から水を掬つて食事をした事もムいました、當時主人の常衣は木綿の双子で、私はまだ料理の方法をも存じませんから、隨分妙なお菜を拵へて笑はれた事がありましたが、辨當の菜は毎日きまつて、卵子燒を一年間つゞけましたそれでも、主人は何にも小言を申しませんでした、其の中に長男が生れましたがどうも家が狹くて仕樣がありま



せんから近隣の家へ引越しました、此家の家賃が三圓五十錢でしたが、折しも茅場町からの失火に類燒しまして、丁度生れて百日目になりました長男を風呂敷に包みて人に頼みました、此時の下女は老婆でムいましたが、近火に驚いて腰を拔かし稍く逃がれた位でした其中、雨霰と降る火の子、燒け落る音の凄ましさ、逃げる事も出來ず、或人の疊の下から逃げ出して、風呂敷に包んだ儘の子供を引取つて見ますと、莞爾〳〵と笑つて居ました、夫から築地の方へ轉宅致しました、此時の家賃は四圓でした、此時丁度、主人の弟が十八歳で故鄕からたよつて來まして、家族は四人下女一人となりましたが主人の月俸も以前よりは少し増して十八圓に成ました其後轉宅する事一ヶ年間に六度もムいました其中尤もおかしうムいましたのは下谷の某所で家賃五圓の宅でしたが、此は以前與力の屋敷跡で門番の部屋と玄關があり、正面には白と淺黄、鞘形模樣の唐紙で、昔しのお白洲の樣でした、座敷は十疊三間と五疊一間といふので、家は馬鹿に廣く飾る樣な道具はありませず、冬の寒は骨に徹る樣でした、そこで又も轉宅致しました此時は主人の月俸も大分昇りまして二十五圓から三十圓になりました、國元から第一の弟が來て一年間滯在致しました、此頃より多少の貯へも出來ましたので下谷徒士町に百五十圓で昔の屋敷跡を買ひ受け初めて自分の家に住む事となりました、時に月俸は四十圓から五十圓まで、子供は五歳を頭に三人の男兒を儲けました、其後此の家に住むこと七年間で、勤め向の都合により、筑前の三池に引移りましたが一年ほど居ます內重役の推薦によりまして三池の紡績會社へ入社致し支配人になりまして七十圓の俸給を得る樣になりましたそれから當年まで丁度八年目今日では某會社の取締役に昇進致しました。





奮闘せる我が亡妻

忠實なる内助者　雨宮夫人信子の事

雨宮敬次郎氏談

商界の偉傑雨宮敬次郎氏が夫人信子(五十五歳にて永眠)を追慕する念深きとは豫て聞及ぶところ、雨宮氏が甲州の一小農より身を起して實業界に今日の勢力地位を占むるに至りしは全く亡妻信子の内助の功に因るものとなし、數年來その銅像を建てたき由繰返し居られしが、今度いよ〳〵之を建設する事に決し、本山白雲氏に故夫人が座りたる丸髷姿の(高さ六尺)の銅像の製作を依賴されたり、出來の上は之を信州輕井澤なる氏の開墾地に建設さるべく、其銅像に用ゆる銅の量目は百五十貫目、臺石は八角四面高さ廿尺にて千貫以上の自然石を積み上げ、此費用總計七八千圓にて、來る七月十二日は恰も夫人の七回忌に相當すればとて同日同所に於て其除幕式を行ふ手筈なりと、記者頃日雨宮氏を相州片瀨の別墅に訪れ親しく夫人の經歴とその性行に就て聞く處ありしを以て左に錄す蓋し夫人の如きは眞に成功立志篇中の白眉なり

△彼女の生立

亡妻信子の生れた土地は信州上高井郡相の島村で御座います。信子の祖父は市村宗四郎と言つて、廿五歳の時に信州から出て舊幕府に仕へた者で、出羽の百姓一揆を平げた事もあり、御普請奉行に登用せられて江戸は元より關八州の水害豫防の事を司るなど、却々偉い人物でしたが、其の一人子息の源次郎は非常な放蕩者で、吉原の大門を二度迄締め切つたなどいふ豪奢を極めたものですから、遂に郷里信州へ追ひ返されて、跡目は妹に婿(市村信成と言ひ、現に內閣書記官を奉職す)を取つて嗣せることになりました。信子は實に此の放蕩子息が郷里信州で產ませた第三番目の女でありましたが、祖父の長所を承繼いだものと見えて、親には似ない誠に感心な女で厶いました。信子が上京して私と夫婦になつたのは明治四年彼れが廿四歲の時です

が、當時は私は全く據ろ無く貰ひました。何故據ろ無く貰つたかと言ふに、私は一體女房と云ふものは一生持たぬ積りで居たのに雙方の親共が無理やりに二人を夫婦にしたからでムいます。

△結婚早々の倒産

信子は其頃迄も親爺の道樂が止まないので、言ふに言はれぬ艱難苦勞を致したものですが、私と一緒になツてからは又々苦勞を仕通しました。信子の苦勞を話すには勢ひ私の失敗談も申さなければなりません。それは先づ恁うです、結婚をした當時は私は横濱で生絲種紙漆器陶器類の賣込や洋銀相場を遣つて居て、明治五年に其の方で二三萬兩も儲けました。昔の二三萬兩だから大したもので、今日の二三十萬圓にも當るのでせう。だから明治六年に平民に乘馬を許された時などは私は早速馬車を買ひました。之れが私が馬車に乘つた初めですが、マア左樣云ふもので乘り廻はして而して例の糸平などゝ友達になつて却々全盛を極めました。所が明治七年に同じ相場に失敗してガラリと樣子が變り、忽ち倒產の悲境に陷りました。左れば其迄用ゐて居た贅澤品なども追々質に入れて流して仕舞ひ、果ては着てゐる衣服迄一枚脫ぎ二枚脫ぎして殆んど身外無一物となつたのでムいました、信子が苦勞を致したのは是れからでムいます。

△下宿屋開業

既う恁うなつては私は何程力んで見ても仕方が無。仍で信子は何か自分で商買を始めませうかと言ふ。で幸ひ家が廣いからと云ふので早速取りかゝつたのが下宿屋でした。併し下宿屋を始めたものゝ、勿論十分の資本は無いのだから、折々下宿人から前借をする、而かもやゝもすると米が無くて飯も出せないと云ふ騷ぎ獨りで隨分苦んで居ました。當時の下宿人は、巡查とか、露西亞語の書生とか或は横濱へ上陸して二三日間滯在する船乘のやうなもので、今日は諸方へ散つてゐますが、今でも折々家へ訪ねて來ます。で此の商買は

信子が自分で考へ出して二人位の下女を使つて自分で一切取捌いてゐたので、私は些も手出しをしなかつたのです。其の樣にして居ながら、一方では頻りと内職をする。其頃信子は夜になると能く明朝宮詣をするからと言つて早く姿を隠したが、其實前の全盛を思ふては流石に人の前では遣り惡くかつたものと見えて人に隠れて靴足袋を繕つたり、襦袢の綻を直したりしてゐたので、恁うして日に二十錢なり三十錢なりのお金を取れば晝食のお菜代が出來るからと言つて毎晩之を續けて居りました。

△緋の袴の口號



故雨宮夫人信子

私は實に奇特なことだと思ひまして、『お前は實に感心だ今に緋の袴を穿かせるから』と言つて慰めて居りました。所が此の言葉がつい夫婦の中の口號となつて、其後信子の口から何時緋の袴を穿かせて下さると云ふことを幾回聞かせられたか知れません。ほんとうに可愛いやつでした、私は勿論彼れに緋の袴は穿かせなかつたが、併し或る意味に於ては之を穿かせた積りです。伊藤さん、桂さん、松方さんの奥樣の許へ二頭曳の馬車を飛ばせて行つて先の御方に面會して何でも話して歸へることが出來るやうになつたとすればまあ緋の袴を穿かせたと同じぢやないかと私は常に信子に話して居たのです。いや全く私が穿かせたとは申されぬ。

恁う云ふ資格の出來たのは何方かと言へば信子の力であつたのだ。それだから私は又信子に言ひましたよ、お前に其樣云ふ資格の出來たのは全くお前が下宿屋を遣つて働いたお蔭だぞ、並大抵で無い困難を物ともせずに耐え〳〵て呉れたればこそ其樣云ふとになつたのだと。

△貧困の絶頂

話がつい先へ走りましたが、扨て信子が下宿屋を遣りつゝ一家貧乏を續けて明治七年八年と經て九年の五月になりました、此時は私は實に貧乏の絶頂で、夫婦互に袷を一枚着たきりで外に何にも無かつたのです。けれ共既に五月になつたし生絲種紙の買込の爲に何うしても資本金が要る。それで止むを得ず私は山梨の親爺の許へ金を借りに出掛けたのですが、運の惡い時は泣面へ蜂で、其の留守の間に火災があつて家が全燒になりました。燒けたと云ふから私は兎に角親爺に百兩許借りて濱へ歸つて來た。すると信子は小さな家を借家して這入つてからこの家が燒けて大變に身代が善くなつたと言つてホク〳〵顏で居るのです。見れば其處に火事見舞の白米が四五俵程も轉がつてゐる、醬油が五六樽も並んでゐる。其他炭だの薪だのが澤山あるので私は成程善い身代になつてゐると言つた程でした。之れで當時の貧乏さ加減を察して下さい。併し恁う云ふ爲體になつて居ても、信子は人に金を借りるとは大嫌であつたから、火災の時にも糸平、今村清之助、高島權藏など云ふ友達から金が要るなら何程でも持て行けと言つて呉れましたが、私は皆御禮を言つて斷りました。そして之を信子に話すと、信子は其れは好い事をして呉れた其れを借りては始終頭が上らないと言つて貧乏を一人で脊負つて働きました。それから恁んな小さな家に居ては商賣が能ぬと云ふので當時南仲通二丁目に身代限の張札をした大きな家があつたから、其れを留守番がてらに無賃で借りて引移つたが、何しろ全燒に遇つた揚句ですから、扨て引移つて見ると、布團も無い、茶碗も無い、行燈も無い、草履も無い、膳

も箸も火鉢も何も蚊も無いものだらけと云ふ始末なので、親爺から借りて來た金などは瞬間に無くして仕舞ひました。が、兎も角も左様云ふ風にして引越して信子は再び其家で下宿屋を始めたので御座います。

△夢幻の如き一年間

其年の六月になると生絲の騰貴る見込がついたから私は今こそ買込むべき時だと思ふて、わづか二兩の旅費をばやつとの事で調へて山梨へ歸り、千五百兩の繭を買つて絲にひかせ、八月末に其れを横濱へ持つて來て賣ると、一時に千五百兩の利益がありました。仍で其金を持つて直ちに信州へ走り、二梱三梱の絲を買ひ占め、九月に歸つて之を賣ると、千五百兩が忽ちにして六七千兩になりました。其れからして其れを稀紙其他の營業に投じて遣つてゐると、十月半ばには其れが更に一萬四五千兩になりました。六月には僅か二兩の金に困つたやつが、十月半ばには一萬四五千兩を持つやうになつたのだから、何しろ大變なわけで御座います。それから又一つ膽玉を大きくもつて今度は歐羅巴の野呂馬を相手に一儲けして來やうと云ふ野心を起して、其一萬五千兩の中五千兩を信子に渡し、自分は一萬兩を懷にして、其年の十一月廿六日に横濱を出帆して歐羅巴へと出掛けました、所で向ふ



へ行つて遣つて見ていやはや慘々な目に逢ましたよ。一萬兩の金を僅に歸る旅費丈殘して見事無くして仕舞つたのです、で逃げるやうにして歸つて來たのは翌十年の六月のことで、當時の私の姿を見ると、身にはキチンと洋服を着けてゐるし、鼻の下にはピンとした髭もある。何う見ても立派なゼントルマンだが、扨て懷中を調べて見ると亞米利加の二十圓貨幣が一つに五圓のナポレオンが三つしか無い。そして信子は如何してゐるかと見ると、矢張り下宿屋をしてゐるが家賃をも拂は無いで私の歸るのを待つて居たと言ふ。はて如何したのかと聞いて見ると、私が置いて行つた五千兩は番頭共が相場をして悉皆無くして仕舞つたと言ふ。――九年六月から儲け出した一萬五千兩は十年六月には煙のやうに消えました。此の一年間はほんに私共に善い夢を見せられたんだ。

△白米五十俵

で之れではならぬと思ふて今度は歐風の商賣を始めましたが、其れが何うやら旨く當つて、其年内に四五千兩を儲けました。それから十一年になつては米が中る、又一方では信子がせつせと稼いだ爲に、彼是小一萬兩の身代になりました。併し恁うなつても信子は從來幾度も〳〵夢を見せられて懲々してゐるから決して下宿屋は止めません。私を當てに爲ずに番頭三人下女二人位を使つて獨りで下宿屋を遣つて居りました。而して恁う言ふんです、妾は自分で自分の金を使つて何うか斯うか之れ丈の商賣を維持して行くから、所夫は妾の身に關はず兎に角儲けて下さいと。私は此の一言に何れ丈力を得たか知れません。けれ共信子が恁うして下宿屋を遣つてる間に折々飯米に支へることがあるので、始終お米がお米がと言つて居りましたので餘り米々と言ふから私が大變に儲けた時に一つ吃驚させて遣らうと思つて白米五十俵ばかり買つて默つて送つて遣つたことがありますが、信子は何時になつても之を思ひ出して彼んな嬉しかつたことは後にも前にも無いと申して居りました。

△彼女の最大功勞

是より先に、我政府が不換紙幣を發行して紙幣の價が非常に下落した爲に、不換紙幣は是非共政府で回收しなければならぬと云ふ說が諸方面より起つて來た。仍で明治十二年になると、大阪商業會議所は時の所長五代友厚を上京させて之を有司に謀らせる、大隈伯は之に同意せられる、と云ふとになつていよ／＼不換紙幣回復の策が立ちました。其時私は其の參謀と云ふ風のものを囑託されたので、事情は知つたり事柄は御手のものなりで、安い紙幣をどつさり買込んで其年は二十何萬兩を儲けました。所で、十二年、十三年、四年と益々好況で其の財產を保つて來たが、十五年の三四月頃になると、私がどつさり紙幣を買込んだ所へ、彼の朝鮮事件が破裂して花房公使が濟物浦へ引揚げたと云ふ電報がはいつて來たので紙幣は忽ち暴落して、私は其の爲に一夜の中に七八十萬兩を損して又々一文無しの悲境に陷



りました。ア、當時の事は思ひ出すだに慄然としますよ。八間々口の大きな家を賣拂つて九尺二間の裏店に逼入る、お金と言つたら鐚一文も無し、私は肺病で血を吐いてゐる、身體は日に〳〵痩せて行く、實に慘膽なものでした。が、こゝに信子は私の爲に實に偉い功勞をして吳れました、彼れの爲に助りましたよ。九尺二間に暫時其樣してゐると、友達の小野寺が其處へ遣つて來て、朝鮮は戰爭にならぬと云ふからこゝで大に買占ると好いと言ふけれ共、金と言つたら一文も無い殘念でたまらない。大倉喜八郎や、横山孫一郎などからも其麼事を聞き込む。其樣してゐると大阪の五代友厚からも至急電報で買へと言つて來る。けれ共金は如何しても出來ない、何處を駈け廻はつて見ても駄目だはて何とか工夫が無いものかと、兩人額を集めて頻りに考へて見たけれ共所詮見込のつけ樣が無つた所へ、信子が大判二枚と慶長小判二十枚とを二人の前へ投げ出して吳れたぢやありませんか。そして之れは死んでも放さぬ積りであつたけれ共若し御役に立つなら立てなさいと言ふ。今の金にしたら、大判一枚は百二十五圓位、慶長小判一枚は五圓から五圓五十錢位に當るのでせう。實に嬉しくつてたまらなかつたですよ。で早速其れでもつて二萬圓の紙幣を買つた。すると翌日になつて二百圓儲かり、其の翌日になつて又千七八百圓儲かりました。そこで又其れを活用して五萬圓或は二十萬圓の紙幣を買ふと云ふやうにして彼是十五六萬圓も儲かりました。之れは全く信子の賜物であつたのです。

△千日千夜の願懸け

それから明治十五年の十一月のことでした、私は橋本綱常(醫學博士)さんとは獨逸から歸へる時に印度から一緒になつて歸つて以來極く懇意にして居たから、私の肺病のいよ〳〵重患になるのを見て、お前は血を吐いて居るぢやないかそれではいけぬから相場を遣るとは斷然止めにしろと言はれたのです、けれ共それでも止めずに遣つてゐると、吐血は益々甚くなつて來た。

で之れでは迚も不可ぬと思つたから、其月の廿日頃から相場はすつかり止めることに決めました、たゞ死を待つのみの身體となつて來たのです。其頃の信子の心痛はひどいものでしたよ。降つても照ても毎日欠かさず水を浴びてそして太神宮と辨天樣とへ御參詣をする。風を引いて居やうが何であらうが必ず缺さずに遣りました。それが十日や二十日ならば左程でもあるまいが、千日千夜通したのです。極寒と言はず極暑と言ずとう／＼之をやり通して仕舞ました。こいつは却々大膽な人間には遣れないことでせう。



△肺病の看護

一方で其樣云ふ風にしながら又一方では醫者のやうな役目を務めて、死ぬばかりになつてゐた、私の肺病を到々癒して仕舞ひました其頃橋本さんが肺病はたゞ滋養物を取るより外に仕方が無いが其れには最も忠實な料理番が要ると言つて教へられた料理番の心得は『目に食はせ鼻に食はせ耳に食はすること勿れ』と云ふ事でした。其意は、普通ならば先づ病人に向つて貴方は何を召上がるかと聞くでせう、すると刺身が食べたいと言ふ、之れは既う耳に刺身を食はせたのです、そして刺身なり何なり

病人の望むものを拵へて持つて來る時分には、病人の方ではもはや厭氣がさしてゐる、これでは不可から、病人には其樣云ふことを知らさずに、料理番が自分で病人の好きさうなものを見計らひ、食事時に默つて持つて行つて甘く食はせろと云ふのです、恁な六ヶしい料理番に適するものは妻君より外には無いでせう。所が病人の方から言ふと、いかに默つて食はせて吳れたにしろ毎度同じやうな料理法では忽ち厭になる。如何に親切な妻君でも大抵之れには手古摺るので、何がつらひと言つても之れ程つらいことは無いだらう。が信子は之を遣りました。私が何處へ行かうが附き纏つて步いて私の好きさうなものを食はせ、料理に就ては決して私に相談したことがありません。そして四年間之を續けてとう／＼私の生命を取り止めて吳れました。

△雨宮村の拓殖

之れも私が肺病を病んでる中のことですが、こゝで二人か死んで墓を拵えたつて仕方がないから、其れよりも我々の紀念の爲に一ッ雨宮村と云ふやうなものを開いたら面白からうと二人が相談をしたのです。其後私が信州輕井澤の附近に地を相していよ／＼雨宮村の開拓に着手致しました。そこで先づ葡萄を植えるが宜からうと云ふので、當時佛國に於て葡萄の栽培を研究して歸朝した三浦泰助、桂二郎の兩氏に依賴して之を栽培して見たが、土地に適せぬと見えて何うも旨くは行かない、そこで牧畜を遣つて見たが、之れは收支相償はぬ。それから養蠶を遣つて見た、之れも不可ない。それで最後に人を移して植えました。そして二間に三間位の家を三四十位も建てゝ、其れに各々馬を一匹づつ附けて遣りました、所が如何でせう少しく金か出來ると皆其金を持つて遁て行く、金の無い奴は馬を賣り飛ばして夜逃げをする。私は全く持て餘して、之れでは到底不可ぬと思ひました。すると信子はそれぢや妾が遣つて見やうと言ふのです。それは面白からうと言ふので。それから股引に草鞋穿と云ふ百姓女の姿になつて毎日／＼其處へ行つて或は病人を慰めて遣るとか

老人を勞はるとか其外色々と世話をやいて居ました。其樣斯樣してゐると其處に居る者は追々信子にお母さん〳〵と言つて懐いて來る、九十歲位の老爺迄がお母さん角力を見たいナなどゝ言つてせがみつく、皆が信子を親のやうに思ふやうになつて來ました。其の中に一人落着き二人落着きまして到々雨宮村の基礎を造るやうになりました。信子の死んだ時には四十幾人と云ふ多數の定住者があつた。之れは正しく亡妻の力であります。此の開墾地の基礎に定つた當時、世間の人々は其地へ數千萬本の樹を植えたことを御譽め下さいましたが、樹を植えたなどは何でもない。其れよりも此地へ人間を植えつけたと云ふこと即ち信子が熱心に骨を折つたと云ふことを御譽め下さりたいと思ふのです。信子は餘程彼處が懐かしかつたものと見えて死ぬ時に彼處へ碑を建てゝ與れと申しましたが、いや碑よりも銅像の方が見え易すからうと思つて、今度銅像を建てゝ遣る事に致したのです。

△彼女の性行一斑

信子の經歷は大體恁んなものですか、而も彼女が眞の苦心慘憺の所は迚も口や言葉には盡されません。それに倘ほ私の感心するのは其の性質です。長らく一緒に居たけれ共一度も怒つたことがありません。私は隨分取締りが無いから夜分など折々遲く歸りましたが、何程遲く歸つても何時もちやんと坐つたまゝで飯も食はないで待つて居て、そして些も怒らない、却て愛想よく迎えるのです。何程ぐでん〳〵になつて遲く歸つて來ても何時も眞面目な顏をして寒くは無かつたか暑くはなかつたかと機嫌よく迎えて與れる。私に取ッては之れは甚だつらい話で、如何しても歸らぬわけに行きません。そして信子の親孝行な事は是又無類であつたと思ひます。私も信子も兩親が長命で、此の十四五年前迄は皆私の家に一緒に居ましたが、それで家へ出入する者などは何方が何方の親だか一向見別けがつかないと言ひました位で。人は私の兩親を信子の兩親と

しか見なかつたのでムいます。私の母は八十四歳で此の八年前に死にましたが、信子が行くとア、と口を開けます、そして豆を嚙んで口移しにして貰ふ、お茶でも其樣なことをやる、彼れの孝行と言つたら實に何とも彼とも言ひやうが無かつたのです。いや親とばかりも限りません、總て年寄は乞食でも何でも勞はりました。今家に居る輝子が母に似て矢張り其樣な風があるのでマア仕合せなことと思つて居ます。

老婦人の處世覺悟

一記者

この一節は教育界の先覺某刀自が其の經歷の一端として記者に語られたる處なり、蓋し後學に裨益する處ろ尠からざるべし。

◎私は幼い時から隨分心の苦勞もし身の難儀も致しましたが、いつも心を廣く氣を寬やかにして參つた所爲か、今時の若い御方の樣に悶へ煩らふなどいふ事は微塵ありませんでした、勿論當時の敎へは今日と雲泥の相違で、女の身に取つては極めて窮屈な女大學流の敎育でムいますから今日から見たならば實に終生牢獄の裡に押籠られてゞも居る樣におもはれるけど窮屈千萬な世界ではありましたが、それでも其の空氣の中に生息して居りまするとそれが女子の自然の有樣だとおもつて、少しも窮屈とはおもはず、又つまらないものだとも思ひませんでした。

◎一體私が心の工夫を求めましたのは彼の心學道話のお蔭でムいます、私は幼い時に道話を聞きに行きました、一番はじめに敎へられたのは「人といふものは誠に得手勝手なものである。御覽なさい、行水盥に自分の身體が這入らぬとこの盥は小いから仕樣がないと小言をいふではありませんか、盥が小さいのではない自分のお臀が大きいので小さい盥が間に合はぬなら、始めから大きな盥を用意するのが間違つてゐるのでないが、何も盥が始めから小さくなつたり、大きくなつたりするものではない、我々にこの身勝手がよくなつたら大抵な事は不足に思はぬ樣になつて來て愉快に働

らけるものだ」といふ事でした「實にこの盥が小いのではないお臀が大きいのだ」と云ふ事は餘程味のある事だとおもつて何事もそこに基いて工夫を致しました。

◎私は又或る山里に佗び住居をした時に始めて米を搗きました、後には人の爲に無くされましたが其時にはまだ食べる丈けの田地は有りましたから小作人から玄米で受取て人を頼んで搗いて貰ひましたが人頼みといふものは誠に自由にならぬもので、此方の都合のよい時に、オイソレと來ては呉れない、其爲め、時としては飯米に差支へるのです或時又も此事があつたので一その事と自分で搗て見ました、身體は實に疲れましたが大分白く出來たので喜んで歸つて來ますと姑がこれはお前大變ではないか五升の米が四升になつて居る、二割も減つては困るから、此次からは氣を付けなさいと言れましたそれは全く無暗に力を入れてカタンカタン搗いたからで有ましたので、次からは氣を付まして段々上手になりましたから、それよりは飯米が乏しくなつても、もう大丈夫、一寸も心配せぬ樣になりました。

◎次には水の事です、これも矢張、山から來るのを筧を通じて置くのであるから、時々止まる事がある、すると隣といつても小一丁もあるやうな所に手桶を提げて行くのです、骨折て汲で來る水は少しばかりですぐ無なるといふ譯です、そこで有合の棒を天秤に工夫して二桶一緒に汲で來る趣向を致しました、人のするのを見て居ると誠に造作もないが、始めて天秤を肩にすると歩く度に桶の水がチャボン〳〵音がしてやう〳〵家に歸つて見ると、半分も無なつて居る、併しそれも段段と辛棒して、汲で居る內、いつか馴れて仕舞ましたから氣兼して人を頼む世話もなく、もういくら筧が止まつても、矢張安心になりました、何事も自分自身に骨を折るつもりなら世の中には滅多に心配する事はないものです、猶何事をするのでも、遣りかけた始めは中々苦しいのですが熟れるに隨つて段々と苦しくなくなり仕舞にはおもしろくなつて來るものです、何事にも唯辛棒が肝要でございます。

◎私は種々不仕合な目に遭ふて方々に住變つてあるく時代は決して一時に唯一つの仕事をする事はなかつたのです、良夫は盲目の悲しさに、自分に好な書物を見る事が出來ませぬ、生活に餘裕のある内は朝に晩に私が側に居て讀んであげたのでありますが手一つに活計の働らき、下女下男のする事までも爲なければならぬ事となつては中々書物を手にする處ろの段ではないので、小供を寐かす時を本讀みの時間と定めて良人に聽かせましたり傍ら自分の修養も謀つたのであります萬事が此の通りで、朝は未明に火を焚きつけてから夜の更けるまで三重にも四重にも時を遣つたのでムいますそういふ折は仕事の配り方も實に我れ乍らこうも氣のついたものかとおもふ程巧に出來るものでムいます。

◎私は實にあの時代ほど望みのある心嬉しい時はなかつたらうと思ひます毎日〱せわしくて〱て暮して居ると月日の經つのは早いもので去年も今年も瞬くひまに過ぎて仕舞つて小供は三人共段々成長するし、嗚呼もう暫らくの辛棒じや、今までやつて來た事を此先やれない事はない、三人共大きくなつたらア、でもあらう、こうでもあらうと働らきさえすれば人の心は實に何所までも勇むものです、今は樂隱居で實に氣樂でございます、小供等は此上ないと思ふ程私を大切に思つております、上を望めば際限もありませぬが、中位の身分として別に不自由もありませぬ、併し樂な身になると却て心に苦勞が出來るものです何故なれば、現在の幸福の爲めに、慢心して我儘の振舞でもあつたならばと思ひ、いつも〱この幸福に遁げられては大變ぢや身をつゝしまねばならぬと思ふので苦しい時代に前途を樂しんで進むのとはまるで反對です、不幸こそ却て幸福の基幸福は時として不幸の基となる者です。

◎私は呉々も皆様に倒れるまでと思ふて御働らきなさい、少しも傍目を觸る事はなりませんぞと申して居ります、又人間の身體といふものはそんなに心配する程のものではありません、現に私の若い時などは至て薄弱な身でございましたが、苦しい時代に働らいてからは後日の今日まで病氣といふものに一切懸かつた事はなく、働きつゝある間は恰も病氣が忘れて居て呉れた樣な按排でした。



下女より立身せる
大富豪の夫人
（石炭王貝島夫人の事）

九州は筑前、日本の炭坑王といはれた貝島太助氏、筑前鞍手郡直方町に其の居宅を搆へ、その財産は今幾百千萬なるか門外漢の推測では、中々當てることは出來ませぬが、同氏所有の炭坑から年々掘り出す石炭の額は、全國炭産の八分の一であると聞いてゐます、さればこの炭坑に從事してゐる事務員や、鑛夫や、又其の家族やを合計して見れば、その數實に二萬人もあるさうですから、貝島家の財産は、計るべからざるものと點首かれます。

されば貝島家一軒で、電話も架けて居れば、電燈も點け、汽車鐵道までも敷設してあります。その電話の延長は約二十五哩もあつて、本宅は固より、支店、各鑛業所等七十餘箇所に架設してあるさうな。電燈も亦自ら發電機を据え付けて、事務所も、社宅も、坑外も街道も、一面に毎夜イルミ子ーションが點くので、初めて此所へ參たものは、斯樣な山の中に、不夜城が築かれてあるのに、驚いて狐狸が誑瞞の仕業ではないかと怪まれる位です。汽車鐵道の延長でさへも六哩あると聞いては實に驚かざるを得ませぬ。

又貝島氏の邸宅は、中々立派なもので、西海道十一ケ國の中で、これに超すものは一つもない。日本全國でも、こんな立派な搆はちよつと無い位です。

然らば石炭王の貝島氏は、素から斯樣な大金滿家であつたかと申すのに、決して然うではありません。初めは、極小さい農家の忰で、種々樣々の艱難を嘗め、辛苦を凌いで、遂には斯樣な大富豪となつたのであります。が、その人と艱難辛苦を分ち、其人に内助を與へて、倶に共に立ち働いたのは、その妻の慶子夫人であります、されば世間の噂に『太助さんは、いくら豪い

人だつて、何程の智者だつて、この妻の慶子がゐなかつたら、恐らく現今のやうな大富豪には成れ無かつたらう」と云つてゐます。

慶子は、嘉永二年の出生ですから今年は五十九歳です。主人太助氏は、同國同郡の新入村の、これも矢張小農の娘であります。

夫人の父榮次郎の先祖は、元熊本の藩士でしたが、仔細あつて浪人となり、この新入村に來て住居つてゐましたが、榮次郎の父、則ち慶子の祖父の代までは代代庄屋を勤めて居つたのです。

所が、この慶子の祖父の代から、種々と不幸に不幸が續いて、身代が次第に衰へ、もう榮次郎の代には、非常な困厄の城に陷り、殆ど如何ともすることが出來なくなつた。

それで、慶子は、乳臭い八歳の時に、母の膝下を離れ、次で父が遠國へ行つて了つたので、それからは祖父と祖母との手で養育はれてゐたが、十四歳の春を迎へると他家へ奉公に出されました。

その奉公先は福岡の黑田侯の侍醫で、武谷良貞といふ人の家であつた。これは唯醫を業としてゐるのみならず、傍ら農業を營んでゐたが、醫者の方の書生や、農業の下男などが澤山居つて、家内は常に三十人以上もありました。

この大勢の飯を炊いたり、お菜を拵へたりするのはまだ年端も行かぬ慶子一人でありました。が、慶子は、幼少い頃から父母に訣別れ、貧苦の中に祖父母に養育せられ、八歳か九歳の時から農業の手傳をしたり、飯を炊いたり、その他種々の仕事の加勢をして、かやうなことには慣れてゐたので、この武谷家へ行つてからこの大勢の賄ひも無事に仕遂げるばかりでなく、その暇には農業の手傳までも爲たそうですが、實に、その能く働き、能く勤めて、少しも倦まず、怠らず務つて其のつとめを全ふして行つたのは下女の身分としては、殊に珍しく眞に雇人の好模範と仰ぐべき振舞でした。慶子は朝は鷄鳴に起き、他の人々がまだ夢の中にゐる間に、朝飯の仕度をし、朝飯が終ると田畑へ出て

農業を手傳ひ、それから又歸つて直ぐ晝飯の用意、午後は家事を手傳ひ夕飯の仕度、夜に入ると米舂、糸紡きで慶子が枕に就くのは、いつも十一時を過ぎてゐました。かやうに能くつとめよく働きましたのは、一つは身體の壯健にも依りませうが、一つは精神に奮發がなくては出來ぬ事です。

慶子か、これ程、粉骨碎身してさて何程の給金になつたかと云ふに、一ヶ年の給料として、三斗四升入の米が四俵即ち一石三斗六升を貰つてゐたのでした。この時分の一石の米は三圓位ですから、一ヶ年を金高に換算して、僅四圓か五圓にならなかつたのです。だから是を一日に割り當ると、一錢何厘にしかならないのでムいます。この些少な給金でさへも、慶子は、決して自分で使ふやうなことはせず、それを悉皆、祖父母の許へ送つて、家計の助をしたのでムいます。



殊に慶子に感心すべきは、何事に就ても極めて丁寧で、飯粒一つでも、蔬菜一片でも決して粗末にするやうなことはなく、一意專心に主家を大事に致したので、主人は元より、家族一同さては近所の者までも、皆慶子の德に服しそれを褒めそやさぬものはなく、時の庄屋も二度まで褒美

を與えたとのことです。

慶子は斯樣なとこに永年勤めて、二十二歳の時、始めて太助氏の所へ嫁いたのでありました。

この時の太助氏は、どんな身分であつたかと申すのに或る時は、石炭坑の坑夫となつて、暗黒なる穴の中で、鶴嘴を打ち振つて石炭を掘つたり、又或る時は綿打の職人となつて、塵埃塗れになつたりして、僅の給料を取り一家數人の者と、狹い穢い破屋に住居つてゐたのでした。それ故、慶子と結婚した時には、その費用がなくて、知人から米一俵と、金七圓を借りて、漸く其の式を濟ませたといふことでムいます。

働手の慶子が嫁入はしたもの〻當時の貝島家は依然として貧乏でムいました。故に慶子は山に這入つて、薪を樵り、それを賣つて僅かの錢にかへ又或時は他人に雇はれて洗濯などして、僅の金錢を得て居りました。そして每夜他人の家に行き米を搗いて賃錢を得又良人の綿打の手傳をし、其他あらゆる勞働をして家計を支へて居つたのでムいます。

その後、良人は、獨立で石炭掘を爲やうと奮發し、慶子諸共に其處へ行きましたが、この時分の石炭掘と云ふのは、又實に哀れなもので、家と云つては、丸木の柱を其儘地上に突立てた小屋で、藁で編んだものを吊して壁の代りとなし雨戸もなければ、障子もなく、床と云つても只地上へ直ぐと藁を敷き、その上に藁莚を置いたまでのもので、起るにも寐るにも、着の身着のまゝといふ體爲、蒲團もなければ、搔卷もなく枕は杉の丸木でわづかに石でないばかりの仕合猶驚くべきは食器で、それにま蚫の貝殼の茶碗、箸は固より其處らの、木の枝を折つて間に合せるといふ、至つて淺間しい有樣でありました。かやうな境遇であるにも拘はらず、慶子は、いつも、可厭な顔一つせず、能く其の艱難を忍び、辛苦を凌いで、出來得る限り働き、只管良人の立身を祈つてゐたのでした。それが爲め、太助氏も時に、多少金を貯へることもあつたが忽ちにして失敗、又失敗で、都合三回獨立して、三回共失敗したのでムいます。

失敗の時は、誰でも心持の宜いものではないから、太助氏も折々妻君に向つて無理な小言をいひ時には甚く叱り飛ばし、又は擲りつけるやうなこともありました。けれども、慶子は、いつも温顔を以て迎へ詞しづかに良人の氣の休まるやうに慰藉し、又部下を勵まして辛苦を分ち、艱難を共にし、日夜苦心して、家政の整理に力を盡し、傍ら子女の養育にも怠なく勉めてゐたから、この慶子を見る人は、いづれも良妻である、賢母であると褒めぬものはなかつたのでムいます。

慶子は斯様なに苦勞して、遂には前述のやうな大富豪になつたのでありますが、決して贅澤な眞似を爲たり又他人に驕つたりするやうなことは、露ほども無く。現今では、大富豪の夫人なれば、何一つ不足なく衣食は意に任してなすべき身分乍ら慶子は、流石に其昔を忘れず、今に木綿服を着て、跣足のまゝで自ら野菜を栽培したり、味噌を搗いたりして、決して榮燿榮華な振舞をせぬのでムいます。

殊に慶子が女として最も尊重すべく、最も感服すべきことは、慈愛心の深いことでムいます。今其の一例を擧げて見ますれば、嗣子榮三郎の嫁の花子がゐる所では、決して跣足になつたり、勞働らしい事を爲ませぬ。なぜかと云へば、この花子と云ふは、或る富豪の娘で、生來未だ、跣足は愚か草鞋一つ穿いたことがありません。それゆゑ、慶子が自身で草鞋がけになつたり跣足で勞働したりしては、嫁の花子の身としては中々堪へ難く思ふならんと察してこれをせぬのでムいますこれ慶子の慈愛心ともいふべきもの、あゝ姑としてもこの位の人は世間に幾人ゐるでせうか、一つに成功したものは既に萬事に成功して居るのでムいます、慶子は實に心の屆いた人と言はねばなりません。





深山幽谷



放縱なる良人を感化して家事を經營せし婦人の實話

婦人記者

薪一本、炭一片の儉約を爲しつゝ體面を維持し行く家の主婦は却々困難でありますが、此難局を巧く切り拔け、自ら修養し子女を教養して不遇的な良人の趣味を滿足せしめられたる某婦人の經驗談を少しく御紹介申し上げませう。

▲母の教訓と處女時代の希望

私は儒者の家に育ちまして母は後妻に參り、私以下二男二女を擧げたのですが、前に嫁した家は內々良人の妾となつて居た召使が權を振ひ、隨分苦痛を忍耐したのが充分頭腦に泌み込んで居り、熟々財產や容貌の價なき事を悟つて居ますので、私が物心付く頃より自分の實驗を話し聞かせ、且つ御前が未來の良人をして幼少から此母が撰んである壯丁は、數多ある父上の門生中の一異材、將來有望の人物にて容貌は醜惡ではあるが、當時の學生には珍しい氣概があり、父上も望を屬して居られるから、例令如何なる人が婚を求めても志を動かしてはならぬと說き、尚よく例證とした昔話は、或る門閥家の姬君は故あつて或る山中の炭燒男を許嫁と定められて在つたのを、兩親も流石姬に打明け兼ね、降る如き申込者を謝絕される許り、其內姬も追々姥櫻となり譯知らぬ姬は緣遠きを果敢なんで、貰ふて吳れる人あらば如何なる方へでも厭はじと歎かれた時、兩親は初めて彼の炭燒男の事を語られました處、姬は驚ける樣子もなく、唯獨り深山の奧へ嫁入されたのですが、山猿の樣な見かけに似ぬ良人の氣高き氣性に姬は打喜び、馴れぬ賤業を苦とも思はず仲睦じく暮

す内、姫は邸より持參した小判幾枚かを良人に捧げし處、初めて小判を見た良人は非常に打喜こび是れと同じ物が此の山に在る事を知つて、夫れより金鑛の採掘に掛つて遂に長者となつたと云ふ小供だましのやうな話でしたが、私は深く此話の味を感じて居つたのです。母は深窓に育つて萬事束縛された反動で娘達には自由教育を重んじて居りました。夫れで私は小學校を卒業致してから男女混同の中學校（高等女學校の如きもの）へ寄宿入學致し、女子部の監督をして居りました、薊の花も一盛で私のやうな者も十七八となれば隨分と有望なる結婚申込者も出來ましたが、兼々母から云はれた末頼もしき未來の良人が立身されるのを信じて居ますから何れも謝絶致しました。此時代の希望は却々樂しかつたもので、未人の良人の品性は母より度々聞ては居れど如何な風采であらうか、醜い方との事ではあるが今知れる男子の誰位であらうかなぞと空想は常に此事に馳せて居りました。

▲一見して山賊と誤りし花婿

未來の良人は孤兒で不幸に育ち、稍長じてから獨力東京に遊學致したので、螢雪の苦を嘗め盡し追々人に知られて日清戰爭の際某協會の任務を帶びて滿洲地方を探撿して殆んど三年間同地に留まり、後歸朝いたす途次前約を踏むために私の家へ立寄りましたがこれは丁度十年以前國を飛び出して以來始めての歸省で御座いました此時私は十九歳で未だ學校に寄宿して居りました處、家から迎ひが參り、是々だから島田髷に結て歸宅せよとの事に胸を躍ろかして歸りますと、奥座敷に坐つて居た彼の人は、骨格逞ましき大兵肥滿の一漢子色飽くまで黑く宛がら亞弗利加土蠻の如く滿面の痘痕垢にまみれ眼光爛々として恐ろしく頭髮は延びて蓬のごとく征衣は破れて海布の如く恰も鬼の窟に住みて人をも喰ふ山賊のやうな風采でありました。若し前々から母に聞いて居なかつたなら屹度私は落膽氣死したに違ひありません。併し茍且ながら花婿である

から袴羽織に着替て往けと親戚が勸めたのも聴かず、風雨に曝された儘の姿で來られた由を聴いて　私は何更床しく存じました。直に形計りの婚禮を濟せ四五日を經て共々出京致す事となりましたが、良人は結婚後　私に一寸も言葉を交へず、國境へ參つてから、初めて此處が國境だと云はれ、不覺私が落涙したので又々無言をつゞけ、樂しかるべき新婚旅行も窮屈と心配に終つて着京致しました。



▲新世帶と收入

着京してから暫らく下宿住ひで暮して居ましたが、或時良人は私を連れて下駄屋へ參り　私相應の品を見立て呉れ代價を置いて先へ歸りました處、其下駄は白木で　私は黒塗が欲しかつたので自分の所持金の內から少し足して求めました。是は國を出る時母が襟へ縫ひ付て呉れた用意金であります。私は自分の金を足して求めた事を正直に良人に話しますと大層立腹致し其後は時々大枚の金を默つて座敷の眞中に放つて置きましたので略々良人の意地も分りました。程無く一家を持つ事となりましたが、良人は家探しなぞ面倒臭がりますから、慣れぬ私が方々を尋ね廻り小さな家を見付け掃除や引越し一切の役を獨りで濟せました。尤も柳行李に机位の荷物で世話もなかつたのです。初めて主婦の位地

に坐つた私が何より氣になつたのは家計費で、誠に少なく定つては居ますが時としては少し位超過する事もあり、何に致せ新世帶で臺所道具から買揃へねばならず、其上來客も可なり多く如何に物價が安い頃でも足らぬ月が有勝でしたが、良人に云ひ兼ねて月末になると內々で例の襟金を少しづゝ融通に用ゐた事もありました。月々の掛りはどうにか遣繰るにしても一體良人の收入は如何程位であらうか、曾て私の兄が『彼位の技術があれば百圓以上の收入は必らず在る』と云はれた、而して見ると大抵は隱して居らるゝのであらうか、去りとて酒も用ゐぬ謹直な良人か潛かに徒費さるる筈もなし、渡す金の不定なのは或は借財でもされるのでは無からうか、兎に角奧齒に物の挾まつた仕向さるゝは面白くなけれど、少ない收入を自分に打明兼ねるのも意地强い良人には左もあるべき事と考へ金錢の事は一寸も話題に登ぼせませんでした。

▲良人の價値

私が男兒を初產したのは、結婚の翌年五月でしたが、出產の四日前にやつと賴んだ雇婆も永くは置けませんから、六月末に暇を出したのです。鄕里の風習が取れぬ私は盆間際、雇婆を出すのが非常に辛う御座いました。唯今でこそまめ〲しい良人が、其頃は水一つ提げては吳れず、座敷一つ掃くではなし、赤兒の手代りさへ一寸も致しませんでした。赤兒を脊負て朝飯の仕度を致し、良人が起出外出した暇に大急ぎで座敷の掃除を了ふのが却々忙しう御座いました。其頃近邊に住つて居た兄夫婦は時々來訪いたし。子守も置かず、襁褓を暖める炭火まで儉約するのを見て、良人に收入を隱され乍ら辛苦する馬鹿者のやうに申されるのが誠に辛う御座いまして、來訪の時は成る可く體裁を繕ひ相應の饗應も致したのです。總ての點に於て處女時代の空想とは大いに齟齬した境遇ではありましたが、私は少しも失望致さぬのみか、此境遇に依て良人の職業に眞價ある事を悟り、益々敬愛の念を强めました。良人は狷介不羈とかいふ側の男で世間では多少聞こへ

て居るに拘らず收入の點は全く反對で、斯く良人が私に對して片意地張るだけ名實相伴はぬと云ふのは、良人の人物に價のある證據とおもひ、格外に低き報酬に甘ずる良人を勞少なくして分外の收入ある俗世界の人人に比べると淸廉高潔に相違ないと感じました。而して是と同時に此收入は感謝と同情の淚を濺いで用ゐねばならぬと感じたのです。勿論初めから儉約の方法は充分講じて居ましたが此感念が起つてから益々克己忍耐の精神を堅めたので御座います。

▲正月着の工夫

家を持ちましてから初めての年の暮、丸裸の良人の春着を何か調へたいと存じましたが、出來ぬ工面して例の意地強き良人に慾いな物を着せるより一層世間並を離れた物が宜からうと考へ、目倉縞の羽織と布子を調へ土方の親方でも着さうな物を拵へました。私のは國から持參の絹物がありましたから、是で春着は間に合ひます、けれども古くとも絹物を纏ふては良人と並んで外見惡しと存じ、國へ注文して木綿の手織縞を取寄せ、持つて來た絹物は悉皆送り返へし、當地で春着を新調したから古い衣服は不用になつたと申送りました。斯樣致せば大に實家の兩親を喜ばせ良人の體面を飾るのに好方便と考へたのです。私は總て買へる地位になつたら何時でも買へる、瘠ばつたい有金の內から買つて世間並に致すのは嫌いで御座いました。

▲下婢の工夫

程なく良人は浪人となり、前より幾分か融通の利く場合も御座いましたが、不定收入の生活は尙更油斷ならぬと存じ、勤儉を勵んで居りました。併し追々子供も殖え、來客の際人手に困りますので國元から女學生を一人呼寄せました。是れは裁縫研究が志願でしたから直に學校へ通はせ、其暇に家事を手傳はせたのです。下婢を雇ふより幾分か經濟ではありますし、裁縫の通學ですから宅の縫物を手傳はせられ、第一下婢より高尙な志を以て忠實に働らきますので、子供等の爲に

もよし私の主義を實行致すのに至極好都合でありました。而して本人も志望の學科を修むる傍ら、家事の實習を爲し得られ誠に雙方の得策で御座います。其代り私の繁忙と氣配りは普通の下婢を置く比ではありません。朝は子を負ふて竈元の先立となり彼が出校時間を妨げぬやう、歸校後も成る可く裁縫に坐らせて彼が滿足するやうに手繰致し、彼が忠實の報酬には私が身體を働かす事を心掛て居りました。

▲廢物利用

家事の助手が出來て少し時間の餘裕得るやうになりましてから、廢物利用を實行致す事が出來ました。其頃の日記に、今日は襤褸切を撰り出て子供の寢衣三組をつもり上げたなぞと書て御座いますが、私は始終襤褸切箱を無盡藏の資庫として居りました。單衣の弱つたのも裏を付ければ袷として着られ、メレンスの小切も市松にはげば奇麗な座蒲團の皮となり、地織や飛白の小切は子供の足袋表、毛布の破れたのは足袋底に結構です。綿屑をつばなかせば新しく求めた赤綿より良い品となり。手造の鼻緒は買ふたのより丈夫であります。其他落散れる糸屑は拾ひ集めて雑巾をさし、不用の葉書は焚付に代用致し蜜柑の空箱を西洋新聞紙で張つて子供の衣類雜品を分類し子供各自に仕末させて人手を省く等の類で御座います。或時はぼろを集めて羽織にまとめ屑屋に拂つた事もありました。贈品でも白キヤラコで涎掛を拵へ、一寸縫取をして子供衆のある家へ手土産に致したり、縫取した信玄袋を造つて置いて旅立つ人へ送つた事もありました。私は唯今以て洋服の襟飾、子供の帽子、肩掛、シャツ、ヅボン下、靴下、敷紙等は皆手造に致して居ります。夫れから唐紙の張替、壁張なぞ職人を頼んだ事は御座いません。廢物利用と申す事は些細のやうでも影響は大いもので、良人の収入が少い時でも餘裕ある如く用ゐられ、倘良人の嗜好品例令ば飲食物、書冊等を求め得られ大に良人を慰藉する基礎を造る事が出來ました。

▲燒石に水の經濟を戒しむ

家計の必要上致方がないとは申しながら、良人の勞力、特に精神を疲らした仕事の收入を、燒石に水を掛けたやうに妻か吸ひ取つて了ふのは、良人の勞に對し、仕事の價に對し實に勿體なき次第と私は熟々感じて居ります良人は粗豪な方でもあり且平生私の勤儉も承知して居ますから、一時に收入の在つた節は悉く私に擲げ出し、私の裝飾品や子供の衣服も買へ、世帶道具も買へと申します。私は其厚情を感謝して受けますが、實際は却々うかと買ひません。不定の收入は今月充分でも來月の警備を致さねばならず、自分等の衣服や家具は、貯蓄の上で何時でも買へますから默つて預けて了います。市街を歩いて見れば何も彼も必要品のみで買へば必らず重寶にもなりませう。併し買はずとも濟せば濟ものですから細々買を我慢して貯へて置き、例令ば百圓餘裕が出來てから拾圓の品を買ふと云ふ主義を心掛けて居ります。併し良人の滋養食料費とか行樂費とか申すものは決して節約致しません。



▲趣味の一致

私は趣味の一致と云ふ事に付て餘程苦心いたしました。先づ何より良人の話相手になるだけの素養が必要と存じましたが、際立て學問をいたすには金と時間の餘裕がありませんから、在合せの書物を手當り次第讀んで淺くとも博く知る事を計り添乳の間や骨休の暇に新聞雜誌を初め良人の机上に散つて居る書物を亂讀いたし、時としては子供の守を致しながら美術展覽會位は參觀して古人の筆跡（勿論一端ですが）を探つて見たり致す内少しづゝ談話の種を蓄へ得られるやうになり、古今人物の批評、社會の出來事なぞ片端位は良人の話相手となられ、馬の耳へ念佛聞かされる程でもなくなりますと、良人も興に乘つて説明して與れ、私も此說明に依て新智識を收得すると云ふ工合で、和氣も自から其間に湧き出るので御座います。或時は夜の更るのも知らず快談致し、隣家に來客と間違へられる事も御座います。其樣趣味の一致は私も樂しんで出來ますが、或趣味に依ては隨分苦痛を忍ばなければなりません。良人は旅行好で一年に二三度は必らず出掛け、土產には高價で實用外な地方の名產品を買つて戾る事がよくあります。自分が平生矻々と儉約する心から考へると、惜しいやうな氣は致しますが、大贊成で此品を歡迎して置きます。又良人は食道樂の方で朝飯から刺身を望む事もあり、晩食には手料理ながら數多い副食物を膳に上せ、食後は麥酒に菓物と云ふ工合ですから、經費の過半は飲食費に用ゐなければなりません。それと同時に良人は青年時代放縱生活の餘勢が全く失せず、不時の收入のあつた時には興に任せて一擲千金的の豪快を買ふ樣な事もムいます併し是れを償ふための、子供等の粗食、廢物利用の魂膽等を良人の前に表白したなら、折角の御馳走も咽喉につまる次第と存じます。麥酒瓶の栓を快く拔くのは留守の間に襤褸とぢくりを精勵しなければなりません。總て斯樣調子に忍耐して良人の趣味に投じて居ります。

▲臨機應變の必要

良人の趣味を満足させるには、臨機應變が必要と存じます兎角儉約に傾くと良人までを切詰に待遇いたし、身だしなみも趣味の一致も家事の爲に打忘れて枯木寒鴉の境遇に陷り、遂に良人の意氣を消沈させて了ふかと存じます。去ればとて根底も堅めずに唯趣味の一致にばかり心を奪はれますと、戸棚は鼠の巣となり、足袋は切れたまゝ屑屋に賣り、晩



食の御菜は店屋物勝と云ふ、豪放に流れ易いのです。是ではいつか、世帶に穴が明き、經費の不足を良人に訴へるやうになつて。前者に勝る弊害を生じませう。此中庸を守る事は却々困難なもので御座います、或日曜に良人は風邪で臥つて、私は庭で張物を爲て居ますと、今日は某學會に異人の講演がある筈、是非其の容子を見る積りであつたのに殘念な事だと良人が歎つのを聽き、私で分るなら大體の意味だけでも聽て參りませうかと申すと、何卒左樣して呉れとの事。私は直にふのりの手

を洗ひ手早く衣服を着更て學會へ驅け付けました處、七月腹致して居る私を門番が不思議さうに見て居りました。

▲餘裕の必要

良人の收入さへ多ければ金と時との餘裕は自然に得られると云ふのは當然の理屈でせうが、私は收入の少い時でも勉めて此餘裕を造りたいと考へ、世間並はづれた忍耐で實行致しました。世間並をはづれると申しても交際向は別ですが、先づ此位の收入なら自分や子供が此位の衣類を買ても差支ないと計算が立つた時、目を眠つて預けて了いました。平生細々買を我慢いたす代りに冬着を夏の內に格安で買ひ置く事も出來ますから、年末一時にどつさりの買物は御座いません。私は元から收入の程度より低い生活(良人の嗜好品は別)を工夫いたした代り、收入の割合に財布の中は餘裕がありました。時間も其通り油斷なく手配いたし、冬着の洗濯は春の內、仕立物は入梅中にせつせと仕上て了いますから、夏秋は日々の用事だけで暇が得られ、良人の好む郊外散步にも氣をゆるりと供が出來、夜分も讀書や談話をゆるりと致す事が出來ます。夫れから小學校の懇和會等にも出席して子供等の平生を觀察する事も出來るので御座います。總て餘裕は良人の感情を快く致すに違ひありませんが、收入少く人手の足らぬ家庭で此餘裕を生み出さうとするには、うんと儉約してはうんと支出し、みつしり働いてはみつしり遊ぶと云ふ風に溫度表の昇降を烈しく致さなければ出來ません。迚も平坦な徑路をポツ／＼と辿つて居ては難いので御座いませう。私は又妙な意地張で良人が浪人して居る際は算段しても子供の身なり等に氣を附け、貧乏じみぬやうに勉めて居ましたが、一定の俸給と定まツてからは却つて體裁的の費用を節して貯蓄する方針にかへました。

▲來客の饗應に就て

私は來客の顏を見てから俄かに菓子や店屋物を買つ

て出す事は致しません。菓子など客の前に列べましても、客が充分に口へ入れるわけでもなし、幼い子供が欲しい顔でも致すと却つて客へ失禮になりますから、買置してある水菓子位出すとか、又は歸られる時包んで上げるのです。其代り御飯時になれば、平生貯へてある食料品や、有合せの物で、粗末なりとも御飯は必らず上る事に定めて御座います。總て事に臨んでから慌てゝ買ひ調へるのは不經濟でもあり、客に心配をかけるものと存じます。

▲明日は日曜、御客は良人

鬼の留守に洗濯と云ふのは、妻の氣保養でも致す諺のやうになつて居ますが、私は敬愛する鬼の留守に家事を齷齪といたし、歸る頃には亂髪も掻き上げ、帯も結び直して快く迎へ、保養は夫から致す事に定て御座います。特に日曜日は良人一週の勞を慰める爲め、珍客として待遇したいと存じますから、土曜日には此用意を致して置きます。先づ自分の結髪、入浴、子供の髪月代、辨當の支度、歸宅後の御菜の用意等手落なく致し、翌日は早朝から散歩の供が出來るやうに豫備して置きます。私共では日曜を尤も樂しく送る代り、土曜日は却々繁忙で御座います。

▲御土産は御父様ばかり

私は買物其他の用事で屢々外出致しますが、留守居する子供に菓子袋を土産と致しませんから、御母様は御土産のないものと定めて居ります。子供を連れて出た時も菓子店へは決して立寄りませんし、間食は一切與へません。併し良人は土産好で時としては羊羹やカステラ、或は林檎など二圓三圓といふ大袈裟な土産を買て戻るので、子供も父の歸りを待兼て居ます。父の姿を見ると懐から本を奪ふ兒もあり、風呂敷包にぶら下る兒もあり、家庭は俄かに陽氣付て面白くなるので御座います。私も此際は制限せずに子供を悦ばせて置きます。

此夫人は常に『私も毎日平凡な勤を致して居るばか

りですから御參考になる御話も在りません」と言はれますが、記者は此平凡が神聖なる主婦の本職で、又尤も實行に困難な事かと存じます、良人と相並んで赫々の名聲を世に現すでもなく、永遠に緣の下の力持をして居ると云ふのは、虚飾に走る女子の到底出來る事ではありません。御話の上では如何にも優しい良人のやうに伺ひ取れますけれども、此良人は一種異樣な變人奇物で大々的の放縱家とおもへば又飄々忽々の仙人肌で在たのが追々常識に富み圓轉滑脫の人になられたのは全く夫人の感化と申しても宜いと存じます。

理想的主婦

佛國の婦人は生來婚姻學の達人なり、榮華に耽る高貴の淑女も、裏店に佗しく暮す貧女も佛國婦人と云へば實に愛嬌の塊なること不思議なり、如何程の貧婦にても小奇麗にサッぱりとして伶俐らしく、さながら蝴蝶の羽たゝくが如き風ありて、一擧一動しなやかにして、一寸衣服の裾かゝげて雨あがりの街歩むにも其優美なること天下に類なし、佛國婦人は或はめかし過る嫌ひあれども、俗なる嫌ひはあらず、年若き裁縫女をして貴顯高位の客間に一時間も居らしめば、起居動作、言語容止など宛ながら高位婦人を見るかごとし、其觀察力の鋭敏にして何れの境遇にもすべて適すること右の如し、佛國婦人の常に目ざす所は良人の眼によく見られんことなり、一體分身にして良人の朋友ともなり、腹心ともなり、事業の仲間ともなり、食卓の相手ともなり、また品好き意味に於ての情婦ともなるは佛國婦人の特色なり、彼等は常に身じまひを變ふ、三四週間同じ髮の結ひ樣をする者はなし、愛と云ひ情と云ふものは些細の事、一寸した思はくによりて育つものなるを知り、髮に一寸薔薇の花を揷すとか羽織着かゆるとか髮の結ひ樣とか云ふ事は良人の愛情を養ふに大關係あるものなるを知り如何に旨き物にてもいつも〳〵同じ煮樣にては何時しかまづくなるものなる事を知るなり。

世間には婚姻をすれば詩的の興味盡るといふ者あれどそは愚かなる事なり、佛國婦人は婚姻後の夫婦暮らしの面白味を十分に解し居るなり、英國にては興味は結婚前の約婚時代にありて、結婚なすれば直ちに實際生活に入りて興味も自然に盡くる樣なれ共、佛國にては之れに引替へ、結婚は初めにして興味はそれより生ずるなり、夫婦相識り相解し、相なづくは結婚後の事なり、佛國の四十女何故に愛嬌多きやと云へば、此は其女の常に良人に愛せらるゝ事のあり〳〵と容貌に描かれ居ればなり、佛國の夫婦は互に少しも相識らずして結婚すと、英人のよく言ふことなるが、其は事實なり、本國には十年約婚して猶結婚せぬ者すらあり、されど英人は一たび結婚すれば詩的興味何處にありやといふ樣になるなり。



貴婦人の月旦

をんな記者

△板垣伯爵夫人

御氣象は極めて圓滿な方で、容貌は艶美と申すべき方、そして誠に人好のする交際上手な御方です、伯爵に添はれてから二十四五年にも成りますが、其間伯の生涯は數奇を極め、隨分家政上に御苦勞を遊ばした方でムいます。憲政黨內閣の時、伯が多年災厄繁き政黨の首領から大臣になられた時は、板垣家の家政も一時愁眉を開いた時でしたが、それもホンの束の間で、又もや朝を退きて元の政黨に歸へられた時、夫人は嗟嘆して、ア、又借金の斷りをいふのかなア辛い事ぢやと述懷されましたそうです、眞に私共は同情に堪へません。

△田中子爵故夫人

土佐の名門深尾家の御息孃で子爵には主筋の娘です容姿は凄いほとお奇麗で體質は寧ろお弱い方でした、交際は中々巧みで、其上經濟が御上手、一代の間に子爵が百萬圓の富を作られた內助の功は大したものです性質は慧敏、同情の深い方でした。

△桂伯爵夫人

御素性は低い方とは申せ、伯爵夫人と成られてからは、萬事上流向の交際に御差支ない樣に御修養を務めらるゝそうです、容姿は高尙の中に何處となく粋なところがムいます、伯爵とはお年が二十四五ほども違つてお若く御風采は華麗な方、お持物は寶玉金銀、不斷流行の粋を極められて居ります、性質は慧敏の方、以前は伯爵と御同車で、時々伊藤侯など訪問されましたが、中々其の調子がうまいので流石の侯爵もころりと參いてお仕舞ひなさるそうで、兎に角明眸千金の價

ありとまで許された方です。即ち玉輿記中の人物です。

△松方伯爵夫人

家政一點張で、昔氣質な極く嚴疊な、そして太つ腹な御方です、交際社會には少しも御顔出はされませんが、一家一門の世話は中々行届いたものです、お一と腹に十二人の御子息令孃が厶いまして、お孫が五十人も居らせられるそうです。質朴、儉素の人です。

△井上伯爵夫人

主人の伯爵と同じ樣に任俠な方で、且つ家政上に驚くべき手腕のある御方といふ評判です、不斷子分好の伯の事故一家後門の繁昌は百萬石の大名も及ばぬ景氣伯直參の郞等はまづこの夫人の御機嫌より取り入らねばならぬとの評判、夫人の力量の凡ならぬを知るべしです。

△樺山伯爵夫人

伯の頑固一徹とは反對で中々如才のない方、氣質は御國風に拘らず開けた方で、世間の風潮や、時の流行等にはよく通じて居られるそうです。體格は嚴疊で言語は寧ろ流暢で、當世の若い者も叶はぬ位だそうで厶います。

△西鄕侯爵母堂

お若い時には中々の美人、殊に賢明無双の淑女といふので大西鄕の目に留り、これならばといふので、從道侯に娶はせられた方です、家政は尤も御上手、子女の薰陶至れり盡せりで賢婦人といふ評判は夙に高かつたお方です、西鄕家一門の祝福の今日ある夫人内助の功至大なりと申す事です。先年故侯爵が品川子爵と協同して國民協會といふ政黨を組織された事がありますると大分この事業には金が費へたと見へまして、相當に有福であつた西鄕家の財産も爲めに傾き、やがては夫人方の衣裳などにも手のつく樣になりましたから夫人は徐ろに從道侯に向つて言はれるには一體その協會といふものは公けのものでせうか、それとも又西鄕一家のものになるのでせうか、一寸お尋ね申しますとやられたので流石の侯も大に辟易してイヤそれはわるかつたと申されて以來は協會と深い關係を絕たれたそ

うです。

△鍋島侯爵夫人

交際社會の大立物、性質濶達圓滿、度量あり、多藝多能、人望高く、世話好で、義侠心に富んで居られる方、大名華族の奥方中での利物です。御子息令孃澤山におはして、お一人は宮様へ上つて居られます。

△岩倉公爵夫人

名族夫人中での敏腕家で中々權式の高い婦人です、殊に當今婦人中稀れなる勉强家で一家の財政を司る上、愛國婦人會の會務を主宰して指揮命令さながら五指の動くがごとく、着々として事務を整理さるゝの技能に至つては、敏腕の男子も及ばぬ位、記者は曾て戰爭中夫人が愛國婦人會定會の議長として臨まれた時に列席して居りましたが其時卓上山の如く積まれたる議案を一々議題にかけて衆議に諮り、細大共に其の議案の性質をよく咀嚼して便宜の處分をなされたには流石と感心致しました、當時列席の貴婦人中には隨分閑問題を持ち出して冗漫極まる辯舌を弄さるゝ方もありましたが、議長たる夫人はそんな事には一向耳を藉さず、サッサと、遣ッて退けられた手際には一同舌を捲いて感心致しました。夫人にも又子女澤山におはしてお一人は宮様へ嫁かれました。

△大山侯爵夫人

是又交際社會の立物、學識、才智、技能共に凡を抽んでた方、殊に家政上手で大山家の有福なのは專ら夫人内助の功と言はねばならぬ、唯度量の聊か狹隘と專ら能に任ずるといふ點に於て衆望を集めざる處ろが、軈がて夫人の特色でせう。

△戸田伯爵夫人

多年外國に居られた丈け交際社會の巨細に通ずる事當世第一と申して差支ない、容姿艶麗、風采婥約、惜い事には近來あまり社交界にお出掛がないので、名月空しく雲に隠くるの感ある事です。

△岩崎男爵夫人

豪放不羈一世を驚かした後藤象次郎伯の令孃だけあつて大氣寛濶、眼中人無しの處ろがある。而かも家政

は夫人の最も長せられた處で子女の教養凡人の及ばぬ處ろがあるとの評判、日本一大富豪の奧樣として貫目あり力量あり、平素一門、郎等より出入の子者に至るまで、岩崎の大奧樣といへば信服して居るといふ。

△齋藤大臣夫人

容姿妍麗風采高雅、謙遜にして注意の行届く婦人らしき婦人、流石仁禮老子爵の令孃なり、齋藤大臣は今の大臣中に貫目ある方、男らしき男、風采堂々、威あつて猛からざる立派な人物、この良人にしてこの夫人あり、眞に天下の好配偶といふべし、この好配偶にして子なきは又一の不幸とや言はん。

△伊集院中將夫人

華族女學校出身中才名夙に江湖に馳せたる一婦人、方今閨秀中の白眉なり、多藝多才、多趣味、多能、その上容色凡を抽くものあり、海軍武將中の利者たるこの中將の奧樣として夫名を辱めざるものといふべし。

△清浦男爵夫人

家政家で、一見した處ろでは平凡なる婦人らしく見ゆるけれども、內實は中々のしつかり物、萬事實行主義で世間の事情にも中々通じた方、良人が小學校の敎師から段々と出世して大臣となり、男爵となるまで數十年糟糠の妻たる人の模範です。

△金子男爵夫人

好個の交際家、容貌絕美、愛嬌あり、世辭あり、所謂お上手なる方です、堅太郎男爵の顯榮今日ある幾分は令夫人の力ならんとの評判、目上、目下に拘はらず人望のあるは夫人の德ならんか。子女は割合に少き方。

△末松男爵夫人

人も知れる大侯爵の令孃で、多少はお氣隨な處ろもあらんとは京童の口、されども氣象快活、物事に拘泥せず、よく家人を愛し、家庭の圓滿なるは夫人の美質に依らずんばあらず、唯子息のなきは當家の不幸とやいふべし。

△谷子爵夫人

古風なる家政家、勤勉力行、質朴、儉素、如何なる勞苦をも厭はれぬ方、加ふるに頑丈此上なしといふ體

格、堅實なる家風を維持さるゝ賢婦人です。

△黑木男爵夫人

大將とは親子ほどの相違ある若き御方、趣味あり、觀察力ある當世夫人、談話上手、交際上手、家政上手、武邊一徹の大將の內政としては好配偶といふべし。

△山本男爵夫人

賢明無双、家政に長じ、一家の幸福を圖るに堪能なる理想的主婦と申すべき方、子女數人悉く好配を得て、一門春の海の如く、富又巨萬を重ねて家計最も有福、海軍武將中第一の人たる權兵衞前大臣の內政は眞に賢婦人と稱すべし。

△兒玉子爵母堂

純粹の家政家、實行家にして交際的婦人にあらず、質素勤儉、子女の敎育に一生を盡されたる賢婦人、才機煥發、智術縱橫、一世の活動家たりし大參謀長の內助者として申分なかりし人也。

△後藤男爵夫人

政界の風雲兒たる新平男の夫人は才慧無双の御方です、辯舌は流暢、容姿は妍麗、風采は高雅多藝、多能で、又家政に尤も長じて居られます。子息令孃は割合に少き方、夫人が今回洋行されたのは、近來外國婦人の訪問が頻繁で、其應接に忙殺さるゝ處ろから、これではとても命が續くまい少し外國へでも行つて氣を拔かしたらばとの母堂などの勸めもあつたといふ事ですが、夫人は、何處までも交際術の練習といふ御言觸らしで參られたそうです、それには新渡戶夫人が附いて居られるから萬事好都合とおもひます、兎に角何から何まで注意の行屆く觀察眼の銳敏な夫人の事ですから歸來は必らず刮目すべき事がありませう。

△千家男爵夫人

隨分お年を召した割合に氣の若い、しつかり物、家政は此の夫人の得意、其上多藝多能で、茶の湯、挿花音曲、和歌大抵な技は人並勝れてお出來になる、風采もどつしりして大家の奧樣たる貫目は十二分です。

婦人の弱點

張飛燕

◎婦人の好奇心（感情問題）

△男子にも好奇心はあるが、女子の好奇心とは少しく其の性質を異にして居る、男子の好奇心は知りたいと云ふ好奇心であるが女子の好奇心は感じたいと云ふ好奇心である、一は知識上の好奇心で、他は感情上の好奇心である、知識上の好奇心は時に有益なこともあるが、感情上の好奇心は甚だ危險である。

△男子の好奇心は穏で落付て居るけれども、女子の好奇心は急しく、騒々敷い。男子は好奇心に驅られて如何程學問を研究しても決して其の素行に差支ることはないが、女子が好奇心に驅られて情愛の研究に出懸けるときは、其の貞操に必ず缺損がつくものである。

△女子が何んでも見たがり、何んでも聞きたがり、小說でも、作り咄でも、嘘でも本統でも構はずに聞きたがりてそれこれを信じて了ふのは畢竟感情上の好奇心からである。

△芝居、見世物などに對する嗜好の著しいのも、皆是れ此の好奇心の結果と見て差支ない。

△女子の好奇心に就て最も特筆すべきものは、其の立腹し易くして忍び切れぬと云ふことである、試に女子が何かの秘密を探らんとするを視るに、其の熱狂實に恐ろしいものである。

△「此の小說を讀ではならぬ」などと言はれるときは、女子の好奇心は到底此の命に服することが出來ぬ、どうしても讀んで見なければ承知が出來ぬ、小說ばかりではない、何事も凡て此の調子である。

△女子の好奇心には自然饒舌りたいと云ふ一種の要求が附隨て居る、秘密を探りたい探りたいとばかり思ふて居るは、未だ可いとするが、一たび其の秘密を知つたら最後、もう安心は出來ぬ、乾度人に饒舌つて了ふ、女には秘密ほど重い荷物はないから仕方がない。

△一番先きに自分が人の秘密を知つて又それを一番先

きに人に知らせるのを以て、第一の名譽のやうに思ふて居る、洵に困つた好奇心ではあるまいか。どうか、敎育を受けた婦人はなるべくこんな事を避けるやうにしたいものです。

△此の如く女子の好奇心には知りたいと云ふ心に饒舌りたいと云ふ心が含まれて居るから、語る勿れと云ふ嚴命を受くるときには、其の好奇心が凡ての喜悅を失つて了つて何よりも辛くなつて了ふ。

△女子の好奇心を最も明に言顯はすものは、彼の天眞爛熳たる子供の言葉であらう『私は面白いことを知ッてるよ、然し言ひますまい……言つても可けれども、母さんに言ふなと戒められたから……』ア、是れ女性の好奇心を穿ち得たものではあるまいか。

◎婦人の想像力　（邪推の塊）

△想像は心の氣狂である、氣狂は凡て沙汰の限りであるが、女の氣狂と來た日には堪つたものでない。

△想像心の第一の結果は恐怖である、女子と子供は一番此の『恐い』と云ふ念に司配され易いものである、そは道理を推究めて事を定めず、唯想像のみを以て空に幻影を畫くからである、如此な物を見たとか、如彼な物を見たとか云つて、獨りで心配し、其の心配が激しくなると五感を亂し、神經を亂し、頭惱を亂し、心をも亂して、果ては全身をも亂して了ふことがある、女には如此な事が間々ある。ですから成可く實際的の見聞を廣めてこの薄弱なる想像心の幻影を擊退して仕舞はねばならぬ。

△想像心の第二の結果は深き悲みに沈み、氣がふさぎ心開けず、何事をも氣に懸け、遂に失望する迄に至る事である、此時何を見、何を聞ても、先立つものは邪推ばかりで、決して實際の眞相を認めずして、實物を悉く變性して幻影をのみ眺めて居る、故に眞正なる判斷を下すことは出來ない譯である。全く想像で暮して居るのである。一體この邪推といふやつは心の狹隘から起る事であるから、可成く想像的幻影を排斥して眞正の判斷を下す樣にせねばならぬ。

△天下には想像生活をして居る女は中々多い、中には

言ふ可くして行はれぬ理想を描いて居る者もあれば、（是れは先づ大害なきこと故可とするけれども）中には其の想像に全く心奪はれて居ることがある、かゝる時には心が自然と色に顯はれて何となくボンヤリとした顔附きをし、或は只今目醒め申候と云ふやうな顔附きをして眞面目な仕事を嫌ひ、人と隔離することを好み、是れと云ふ嗜好も見えず、運動も厭、散歩も厭と云ふやうになつて了へば、最早手の附けやうもなくなつて了ふ、此の如き女は隨分世間に多いので親共はどうして可のかと氣を揉むやうな事がある、自分を自分で處置することが出來ぬやうになつて居るのであるから仕方がない、ボンヤリも茲に至つて極まれりと云はねばならぬ。

◎婦人の鬱憂性　（孤立生活の先驅）

△鬱憂と云ふのは、心が始終沈み勝で、現在が面白くなく、將來が心配になり、空しく迷想を逐て、人との交際を避け、活快なる狀貌も愉快なる顔色も皆消えて了つて、一見甚だ可哀相な有樣になつて了ふのである。

△鬱憂と厭倦とは殆ど同時に生ずるけれども、これは双方異つたものである。鬱憂は性に附隨せる弱點であるけれども、厭倦は一時の病的狀態である。

△鬱憂性の女は多く人を避けやうとして居るから、人が之を喜ばせやうと思ふて何か面白い遊び事に誘つても、毫も氣が進まない、強て之を誘ふときは意味を惡く取つて了ふ、如何にも自分をいぢめるかのやうに思ふのである。

△其の代り鬱憂性の女は餘り其の弱點を人に傳染せしめない、人を避けるのが其の性分であるから、傳染する譯がないが、人が之に交際つて心持の惡い者であるから、如此女を妻にして居る人のところへは段々と人が出入りしなくなる、これは誰も其の顔を拜みたくないからである。そこで鬱憂性の婦人を妻にした家庭は自然孤立的になるのを免かれないから、婦人はつとめてこの鬱憂性を去る樣に工風せねばならぬ。

△女學生時代には鬱憂性の爲に度々厭倦を來たすことがある、勉强が厭になつたり、寄宿生活が厭になつたり就中舍監の顔などが見たくなくなり、規律生活を惡むこと甚しくなることがある、居常活潤なる女子ならば、一時は一寸と厭倦が來ても、直ぐに又消えて了ふけれども、鬱憂性の女になると、厭倦までがシッコクなるのである。



無名の名花

菊亭主人

△彼女は一巡査の母なり

譯もなき虚飾に心あこがれ、嫉妬妄執の念のみ強きは無教育なる女性の常なるが、斯る女に限りて一門に顯榮者あれば以て己れの誇となし、利慾にかゝりては骨肉の見界もなく我意を遂げんとするものなり、こゝにいと珍らしきは顯榮一代に輝やく大臣の叔母にありながら、都住居を辭して不便なる田舍に隱れ、今も猶一巡査の母として清貧を樂しめる婦人あり、これなん海軍大臣齋藤實氏の叔母君にして仙臺を去る程遠からぬ片田舍に七十六歳の高齡を安らけく送りつゝある佐佐木よう子刀自にぞある。

よう子は四十歳の時未亡人となり、爾來三十六年間自から鍬執りて畑を耕やし、其間良人の忘れ片身を教育しつゝ餘裕あれば村の貧困者を救助するなど慈惠の行多かりきが、甥なる齋藤大臣稍々官界に地位を得らるゝ頃より、是非上京して老後を安樂に都に送られよと度々勸められしも叔母君は堅く辭して田舍者は田舍に暮すが何よりなり、新らしき望ある身ならんには好意に從ひ上京もすべきなれど今は去る身にもあらざればとて承引せられずとなん。

よう子が田園生活を樂しみて都住居を厭ふといふは性情の然らしむることゝて別に怪しむべきにあらねど人誰れか子を思はざらん、殊に母として其の愛子の立身出世を冀はぬものやあるべき、是れ母の至情にして賢なればなるほど一層にこの念の強きものなり。よう子の如き甥は都に時めける海軍の大臣なり、その子は片田舍に蔭もなき一巡査の身なり、從兄弟の地位の懸隔、窮達の相違も豈又甚だしからずや、よう子が甥の權勢に縋りて其子を相當の地位に引立を賴みたればと

て人誰れか怪まん、否むしろこれ當世普通の事なり、よう子がそれをせざるこそ却つて怪しき限りといふべし。されど、よう子は窮達、榮枯は人おの〳〵天命のある事を知りてにや、その愛子が草深き田舍に老ひんとしつゝあるも私情の爲めには公を煩はすを潔よしとせざるの至心に出づ、其の高潔の心事豈感仰せざるべけんや。

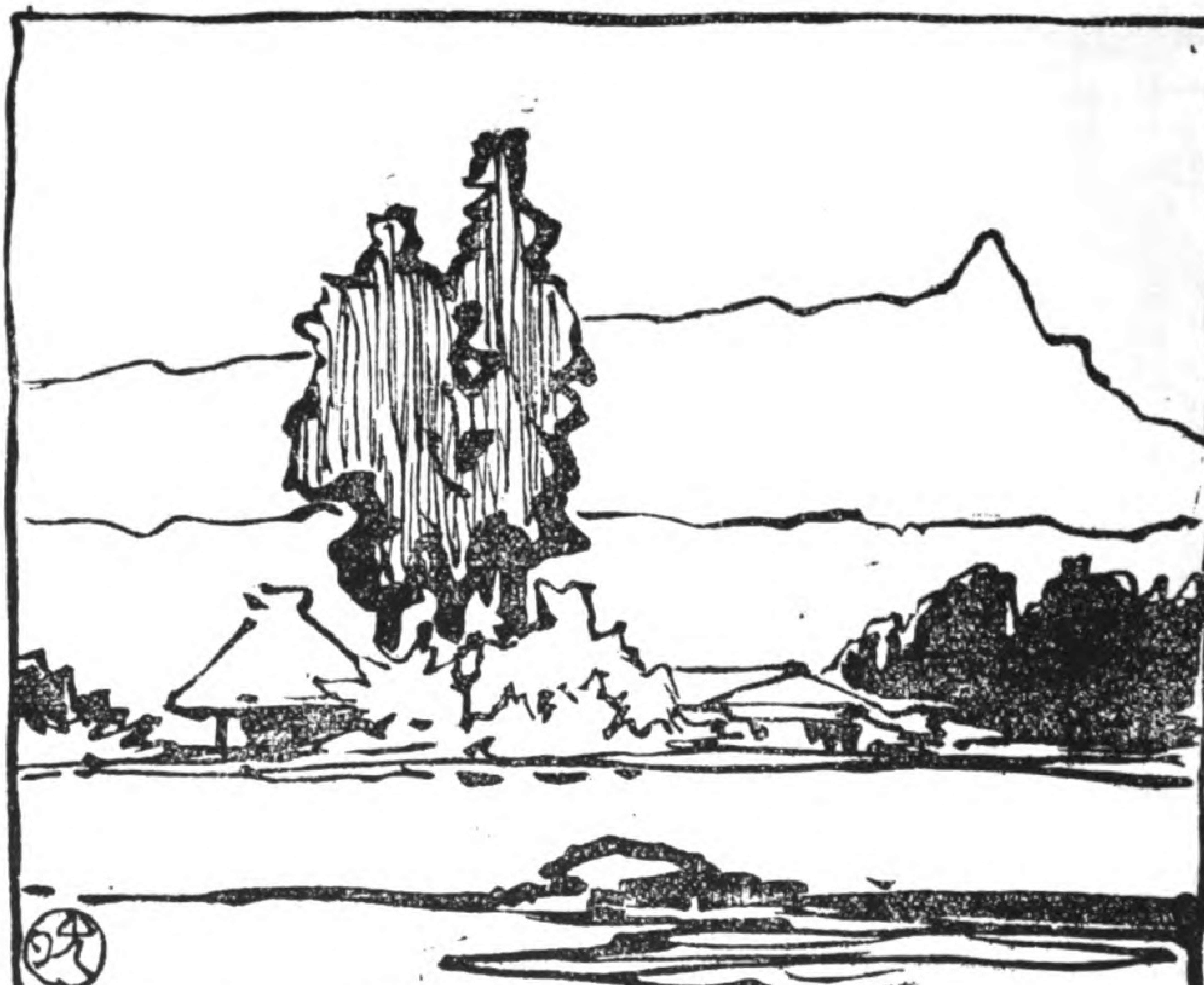
刀自二十五年前舊主なる中村家の爲めにとて其墓地に自から杉苗を植付けたりしが、此の杉苗今はいづれも成長して鬱蒼たる林をなすに至れり、刀自の德化の遍きは此の一事にても知るべし。

△彼女は糟糠の妻なり

初婚の女子が後妻に行く事は世間一般好ましからぬ事となし、甚だしきは女の不名譽として兎角に忌み嫌ふの習ひなり、されば、偶々これあるも、多くは婚期を逸して配偶者を得難きものか、或は徒らに物質的の虛榮心にあこがれ、美衣、美食、さては好地位、財産權勢等種々なる慾望の滿足を期して嫁入るが多し、然るにこゝに一種の自信と氣概とを有する一婦人こそあれ。其人を誰とかなす。寫眞師として都下に有名なる丸木利陽氏の夫人駒子にぞある。

丸木氏も今こそ貴顯の御用をも承はる有名の寫眞師なれども、夫人の嫁せし頃は開業早々の事とて家計の困難中々なりし、其の頃駒子の實姉に當る人二人の幼兒を遺して永眠せしを親戚の誰れ彼れ勸むるまゝに己れも又姉の遺子を他人に掛くるを不愍におもひ、遂に後添として入嫁せしなりとぞ、當時駒子は困難なる家計を引受け、店の方は良人の助手として撮影の手傳をなし、下役を勤め、受附より會計、時としては得意先への使ひ歩きまでも一身に引受けて働らき、其上臺所に下女もなければ、店用の隙を見ては炊事をなし、店の多忙なりし時には二日も三日も冷飯に水を灌ぎて濟ませしことすらありしと。かくて店は次第に盛んになり、追々上流社會の顧客を得るに至りて弟子を養ひ、助手を雇ひ、今や都下に一二を爭ふほどの有名家とな

りしが其間駒子夫人は良人を助けて專ら經營の任に當り會計を司り、雇人を使役し、よく其任を盡したりき、今同家の家法として夫人が多年の實驗より獲來れる方針なりといふを聞くに、金錢の出納は尤も嚴重にして、入金は一切自ら取締り、假令一錢一厘たりとも、その都度必らず奥へ届くる定めなり、夫人常にいふ、若し出來心で書生などが、金の爲めに不良の行をなす時は啻に其人を誤るのみならず、其人の親にも濟まず、第一は我



店の信用に關係する處大なれば注意の上にも注意すべきが家政家の責任なりと、且ついふ、人は勤儉といふ事を忘れてはならぬものなり、すべて足る事を知るは人生の大切なる事なり、人間にしてこの心掛なくば到底立身出世は出來ぬものと覺悟せよ、と蓋し事を省きて儉を守り、餘裕を貯へて眞逆の時に人をも助け、自からをも助くるものなり、これ家政の上法なりと。

△彼女は一代に卅萬の富を積めり

こゝに又强健なる一婦人

が勤勉の結果遂に巨萬の富を作り成すに至りし成功の物語あり、其人は誰れぞ。

東京は京橋區本材木町に住みて四人の子供を有ち、日々百餘人の人夫を使役しつゝ何不足なく餘世を樂しめる林藤七と呼べる者の妻にて當年七十歳なる惠野子にぞある。

この老婦今こそ家に三十萬にも餘れる富を藏し、附近にては屈指の資産家と人にも羨やまるゝ身分なるがこの老婦が結婚當時の有様は如何なりしぞ。

元來林家といふは、昔時より江戸市中の塵埃掃除を稼業となし來れるが、藤七の父の代に至り、偶と他の事業に手出して失敗し、其の爲め一時は家資分散の悲境に陷り、間もなく父母逝りしかば藤七は十六歳の時、親戚相談の上從姉に當れる惠野子と結婚する事となりぬ。

惠野子は葛飾郡船寺村の產れにして其時二十一歳の妙齡なり、十六歳の少年に二十一歳の妻は聊か不似合なりしが、藤七は果して惠野子を嫌ひ、結婚の當座は近所の惡太郎と埒もなき遊戯に餘念なく、其後一子を儲くるに至りしも藤七の腕白は依然として我が子の守を爲ながら犬の喧嘩、子供の鬪爭に立交はるなど一向に大人らしき了簡も出でざるより、女房惠野子は涙を流して諫むること屢々なりしが、流石の惡太郎も年の長ずるに從ひ、漸く己れの非行に心着き先祖傳來の家業なる芥取に從事するに至り、こゝに林一家の前途は幽かながらも始めて燭光を認むるに至りたり。

斯くても猶藤七が得る所の賃錢は迚も一家三人の口を糊するに足らざるより、惠野子は良人に奬めて京橋區鍛冶町に些やかなる燒芋屋の跡を借り受け、此處にて一錢二錢の小商ひを始めしが、彼女の一心は如何にもして良人を一人前に仕立て上げんものと朝は未明に起き、夜は人々の寢靜まりても猶何呉となく生計の道に、いそしみて、十年間一日の如く働きたれば藤七も知らず識らずの裡に妻の感化を享け、己れも又稼業大事と立働らく樣になりしほどに、艱難は遂にこの夫婦をして玉となし、零碎なる利益は數十年間積りに積りて

貳拾萬圓の巨額に達しけるとなん。

斯くて夫婦は巨萬の富を作るに至りしかば一まづ芋屋は廢業せしも彼芥取業は先祖傳來の稼業なりしかば今も猶引つゞきて東京市の塵芥掃除請負業を營み居れり、惠野子今は古稀の齡なれども猶營々として家事の整理に當り、一家は綿服と粗食に甘んじ、主人藤七を始め、一家の男子は何れも印絆纏を着し、更らに榮耀の事を願はずといふ。今も猶家に秘藏するは世帶持當時より十數年使ひ



來れる飯櫃と柳行李の破れたるものなりとぞ。

△彼女は秀才を薰陶せり

十で神童、二十で才子、三十過ぎては只だの人といふ諺あり、折角怜悧なる子を擧げながら、無能の愚人に畢らしむるは大抵その父母の愚なればなり、世間にその例多し少し敏捷なる子を持てば第一に感服するものは其親なり、偶々幼少の折一技一能に秀でたるものあれば、他人の稱贊を眞に受けて我子を見世物同樣にして其の學問技藝を吹聽

し肝腎の躾をそちのけにするものあり、成人の後家を治めず身を修めざる人は多く斯る迂濶なる親心より出づるものとぞ

兄は醫學博士にして文名さいも高き軍醫監たり、妹は閨秀作家として夙に令聞ある賢女なり、この兄妹の母親たる森みね子といふは石州津和野の藩醫森靜男の配なり、刀自幼少の頃は女に學問は無用なりとて不斷讀むことを敎へられざりしを醫師の家に生れながら藥簞笥の前に立ちながら藥の名が分らぬ樣では恥かしき限りなりとて隱れ忍びて讀書習字の獨稽古をなし、果ては假名付の四書を購て素讀をもなしたりきといふ。

父なる伯仙翁逝去の翌年今の博士林太郎君生る、良人靜男君は藩命により翁の箕裘を繼ぎ、江戶の松本順佐倉の佐藤尙中とて當時の大博士に就きて醫學を修めしほどに刀自は幼兒を相手に數年間空閨を守られけり

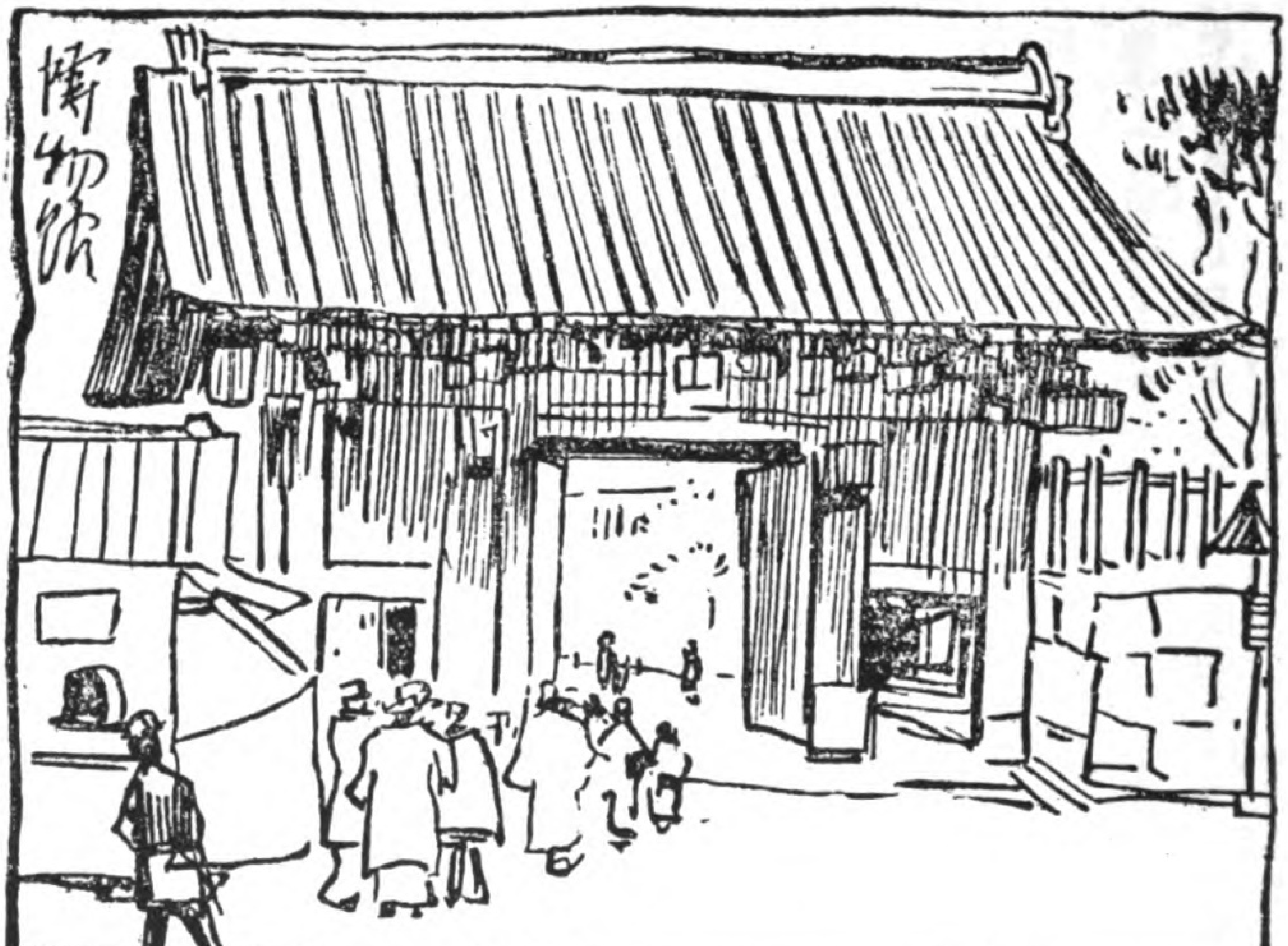
さて博士六歲の時藩の學塾養成館といふに入學せしめぬ、當時の學問は漢學にして藩主は毎月日を定めて藩中の子弟を招きその成蹟を試驗せし上賞品を與へらるゝ定めなりしが、博士も六歲よりその掟によりて修學し夙に神童の譽を博し一二年とつゞきて賞與の榮を得たりける、程なく藩塾は閉ぢられしかば博士十一歲の時、刀自は良人に從ひ、出京して博士を然るべき大家に就かしめ、十八歲に至るまで、七年間毎夜のごとく我兒の學課の下調べを孤燈の下に監督して倦むことなかりしといふ、十歲にして神童の名を博せる博士をして猶大器晩成の譽をも併せしめたるは一にこの老刀自の等閑ならぬ薫陶とや言はん。

△彼女は伯爵夫人なり

凡そ一家の倒産する順序は大抵同じ軌道を行くものなりまづ田地、山林、乃至は其家に傳はれる家株などを賣り飛ばして次に家財諸道具に及び、最後に家宅を明け渡して零落するものとす、さて斯る順序にて倒産するものは大概家運の再興は覺束なきものなり、されど最初に家藏を賣り放して世帶を縮め、身を落したるものに限りては一代の間に再び家運を挽回するに至る

事あるものなり。されどこれは非常なる決心と、無類の勇氣と、健康を以てせざれば叶はぬことなり、男子に於て猶且つ然り、況んや柔性の婦人に於てをや。

京都縉紳家にして名門の聞へありし烏丸伯爵といふは或る事業に手出して十數萬圓の損失を蒙り一家殆んど離散の悲境に立至りしが夫人操子といふは當時未だ三十にも達せざる世に何の經驗もなき婦人なりし、この人斯る悲境に立ちながら少しも氣を挫かず、身を以て一家の整理に盡したり夫人は解由小路子爵家の妹にして當時良人との間に三男二女の五子あり、まづ家政整理の手始めとして下女を解雇し、自から薪水の勞に服し數年間粗衣粗食に甘んじ、竊かに身を賤婦に窶して經木眞田の製作を習ひ覺へて家事の傍ら手工をつとめ、以て子女の學資を支へたりといふ。通例の人にありては格別異とするに足らざるも當世伯爵夫人の身にありては一寸決斷のつかぬ處なり、夫人が家の悲境に鑑みる處ありてこれを決行せしは又尋常婦人に異る處あるを知るべし。



△彼女は幕人の寡婦なり

疾風に勁艸を知るの諺あり、非常の事に遭はざれば人品の鑑別は一寸つかぬものなり、曩に本郷弓町にやまと女塾といふを開きて女子監督寄宿舎を設けし伊庭くに子といふ老婦人は實に寡婦の模範とこそいふべけれ。

くに子は幕臣の家に生れ父は蘭學家にして文部省へ仕へし事もありき、明治十四年伊庭豊長氏に嫁し伉儷厚かりしが間もなく良人遠逝して刀自は二十八歳の時八歳を頭に四人の子供を抱へて寡婦とはなりたり。當年二歳の乳呑兒を始めとして足手まとひ四人を擁して女の弱腕何をかなさん。されば前途を思ふ親戚知人は不憫におもひて再縁をすゝめけれども刀自は一切これを謝絶して此上は逝かりし良人の遺兒を養育して伊庭の家名を興さん者とその儘女子の敎育に一身を委ぬる事となれり、幸ひにも幼少の折より秀才と呼ばれし程に國文、和歌、禮法、手蹟其他女一と通りの學問藝能を修めたれば、招かるゝまゝに彼方此方の私塾やら、女學校やらに敎鞭を執りつゝ十七年間一日の如く、出でゝは諸生の薫陶に一身の熱誠を捧げ、入つては四人の愛兒に心をつくし、手をつくし。三度の食事の鹽梅は元より、裁縫洗濯の業まで身一つにてまかない、一人の子供に三枚づゝの着物は十二枚を要し春夏と秋冬とに移り變りて一年四十八枚の衣類の調製一つとして他人の手を煩はせし事なく只管愛の心に慰められて辛苦を覺へざりしといふ、されば女史が辛苦の甲斐ありて今や長女は高等師範を卒へて國文科の敎師となり、次女は音樂學校に學びて本年卒業の榮を擔ひ長男は第一高等學校に次男は中學に一人として缺くる處なくいづれも美事に成長して成績拔群なりといふ。刀自の心になりて見ば如何に嬉しき事ならんか。

△彼女は紡績の工女なり

尊き品性は、金錢もて買ふべからず、權勢もて誘ふべからず況んや服裝をや、髪飾をや、こゝに奇特なる一女性こそあれ、鐘ヶ淵紡績の工女にして今は工女の取締なる松浦某といへるあり、十八歳の時入社したる

ものなるが同女は一般女工の如く衣食の爲めに金錢を浪費することなきに常に窮乏の有樣なるより、女工を監督せる役員の中には彼れが身の上に不審を抱き、やがては工場長の怪しむ所ろとなりしかば、さるにても品行上に一點の疑ふ所なければ、いろ〳〵と言葉を盡して其の費途を尋ねたれども、更に其の實を得ざりける、然るに其實同女には二人の弟あり一家は以前然るべき身分の者なりしも、不運や家計傾きて生計上中中學問などさすべき餘裕なかりしを痛く不便におもひ如何にもして弟等を然るべく學ばせ相當の地位に仕立てんものをと志しさては女工として入社し其の收入を擧げて二人の愛弟に學資を供し居たるなりと事の次第明かになりて同女の信用一時に加はり、爾來社に於ても取分け目をかけて使ひたりしと、然るに二人の弟は姉の芳志を服膺し、今は立派に立身して兄の方は海軍の機關大尉まで昇進し、弟の方は歩兵中尉として出征し、兄弟交々功を樹てたりといふ。

さるほどに同女の志は天晴れ奇特のものなりとて工場長の媒酌もて會社の役員某氏と婚を結ばせ今は新らしき家庭を作りつゝありといふ。實に芽出度き事共なり。

燕子花

ゆかりの色は藤にのみ限つたものではない、裏の池には父上の丹精をこめられた燕子花が今を盛りと咲き出てゝ居る、その狀、實にもゆかりの色一入あでやかにあるので、朝な〳〵寢所を出ての眼覺しには、唯一のものとして居る、まだ旭が漸く地平線上に形はれた頃、枕時計の響きに夢破られて床を離れ、顏を洗はぬ前、露の小草を踏み分けて、前日の夕暮その蕾の數を調べて置き、翌朝いくつ咲くであらうかと樂みにして池洲の傍に立ち寄ると、其朝はいつも思つたよりは多く咲いて居るのは、實に不思議なほどである。（柳瀬しづ子）

社會

巴里の婚姻事情

前田美根子

結婚の統計表

巴里の婚姻狀態を公平に申上げやうとするには、統計表に基て言はねばならぬ、世に一番雄辯な者は統計表だと云ふ、誰も之に逆ふことは出來ぬ。

乃で巴里では年々の結婚數は二萬一千三百七十三人と云ふのが、平均數である。

夫から婚姻の結果即ち子供の生れる方から考へて見ると、巴里の婚姻は貧乏な街區の方が富貴なる者の居る街區よりもズット子福者の方である。

一番富める街區には、十五歳より五十歳までの婦人千人に就き、其の生産數を調べて見ると平均百十六人位しかない。

歐洲大陸の中では人口の減少は佛國を以て最とする尤も各國共に人口減少の傾向を示して居るが、然し巴里ほど減少の著しい所は何處にもない。

人口の減少（原因）

佛國就中巴里で何せ斯の如く年々人口が減少するかと云へば、原因は澤山あらうけれども、其の著しきものを擧ぐれば、

佛國人は世界中一番多額納稅の義務を負擔し居る。それで出來るだけ子孫を減すのが、一番經濟主義に適ふのだと云ふ、隨分可哀相な話である。

婚姻が澤山ないばかりでなく、生活難と云ふ口實の方に、成る可く遲く婚姻するのも原因である。

民族も漸次精力が盡きて、老い易くなつて來たのも其の原因に數へねばならぬ。

女權主義の日に益す盛になるのは、家庭滅亡と婚姻減少の將來に於ける大原因である、女の飛び出すのと威張り出すのは人類滅亡の凶徵と見る可きである。

結婚後の利益

然し正しく結婚する時には如何なる利益を來たすかと見るに、結婚によりて男女の性質が丸で變つて來る夫婦相互に睦まじく暮さん爲、出來るだけ忍び合ひ、荒い氣象を和げ、堪忍と柔和がなければ家庭の安寧幸福は一日も繼かないと云ふので、婚姻後は亂暴な者も良民に化し、お轉婆も良女に變じて了ふ。

又婚姻によつて男の利己心がダン〜〜消えて、己の健康と幸福の外何をも望まぬやうになる、自分が家庭の主となり、妻子を司配する者になるから、努力と献身の習慣が附いて來る、勤儉貯蓄の必要、辛抱强き働きの必要、規則的生活の必要などをもダン〜〜深く感じて來て、自分の働きで最愛の者を養ふのを一種の名譽となし、苦を自ら引き受け、樂みを妻子に讓るのを誇るやうになる、兎に角結構な傲慢である。

若夫れ婦人側の方から見れば、非常に感心な特質が顯はれて來る、例へば小さな商人などの妻になつた者に就て考ふれば、萬事萬端上手に立廻り、仕入には默されず、商賣には拔目なく、華客には巧に愛嬌を振蒔き、朝から晩まで店に出で、帳場を司り、一年三百六十五日單調な生活を送つて居つても、金の舞込んで來るのが如何にも嬉しいので、單調な苦みをスッカリ忘れて居る、良人の方は何れかと云へば愚鈍の方であるから、妻を使ふと云ふより、寧ろ妻に使はれて居る方である、故に小商人の家には最初の丁稚は良人だと云ふ、良人が妻に從へば乾度金持になる、小商人の富は大抵皆妻が築き上げたのだと云ふ。

婦人の勢力

巴里婦人は世間に對しては大なる力を發揮して居る夫婦の交りにも巧妙の術を揮ふが、社交界に出でゝは倘一層巧妙の働きをなして居る、萬人の機嫌を取り、萬人の說を調和し、如何なる困難障害が起つて來ても巧に之を轉じて了ふ、男には鐵の柵でも、女には蜘蛛の巢だと云ふ諺がある程だ、千難萬艱を排した結果遂

にどんな目的をも達して了ふ、其の特質ばかりが働くのではなく、其の弱質に大變に助けになると云ふ、成程女に泣かれると、誰もかなはなくなる。

役人などになるにも大抵妻の力を假りるのである、今日巴里の役人の半數以上は皆妻の力によつて上つた者だと云ふ。

巴里の婦人が良人の爲に戰ひ、家庭の爲に戰ふときば、如何なる戰略家でもかなはぬと云ふことである巴里には實に利巧な婦人勇壯な婦人が澤山あり、成功に必要な



秘訣を能く心得て居る、故に今日要路に立つて居る貴顯紳士などは此の力を利用して榮えた者が多いと云ふ。

母としての婦人

巴里婦人に、就て最も感心なのは其の母としての心である、彼等は男の如き缺點は有つて居るけれども母としての麗はしき心を以てその凡ての缺點を補ふて居ると云ふ。

父がその子に對する情には人爲的の分子を含んで居るけれども、母がその子に對する情は、腹から

出て來るのである父は野心、事業心、又は學問熱などの爲に親としての情が餘程薄らいで居るが、母としての巴里婦人は子供の世話と心配のみを以て暮して居る子供の生命幸福を以て己の生命幸福となし、子供を愛するのは、ツマリ己を愛するのだとして居る、何處も同じ母の情ではあるが、巴里婦人に於ては特に其の情が著しく顯はれて居るのである。

巴里では子供は母にばかり育てられて居ると云つても可い、父は家庭の主でありながら、子供の事には冷淡無頓着である、事業にも忙はしいが、又遊樂にも心を奪はれてゐて、子供の教育などは大抵母親に一任して置く、母は子供の爲に學校を撰び、復習もさせ、教員にも接觸ひ、試驗の塲などにも出席する、加之、後日卒業して位地を撰ぶときにも、母は熱心に奔走してくれる、故に智識界に成功した人々の多くは其の功を母に歸して居る『大人と母』などと云ふ關係の深いのは此の邊に原因して居るのである。

婦人の奢靡

巴里婦人に筆誅すべき點を擧ぐれば、奢靡の風である、巴里の婦人は嫁資なくして嫁になる時は、良人を永久の苦役に處して了ふ、良人はイクラ働ても妻の奢靡心を滿足させることが出來ぬ、巴里人の過勞、慾張り根性等皆之が爲と言つても差支ない、男は女のお化粧の道具となつて何から何まで皆んな買つて遣らねばならぬ、故に金のない男なぞは婚姻するのは眞平御免だと云つて居る。

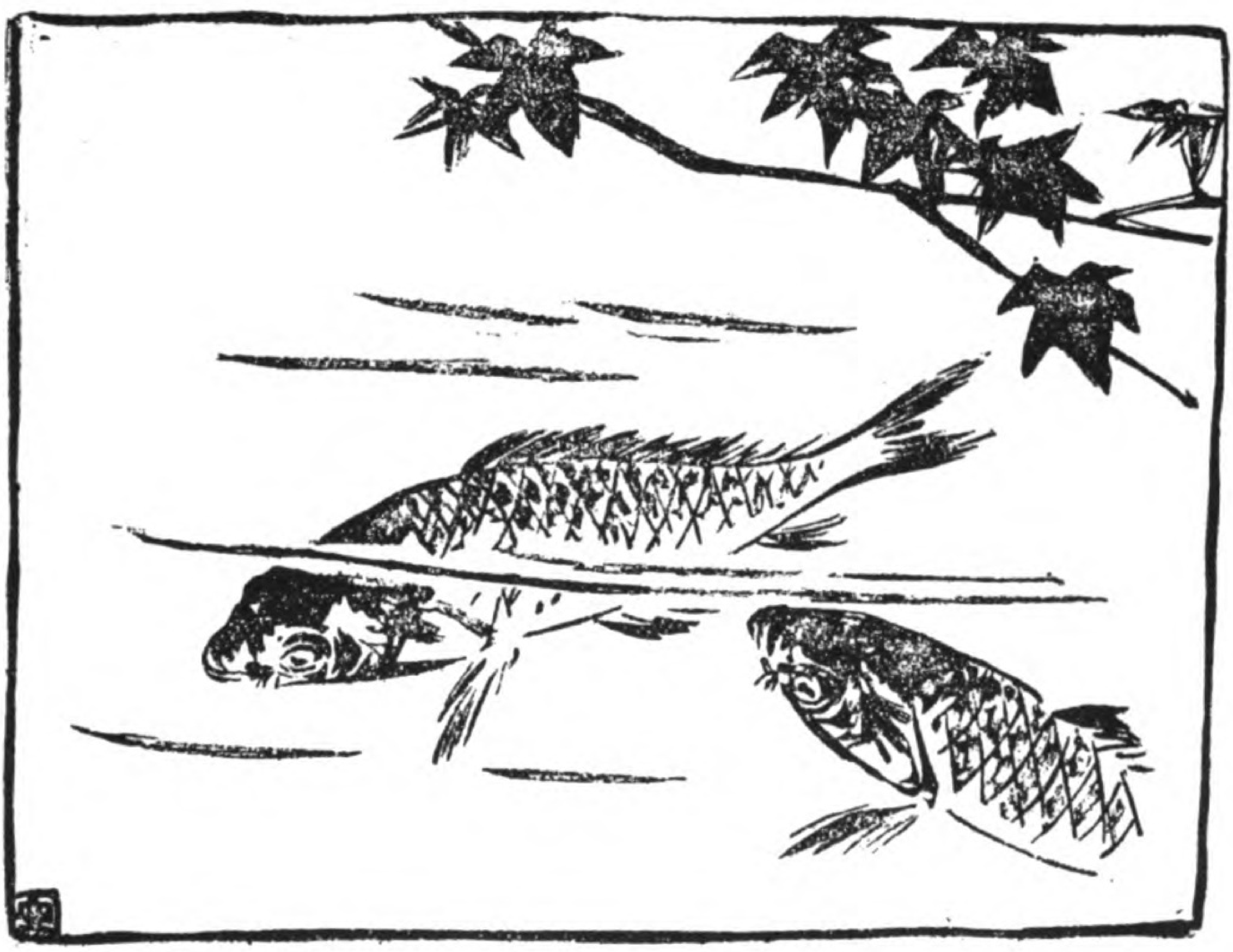
此等の理由より男の方で女を娶らんとするときは、成るべく金の澤山ある女を貰ひたいと思ふて居る、それで婚姻の話になると直ぐに金錢問題が出て來るのである、是れは諷刺の言ではあるが『何某は何萬法と結婚した』と云ふ流行語も畢竟此の邊より起つて來たのである。

婚姻の時に金に目をくれぬ者なぞは又別な考を有つて居る、婚姻して妻の爲に一生苦 まんより寧ろ獨身

で暮した方が餘程氣樂だと云ふ、其が又婚姻數の減少する一因となるのである。

自由結婚者

巴里では自由に結婚する者は大抵終には苦境に陷つて了ふ、自由結婚は取りも直さず自由離婚なので、初の内は戀愛神聖だとか何んとか言つて居るけれども、偖結婚してから如何と云ふに、神聖なる戀愛は永く繼かず直ぐに消えて了ふ、アラの見えぬ内は、神聖だがアラが見え初むるや否や忽ちお拂箱となつて了ふ、其時女の方で如何程殘念だか



知れぬ。豈啻お拂箱となりたる時のみならんやで、結合中何時情人より棄てられるか知れぬと云ふので、樂しいやうなものゝ人知れず苦みを藏して居る。

　して見ると矢張婚姻は正式に限る、正式の婚姻は公々然多くの人々の面前に結ぶのであるから、後に設令嫌氣がさして來ても、さうは自由にならぬ、それで婦人の方では大變に安心して居ることが出來るのである。

　若夫れ婚姻せずに獨立を唱へて居る婦人に至りては多くは調子の變つた女であ

る、不規則の女と言つて可い、隨て其の辿る道も常道でない、之を見るに女は定まれる良人の保護の下に立つ可く作られた者である、獨立不羈などと云つても、元來纖弱い身には中々然うは甘く行かない、大抵は墮落と相場が定まつて居る、女は愛する爲に生れ、又其の愛する人に從ふ爲に生れたとするならば、家庭に於て愛し、家庭に於て從ふのは、如何程幸福か知れない。

女權主義者

女權主義を勸める者は何の心か一向に分らぬ、其の骨折は皆んな女を禍に落して了ふに歸するのだ、事理の解つた婦人は幸に女權主義が娘たる者にも少女たる者にも合はぬと能く承知して居る、男子の方でも又設令人に女權主義を勸めても、自分が妻を娶らんとする場合には、決して女權主義の女を娶らない、それは尤である、お轉婆の女などを好む者は一人もない筈である成程遊び戯るゝ爲には面白いか知れぬが、自分の妻にするには、極めて不合格の者である、されば良人にして自分の家庭の者に女權主義を敎へる者は一人もない、人は正直な者である。

今巴里に於ける女權主義の女學生に及ぼせる結果を示さんに、

(1)女流文學熱を熾に起したる事、

(2)過勞の爲に幾多妙齡女子の健康を害ひたる事。(免狀を貰はなかつたならば、そんなに早く死ななかつたらうにと云ふ悔恨是より出て來る)

(3)女に先生ぶる一種妙な氣風を生じたる事、(其の風如何にも可笑しく厭らし)

(4)免狀は取つたが愛嬌がなくて家政や臺所が不案内なので、多くの良人をにがして了ふ事、

先づ巴里昨今の婚姻狀態に就て言ふ可き事はザット如此なものである、善い事も惡い事も、美質も缺點も包まず有り體に語つたので、順序も系統も立つて居らぬが實際巴里の婦人社會は如此なもので善惡混同、玉石同架であるから仕方がない。

就職事情

電話交換手の內情

女子就職の希望者多き折柄、最も低き程度の職業に就て比較的多數の希望者を需用すべきは電話交換手なり。今その內情を聞くがまゝに

▲試驗採用法

まづ交換手となる資格は十三歲以上二十三歲以下で高等小學二學年以上の學力ある者は學科は無試驗であるが、左もなければ讀書算術作文筆蹟等の試驗を受けねばならぬ、體格檢査は總てに行はれる、まづ尤も肝腎なのは視覺と聽覺の銳敏なる事である、これは耳と目と口とを一緒に使ふ器械を取扱ふのであるから、勿論の事であるが、それにも增して大切なのは言語である、一時に大勢の加入者と談話するのであるからそれが明斷して居らなければ交換手には採用されない、又傳染病、殊に肺病の方などは無論採用されない、又氣管支カタルなどに罹り易い者も不合格としてある、

▲應對と愛想

交換手は言語の明斷であるべきは無論であるが猶一つ必要なのは愛想の好い事である、交換手は如何なる時でも不愛想な口を利いて相手を怒らすやうな事をしてはならぬ。交換手の方では一寸した一口でも加入者の側では厭に思ふものである、例へば話の中に「そんな事はありません」とか「そうではありません」とかいふ樣な事でも通話者の心持を惡るくさする樣な事になるこんな些細な言譯でも、何分器械が交換手の方にあるものだから何か勝手な事をして威張つてゞも居る樣に思ひ做して感じを惡るくさするものであるから、よく熟練したものは加入者から何と言はれても只ハイ〳〵と云つて居るのである。

▲勤務時間

交換手の勤務時間は中々面倒な仕組になつてゐて、他の銀行會社の樣に一日何時間といふ樣に一定はしてゐないのである、例へば今日は朝七時に出勤して午後

三時に退局すると翌日は八時出局の四時引け、それから九時に出て五時に退けるといふ樣になつて丁度五日目に「明け」といつて一日の休暇がある、明けの日の前日は夜勤で午後四時から翌日の午前七時までである、が、斯ういふ樣にすべての交換手が五組に分けて定めてある、而して一日の中に休憩時間といふのが一時間毎に十分乃至十五分間といふ工合でこれは仕事の都合上から取極めてある、其間は休憩室に這入つて備付の雜誌なり書籍なりを默讀する事が出來、また自分で携帶した書籍などを讀む者もあるが併し休み時間の短かいのと側が騷がしいのとで中々落ついて讀む事は出來ず、ほんの一時の耳休めといふ丈の事である。



又仕事は馴れさいすれば左程難かしい事ではなく一日八時間詰めで働らいても大した疲勞もなく、歸宅後何なりと仕事をする位の餘裕はある、それ故、交換手を勤めながら志ある者は、學校にも通ひ、裁縫なり、技藝なり、それ〳〵學ぶ者もあるが、何分にも時間が半端であるから纏つた事は出來ぬそうである。

▲取締法

交換局には申告簿といふものがあつて交換手の過失があればそれを一般に報らせて毎朝注意する事になつてゐる、一人の交換手の失策を其人一人限りで仕舞ふ事はない、其外に伍長といふものありて終始交換上

の事を巡視して手の廻らぬ處は補助し、又見習者には注意を與へなどする、これは故參で二年以上勤續した者の中より選拔する事になつてゐる。

▲見・習

採用試驗に合格したものは、最初はまづ熟練な交換手に就いて取扱方を見聞し、傍ら規則類其他取扱上の事一般を習ひ覺ゆるのである、斯くして馴れるに隨ひ交換手が後見となり、尤も閑散な交換機に掛りて實習するのである、大概は三ケ月位で一人前の交換手となるわけだが、初めは中々忙がしくて眼と口と耳との三ツが工合よく調子の取れる樣になるまでの骨折は並大抵ではないが、馴れて來れば又譯はないのである、

▲健康診斷

交換手の健康上に就ては一年に數回囑托醫の診斷を受ける事になつてゐる、又何人でも病氣が起れば直ぐ醫師の治療を受け得られる事になつてゐる、送話機の消毒は嚴重に行つて居るが、交換手が交替する時にはスプレーで、アルコールを送話器に吹掛け消毒する故送話器が病毒を媒介する事はなし、又現今は一般に消毒器を使用する事となつてゐるが局では殊に精製のアルコールを使用する故殺菌は勿論器械の保存上にも効力ある譯なり。

前記の如き次第故交換手に傳染病の患はなきも、長時間椅子に腰掛け居る故夏季に至れば往々脚氣の氣味になるものありと。

▲風紀と衞生

交換局では風紀と衞生に就ては尤も注意をしてある、故に一寸した事でも面會は中々嚴重である、たとへ父兄の者でも相對で面會させる事はない、必らず取締の者が其席に立合ふ事になつてゐる、他人が居ては出來ない話もあらうが、そんな事は歸宅後に出來る事だといふ樣なわけで手紙なども中々嚴重である、又衞生の事は衣服、髮飾、室内の清潔法、寢臺の事まで取締りが司つて風紀衞生に關する一切の事は責任を以て取締つてゐるといふ事。

斯る次第故衣服は華美を避け質素を旨とし勤務中は

袖があつては不便故一般に筒袖と極つてゐる、又或る局では髪は束髪、衣服は黒の筒袖、袴ば蝦茶だそうである、又袴は交換手、伍長、取締と三色になつてゐる、總じて髪は器械の取はづしに邪魔にならぬを専一として自然束髪とするのである島田などは器械の取はづしに髷の壊れるのを厭ふて自然仕事が緩漫に流れるといふ事である。

▲電話加入者

富の膨脹は自然の勢ひ戦後事業の勃興に伴ひ且つは今春東京博覧會が開けるといふので、電話の加入者は非常の勢ひで、交換手の繁忙は想像の外であるが、さてその澤山な加入者の中で一番忙がしい處ろは諸官省、新聞社、會社、辯護士などであるそうな、其中でも殊に忙がしいのは、切替になつてゐて交換手の中でも最も應對に巧みな優等の方が受持の事になつてゐる且つ官省向は何處でも横柄で、電話に出て給仕までが威張るといふ形ち、そして器械の取扱なども亂暴である、或る交換手の實話に、横柄で亂暴なのは役所の給仕、理屈つぽいのは辯護士それから新聞社も随分烈しい方だといふ新聞社は號外の出る時などは恰も火のつく様なりと、午前に忙がしきは官省、と相場取引所、會社、午後は新聞社である、之れに反して閑なのは第二流の華族家、普通の金満家、極々上流向の割烹店、富豪の別邸等である。







暴戻なる良人を感化せる婦人の實話

この婦人は嚴格なる家庭に養はれ、所謂女大學流の教育を受けたる人なるが、其感化し得たる夫も今は此世に在らず、獨り淋しき生活を營みつゝも、うら若き身を以てなほ節操を守れり。さていかにして彼女が暴戻なる良人を感化し得たるか、暴戻なりし良人はいかにして彼女の如何の德によりて感化されしやは、乞ふその實話にきけ

一　良人の不身持

儂の良人と申すは一時某會社の重役を勤めて居ましたが、儂が嫁に參つた時には、もう二人も妾が圍つてあつたのでございます、自體この緣談がありました時、儂は餘り好ましくなかつたのですが、父が荐りと勸めて、別に舅姑があると云ふではなし、會社の重役と云へば先づ生活向きも豐かなり、男もまだ若いのだから、これから何處まで出世するか譯らない、こんな口はまたとあるものでないから、取極めたがよからうと、一人で承知して極てしまつたのでございます。

會社の重役もする方、三十七にもなつて獨身で居られた人、屹度何か理由がなければなりません、縹緻好みと云ふ上から申したら、儂のやうなものゝ氣に入りさうな筈もございませんし、またさうでないとしたら、屹度外に何かあるに違ひないと思ひまして、種々と斷りましたが、父は承知をしてくれません、とう〳〵結婚と云ふ事になりましたが、翌る朝になつて見ると小間使と思つて居ましたのは良人の妾で、儂は吃驚致しました。

始めの中は妾の方でも遠慮して、何事も儂に相談すると云ふ調子でしたが、だん〳〵馴れるに連れて儂を莫迦にし始め、陰へ廻つては種々な惡口を云つて居る

と云ふ有樣ですから、僕はもう床の間の置物同樣で、それは〳〵辛い想を致しましたが、凡そ半月も經たない中に、妾は暇をくれろと云つて出て行つてしまひました、僕はホツト息をついてこれは良人が僕と云ふもののない中こそ、あのやうな妾を愛したれ、僕と云ふものが來た以上妾に用はないと云ふので、暇を出したのだらうと思つて居ました、何と云ふ馬鹿でしたらう僕はさう信じてしまつて、何となく良人が氣の毒にも思はれますので、なるべく氣に逆はないやう、氣の安まるやうに仕向けたのでしたが、良人は什麽云ふものか家に居る事は尠なく、大抵は他所へ泊る事が多うございました。けれども僕は御用も多く、御交際も多い事だからとばかり信じて居ますと、だん〳〵これが烈しくなつて、一週間も二週間も家へ歸らないやうになりました。

なんぼ馬鹿でもかうなつては默つて居られませんから、或日實家へ行つてこの事を云ひますと、それはお前の仕向けが惡いからだ、と一言の下に叱られて歸つて來ますと、其處へ丁度良人のお友達が見えまして、

「渡邊君は此頃少しも家へ歸られんさうぢやありませんか」

と被仰いますから、これ〳〵だと申上げると其方は大層お笑ひになつて、

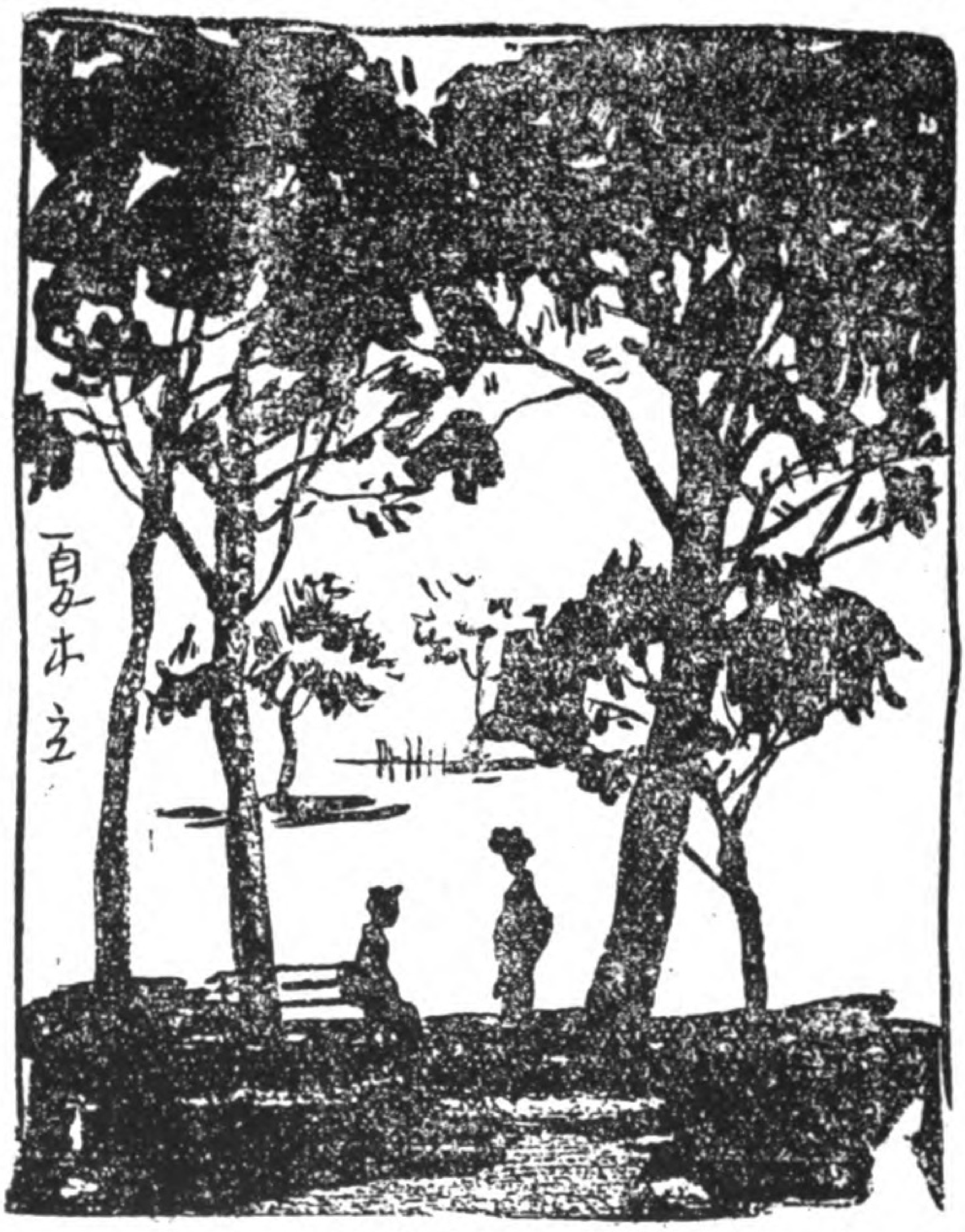
「奥樣がさう信じてお出でになるものを、水をさすやうで甚だ相濟まんが、實は渡邊君は先にお宅に居た妾をあるところへ圍つて置くので、多分其所を家のやうにしてるのでせう」

まア何と云ふ事でせう、妾を家から出したと云ふ事は只僕から離したばかりで、矢張さう云ふ關係が結ばれて居たのです、僕は其當時口惜しくつて、妾を斬殺して、自分も死なうかとまで思ひましたが、能く〳〵考へて見ると、それは男の働きで、僕が口を容れる事ではない、それよりも此方から何處までも愛を良人へ灑いで、出來るだけ我慢したらいつか良人の眼が醒める時が來るだらうと思ひ返しはしましたが、それでも好い心持はいたしません。

二　身の皮まで剝がれる

ある晩稀らしく良人が歸つて參りましたから、儂は快よく出迎へて、此間中から獨りで淋しかつたことなんかは毫も申しません、お茶などを入れて饗應しましたが良人は始終俯向勝に、少しも浮いた氣色が見ません、什麽したら機嫌が直るだらうと思つて居りますと、不意に良人は儂の名を呼懸けて、

『此間中は眞個に濟まなかつた、嘸淋しかつたらう、會社の方の用が立込んだものだから、つい歸りそびれてしまつて』



と見へ透いたやうな辯解ですが、それでもかうやさしく云はれて見ますと、何となく氣の毒にも思れまして

『さうでございますか、嘸お疲勞でございませう』

と云ひますと、良人はさも晴々と儂の顏を見て、

『さう云つて迎へてくれるのは、眞個に家ばかりだ、家程難有いところはないな』

かう云つて、またさも云ひにくさうに、

『實は明日社長の宅で假裝會があるので、俺は一つ奧樣風をしやうと思ふのだが、お前の晴衣を貸てくれないか、それに時計と指環とが是非入用だ』

これが良人に力がないのなら、或は質に置くのではあ

るまいかと云ふ疑もありますが、それ程困る財產ではなし、また其妾に遣るとしたら、儂にそんな事を賴まずとも、立派に拵へて遣りさうなもの、眞逆噓をつくのでもなからう、と恥かしくないやうに拵へたての小袖、帶、長襦袢、時計、指環、そつくり取揃へて一風呂敷に包み、

『それではこれを車夫にでも持たせてやりませうか』

と云ひますと、良人は大きく手を振つて、

『いや、それには及ばない、今に向ふから取りに來る筈だ』

『それでお髮は什麼遊ばすお積りです？』

重ねてかう聞きますと、

『それは彼方にちやんと仕度がしてあるからいゝ、何しろ好い奧樣が出來るだらう』

と笑つて居るところへ、お使が來て、召物を取りに來ましたから渡してやりますと、其後から良人はまた散歩に出ると云つたまゝ歸つて來ないのでございます、眞逆今夜は妾のところへ行つたのではなからうと思つて、待つて居ましたが、とう〳〵歸りません。

一日置いて出入の女髮結が來て、儂の髮を結ながら

『奧樣、貴女はいつか拜見した彼のお召を什麼か遊ばしはなさいませんか』

と云ひますから、儂は吃驚して、これ〳〵で良人が假裝會へ持つて行つたと云ひますと、髮結は妙に笑ひながら、

『奧樣、それは大變な假裝會へお召をお貸し遊ばしたんでございますね』

『什麼して、お前そんな事を云ふの、旦那樣の召て被入るところでも見たのかえ？』

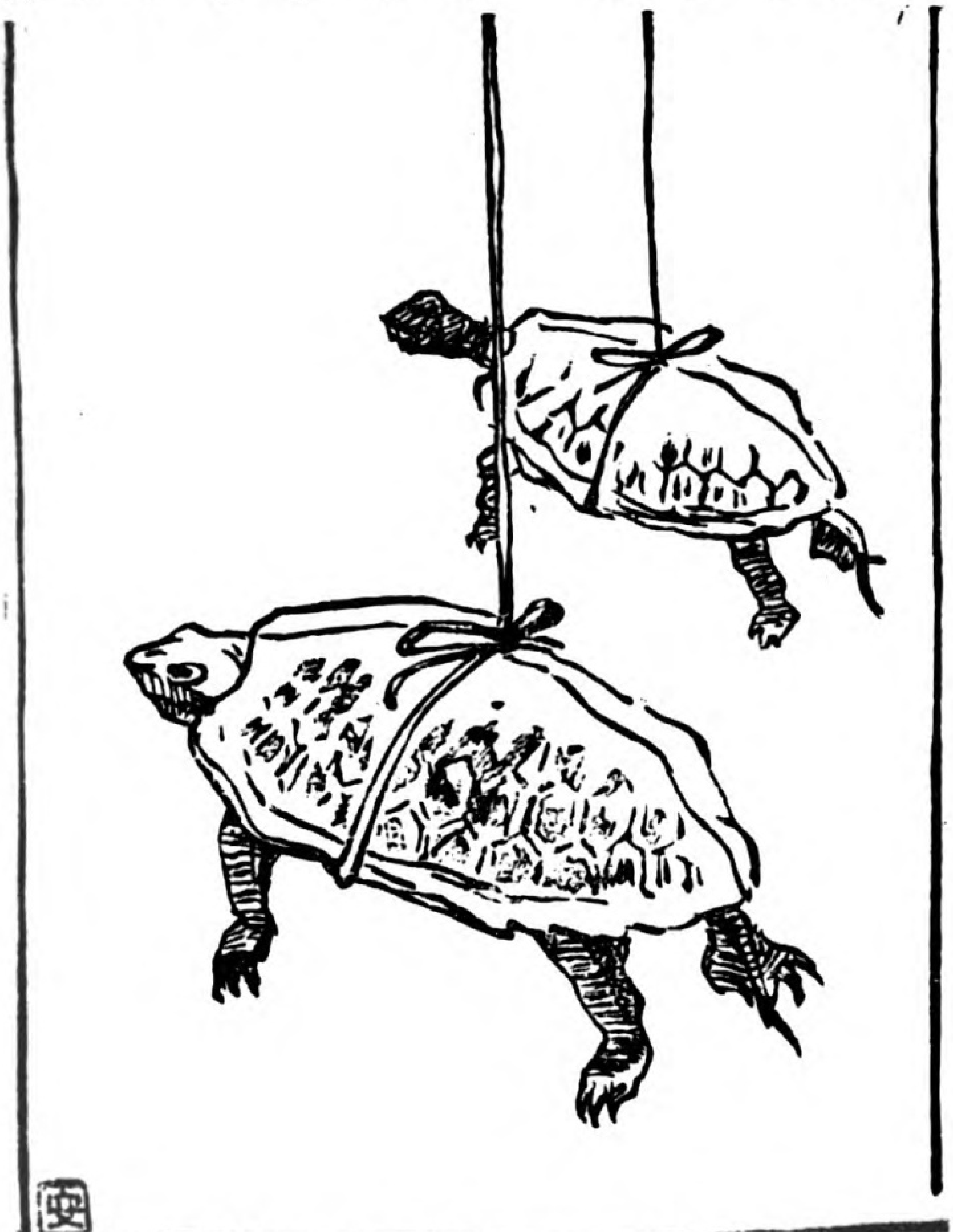
かう云つて訊きますと、髮結は鼻を詰らせながら、

『奧樣が餘りお人が好過ぎるものですから、いゝやうにされて被入るのでございます』

と冠詞を置いて、昨日歌舞伎座で、妾の一人がそつくり自分の衣服を着て、奧樣然と構へて居た事から、良人が其側へ座を占めて、これ見よがしに戯れて居た事を悉皆話して、

『眞個にさう人を好くして被入つては、今に身の皮まで剝がれておしまひになりませう何とか少しは嫉妬らしいことも被仰つて困らして上げた方がようございます』

其日は散々髮結に意地をつけられました、あゝ何と云ふ馬鹿でせう儂はいかに氣に入らぬとしましたところで、身の皮まで剝れるとは露ばかりも思ひませんでした。で、嫉妬と云ふよりも、今ではもう欺されたのが口惜くつて、いつそ身を投げて死んだら、いかに無情の夫でも、少しは目が覺めるだらうと思ひまして、むら〳〵と死ぬ氣になりましたが、また考へ直して見ますと、今自分が此處で死んでは、今迄辛抱した甲斐がない、一旦人の妻となつた以上は、何處までも其良人の放埒を改心させなければ、女の義務が濟むものではない、良人も良心は屹度ある、只一時の迷に驅られて居るのだから、いつか一度は目の覺める時があるだらう、儂はかう考へると、結句良人を感化して、善良な良人にする責任があるやうに思はれまして、心を石のやうに堅くして、夫の改心するまでは、甚麼事があらうとも、此處の家を去るまいと決心しました。



三　難題の下に離縁

其後良人の一旦持つて出た儂の晴衣、帶、時計、指環、一切のものは儂の手元へ歸りませんでしたが、儂はあれッ切忘れたもの〻やう、何事も云ひませんでしたが、良人は益々妾の愛に溺れたものと見えまして、いつとても家へ歸つた事がございません、かう云ふ時には結句男か姑かの何方かゞあつたらば、相談對手になるだらうと思ひました、するとまた良人は、子がないと云ふ難題の下に儂を離縁すると云ひ出たのです。それは何でも儂を追出した後へ妾を入れやうと云ふ算段だつたに違ありません、けれど儂もこの事ばかりは承知する事が出來ないと云つて、いつになく剛情を張通しました、とう〱實家の方へまで懸合つたのでしたが、實家の方でも薄々様子を知つて居たものですから、おいそれと承知しません、さアそれからと云ふもの、良人は儂を憎みまして、

『もうそんな剛情な女に扶養の義務はない、俺はもう二度と此家へは歸らないから、勝手にするがい〻、然し家財は一切俺の物だから引上げる』

何と云ふ淺猿しい事でせう、翌る日人足を大勢連れて來て、家中の家財を車に積んで、何處へか持つて行かれてしまひました。

四　空家同然の住居

臺所道具を殘して、洗ひざらひ持つて行かれましたから、儂は宛然空家に住んで居るやうなもの、それでも一旦嫁に來た家ですから石に食ついても離れない決心で居りますと、實家の方でも有繋に良人を見限つたものでせう、

『そんな空家同然の家に居る位なら、潔よく歸つて來い、今度ばかりは此方から離縁する』

と阿母は再三迎へに來たのでしたが、

『甚麽ことになりませうとも、儂は此家へ嫁に來たものですから、こ〻を離れない決心です、また假令良人から仕送りをしませんまでも、決して實家のお世話にはならない積りです……』

判然と斷りましたが、さて什麽して御飯を食べやうか

知らと考へると、寢ない晩が五日も六日も續きました、それでも天道は人を殺さずと云ひまして、娘の時少しばかり習つた造花が役に立ちまして、下婢と二人細々生活を立てる事が出來ました。

五　一年半の辛抱

するとまもなく戰爭で造花も暇になりましたから、さアこれから針仕事をしたり足袋形を貼つたりして暮して居ましたが、ある日仕事を持つて近所まで參ります途中、良人と妾とは夫婦氣取で、遊山にでも行つた歸途でもございましたらう、二個とも赤い顏をして縺れながら參りまし



たが、妾の方が先きへ儂を見つけると、急に良人の袂を引いて、足早に行過ぎやうと致しました、すると良人は儂の方を始めて見て、大きな聲で、

『いゝぢやないか、逃げるにあたらんぢやないか、何處の女か譯りもせんものを!』

迷と云ふものがそれ程まで良心を晦ますものであらうかと、儂は良人が可哀想になりました、けれども別に言葉を交へる場合でございませんから、儂は足早に外して歸つて來ましたが、妾にまでも莫迦にされるかと思ふと、殘念やら、腹が立つやら、其晩また寢られませんでした、この淋しい、心細い生活を

儂は丁度一年半つゞけました、佗しい花、佗しい月、見るもの聞くもの皆面白いと云ふものはありません、草の葉の戰ぐのを見ても、何となく物哀しいやうな氣がしまして、雌雄の蝶が椽近く飛んで過ぎたり、近所で子供が産れたなど〻云ふ噂を聞きますと、あ〻、良人がありながら、自分は何故かう淋しい生活をしなければならないのかと思はず涙を催す事も度々でした。けれども儂は良人を怨む心になりません、什麼しても良人が惡いとは思ひませんでした、良人の心に惡魔が宿て、凡てこの惡魔が爲す業と思ひましたから、儂はこの一年半と云ふもの良人の蔭膳を一日でも懈つた事はございません、至誠天に通ずと云ふからには、儂のこの想がいつか一度良人の胸に通じない筈はあるまいと、良人の心から惡魔去れよと、そればかり神に祈つて居ました。

六　ありもせぬ人の噂

するとある日良人の友人が參りまして申しますには此頃貴女の事に就いて妙な噂がある、それは噂だから的にはならんが、奥さん貴女は、良人のあると云ふ事をお忘れにはなるまいでせうね、と云ひますから、儂は變な事を云ものと、

「一體儂の身の上に就きまして甚麼噂があるのでございます？」

と訊きますと、友人はさも云ひ難さうに、

「此頃お宅へ男子が出入するさうですが、さう云ふ事がありますか！」

意外とは此事でせう、男子どころか女の客さへ來た事はありません、あ〻、女が獨りで生活して居ると、さう云ふ噂が立つのだらう、恐ろしい事だと思ながら、

「什麼してそんな事がお耳に入りましたか、男子どころか女の客さへ來た事はありません！」

と判然云ふと、友人はさも疑ひ深さうな眼を瞬つて、

「煙の下に火のない道理もないでせう」

こそ〳〵見廻して、例の蔭膳に眼がつきますと、急に形ちを改めまして、

『あのお膳は什麼したお膳なのです』

疑の眼程恐ろしいものはありません、良人に捧げた蔭膳までが、男と御飯でも食べて居たものゝやうに見えたのでせう、で、儂はこれまでの境遇を悉皆話しまして、夫に對する愛情は今も變らぬ事、毎日蔭膳を据へて、其祝福を祈つて居事まで、涙ながらに話しますと友人の方も有繋に儂の眞心に動かされたものでせう、涙さへ浮めて下いまして

『さう云ふ譯でしたか、いや、女お獨りで被入るところから、種々中傷的の噂を立てるものと見えます、私も始めは奥さんに限つて、そんな事はあるまいと思つて居ましたが餘り噂が高いものですから、萬一そんな事があつては、渡邊君の名譽にも關すると思ひまして、實は樣子を見に參つたのですが、お話を承つて悉く氷解しました、其貴女の御志を渡邊君に話したら、渡邊君は屹度反省するでせう、既に渡邊君は妾の自墮落に愛憎を盡かして居られるですから、私が再び奥さんと一緒になられるやう御盡力申しませう』



と其日は歸つて行きましたが、翌る日またやつて來て

『渡邊君は非常に貴女の志に感謝して、再び以前の

家庭がつくりたい、けれども一旦自分の良心が晦んでしまつて、あれ程に虐待した以上、のめ〳〵と一緒になる理由にも行かないから、何か一つ土産を持つて、一緒にならう、兎に角貴女の思召を伺つて來てくれろと云ふことです」

と云ふ話、僕は甚麽に嬉しかつたでせう、もう假令一緒にならぬまでも、無形の感化を良人に與へて、良人の良心から惡魔が去れば、それで僕は滿足する、その上良人の方から一緒になつてやらうとある、僕は此報酬に對しては餘りに苦勞が尠なかつたやうにも思ひました、で、不思も涙のさしぐまれて、嬉し泣きに泣きましたが、

『僕はもう其お言葉を伺つただけで滿足を致します、別にお土産なんぞ入りまんから、どうぞお歸り遊ばすやうに。』

と申しますと、友人の方も大層喜んで歸つて行きました。

七　善良なる良人

もう此時には良人は妻の自墮落に愛想を盡かして、同時に其良心から苛酷の惡魔の去つた跡でしたから、再び一緒になると同時に極めて善良な人になりまして

『俺の不了簡一つの爲めて、お前には非常な苦勞を見せた、然しお前は別段側に居て俺を感化したと云ふ譯でもないが、お前が爲した行の感化は、どれ程深く俺の胸を刺したらう、お前と云ふものがなかつたら、俺は墮落の底に沈むところだ！」

とそれからと云ふもの、僕が眞心で云ふ事は良人もまた眞心で聞いてくれまして、眞個に樂しい家庭をつくる事が出來ましたが、天は什麽してかう僕を苦しめるのでせう、其善良な良人を奪つてしまひました。あゝ、樂しい家庭、僅かに三年の間眞個の夫婦であつたのです、けれども僕はあの時から思ひました。女が一旦嫁に行つて、其良人と同棲する事が出來なかつたら、これ程不幸はない、また若い女が獨りで居れば必らず訝しな噂が立つ、未亡人と云ふものになつたら、人一倍氣を締めてかゝらなければならない、惡魔は乾度甘

い餌で釣るだらう、其時にこの鋭い針にかゝらぬ要心をせねばならぬ、それには先づどうしたらいゝか、品性を高くする事、趣味を涵養する事、この二つの武器があれば、先づ逃れる事が出來るでせう！

かう考へましてから、僕は先づ品性を高める事と趣味の涵養とに心懸けまして、今日までかうして參りましたが、今年まだ三十六、先きが長いものですから、何日甚麼迷の雲に襲はれる事がないとも限りません、けれどもこの二つの武器を備へさへすれば、決してさう〳〵墮落するやうな事はあるまいと思ひます。別段に際立つた事もございませんが、僕のした行は決して天の道に背かない事だらうと信じて居ります。



同胞十一人を鞠育せし婦人の用意

鈴川

地位あり富ある身分でも、どうかすると僅か二人三人の子供すら完全に教育する事の出來ぬもの、況して下級官吏の身の上で男女十一人の子供を育て上げ、男子は三人大學を卒業させ、女子は八人相前後して高等女學校を卒へしめて、而かもよく立身出世の人とならしめた原作造氏（前號口繪參照）の家庭こそ當今の珍とも申すべきでせう。以下即ちこの寧馨兒十一人の母たる原夫人のお話です。

▲貧乏、幸福の種

元來妾の家は貧乏で御座いましたが、小供を教育する爲めには、却て之れが良藥となつた樣に思はれま

す、夫れは萬事を儉約に致して、子供にもそれを見做はせたので厶います、一體私共は子福者で御座いまして、前後十四人儲けましたが男子一人と、女子二人が缺けまして今は十一人なので厶います。

一體良人は兒煩腦で、之れが爲めに大そう苦勞もいたしました、ですから、何樣なにしても、小供の敎育丈は充分にせなければ、親の義務が盡せぬと申して常に小供にも言ひ含めて、何んでも自分の思つた事を勉强して、將來立派なものになれと申し、臨終の時も小供の敎育と健康とが、尤も大切であると言ひ遺しました。

併し別段にこれと申してお話致す事も厶いません、只兩親が實行して小供に見做はせると云ふ所謂躬行實踐主義でしたから若し少しでも道に違ふ樣の事でもあれば、毫も假借しないと云ふ風で、頗る嚴格な方でした、併しそうといつて叱る許りでも御座いません、矢張り敎へ諭して、小供の心にも成程と思はする樣に致しましたから、彼等も自然とそれに導かれて善良の方面に進みましたかと存じます。

▲一種の家庭

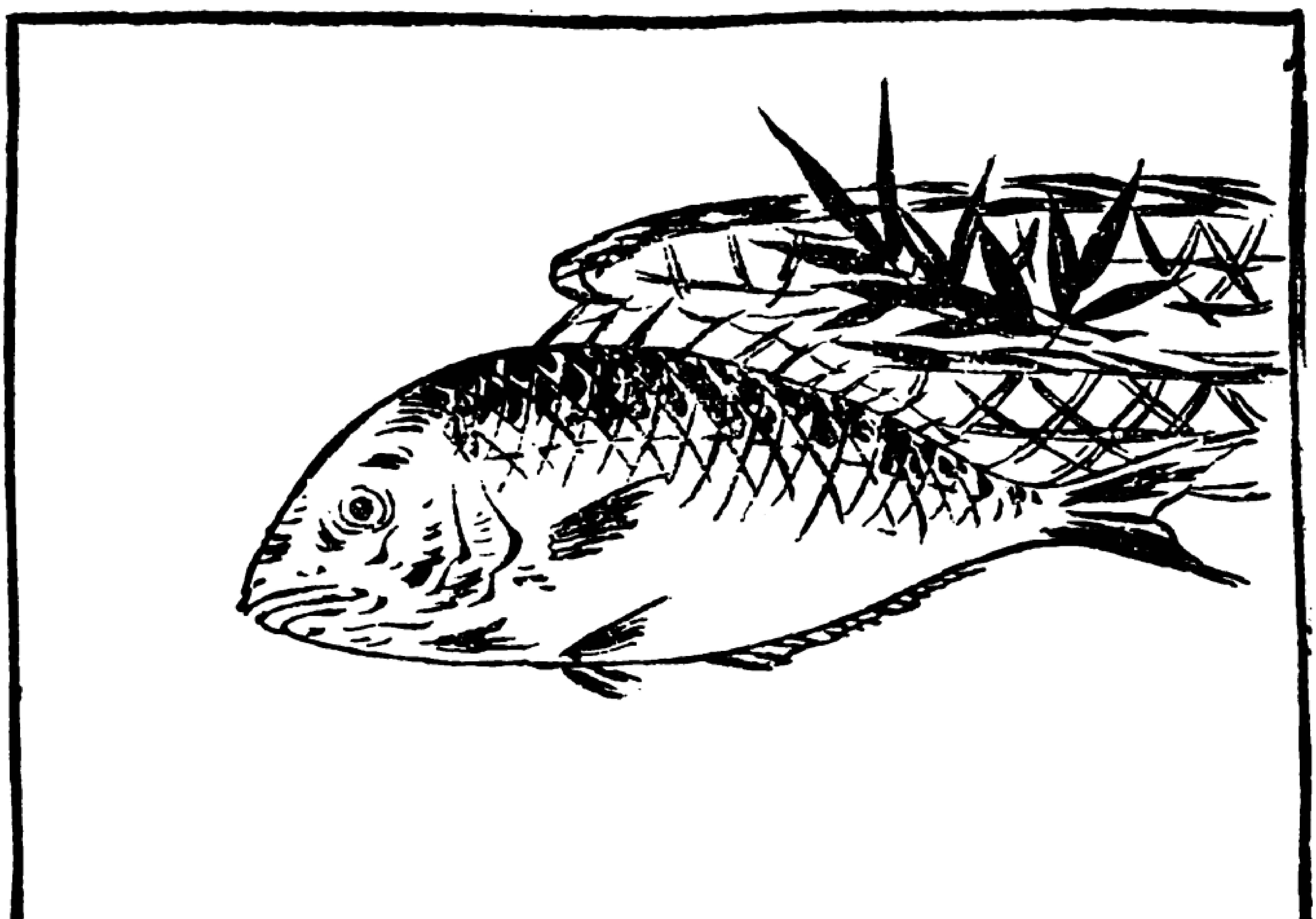
原家は、代々彦根藩の儒者でありました、良人の兄捨藏と申すが勤王論を唱へて、十六歳の時伏見の戰に戰死しましたので、兄に代つて家を相續する事になり、私は十八歳の時原家に嫁しました、間もなく主人が鹿兒島縣廳に奉職する事になり、私も長男を連れて同行いたすと其の内十年の戰が起つて、縣廳は皆西鄕方となつたといふ次第、良人は遂に官軍の爲めに捕はれ生死不明の人となりました。

軍が平定して良人の所在も分り、暫くは長崎の牢獄に入る事になりましたが、夫の留守中と云ふものは一方ならぬ心配で、私の實弟と五歳の長男、二歳の次男を伴ひ、鹿兒島を去りまして、晝夜兼行小山田と云ふ所に避難し、山の上にあつた百姓家の奥の三疊を借りて、親子四人で暮して居ました、此の時の困難辛苦は御話にもなりません。下男を連れ馬を引ゐて三里の山道を米買ひに行つた事も厶います、人知らず涙を流し

て、夜も寝ずに子供の世話をしたり、夫の行衛を考へて居た事も幾夜、のみならず戰爭の爲めに交通も絶へ、故郷への音信も出來ず殆んど島流しに會つた樣な思ひでした、併し自から勵まし、自から慰めて日を送つてゐる内に戰も漸く平定致し、無事に作藏も放免となつて、やつと一と安心致しました。

▲可愛兒に旅

夫れから良人は暫時浪人の樣な有樣でしたが、十四年に故山田(信道)男爵の御世話で鳥取縣の郡長として赴任する事になり、小供も成長し學問させねばならぬ時となりましたので、可愛兒に旅をさせよとの方針から、長男を入塾の時に大阪の知人に托して、濱



學塾に入れました、二年程大阪に置きまして、鳥取に呼び寄せて父母の手元で通學させました、當時は未だ小供も四人でしたから、別段手數もかゝりませんでしたが、家庭の教育は斯かる時こそ最も大切と思ひ、子供等の寢起、部屋の掃除、皆自分でやらせ、寒中でも足袋を穿かせず、炬燵に入るなどゝ云ふ事は一切禁じました、其の位でしたから勿論金錢を持たせたり買ひ食ひをさせる等の事はなく、必要の品物があれば親が買つて與へる事にして置きました、良人は役所から歸りますと、直ぐに小供を相手にして遊ぶ方でしたが、體育を重んぜねばならぬと云ふので、頻りに撃劍や相撲を奬勵いたしました、三人の男兒と、一人の長女都合四人で家中飛んで歩るきましたから、雨の夕暮などには隨分と騷動でした、けれども良人は此の騷動が却つておもしろいといふ風で少しも頓着い

たしませんでした。

▲東京に遊學

長男が鳥取の尋常中學二年生の時だと記臆して居ります、如何なるはづみか東京に勉強に出たいと申しましたが、あまり唐突の事で良人は許ませんでした、すると其翌年の春、突然良人が是れから御前を東京に勉強にやるから、明日直に仕度をして出懸けろと申したので、伜も是れには少々困つた様でしたが、私が種々と世話して、其の翌日東京に出立させました、確か十五の時だと存じます、東京には誰一人知合も御座いませんのに、漠然遣るのも、可愛想であり、又心配にも思ひましたが、之れも修業の爲めと存じ思ひ切つて立せました。

長男は東京に出まして、杉浦重剛先生の小石川の稱好塾と云ふに厄介になる事になり、學資も僅かに六七圓程しか送りません、とても今日の學生の思ひも寄らん事でした、次男の方も鳥取の中學に通はせましたが常に父作造の申しますには、小供が眞に可愛と思ふならば、可成小供に苦勞をさせ、贅澤をしない様にして行く事が何より大切であるとて餘分の金は送らずに悉く小供の養育資金といたしました。

話しは少しく横道に這入りますが、私共の家では、小供が一人出來ますと、子供の養育資金として、俸給の幾分を割いて、その小供の名前で之れを貯金し、成長後の學資金の用途に宛てる計畫をして置きましたから、どの小供にも必ず何程かの貯金は御座いました、ですから子供の使ひました眞の學資金は、極く儉約して何時もかつ〳〵にして置きました位です。

▲鳥取縣より福島縣

宅が鳥取縣に郡長として奉職する事、九年間明治二十二年に福島縣に轉任致す事になりました、其頃は今日の如く交通の便利のない上に山陰道から、奥州に行くのですから、道中も中か〳〵でした、此の時には次男は不幸にして早世しましたが、まだ十二歳を頭に九人の子供を連れて居りましたので、隨分と困難でしたが福島縣では伊達郡に奉職する事になりましたが、こゝ

でまた二人の小供が生れましたので、夫婦に男子三人女子七人都合で十二人の家庭となりました、働くものは良人一人私は毎日小供の世話と、炊事其他、家事一切を引受けましたが、御存じの通り役柄とても、多分の收入があると申す譯でもありませんから、此の大勢の小供を育てゝ行きますには、一と通りの苦勞ではありませんでした。

御承知の通り伊達郡は、養蠶に適した所でしたから主人は益々これを發達せしめねばならぬと申して、郡民を奬勵する爲めに、率先して手を下せよと申しましたから私も大勢の小供を抱へて養蠶を致しましたがそれはなか／＼忙いもので夜も碌々眠らずに働きましたが、幸ひ身體が健康でしたから、別段の障りも厶いませんでした。

▲長男は高等學校へ

右の如く辛い生活を立てゝ居る間に、東京に居る長男も、追々成長しましたので、此地へ呼び寄せ仙臺の高等學校へ入學させる事に致し、三男も高等小學校を卒業しましたので、之れは尋常中學の課程を踏ますに、長男監督の許に、同じく仙臺で高等學校に入れる準備をさせました、良人が豐かならぬ收入の内を、節約して、小供の教育に入れるのを自然と覺えましたものか、小供等も自然質素になり、僅の學資でも不平も言はずに、友達と自炊して通學を致して居りました、夫れ故學校の校服なども、入學の際只一着製つた斗りで、破れた所は自から繕ふて着ると云ふ有樣で、殆んど襤褸同樣のものを、着て居たので厶います。

又書物を買ふにした所で、止むを得ないもの丶外は、大抵買はずにお友達のを借りて寫したと云ふ事です、若し落第でもすると夫れ丈け餘分に學資も入り、親達にも苦勞を掛けるわけになりますから、何時も油斷なく勉強いたしましたので、幸とも二人が大學卒業するに至るまで好い成績を得て居りました、貧しい家庭にも自から一種の樂しみが出て參つて、家計上の困難なぞも忘れる樣になりました。

▲物價騰貴と家計

廿六年に福島から大阪に轉任する事になりました、大阪は福島と違つて生活の程度も高し、其上小供は增へて十一人となり、世話は益々繁くなる、學校に居る三人の小供には夫れ／＼學資を送らねばならぬと云ふので、ほと／＼家計の困難を感じました、併し私共は此の苦しい中にも、小供を大きくするのが何よりの樂しみだと申して、暑中休みの折は必ず仙臺から呼び

寄せ、家庭の團欒を味はしめ、旁々一家の事情を見せて、益々奮發の念を增さしめたので厶います、ですから歸省中は病人の看護や、子守の手傳、其他家事の補助を致させたりして休暇を過ごさせました。

▲女子教育の手初め

大阪に參りまして長女も小學校を卒業し、女學校に入れる筈でしたが、仲々手が廻りかねますので、頻りと勉强したがりますのを、種々諭して、手許に置き家事を見習はせ傍ら、女學講義をとりて勉强させ、裁縫、茶の湯、挿花などを學ばせました、併し女子は家事を取るのが本分と思ひますので、臺所仕事や子守一切の事を致させ、用事の濟みますと讀書を初め、夜は深更まで勉學すると云ふ風でした、四男も高等二年を卒へましたので、十三歳の時手放して彦根中學校に入れ、親族に賴み嚴重に監督して貰ふ事にしましたのです。

僅かの收入の中より生活の費用を節約して、三人の男子に夫れ〳〵學資を送るのですから、中々〳〵困難でしたが、良人は男子だけは是非高等の教育を卒へさせたいと申して、家計などには少しも頓着せず、出來得る限りを節約して小供の學資に宛てたので厶いますから大學に居ります長男が見兼ねまして自分は獨立して學資を得るからと申して、月額五圓の外は送らなかつた事もあります。

元來良人は教育に熱心でしたけれど、さりとて無理に小供に勉學せよとは申さず、十五歳以上にもなつて、他から世話を燒かるゝ樣ではとても勉强は出來ぬ。自から進んでやるのでなければ、眞の勉强でないと申して居ましたので、小供も自から勵んだので厶います。

長男は廿六歳で大學の法科を出る事になり、直ちに裁判所の方へ採用されました、三男は此時工科の方に入る事になり、長男と三男とで一家を東京に借り受け、長男が多少收入あるを幸ひ、四男と長女を東京に出し、永年奉公して居りました老婢を付添へて、兄弟四人で世帶を持たせ、夫れ〳〵學校へ通ふて勉學をさせました、別に世話も燒きませんでしたが、兄弟仲よく勉强を續けて居ました、其の內長男は先年矢ケ間敷かつた、司法官連袂同盟辭職の渦中に投じて、辭職せねばならん次第となり、間もなく良人作造も鳥取縣警部長の職を退き、家族一同は東京に集つて暮す事になり、三男も工科大學を卒業して、會社に出勤する事になり、引き續き四男も高等商業學校に入學し、女の小供は前後して下田さんの實踐女學校に御賴みする事に至したので厶います。

長男は裁判所を止めて辯護士になり、三男は會社へ勤め、其の他の子供は皆學校へ參りますので、貧乏ながらもなか〳〵樂しく、父の誕生日などには一同が揃ふて祝賀を致し、思ひ〳〵の遊び事などありまして、斯かる家庭の樂しみは、容易に得られぬなどゝ申して居りました、程なく作造は更に群馬縣の警部長を奉職する事になり、下の子供四人と私とが參りまして、あとは長男監督の許に東京で教育する事にし

たので、之れまで少なからぬ苦勞して來ましたのも、之れで何程か安心の出來る樣になりました。

▲三男五女悉く卒業

群馬縣に居る事三年で役を廢めまして再び東京に來り今の原宿の家を購ひまして、永住の地と定め、一家十四人の家庭を作りました其の内に四男も高等商業學校を卒業して會社に入る事になり、長女、次女、三女と共に女學校を卒業し、長女は海軍大技師工學士の所に嫁きまして



今は英國に留學中です、次女は海軍中尉の所へやる事に致しました、跡の小供も下田さんの實踐女學に通學中です。

考へて見ますと三十年の長の年月は、あげて小供の教育に盡して仕舞つた樣の心地がします併し此の多人數の小供に一人の不足も出來ませんでしたのは、何よりの幸福で御座います、斯樣に小供が澤山ありましたので、皆さんが養子や養女に遣はしてはと、御勸め下さる方もあり

ましたが、作藏は子を育るは親の義務であるから一人でも他人に遣はす事は出來ぬと申して、殘らず自分で育てゝ參りまして、漸く是れ迄になりました、有り餘る財產でもありましたならば、別段苦勞も御座いませんでしやうが、何一つ他人の手を借らずに、是迄に至しますには…………、ですから私共夫婦は三十餘年間一度も物見遊山などした事は御座いません、只人間は世の中に苦勞をしに生れて來たものだとあきらめて居ました、所が小供等の勸めによりまして、昨年夫婦で修善寺へ一月程參りました。

▲實踐躬行の結果

主人は官職を奉じて毎日役所に出て居る間に、私は一人で十一人の兒供を引受けて世話致しましたので、隨分忙がしう御座いまして、夜も深更に及び朝は何時も暗い中に起きなければならぬので、一日でもゆる〳〵とした日は御座いません、殊に主人はなか〳〵嚴格の人で小供を敎育する爲めだと申して、下駄のぬぎ樣まで世話を燒く位でしたから、小供も自然と夫れに倣つて、何事も眞面目に勉强する樣になつたので厶います。

本年一月良人作造は亡き人の數に入りましたが、其の病中子供等は皆寄り集つて、屆く限りの看護しまして、些しの遺憾も御座いませんでした、ですから最終の言葉にも、子供の敎育と身體の健康とが一番大切であると申しました、小供等も父の最終の言葉を服膺して、互に相戒めて居る次第でございます。

勞働

人は働く爲めに生れたるもの也、働くものには富と安心との報酬あるのみならず、猶又身體の健康と、精神の愉快をも働らきし當座に於て之に報ひらるゝにあらずや。

論より證據人は相當の勞働をなし其日を有益に時間を用ひたりと思へば、其夕休息するに及び、一日を顧みて如何に自ら心の快きを覺ゆるぞ、粗食をなし水を飲みても其甘美なること限りなかるべし、古人が夕顔棚の下涼みといひしも其物が人生快樂の眞味なるにあらずして一日を有益なる勞働に用ひて休息する時の快味を言ひたるものならん、かく一日を有益なる勞働に用ひて心身の樂しき時には其人の氣象自ら平和にして人に接するにも温良なれば一家靄然としてこゝに地上の天國をも形造るなるべし。



辛き舅姑に仕へて柔順の德を完ふせし人の話

△媒妁人口

雜貨商にして、資產は中等、舅姑はあれども、國元に兄あれば、當人に毫も關係なし、共稼ぎの覺悟にて來て貰ひたし、仕度を要せず。

これが儂の今の家へ嫁く前、媒妁人が父に話した良人の身分でした滿更世に云ふ媒妁口でもなく、共稼ぎの覺悟と云ふ一事が、酷く父の心を動かし、仕度を要せずとの事がまた母の意を動かしまして、近所の聞合せもほんの形ばかり、儂は今の良人へ嫁く事になつたのでございます。

成程媒妁人の云つた通り、良人は當時筆墨商を營んで居ましたが、資產があるどころではございません、其日暮しの行商で、生活向きはお話になりません、想ふに今迄何處かの下宿か何かに居て、儂を迎へるに就いて世帶を持つたものらしく、何も彼も足りないものばかりです。

すると間もなく國元から良人には關係がないと云つた舅姑が上つて來る、これまで聞いた事のない出戻りの良人の姉さんと云ふのまでが何處からとなくふらりとやつて來て、狹い家へ同居と云ふ有樣、さなきだに足らぬ勝ちの生活向きへ、これだけの人が增へたのですから、其困難は一通りでありません、そこへ持つて來て、舅と云ふのが大の酒好きで、每晚五合は屹度飮んで寐ると云ふのですから、堪つたものではありません、良人は固より儂の心配は一通りではございません、良人が行商に出た後は、儂が賃仕事をして、少しでも不足勝な世帶を舅姑に見せまいと思ひましたが、何分其日〳〵に追はれますので、つひ〳〵舅が欲しがるだけお酒をあてがふ事も出來ませんから、舅はまた妙に僻んで、やれ厄介者にするとか、老人を死ねよがしに扱ふとか、種々皮肉な事も聞かされました。

それもまだいゝとして、姑と小姑とは酷く儂を憎みまして、箸の上下しに可厭味を列べて、何でも儂に意氣地がないから、家が貧乏するなど、聞えよがしに云はれるのです、お考へ下さい、儂は泣くにも泣かれない境界、いつそ離緣してはと思つた時には、もう懷姙なして居ましたから、それも出來ませず、大きなお腹を抱へては、賃仕事をする苦勞、今想出すと夢のやうですが、其時はいつそ身でも投げて死んでしまつた方が優だらうと思ひました。

△一家の陰事

ある日儂が臺所で炊事の業をして居ますと、奧では頻りと儂の惡口

な云つて居ましたが、

「あんな嫁は今の中出しちまふ方がいゝよ」

「さうさ、子供でも出來ると面倒だ」

「あんな愛嬌のない嫁も珍らしい」

「儂は嫁と思つてはしない、畜生と思つて居る」

　儂はこの囁きを耳にしました時、あゝ、何だつてかう憎まれる事だらう、別に儂は舅姑に抵抗つた事はない、良人の姉は姉として事へて居る積りだのに、かう憎しみを受けると云ふのは、身に德がないからだ、それにしても舅の心がもう離縁と云ふ事に傾いて居るからは、早晚此身は出されずには居まい、もし出されたら、この大きな腹を抱へて、のめのめと實家へ歸れた義理ではない、其時には……と考へると、身の不幸が思ひやられて、いつかふらふらと外へ出ました。何處を什麽歩行くともなく徘徊つて居ますと、丁度良人が行商の歸りがけ、儂の姿を見ると不審に思つたものか、側へ寄つて來て、

「おきく何處へ行く？」

と訊きました。儂はもう何にも云はれません、ぽろぽろと零れる涙を前垂で拭いて、良人の手へ默つて縋りますと、

「また何か家で喧嘩をしたんだな！」

良人の面には當惑の色が見えて居ました。

「よしよし甚麽ことか知らないが、家ぢやア話しにくからうから、何處か其處等の蕎麥屋へでも這入つて悠然訊く事にしやう！」

　これが常だつたら、家へさへ盛蕎麥一つ取つた事のない世帶、二人して蕎麥屋へ這入るなどゝ云ふ事は儂からとめなければならないのですが、其日は自分の苦しい胸を什麽がなして良人に訊いて貰ひたいと云ふ一心、良人の懷中の苦しい事も知つてましたが、そのまゝ默つて蹤いて行きました、丁度誰も居ませんでしたから、二人は天麩羅を吩咐けて、

「さア食べながら話さう！」

と云はれましたが、儂は什麽しても咽喉へ通りません

「一體喧嘩の原因と云ふのは何事だへ？」

良人はいつも儂の云ふ事を極手輕に訊いて、終局には爭らない事なと笑ふのが常でした。で、儂は今日良人の留守の間に起つた次第を詳しく話して、

「さう云ふ譯ですから、晚いか、早いか、儂は離縁されなければなりません、けれども、どうか身二つになるまでは、貴郎の家へ置いて下さるやうに！」

と云ひますと、良人も有繫に打沈んで、

「阿父さんや、阿母さんがさう云ふ事を云つて居るのが、假令甚麽事があらうとも私はお前を見捨てるやうな事はしないから、關辛からうがどうか俺に面じてもう少し辛抱してくれろ、其中には什麽かして阿父さんや阿母さんの氣が柔げないとも限らない、どうか短氣な事をせずに、何處を風が吹くかと云ふ積りで居ておくれ！」

と儂の手を把つて熱い涙を零しました。

「貴郞がさう被仰れば、甚麽辛抱でも致しますが、一體什麽したら阿父さんや、阿母さんの心を柔げる事が出來るでせう？」

「それは俺にも鳥渡判斷がつかないが、長い間には自然折れて來るだらう、離緣と云ふ事は俺が承知しない以上、阿父さんや、阿母さんの勝手に出來るものではないから、何と云はれやうとも、少しの間辛抱しておくれ！」

別段取とめた事も云はず、其儘勘定をして

「一緒に歸つたら、亦何とか八ケ間敷いだらうから、俺は一廻り廻つて歸る事にする、お前は一足先きへ歸るがいゝ」

こゝでまた良人と別れて歸つて見ますと、男は大の不機嫌で、

「家の者に飯も食はせずに、何處をのさばッて歩行いてるのだ、燈火を點けたくとも油がねえ、俺等を干殺す了簡だな！」

と其處に在つた土瓶をとるが早いか、儂の顏を目懸けて投げつけました



けれども幸ひに土瓶は外れて向ふの柱へ中つて破壞れましたが、阿母さんも姉さんも別に制めやうともせず、空嘯いて居るのです、儂はおろ〳〵しながら、男の前へ手を突いて、

「眞個に惡い事を致しました、早速油を買つて參りませう」

すると良人の姉は側から口を出して、

「ようござんすよ、儂がもうちやんと買つて置いたから……日が暮れてから油を買ひに行く莫迦もないもんだ！」

お察し下さい、萬事がこう云ふ有樣ですから、儂は涙で迎へない日は一日もございませんでした。

△大決心

儂はこの針の蓆のやうな家に三年居たのでございます、この中で初產も致しました、辛い事、悲しい事、一々お話すれば際限がありません、丁度三年目の春儂は買物に町へ出ますと、觀花の歸りでもございましたらう、切下げの御隱居と、二十三四と見える若い御夫人、それに子供衆が二人と、下婢がつい

て、さも樂しさうに通つて行くのでした。妾は其時さう思ひました、あゝ、何と云ふ樂しい一家だらう、あの若い御夫人は妾のやうに辛い思ひをなさるだらうか、それは姑と嫁との間だから、親子のやうな圓滿に行く筈もないが、假令一日でも、あゝ云ふ風に樂しく暮したら甚麽に嬉しい事だらう、けれどもそれはお金があつての上の事、それよ、いかに意地の惡い姑でも、滿足を得させたら、さう／＼不足を云ふ事もあるまいと、不圖氣がつくと、まア矢も楯も堪りません、什麽かして良人を助けて、少しは樂な生活をして見たいと、其晩良人の歸るのを待つて、晝間見たまゝを悉皆話し、さて、

「何とかお金を儲ける工夫はないものか知ら」

と云ひますと、

「俺もそれは考へぬではないが、どうもこれはと云ふ仕事がない、其中には屹度好い事があるだらう」

と對手にしてくれません、で、妾は賃仕事から産出したお金の幾分を積んで置いては、近所の困る者へ少しづゝ貸つけて見ますと、隨分損をした事もありましたが、利息と云ふものは大きいもので、いつの間にか六七十圓のお金が出來ました、そこで此事を良人に云ひまして、

「さう云ふ譯ですから、とても一資本と云ふ譯には行きますまいが、この金で表通りへ出て、少し華美にやつて見たら什麽でせう」

と云ひますと、良人は大層喜びまして、

「お前がさう云ふ考へならば、問屋の方でも二百や三百の代物は貸してくれるだらう、乘るか反るか一つやつて見やう」

これから表通りへ出て商賣をして見ましたが、什麽も思ふやうに參りません、益々妾は良人の家を潰す惡魔のやうに云はれまして、隨分辛い想ひをしましたが、此處まで辛抱して來たもの什麽かなしてやれない事はあるまいと、一生懸命、店番をしながら賃仕事をして、何と云はれても餘計なお金は一錢も遣はないやうに心懸け死ぬまではやり遂げる了簡で、良人を勵ましたが、其中に運が向いたとでも申しませう、近所へ學校が出來るやうになりまして、紙や筆がぼつ／＼賣れて行くやうになりました。

人間と云ふものは妙なもので、少し仕事に反動がつくと、面白くなつて來て身を入れます身が入れば自然商賣も繁昌すると云ふ調子で、めき／＼と金も出來、漸く酒好きの男に毎晩五合位の酒は、何の苦勞なしにつける事が出來るやうになりました。

△益々好運

けれども店をこれまでに擴げる苦心と云ふものは一通りではございません、妾は紙屑一枚でも無駄にはしませんでした、家中を干物にする積りだらうと云ふやうな噂も度々耳に聞きました、子供に一枚新らしい衣服拵へてやつた事はございません、只々妾はこの間一厘たりとも人樣に不義理のないやうに心懸けました。

其中に良人は或る傳者を求めて陸軍の御用を勤めるやうになり商賣もだん／＼繁昌して來ましたから、妾も氣に張合が出まして、それ

からと云ふもの、舅になんと云はれても、姑に何んな事を云はれても、一切闘ひません、只商賣一心に夜も碌々寐ませんでした、其お蔭でせうか、それから一年ばかりすると、奉公人を一人置かなければならぬやうになり、それでも手が足りないので、また一人と云ふ風に、だん〲殖て參りますし、子供も小學校へ通ふやうになりましたから、儀はまたこゝに一の苦勢が出來ました。

△六十の手習

世間で能く六十の習字と云ふ事を申しますが、奉公人はだん〲殖へろ、小供も小學校へ通ふやうになつて見ますと、儀もたゞ店の處理ばかりもして居られません、少しは學問をして置かなければならないと思ひまして、この時分から夜になると習字を始めまして、假名のついた小說のやうなものからぼつ〲讀み始めたのでございます、舅や小姑も始めの中は種々批難致しまして、



「あれは氣が狂つたのだらう」

なんぞと申して居りましたが、儀の眞心が追追に解つて來たものと見えまして、小姑までが一緒になつて稽古をするやうになりました今でも人並の事は出來ませんが、それでも取引の手紙位艮人の力を假りませんでも、自分で間に合ふやうになつたのは、全くこのお蔭でございます。

火でもさうですが、ふす〲燻つて居る間にあれが燃えるか知らと思ふやうですが、さて一旦燃え上つたら、燒盡さずには歇まないと同じやうに、什麽したら財產が出來るか知らと

氣を揉んで居る間は、いつまア溜つた金を見る事だらうと思ひますが、まア少し纏まて來ると、早いものでいつの間にか立派な財産が出來るものです。百から二百、二百から三百、千から二千と云ふやうに面白いやうに殖へて、まア一萬となると、それからはまた增へ方が烈しうございます。家を抵當に金を貸す、すると流れる、その家を貸すと云ふ風に、萬事思ふまゝになりまして、だん／＼生活向きも豐かになつて參りましたから、舅と姑とは樂にさせて上げたいと、裏へ一軒隱居所を拵へてそこへ住はせるやうにし、良人の姉もまた四十には間がある身體でしたから、何處かいゝところがあつたら嫁けたいと思つて居ますと、これも丁度同じ陸軍の御用を勤めて居る手堅い商賣の人がありまして、先妻が死んで、後を探して居るところでしたから、直ぐに相談が纏つて、其方へ嫁く事になりました。其時に姐は僕に向つて、涙を零しながら、

「今迄おきくさんに酷く當つて居たのは濟まなかつた、そんな人とは知らないで、一圖に憎いと思つたのは、僕の一生の誤りでした、どうぞ勘忍して下さいと云ひますから、

「そんな事を被仰つては困ります、あゝ云ふ不自由な目をお見せ申したのも、皆僕が惡いので、またあゝ云ふ苦しい境界に居ませんでしたら、かうした樂は見られなかつたでせう、姐さんも今度お嫁きになりましたら少し位の事は辛抱なすつて、どうぞ末長く連添ふやうになすつて下さいまし」

良人の姉さんの嫁いた先きと云ふのが、また別段これといふ繁榮もなく生活向きも、又さう苦しくなかつたものですから、この方も圓滿く納まりましたが、こゝにまた一つ災難が降つて湧きました。

△良人の失敗

良人が餘りに商賣を擴げ過ぎまして、種々の事業に手を出しました結果、一方から崩れ始めて、あはやこれまでに拵へ上げた店へまで、其餘波を食はうと致しました、其時の僕の心配は實に一通りではございませんでした、で、隱居所へ參りまして、

「これまではどうにか兩人を樂にさせる事が出來ましたが、今度これの事で失敗致しましたから、殊によると元の裏屋へ引込んで、元の通りの生活をしなければならなくなるかも解りません」

と申しますと、隱居を涙を流しながら、

「お前の丹精でこれ程の店にもなり、亦俺達もかうして安樂に送る事が出來るのだが、さう云ふ羽目となれば仕方がない、また俺達は元の境界に歸つて、お前にあの時の恩を返したいと思ふ、俺達の爲めとなら決して心配してくれるな」

あれ程僕に辛かつた舅の口から、かう云ふ事を聞かうとは思ひませんでした、けれども、それは一時の災難でしたから、直きに助けて下さる人がありまして、この事は間もなく一埒がつきましたが、僕はいつか見たやうな一家引連れて一遍樂しい遊山がして見たくなりました。これは奢りの根が萌したのか知らと、一時は心に訊きましたが、いや

いや自分がかうなつたのは、あの時何處かの奥さんと御隱居とが樂しさうに歩行いて行かれるのを見て、あの位豐かになれば、家が圓滿く行くものと思つたからで、これを一度は偲ぶ爲め、また一つには長い間演劇一つお見せ申さない舅姑に、一度は氣晴しをさせて上げたいものと思ひましたから儂は良人に對つてかう云ひました。

「お忙がしいところを御迷惑か知れませんが、儂に一日お暇を下さいまし」

すると唐突だつたものですから、良人は驚いたやうな顔をして、

「唐突に何の事だか知らないが、一日實家へ歸りたいとでも云ふのかね？」

と訊くのです、儂は何だか云ひにくうございましたが、

「いゝえ、儂は一日お隱居と小供とを連れて遊山に行きたうございます」

とこれからいつか何處やらの御隱居と奥様とが樂しさうに歩行いて行つたのを見て、大決心を起し、其決心から今日の境界を見る事が出來た事を悉皆話しまして、



「さう云ふ次第ですから、別に贅澤な沙汰ではなからうと存じます、たつた一日で好うございますから、儂の願を叶へて下さいまし」

すると良人は默つて聞いて居ましたが、

「いや、さう云ふ事なら行つて來るがいゝ、さもないところで、これまでお前に隨分長い間苦勞をさせたから、一日歌舞伎座へでも往かうと思つて居たところだ」

と快よく許されましたから、儂は其翌日舅姑それに小供と良人の姉さんとを誘ひまして、上野から淺草へと遊びに行きましたが、この時の樂しかつた事は何とも申上げやうがありませんでした、其後奉公人もだん／＼增へて今では三十人近く使ふやうになり、歌舞伎座へも年に二三度は行き、夏は箱根や鹽原へも湯治にも參る身分になりましたが、あの一日の遊山は什麽して

も忘れる事が出來ません、只々昔の事を考へると夢のやうで厶います。

彼女は今現存せり、而も暫らく姓名を包むはまた彼女の謙徳に出づ。只住所は麻布にして、其人は又市の名譽職たる事のみを告げ置ん。

男女の面白き定義

是れは西洋の或雑誌で懸賞したものださうですが、實に奇々妙々な定義であります、中には惡口もありますが、然し又却々面白いのもあります。

△女とは何ぞや

◎人生の装飾物。男子の玩弄品。
◎多感多情の動物。脆き美術品。
◎悔恨になる希望物。
◎一種の造花。男を生捕る魔物。
◎弱點に强味を持つ造り物。
◎お化粧を唯一の事業とする人間。
◎詩的生活の材料。
◎色々に化ける動物。愛によりて動く人形。
◎捉へ所のなき蛸（觸れば直に刺す、故に捉へること甚だ困難なりとの意）

△男とは何ぞや

◎金を食る唯一の動物。
◎眞面目な顔附したる動物。
◎家庭の大黒柱。優美性を壓する强暴力。
◎女に對する專制君主。
◎野心で膨脹れる風船球。
◎立派な猿。大きな子供。
◎一種の消化器。女が糸を引く機關人形。
◎一生女の爲に働いて居る動物。
◎器具を使用する動物。

△婦人の最も美なる時代

◎戀愛の蕾の綻び初むる時。
◎未だ泣いたことのなき時。
◎十八九歳に在り。此時心情開け初めて最も幸福なり、而して美は幸福の返照に過ぎず。
◎二十歳に在り。此時尚未だ處女のところあり、然れども既に人の妻となれり、尚且母となるの資格あり、是れ實に三美兼有の時代なりとす。
◎二十五歳より三十五歳に至る迄の間なり、子供に圍繞せられて、母權全盛の時代なり。

瀑布

余年久しく那智山の瀑を見まほしく心掛け居たりしが、漸う近き頃彼地に遊びて快よく一見せり、誠に天下無双眼を驚かす瀑なり、其瀑のあたり、山のたゝずまひより堂宇の數、樹木の老やうまで他山にはすぐれて神仙の境界といふべし、此瀑の事は幼なき時より聞居りて斯樣にもあるべしと思ひしにもよらず、格別に異なりし始めに思ひ居りしは懐ろの樣に山の抱へたる所に巖石峨々と聳へ、其中に大河を切り落したる樣に水逆捲き落ちて水烟一二町にも飛散り雨の降る如く一山鳴りひゞき其音遠く三十丁、五十丁の處までもきこゆべし、其瀑の全體の趣を譬へていへば力士の荒れたる如く恐ろしく目を留て久しくは見る事もなるまじ余が如き虛弱の者は神氣も遠々しくなるべしと思ひ居りしに、さはなくて瀑の全體の趣を譬へ曰はゞ美人の白衣を着て立ちたる如くなり、瀑の落つる處ろは一枚の巖にて壁を作りたるが如き處なり、其石壁の横の廣さ五丁も十丁もあり、但し遠方よりは此の石壁樹木の梢に出で、全見ゆれども近く寄りて瀑見るあたりにては兩方に程よく大木の杉多くありて石壁の横廣くは見へず、空は誠に天より落つる心地すれども水の幅は殊の外に狹く、大抵巾一間ばかりに見ゆれども廣ろく高き處なれば實は二三間もあるべし、高さは直下五六十間と見ゆ、上の方暫らくは水筋透りて見ゆれどもそれより下にては石面に水碎け色白く、霧の如くに散りて其美事言ひ盡すべからず、下には大石多くありて瀑壺といふべき淵はなし其音も格別甚だしからず、瀑近く寄りても神氣の遠々しくなる樣にはあらず文覺上人の荒行も虛事にはあらずと見ゆ、皆人の高さは二百間巾は三十間などいふは仰山に實を亡ふといふなるべし。此瀑のみに限らずすべてのもの稱美に過ぎて實を失ふ事多しとぞ覺ゆ。(橘南谿、那智瀑布の記一節)

季節衛生

夏季と子供の衛生

夏季に子供の多く罹る病氣は感冒或は下痢、腹痛胃腸病等、即ち消化器病で、是等が尤も冒され易い病氣である。

△原因と豫防

以上の病氣は何に原因して居るかといふのに、寢冷へ、氷水或は水の過飲、菓物の過食等からである、それ故夜子供を寢かせるに就て親々の注意すべき事は夜中の室内溫度が八十度内外であれば寢冷をする恐れもないが曉の四五時頃急に溫度が降る時に注意しないと感冒にも罹れば寢冷もする、子供は夏は愚か、冬でさいも布團などの上を轉々して決して一定の姿勢を保つて寢て居るといふ事はない、是は發育の尤も盛な時であるから止むを得ない、寧ろ當然の事で却て動き廻るのが健康の證據で寢像のよいのは虛弱な子供であるから掛物をかけても其甲斐はなく寧ろ腹掛か袖なしでも着れば十分である別に布團などを掛ける必要はない、又暑い時節には却つて暑くせぬ方が良いのである。又窓をあけて置けば寢冷をするといふ掛念をする人もあるが、それは無用の話で直接身體に風が當らなければ窓を明けて寢ても差支ないのである。又能く子供に、

△寢て汗をかく

ものがあるが、是れは新陳代謝の盛んな時であるから心配するには及ばない。

次は氷水であるが是は少しは差支はないけれども子供は自分で其量を計ることが出來ないから親たるものはよく注意してやらねばならぬ、渴を醫するには氷水よりも却て氷塊を口に含が宜い、そうすれば氷水よりは少量で渴を醫す事が出來る併し夏季一番よい飲物は

△麥湯である

是とて砂糖を澤山に入ては却て渴を促がすから若し入るなら最も少量がよい、成可くは絕體に入れぬ方が

よろしい。又淡水も少量ならば格別害はないけれども土地か違へば害があるから注意せねばならぬ、近頃市内に赤痢の多い處を見ると水道とても決して安心は出來ぬのである、菓物も新鮮なものは多少利益はあるが、其度を過せば元來消化のよいものではないから往々膓胃を損することがある、幼年者には別して夕刻菓物を喰べさせるのはよろしくない。



△あせぼ

汗疣を豫防するには湯に入れるか又は屢々拭ふて皮膚を乾燥させて置かなければ可けないのでこれに用ふる粉は天花粉か又は西洋白粉の如く皮膚を刺激しないものでなければならぬ、近頃サルチルサンを加味したものがあるが是は皮膚に焮衝を起して適當でない、汗疣につける簡易な粉は硼酸一、澱粉十、といふ割合に交せて用るが好い、若し汗疣の親玉と稱する大なものが出來たらば醫師の治療を受けねばならぬ。

△轉地療養

始終感冒に罹るとか、或は腸が悪いとか、平素虚弱な小兒は轉地療養が最も其効がある、小兒科醫が診察する小兒患者は十中の八九皆腺病質の小兒であるが、此の質の子供には轉地療養の必要がある、然らば如何なる場所に行くべきかといふと海岸が最も好いのであるが、東京附近の海岸は冬期肺病患者の轉地療養が多いから何處に黴菌が殘つて居るかも知れず、實に危險で恰も薪を負ふて火に近付くが如きものである。全體、

△腺病質

の者は肺結核、腦膜炎等と非常に接近し易いのであるからよく〳〵注意せねばならぬ、外國の如く肺病患者の爲めに特に場所を設けて傳染病を豫防し置けば格別であるけれども我國の如く何等の設備もない處では實に危險であるから、寧ろ此間に轉地するのが安全で又效能がある。

又海水に就ても兎角の議論もあるが、まづ世間の人は餘り多く海水に入り過ぎる、夫が爲め受くべき効能も受ける事が出來ないのみならず却て害がある、海水は日射の酷しくない朝夕に三十分を限り入るのが最も適度で、其以上は害あるとも決して益はない、併し足位を浸たして海濱に遊んで居るのは差支へない、又海水を出たら淡水か又は湯で洗つて乾いた手拭で摩擦するが良い、海水浴から歸つたものを見ると色は黑くて如何にも丈夫な樣であるが、何うも痩せて居る樣である、是は過度に海水に入つた爲めであらうとおもはれる。

夏季と傳染病

△赤痢

同病の誘因は常に氣候の感作、不攝生の飲食、消化機の不能等から來るもので、流行期は主として仲秋から初冬の交であるけれども、又入梅前後に多く流行する事もある、そして其病毒の感染が飲食物の不注意から來るものとすれば大に警戒せねばならぬ、猶赤痢は一度病毒地となると數年に亘つて病毒を遺し、其土地は時々患者を發生する事がある。其死亡率は大概百中二十、乃至二十五、即ち五人若しくは四人に付一人の

割合である。

△麻疹

はしかは主として春夏秋に流行するものであるが、今年は春以來東京市内で隨分、激烈であつた、この病も又特異なる固有毒の傳染に因るもので、其媒介となるものは洟汁、唾液、咯痰、呼吸氣、皮膚の蒸發氣、空氣、器具等で、比較的大人には少いけれども二歳より八九歳までの小兒には尤も感染し易く傳染力は頗る強大なもので爲めに一家族擧つて冐さるゝことがある、症候は最初感冐等の如く發熱し熱度三十九度に及びくさみ流涕流涙、乾咳を起し四五日位で發疹期となり、熱度は三十九度五分より、四十一度に昇り面部、頸部、軀幹といふ順序に發疹する、八日乃至十日で全治するけれども併發症があるから必らず醫療を加へねばならぬ、看護も亦醫師の指揮に從はねばならぬが殊に注意すべきは冷氣に當てざる事、冷かな飲食物を與へざるに在る事である。



△實扶垤里

此も亦バチルスの傳染で、最初は主として咽喉を侵すのである、大人でも罹る事があるがまづ十歳未滿の小兒が重に冐されるのである、傳染の機會はまだヂフテリヤと知らぬ初期の患兒と遊戯して接觸した爲めに感染する場合が多く、又之が誘因は多く感冐から來るものだから入梅期や氣候の變り目などには寢冷さ

せない樣大に注意せねばならぬ、この症候の內最も素人に判り易いのは喉咽部の腫るのと同時に嚥下が頗る困難であるから唾、涎の出る事が著るしく、內部を檢すると白色の義膜が發生して居る、今日では血淸療法が發見されて居るから容易に治療せられるけれども最初感冒だとおもつて、等閑にする時は終に不良の症に陷る事があるから子を持てる親逹は大に注意せねばなりませぬ。

△腸窒扶斯

これは彼のエーベルト博士が發見したチフス菌の傳染するもので、該の病毒を含んだ飲食物、殊に飲用水（粗雜なる井水は尤も危險也）より來るが、氣候の感作、飲食物の不注意、消化機の不能が誘因となるものである、チフスは潜伏期を經過した後ち、全身の調子がをがしく、兎角倦怠の氣味があつて頭重く、食思缺乏し殊に惡夢に魘はれる等睡眠の不安甚だしく數日乃至一週間斯る狀態に在つて後、數回の惡寒を催ふし、斯くして發熱し、舌と唇とが乾燥し大に渴を覺へ、飲料を欲する事が頻りである、それから次第に他の本症の狀態を呈はして其傳染力病勢共に恐ろしいものである、合併症のあるものは尤も危險である、假令生命に懸念はないとするも經過が長い時日に亘つて快復期に至るには四週間を要するのである、殊に腸窒扶斯の快復期は尤も注意すべきもので、此の際食餌に不注意があれば忽ち病の逆戾りをして遂に救ふべからざる樣になるのである。

神經衰弱の一原因

衞生上の事柄とは言ひ乍ら明狀に言ひ難いのは反性的遂情である、恐らく少年男女の健康を害するもの〻大なるこの遂情に如くものなしといふてもよろしい、神經病に就て造詣深き狩野醫伯の說に、現今靑年男女の間に多くある神經衰弱症に就て其の原因を搜ぐれば、千六百餘名の中六百二十名は專らこの遂情に依るものであると、實に恐るべく慎しむべき事である。

同氏の說によれば、

一體この反性的遂情は、社會に廣く蔓延して居るので、歐米諸國の衛生家も爲に大に心配し獨逸の如きは學校衛生の取締上、机の形まで工風して學生の下肢の部分が教師の席から見へる樣に改め一方には又保證人や父兄に對し學校醫は明らさまに注意を促し置くといふ、日本の習慣では勿論斯る事は口にするさい忌むべき事としてあるが、實際は素人の思ひ及ばぬ害毒のあるもので、衛生上等閑に附すべからざるものである。

第一この事を豫防するの困難は春氣發動の青年が其惡事たる事を知りつゝ行ふので醫者も持て剩して居るのであるが、其上にも惡習慣が存在して未成熟の青年者を誘惑して行はするなどいふ事もある、而してその誘因となる場所は彼の寄宿舍、塾舍、若しくは下宿屋等專ら青年の集まる處ろである。

而して又此の惡習慣は獨り青年時代にのみ限らず已に結婚したる者、或は老人にさいも、これを爲すものがあるといふに至つては其の無分別實に驚くべき次第である、云々。

扨てこれを豫防するに就ては如何なる方法を取るべきか、勿論、兩親、醫師、朋友、教師等は其有害なる理由を說いて之れを戒愼せしめねばならぬが、歐米では睡眠時に此の事あ



る少年に對して手袋を穿めて、其の手袋を寢臺に結びつけて之れを防ぐ方法を取つてゐる、此の如き豫防も勿論必要であるが、外に少年並びに女子に就ての豫防法は蟯虫といふ三四分のものが肛門より陰所に傳播して瘙痒を促す事があつて、これが爲めに反性的遂情を促がすことになるから注意せねばならぬ、其他には精神の修養に務め、監督を嚴重にするの外完全なる豫防法はないから、遂情の原因に逆つて少年男女の間に春情の誘起を防ぐ事が肝要である。

さてこれを防ぐにはどうしたらばよいかといふのにまづ猥褻なる繪畫、文章等を見せる事を嚴禁するのは勿論であるが、一體この春情を誘起せしむるものは、愛情とか、追想が大いに力あるものであるから、彼の空想的の思念に耽るのは甚だよろしくない、故に成可く朝は夙起して冷水を浴び、運動を成し務めて空想的の雜念を拂ふことをせなければならぬ、この空想的思念は春情の自發性であるが、他動的のものは前記の繪畫、文章、動物の生殖行爲、及び寢具、下帶、衣服等の局部摩擦である、この外又美麗なる衣服、芳香ある香物なども春情喚起の誘引となるものである、又都會の人は田舍人に比較して春情發動の早き傾きあるのは都會には春情挑發的の事柄が田舍よりも繁多であるからで、彼の演劇、寄席等で形體上、若しくは聲音上自然に春情誘起の因となるものが多い、少年少女の父母たるもの若しくは、男女學生の監督者たるものは一寸此の邊に注意を拂はねばならぬ。純粹無垢の少年男女が一寸した誘引からして一度この惡癖に陷ることあれば、其習慣は遂に改むるに由なくして一生の身體、精神の上に非常の大患害を遺すものである、注意の上にも注意をせねばならぬ。

一體この反性的遂情は自然的の遂情に比べて神經に及ぼす疲勞の程度は非常なものである。何故かといふのに第一幼年の時からそれを行るとそれが自然と過度に流れ易くなり、隨つて精氣を減損するの量多き爲めであるが、今一つは局部の神經を刺戟する事が自然的よりも過劇であるといふ事が疲勞の原因である、斯し

て其結果は食慾減乏、體質虚弱、記臆力衰へ、精神及び身體上の作業に堪へる力が薄くなりて女子にありては幽欝性となり、憶病となり、無氣力となり、男子にありては活潑敢爲の性を失ひ、懦弱となり、杞憂性となり、引込思案となるなど皆この反性的遂情の齎らせる結果である、五官の機能はすべて微弱となり、腦力衰耗して事物に對する判斷力を缺き男女克己忍耐の力を薄弱にして生存競爭に堪へざるに至らしむるものである。故に反性的遂情は前途有望なる少年男女を毒するの大なるものとして衛生家の尤も恐懼する處である。



△嬰兒の轉地

暑中は大人でさい避暑に出掛ける位であるからまして柔弱な小兒は炎暑に冒され易く種々の病氣を引起す道理である、殊に夏季には小兒一種の腦膜炎が流行し毎年死するものが澤山である、此の病は初期に轉地療養さすと全愈することは醫者の實驗する處ろである。併し避暑には如何なる方面を選ぶべきかといふのに、海濱は全體熱度の高いもので、晝の間は海風吹きて清涼を感ずれども夜に入つて却つて蒸し熱い樣な事があり、其上種々病人の群集等があるから、寧ろ山地を撰んだ方がよい樣に思ふ。

季節料理

青梅貯藏法十種

入梅の季節に入りて梅子は色づき今や採收の時とはなりぬ、この梅子を採りてよく保存し、厨下に貯へて朝夕の食膳に供するは德用の方法なり依てまづ梅子に就て十種の貯藏法を述ぶべし。

△煮梅子　青き豊後梅の少しも疵なきを撰み、針を所所に立て湯煮をして其湯の煮立ざる樣、時々水を加へ酸味を去らしめ、一日ほど水に浸け置き砂糖を煮つめ、鹽を入れ、靜かに煮上ぐべし、又鹽漬の梅實は前條の如く湯煮をして十分鹽を出して用ふべし。

△熨斗梅　よく熟したる梅實を取りて桶に入れ、蓋をして一夜を過ぎ取出し擂鉢にてすりつぶし、種を除き布袋に入れ絞りて糟を去り、梅肉一升なれば砂糖百二十匁に葛粉四匁を加へ、鍋に移し又火にかけて砂糖を入れ、葛粉を入れ、攪き廻しながら徐かに煉りあげて薄き箱に流し、堅めて焙爐にかくるなり、清汁、羹汁などに用ふる事あり。

△甘露梅　青梅のよく熟せしを山葵卸にて摺り布袋に入れて搾りたるを平鉢に入れて乾かし、適宜に切るなりこれも羹汁等に用ふるなり又青梅を鹽漬にして屢々水をかへ、苦味を去り、砂糖蜜につけ置き、鹽漬の紫蘇の葉につゝみ、輕き壓石をかけて煮るなり、これを甘露梅といふ。

△更紗梅　小梅を鹽漬にして干したる後核を去り、核も肉も又鹽漬の紫蘇の葉をも加へ、砂糖を入れて煉り合すなり。

△梅びしほ　十分に熟したる梅の實を鹽漬にして壓をかけ水の上りたる時取出して壓蓋をあて水氣を絞りて擂鉢にてすり、砂糖を加へ、水嚢にて漉すべし、又一法あり、梅を一旦湯煮をして鹽を出し水氣を搾り砂糖を入て火にかけて煉るなり其割合は梅實一升なれば砂糖三匁程なるべし。

△青梅漬　梅の實の未だ黄ならざるを取り鹽水につけ

暫くして引上げよき酒に砂糖を加へたるに漬け込むべし、大約梅百個に酒一升、砂糖は百目ほどなるべし又青梅を罎詰にして燒酎に漬くるもよし。

△梅干漬　實の入りたる梅を取り二三時間水に浸し梅一升に鹽三合の割合に紫蘇の葉見はからひに入れ、押をかくるなり、漬けてより二週間より三週間を經て、晴天の日に取り出して莚にならべ、日光に晒し、四五日ばかり乾して壷に收むべし。

△梅干に大根、茗荷、筍、ちよろぎなど漬けたるは雅趣ありてよし又、此の梅酢に黴の生せざる樣にするは芥子の粉を袋に入れて漬け置くべし。

△青梅　を枝の儘折りて葉も實も一つに藁にて捲きさて梅の實をむきて水に浸け酢を出し、この酢一升に水一升五合を交せたるに漬け置くべし、久しく貯へらるるものなり又梅の實の猶熟せざるを撰み、青竹二つ割にして實を其中に入れ、藁などにて括り泥にてよく塗り土中に埋め置くべし、何日迄も變らず新鮮の如し。

△梅花　を貯ふには梅干をすりつぶし、其肉を壷の內に塗りつけ、梅花を蕾のまゝ枝と共に挿し込み、固く目張りして外氣の入らぬ樣にすべし、盛夏の日出して珍膳に供すべし。

△青梅　を青くし置くにはわらびの灰汁に一夜漬け置けば茶色のごとくなるを引あげ、水を乾かし常のごとく鹽につけ、葢をよくし置くべし。

夏の川魚料理十二種

川魚は夏の庖厨に鮮美を競ふものにて其種類甚だ多く日常食膳に供するものは鯉、鮒、鰻、鯰、鰌、うぐひ、たなご、かじか、はや、鮎、やまめ、鯊等なり、川魚は一般に肉柔かにして腐敗し易く、且つ枝骨多きものなれば、これを調理するには、生鮮なるを撰ばざるべからず、殊に鯉鮒等には一種のペスト菌發見したる事あれば調理上尤も注意すべし、又魚類は何種にても概ね産卵前を美味とす。

〔鯉のあめだき〕　鯉の鱗を取り頭をおろし、腹をあけ

て腸を去り、膓に庖丁を觸れざる樣注意して三枚におろし、薄肉を取り、爼にのせ、皮目を下にし、薄刃にて皮に達するほどに刄をいれ、味淋一杯、酒一杯水飴少量を加へ、能く沸立たせたる中に煮笊を敷きて右の鯉を列べ、落蓋をし、暫らくにして少量の醤油を加へ汁の煮つまりたるを待ち、鍋をおろして皿に盛り、粉山椒をふりかけて用ふ。

〔鯉のあらひ〕　鯉の脊より庖丁を入れて三枚にすきとり、鰓及び膓を拔かずして三枚に卸したる肉の皮をそぎ、小骨を拔去りて薄く作り肉になし、冷水にて數回水を替へて肉のはせるまで洗ひ、別に細き竹串にて頭の方より骨にうねり刺しにて、皿に盛り、其上に前の肉を載せ氷及び越瓜のかつら、或は山葵の卸したるを添へ二杯酢又は單に醤油を附けて出すなり又冷水の代りに沸湯をさつと打掛けたるを「鯉のちり」といふ其食方はあらひに同じ。

〔鯉こく〕　鱗のまゝ一分程づゝに骨切にし更にこれを筒切にして白味噌八分と三州味噌二分とを混じ少し味淋をさし、その中にて煮るなり、味噌は鰹節煮出汁にて溶き吸口に粉山椒を添ふ。

〔鮒のこがし漬〕　鮒の二三寸位なるを硬錬の甘酒に二日程漬け置き三日目に取出して其儘遠火にて燒き冷して白味噌の中へ漬込むなり。

〔鮒の雀燒〕　一二寸位なる鮒を脊開きにして竹串に刺し、味淋と醤油とにて煮詰めたる汁にてこれを附燒にし粉山椒をふりかけるなり。

〔鰌の柳川〕　大なる鰌を目打にて刺し、脊開にして腸を去り、骨を拔きて頭を切去り、沸騰せる湯に投じて直ちに笊にあげ、水を注ぎて手早く冷し、笊にあげ置き、醤油一杯に鰹節煮汁四杯と味淋の煮切（味淋を煮て酒氣を散きたるもの）半杯とを加へ煮汁を造り、これに午蒡の皮を庖丁の脊にてこそげ、水洗ひしてこれを笹の葉のごとく薄く削り、水に浸して灰を去りたるを能く水氣を搾りて鍋の下敷とし、湯引きたる鰌を載せて右の煮汁を適度に注ぎ、落蓋をし、汁の煮へ上りたる時蓋を取り、よく溶きたる鷄卵を鰌の上より引き

直ちに鍋蓋をして火より卸し、本鍋（薄色に焼きたる土鍋）に載せて塗蓋をし粉山椒を添ふ。
〔鮎の早鮓〕鮎を三枚に卸して、其儘酢に浸し置き、焼鹽を加へ、花鰹をかけて出す。
〔鮎の魚田〕鮎をよく水洗して鱗を去り、下身の頬肉より金串又は竹串にてうねり刺にし一回醬油を注ぎて兩面に塗りつけ、ざつと炙り板の上に抜き皿に盛るなり、魚田味噌の作り方は、上等の赤味噌を裏漉にかけ味淋の煮切及び砂糖と鰹節煮出汁少量とを加へ、これを烈火にて煉り、冷したる後鷄卵を割込み、よく混合して刷毛にて魚に塗るなり。
〔鮎の土佐燒〕味淋に清酒を混せ、薄く削たる鰹節を加へたるを汁とし、鮎を煮込みたるものなり。
〔鮎の味噌燒〕鮎を素燒にして味噌を味淋にてよく摺り油を搾り込み砂糖にて味をつけて、よく摺り合せ、右の鮎に塗りてあぶるなり。
〔鮎汁〕甘味噌をよく摺りて適度にとき、鍋に入れて沸騰せしめ、鰹節の削りたるを入れ、直ちに別の鍋に漉し入れ、これに、さゝがき牛蒡と細き土鰌とを入れザッと煮て、椀に盛り、粉山椒又は剝き柚子を添ふ。
〔たなごの佃燒〕小なるたなごを竹串にさし、ザッと燒きてこれに醬油を塗りて三回ほどつけ燒にしたるものなり亦粉山椒を添ふ。

即席膾料理十二種

△胡瓜の酢もみ　胡瓜を二つに割りて種子を去りて薄く刻み、鹽を少しふりかけ、擂鉢に入れ揉みてこれを搾り、さて後酢の中に入れて掻き廻すべし。酢の中には砂糖と醬油とを少し許り入るゝもよし、又瓜の中へ紫蘇をうち込み、又何魚にても酢に浸したるものを入るゝも可なり。若し精進ならば白胡麻をいりて擂鉢にてすり、其中に酢と味淋と、醬油とを入れて掻廻すべし、青瓜白瓜も又胡瓜に同じ。
△茄子の生姜酢　茄子の皮を剝き煠でゝ搾り、三杯酢の中へ卸し生姜を入れて和へるなり。

△茄子の酢味噌　茄子の皮を剝き其儘蒸して酢味噌を載す、又略しては煠でゝ酢味噌の中へ少し砂糖を入れ芥子を摺り込みてこれを載するもよし。

△小鯛の酢つけ　小鯛を幾尾にても鱗と腹とを去り全體のまゝ鹽を強くふりかけ、半日ほど置きて後その鹽をしたみ、更に器に入れかへ、三杯酢をかけ翌日より食すべし骨も頭も柔かにて餘す處ろなし。

△鯔のぬた鱠　魚の大小に拘ならず腹より割き、中骨を去り脊ごしに作りおき、別に酢と醬油とを程よく合せ、味噌及び砂糖を少し入れてよく解き、又葱の白根を割りて、ざつと湯煮て、油揚を火どりて絲ぎりにしけつり大根、木耳、唐からしを一緒に調和して出す。

△沖鱠　鮎、鰺、など丸作りにして蓼、紫蘇など粗く切りて入る、酢は燒鹽を入れて煮かへすべし。

△蛸のかくし酢だて　隨分大きなる蛸を煠で細作りか又は小口より極めて薄く切りて極上の酢に鹽を少し合せて浸しおき酢を四五回も取換へその度毎に手にて揉む、さて出す時によく搾りて生姜のせん切を上におきて出すべし。

△鯛の玉子酢　鯛を三枚に卸し鹽をふりかけ置き別に魚の大さに應じて鷄卵一二個を割り、よくまぜて山葵を摺り込み、酢をかけ更に少量の鹽を加へ、これを混ぜ合せ、さて後右の鯛、鹽身を刺身のごとくに切りて其上に此の酢をかくべし、夏季魚を生にて貯へ置く事出來ざる時、魚に鹽をふりかけ、貯へ置きて用ふるに尤もよし、又刺身の殘りたる分に鹽をふりかけ置き右のごとくせば殘物とおもはれずして二度の用をなすべし、これは鯛に限らず、比良目鱸等にもよし。

△すゝきの蓼酢味噌　鱸の鱗を去り、皮付のまゝ刺身に作り爼の上に、列べたるまゝ布巾を被ひ其上より沸湯をかけ更に冷水をかけたる後布巾を取去り、よき茄子の皮を剝き縱に二つに切り、煠で、少し搾り縱二分位の厚さに切り、茗荷の子を薄く刻み、水に浸して後水氣を去り各々を中皿に盛分け蓼酢味噌を盛て出す、味噌の作り方は蓼の葉をよく洗ひ、擂鉢にて擂り味噌共によくすり酢と砂糖とを入れてまた擂りませ裏漉に

するなり。

△蝦と白瓜の甘酢　蝦を煠で肉を拔き出し細かく裂き鹽酢に一寸入れ、酢を切りて岡盛になす、また白瓜を一寸程の長さに切り、皮を剝き捨て、心の所までかつらに剝き落し、又これを堅く卷きて小口より薄く切り直ぐに薄き鹽水の中に放ち入れ、取あげて水氣を去り鹽と酢にて洗ひ更に酢を切り岡盛にして客に出す時右の二品に甘酢をかけるなり、甘酢は味淋一合を半分に煮詰め、五勺の酢と少量の醤油とを加ふるなり、あしらひには生姜を用ふ。

△赤貝の三杯酢　まづ赤貝の介殼を剝し、腸を除きて俎に載せ、直ちに庖丁にて薄くへぎ、その儘目笊に取り、鹽を少し撒きちらして笊を揺りうごかし、よく血液と、粘液とを去り、幾度も水をそゝぎ洗ひ流してよく水氣を斷りて皿にうつし少しの鹽を混せたる酢を加へ、暫時其中に浸し置き、取合せの材料には蓴菜を撰び指頭にて莖を摘み去り、よく洗ひ、毛飾をうつ伏せにしてその上にのせ、十分に水氣を斷りて少量の鹽をませたる酢の中へ浸し再び毛飾の上にのせ、更に器に盛り分け、右の酢に浸し置きたる赤貝を盛り添へ三杯酢をそゝぎ、卸山葵など添へて出す。

△芋莖の酢の物　芋莖の葉を切去り、一尺ほどの長さに切り、指頭にて兩端より皮を剝き更に一寸ほどの長さに切り、再びそれを縱に細く切り、直ちに水に入れて暫時灰汁を脫き置き、鍋に熱湯を沸かしそこの中へ投じざつと煠でゝ目笊にあげ堅く水氣を搾りて丼鉢に入れ、砂糖一杯、酢二杯を醤油に混せたる後、別皿に盛り分るなり。

季節燒物料理八種

△烏賊の附燒　烏賊を縱に六切にし、肉の厚き處ろを四角に切りて裏表より布目を入れ、串にさし、山椒醤油にて附燒にし、串を拔き庖丁を横にして短册に切り、好みの物取合せて出す。

△蚫の附燒　蚫を殼から放して鹽水にて洗ひ、薄く大切にへぎて串にさし、火にかけて兩面を燒き、燒けた

る時、醬油一杯に酒三勺を合せたる汁を二度ばかりかけて炙るなり。

△蝦の蠟燒　海老の頭を去り、腹の兩脇より庖丁を入れ中の腸を取除けて身を引出し、押し開きて少し鹽をふり、横に串を二本ほど刺し、兩面よりよく燒き、さて鷄卵を割りて少しの饂飩粉と醬油とを交せこれを海老に塗りて遠火にかけ五遍ほど燒くべし。

△針魚の合せ燒　針魚を拔きて骨を去り、肉の方に鷄卵の白身を塗り二枚合せて鹽をふりて燒き浸し物など取合せて出すなり。

△鯛の蠟燒　鯛の切身に薄鹽をあて、串にさしてよく燒き玉子の解きたるに饂飩粉をませ、遠火にかけて四五度附燒にし、串を拔きて出すべし。

△鮎の山吹燒　小鮎の腸を去りてよく水にて洗ひ、鹽をふりかけて串にさし置き、更にざつと水にて洗ひ、火にかけて燒くへし燒加減は魚の目の白くなりたるを度とす、斯くて燒けたる時鳥の羽にて鷄卵の攪交たるを塗附け火にあぶるべし斯くすること三度に至らば魚は山吹色になるべし、隱元の青煮を附合にす。

△鰹の附燒　鰹を小賽の目に切り、麴に柚子皮の細かに切りたるをすり混せ醬油にて解きこれを附燒にし、小串をうちて出すべし。

△茄子の鼈甲燒　茄子の皮を剝かずに二つ切にし、縱横に切目粗く庖丁入れ、鍋に胡麻の油を引きて、煎り燒にして生姜醬油をかけて出す。

△茄子の鴫燒　よき茄子の蔕を切去り、水にて洗ひ皮とも二つ切にして竹串にさし、胡麻の油をひきてよく燒き、味噌をつけて再びざつと燒くべし、味噌の拵へ方は擂鉢にてよく摺り砂糖にて旨く味をつけ、裏漉にするなり。

即席サラダ

△胡瓜サラダ　胡瓜を水洗ひし、皮を剝きて薄切にし食鹽をふりかけて三十分間程置き、別に大匙二杯のオレーフ油、或はハムのスープ及び、同量の酢と小匙一杯の胡椒粉に砂糖を混和し、直ぐに其中に右の胡瓜を

入れ程よく攪拌したるものなり。

△稚鷄サラダ　一羽の鷄肉を能く煮て軟かになりたる時分に引あげ適宜に細かに切り、直ちに細切にしたる一個分のキャベツと胡椒粉及び芥子粉とを加へ、共によくかきまわしたる後、温めたる三合の酢を混和し冷却して後食すべし。

△蝦サラダ　大なる伊勢ゑびに鹽をふりかけ、直ぐに熱湯中に投じ、二十分間ほど煮て其爪並に頭部を去、身を竪に二分して内部の肉を出し、皿に萵苣の芽葉をちぎり置きて其上に盛り又皿の周圍に殻と頭とを並べ別に三個の雞卵の黄味をよく攪拌し、大匙四杯のオレーフ油徐々に點じつゝかきまわし、少しの鹽と一本の唐辛とを加へ、更に半匙の芥子粉に大匙四杯の酢とを加へ、これをソースに作りて右の蝦肉の上に注ぐなり。

△萵苣サラダ　新鮮なるちさの外部の古き葉を除きよく水にて洗ひ、水氣を布巾にて拭ひてこれを肉皿にうつし、其莖根の部を皿の中央に丸形に並べ、内部の柔かき葉を上部に置き、別に鷄卵の黄味三個分を取り、大匙一杯の鹽と半匙の芥子粉とを加へよく混和し、大匙に三杯のオレフー油、又は半杯の溶かしたるバタを漸々に落しつゝ絶へず、かきまぜ其終りの頃、茶匙一杯の酢と、パセリ又はオランダ三ツ葉の芽葉を玉葱と共に挫み込みこれを匙にて右のちさに注ぎ込み、又その上に煮たる鷄卵の小口切を二三片添へて盛り出すなり。

△キャベツ（甘藍サラダ）　一升三合の細長く刻みたるキャベツを取り別に大匙二杯の食鹽及び同量の砂糖と大匙一杯の胡椒粉及び同量の芥子粉と四個の卵の黄味とを混和し更に半杯のバタを溶かし込み、其中にて右のキャベツを和へまぜ再び茶匙一杯の酢をそゝぎ、煠玉子の薄く輪切にしたるを、二三片添へ、又牛乳及び酢を別々の鍋にて温め、酢の沸騰したる時バタ及び砂糖と食鹽を加味し刻みたるキャベツを投じよくかきまわして二三分間蓋をして熱し小量の牛乳を加へて暫時冷却するを待ちて食す。





幽棲の佳人

綠蔭深處主人

（一）

歐洲の都會中にても殊に風光の明麗なるを以て聞へ、舊跡靈山の勝概普ねくして夙に地上の樂園とまで許されたる西班牙「グレナダ」の市にアントニオといへる一靑年ありけり、渠は「サラマンカ」大學の制服を着こなし圖書館にて讀書するを日々の課業となせり、この靑年は好奇心と、冒險心に富める者なりしかば、暇ある時は、昔時此の地に榮へたりし「ムール」人の榮華の夢のあとを探險しつ、縱まゝに其の好奇心を養ひ居たりぬ。

渠は每日のごとく、其通へる圖書館にて異樣の服裝をせる老人を見たり、其着物は古びて色褪せ、垢づきたる羊羹色の袴に同じ色の上衣を着、幅の濶かなる帽子を頂きぬ、されど容は瘦せて憔悴の色あり、其腰は屈りて梓の弓狀をなせり、這は元より年齡の所爲にもあらんか一體に窶れて顏に生氣なく、外貌沈鬱にしていとゞ哀れ氣に見へたり。

乍去、老人の書籍に對する熱心は非常のものなりき、渠はアラビヤの古文字を硏究し、印度の哲學を極め、支那の煉金術をも搜ぐりつゝあるなりき。靑年はこの不思議なる老人に遭ひて彼れが生得の好奇の心は忽ち燃え上れり、彼れは老人の身分性行をその傍人に

尋ねたれども誰とて其の素性を知るものなかりき。

渠の好奇心はいよ〳〵發動し、如何にもして其の本體を發見せばやと思ひ、その翌日圖書館にて遭ひし時、その老人に或る書物を借覽したき由を望みてそれとなく昵近を求めたり。この時老人は只纔かに頷づくのみなりき。

彼れは一覽してやがて恭々しく之を返却したるに老人は何の答だにもなさゞりき。

アントニオは暫時躊躇ひけるが、やがて言ひ出でぬ、

「先生一寸御質問申しますが、一體先生は何を御調べになるのですか」

老人は其質問のあまりに不調法なるに驚きて、ぬつと其頭を擧げ眼鏡越に學生の顔を覗きこみつゝ、

「御免なさい、私は研究が忙しくて一寸も眼が放されないから」

かくて再び其眼を書物の上に投げ、又もや研究に餘念なかりし、學生はあはてゝ

「御尤です先生、併し、先生、道を尋ねられても忙がしいとて敎えて呉れなければ、不案内な旅のものは困つて仕舞ひます、それでも先生はよいと思召ですかね」

老人は迷惑そうにいへり、

「私共はまだ、學びの最中です、中々貴君達に道を敎へるやうな委しい旅行者ではないです」

昵近の鐵門は斯くして堅く閉鎖せられたり、刎ね付けられて靑年は再び言ひ寄る詮もなかりき。

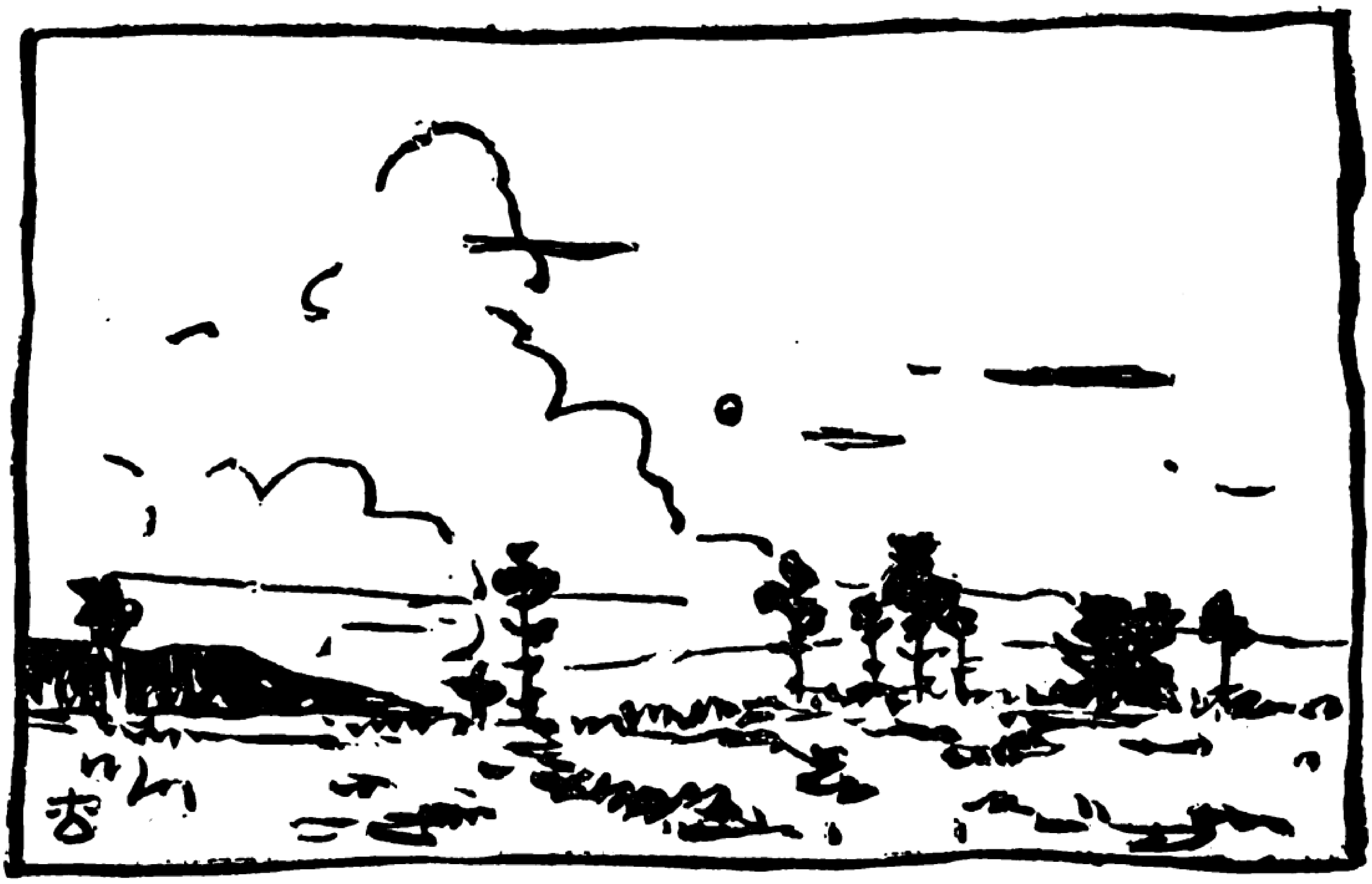
（二）

アントニオの心は是より又他の問題に轉じぬ、渠は昔時「ムール」人が建築たる彫琢を極めし大厦、高樓の趾をさまよふて、當年榮華を極めたりし人民の今僅かに名殘を留むる哀れ悲しき墓碑の苔を拂ひて昔時を懷ひつゝ、莊嚴なりし宮殿の荒廢せるに感愴の涙を流し、或は華やかに彩色されたる金碧燦爛たる「モーセ」の圓尖塔を見、大理石の水盤や、雪の如き石膏の壺などを仔細に點檢しつ幾度か其豪奢に驚嘆したりき。

顧みれば當年の豪華は、今何れの處にかある、むか

し晴天時ならぬに雨ふらせし泉の谷も今はあはれや水涸れて塵埃堆く、昔し玉を炊ぎし榮華の宮殿も、今は沫香の香りいぶせき廢寺と化しぬ、この如く彼は驚嘆し、悲愴し、古今を俯仰して感慨に沈みつゝ逍遙する時圖らずも又圖書館にて見し件の老人に遭ひたり、老人は例によりて、深く沈思せるものゝ如く首俛れて周圍の光景には眼も觸れざりき、彼は何の目的ありて此處へとこそは來りたれ、想ふに廢墟の中に發見せられたる瓦石の斷片の記錄によりて、古昔の歷史を讀まんとにはあらざるか。

アントニオが斯く推察せし時



渠は又もや老人と知己となりて學問上の談敵手を作らんものと思へり、渠は氣清く日朗かなる一日、帶のごとく延ける「ダロー」の河の美はしき谿谷、渺茫たる「ベッカ」の沃野、さては地上の樂園と稱せられたる「グレナダ」を圍繞せる野山の姿の一段と麗はしき眺望を一と眸の中に收めつゝ、只ある靈山に登りぬ。

靈山の頂には一の禮拜堂あり、この禮拜堂にはアラビヤ語もて書かれたる種々の貴重なる記錄の藏せられたれば、世人は皆これを「智識の藏」なりといへり。好奇心と探險心とに富めるアントニオが寶藏探險の爲めに

此の山に登りし時、又かの老人が此處に來會はせて居たり、渠れが老人に對する好奇心は是に至りて又一段と燃え上りぬ、渠は實藏の探險を中止して更に此の老人の本體を探尋せんと欲し、遂に其跡を趁ふて其住家に到らんと決心せり。

老人の足は山を下て麓を縫ひ、樹陰茂れる「ダロー」の堤を傳ひ、小丘に沿たる一條の淋しき道を辿行けるに須臾にして蒼然たる暮色は地上を次第に覆來りぬ。

（三）

老人の住家は如何なる光景なりしよ、今こそは家居も壞れて衰れ果なき有樣なれど、むかしは由ある貴人の邸宅なりしとおぼしく、華麗なりし面影は猶ほ所々に名殘を止めぬ、四方の壁は中々に厚く造られ、窓牖は狹けれども皆鐵の栓もてさし貫かれぬ、扉はいたく破損したれど、大釘もて打付られたる堅き板張なりき。

邸宅の一端に「ムール」風に建築せられたる塔の今は破れかゝりたるが突兀として殘りぬ。

家の前まで來たりし時、老人は立止まりて門扉をほと〳〵と叩きぬ、一道の光線は微かに上層の窓より洩れたりと見る間に、一個の美人端なくも顯はれ來りぬ、其の麗はしさはラフエールが畫中の標本なりき、其頭髮はうるはしく掻きなでつゝ後脊に垂れ下げつ、程よき所を絹紐にて結びぬ、かすかなる燈光をたよりにすかし見れば、姿は春の月のごとく、艷やかにして、然かも凛々しく、實に南方美人の長所を殘りなく備へたり、アントニオは我を忘れて恍然眺め入りぬ。

老人は嗄たる聲にて「今歸りぬ」と音なひぬ、美人の姿は忽ち見へずなりしが、須臾にして小門は開かれたり、家に近く寄り添ふたるアントニオは此の婉麗なる少女の姿のうるはしさに見惚れつ、暫時身動きもせず佇み居りしに露を含める少女の黒き双眸は早くもこれに心づきて、いとも驚きたる樣なりしが、門の扉をそこ〳〵に閉して遽しく家の内へと駈け入りぬ。

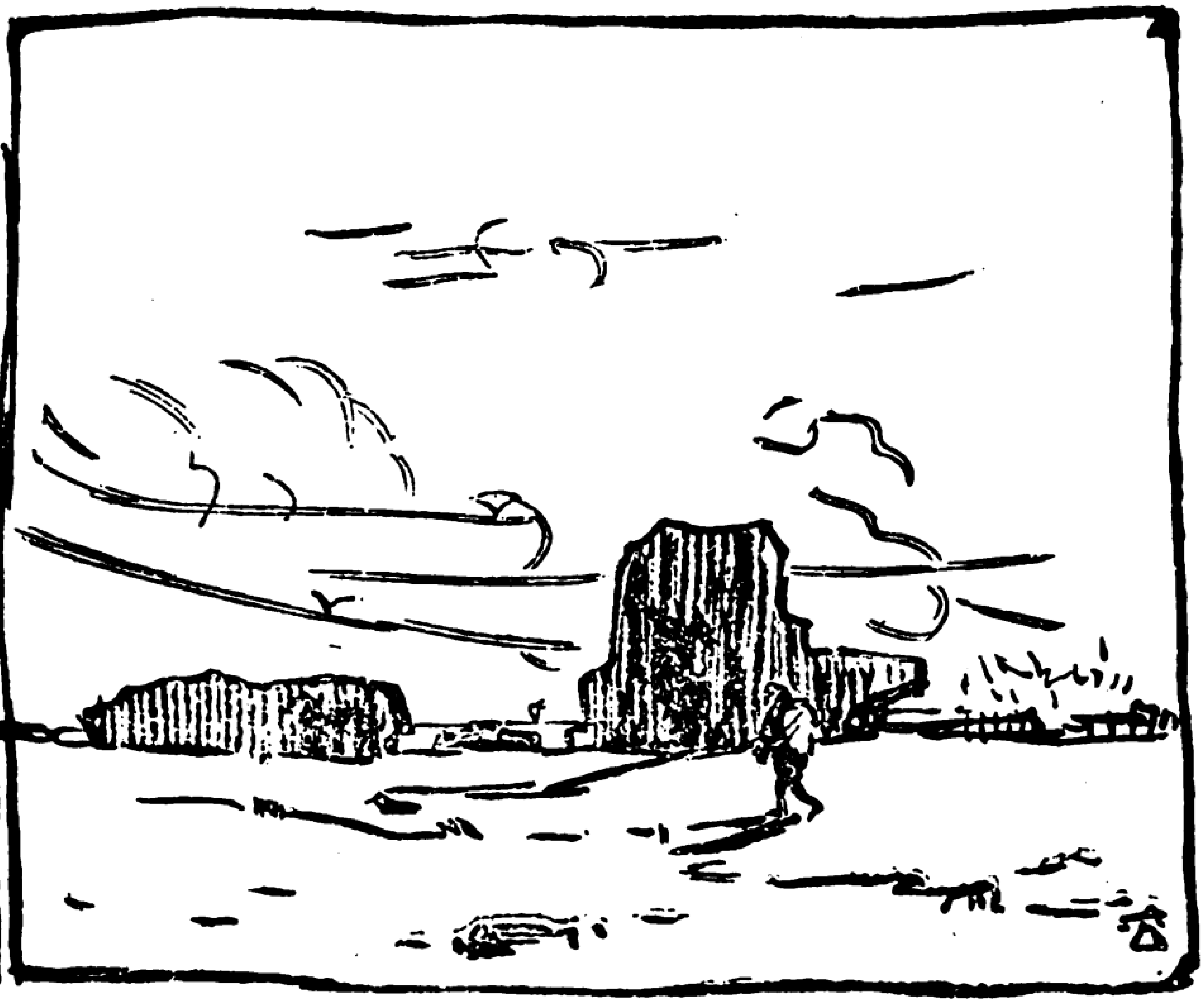
アントニオの身に取りて此の瞬間に閃めきし美人の一瞥は、如何ばかり力ありしぞ、そは恰かも、黒き小

霧の中より俄かに閃めき渡りし電光の如く、いたくも青年の心を搏てり、アントニオは鬱然として酔へるがごとく、その物凄き壘壁の址を見やりつゝ獨りとぼとぼ徊徉ひ出しぬ。

折りしもあれ町の盛り場へ夜興行に行かんとする、樂人の一群に遭ひぬ、樂人等は今しも岩窟を陰にして、何事か打騒ぎつゝありしが、アントニオは又もや好奇心に促されて彼等の仲間を訪ひ、さて、きゝたゞしぬ。

「ぬし達は、向ふの家を知つて居るだらう、一體あれは何者の住居だね」

ますだね」



一群の頭領らしき男首を此方へ曲げて答へぬ。

「アレですかね、あの家はお前様の前で申すも可笑しいですが、本統に何だか譯の判らぬ家でがすよ、近所に住んで居る人で誰も彼の家の素性を知つてるものはないでがす、だが、家内は死損ひの老爺と十八九になる娘と外に一人の下婢が居る丈けで、どうも得體の知れぬもんでがす、それで夜中になると俺共は時々彼ら家の窓から怪しい鬼火の燃へ上るのを見た事がありますでまア皆の者は、魔法を使ふ狸老爺でもあらうかと思つて

アントニオは更らに其娘に就いて聞かんとしたれど彼等は早くも若干の報酬を强請り出しぬ、渠は詮方なく幾干かの端錢を惠みて其まゝ家路へと急ぎぬ。

歸ると其まゝ机に凭つて書を讀まんとせしが、さしも一日の見聞に疲れたる腦は追懷の材料に充滿して其目は書冊の上に注ぐも、心は端なく塔のほとりにさまよひて、其なつかしげなる小窓、半開の扉、さては忘れられぬ少女の面影を髣髴して暫時は茫然たり。

（四）

翌朝彼れは塔を指して再び吟ひ行きぬ、前夜薄暗くして細かき所のよくも見へざりし塔も、今麗かなる日光もて見れば其哀れさも又一しほなりき、其壁は所々壞れ出して其間より名も知れぬ雜草の靑々と生ひ蔓こりしさま、さながら牢獄のごとくなりき、されど四邊の荒れ果たるにも似ず、此處ばかりは不思議にも淸らかなりとおもはるゝ家の一隅に窓扉の穿たれて內より白き窓幕のゆるやかにかゝりて、窓石の上には小さき盆栽の安置せられてありき。

アントニオは窓を凝視てありし時、忽ち幕は排せられて其所より凝乳に赤味さしたる樣な、而かも肥へて艶やかなる手首顯はれて其盆栽に灌水がんとするを見たり、すはやとアントニオは胸打ち噪がれながらもこの艶美なる培花者の注意を惹かんとして、わざとらしく聲立てぬ、窓幌はサッと開かれたり、アントニオの胸は痛くもうち噪ぎぬ、可憐なる少女の顏は遂に見はれたり、靑年は愕き乍らもじつと其顏見つめんとせし時窓幌は直ちに落されて戶は再び鎖しぬ、

靑年は思ひぬ、彼の女は實に深山の奧の名花なるべしと、渠は幾度か其家の前に往きつ、還りつなせしが遂に再び見ることを得ざりし、かくて長き日はいつしか暮れ果てたり。

燈は間もなく塔の窓に輝き始めぬ、其光は弱くして其色は黃色なりき、時としては煤のごとき眞黑なる煙を立てつゝ熾んなる金屬質の靑炎を吐き出しぬ、煤煙は空中に飛揚して塔の上に天幕のごとく覆ひ懸りぬ、

周圍の寂寥なるに加へて其家の不思議なる、實に昨夜樂人等の言ひしも悉く僞りにはあらじとおもはれ、いかさまこの家は不思議な魔術師の隱家なるべく、又彼の美女こそ其の老人が手練の魔術もて作り出したる一種の活ける彫像にやあらんなど過敏なるこの青年の心に感ぜられしなり。

暫くして燈光はまたもや窓口に映り來りしが、窓帷の薄紗を透かして人影の彷徨する樣映り來りぬ其姿のなよやかなるうち自から活潑の擧動あるより、そは多分、例の少女なるべしと。果然、室より六弦琴の妙なる響につれて、いみじく唄ふ少女の聲をきゝぬ、其歌は都の敗北者が住馴れたる「グレナダ」を去るに臨みて催ふせし胸中無限の感念を咏じたるものとて頗る悽惋の趣ありし曲なりき、而して其曲は青年時代の快樂を叙するに始まり、「ダロー」河畔の秋の月、「アルハン」宮の春の花、朝のさゝめき、夕のわらひ、相思の樂未だ央ならざるに哀れや運拙くして敵手に敗れ遂に朝の露と消へ去りし其悲や如何なりしといふところなりき。

聞耳立てゝほれ〴〵と眺め入りたる青年はいつしか精神恍惚として宛がら醉へるがごとくなりぬ。

（五）

斯くてアントニオは日々同じ事を繰り返して過し行くほどに、早や家人は怪しき者と見とめたりけん、其後窓は堅く閉され、美人の面影は元より、盆栽を培ふ艶けき腕も最早見ること能はずなりぬ。

只顫へながらに唄ふ少女の聲を聞くだけを、無上の慰藉として喜ぶまでとなりける。

アントニオは或夜又例のごとく窓下に佇み居たりしに、何人か足音を偸みつゝ近づき來るものあり、渠は驚きて思はず其處を飛退きつゝ密かに樣子を伺へば、西班牙風の大なる外套を被たる一人の逞まし氣なる武者が塔の下に佇みつ、携へ來れる六弦琴を奏でながら唄ひ出しぬ、其聲には一種爽やかなる響きありて抑揚も自から調ひぬ、若武者は又琴をかいなでしが其手は驚ろくべき巧妙なるものなりき。

アンドニオは愕然として其何人なるかを推察することゝ能はざりき、幽かに照せる月の光にすかし見れば、其帽を飾れる羽冠は寶玉もて鏤められたらんか、燦々として眩ゆき光を放ちたり、琴を取出さんとして脱ぎ捨てたる外套を見れば、さても其美々しさ是は如何にも由ある大貴族の若君などにやあらんと青年は俄かに恐怖つきて、若しや彼れこそ少女の戀人にはあらずやとそゞろに物の哀れを催ふし來りぬ。

青年は思ひぬ、我今彼女の歡心を買はんには彼の若武者の如く、寶玉もて其身を飾らざるべからず、其上に猶又巧妙なる樂手とならざるべからず、嗚呼我れは斯く鄙しき道化人とまで墮落せざるべからざるか、否〳〵我れは再び大に讀書せざるべからず、讀書なるかな〳〵讀書は我が心の妄念を拂ふ無上の神丹なりと。斯く決心せしものゝ彼れは考へれば考へるほどいよ〳〵自から深き物思ひの網にかゝりて苦みもがきぬ、魂も消へんばかりの美はしき少女に今や一人の競爭者の顯はれ出でたるに彼れが心は殆んど寸斷さるゝおもひなりき。

（六）

若武者の巧妙なる樂の手と其冴へたる調子の唄とにも拘はらず窓の裡よりは何の反響もあらざりき、程なく、若武者は妙なる弦を鳴らしつゝ其處を去りたり、アントニオは去るにも去り兼ね名殘惜さに堪へずして彼方を見やれば、塔の内には前に見たりし怪しの火光の又もや現はれ初めて、渦巻ける黑烟は圓き柱の如くなりて盛んに揚り、風に吹かれて横になびき、物凄き樣を現じぬ、這は例の老人の今しも妖術仕業に取かゝりしにはあらずやと。

斯く思ふ間に俄かに凄じき物音聞こへ、熾んなる火焰紅の舌を吐き、赫々たる火光の閃き渡るかと見れば、忽ち周章叫ぶ聲聞こへ、馳せ惑ふ女の影は窓に映りぬ。

何事ぞと青年は門邊に立寄りて外より聲懸けたりしも、家の内は罵り叫ぶ聲のみ高くして誰とて取合ふも

のなかりし、青年は力に任せて門を破り母屋の方へと躍り込みぬ。

　渠は小さき圓天井の一室に入りて見れば左側に階段ありそれを上りて行けば廻廊あり回廊を通りて右に行けば塔に通ぜりこゝに下婢と見へたる女ありて合掌して救を乞ひつゝあり、アントニオは今しも焰々たる炎の黒煙に交りて燃るを見たり、渠は戸を壞ちて圓天井の一室に入りぬ、室内は鎔爐を始めとして種々なる化學的の用具の裝置あり、蒸溜罐は破裂して石牀の上に横はり、燒け焦げたる燃質物は今しも燃へつゝある書籍紙片と混亂して、稀薄なる青



煙を室内に充たして一種異樣の臭氣鼻を衝く處に彼の魔術者と思ひし老人は血に染みて倒れ居たり這は蒸溜罐の破裂に依つて重傷を負ひたるなりき。

　老人は氣絶したるなり、アントニオは抱き起こして階下の一室に運び、臥床の上に横へしめぬ。流石に下婢は心確かにして周旋つとめたりしも彼の美女なる娘はほと〳〵正體なく父の傍に身を投げかけつゝ哭き慟しみ其激しき愕ろきに前後を取みだし、髮は亂れて頸より胸にうちかゝり、宛がら夜半の嵐に吹きもまれたる花の如く、アントニオの眼には一しほ可憐なりき。

アントニオが親切にして行屆ける介抱は直ちに効果ありて負傷者は息吹き返しぬ、重傷にはあれど生命にかゝるほどの事もなし、併し渠れが若し來つて救ふにあらざれば老人は金屬瓦斯の爲めに窒息せしならん。

（七）

老人は蘇生せり、アントニオの氣轉ある介抱にはやがて正直と、親切と、温厚の心あらはれて二人の女性に端なく頼母しき感念を與へぬ。別けても彼が着なせし質素なる學校の制服は、彼を此の貧家に推薦していとゞ信任を増さしめぬ。

かくて二人の女は、翌朝までの看護を渠青年に托して休憩することに協議して此室を退りぬ。

室を出づる時少女は限りなき謝意を沈默の裡に顯はせしが、其黒眼勝なる明眸は涙の露を一杯に宿して輝きつゝ青年の面を視つめぬ。

端なくも機會は來れり、今彼れはこの不思議なる家に留まる事となれり、家人は皆立去りて、此家の混雜再び元の靜穩に返りし時、靜かに己れの坐せる處を見渡せば、此處は一たび己れが戀愛の眼を投げて慕ひ望みたる彼女の室にてありき、青年の心胸は忽ちにして強く波立ちぬ。

室内の裝飾の古めかしきを見ればいづれ古し榮へし時代に建てし物ならん、舊日彼女が培へたりし花を見れば今も猶馥郁として床しき香を放てり、手琴は十字架を載せたる卓子に凭せられて其前には經文、念珠など整然として排べ置かれぬ。一室内にこもれる淸楚なる空氣は、主人の平常を想ひやられて床しく、椅子に懸けられたる二三點の衣裳は彼女が樂しき夢を護るべき臥床、彼女が柔かなる頬を埋むべき其枕の此の室内に横はるを見し時、渠は殆んど夢路に入るの思ひをなしぬ。

（八）

いふまでもなくこの老人は煉金者なり。實に寶石はこの時代に於て熱心に發見せられたるものなり、

されど迷信の深かりし當時に於ては發明家は恰も贋造金を造るもの丶如く遇せられて、動もすれば苛酷の刑に處せらる丶なれば、發明に志ある者は皆人里遠き離れ家、洞窟、墟址、さては廢寺の密室等に潜伏して人知れず試驗するを常としたるなり。

夜の次第に更け行くにつれて老人は絶へず譫言を口走れり、されど別に氣遣ふほどにもあらざりき、既にして煌々たる朝日の窓に其光を投げかけし時、美はしきイチッズは下婢を從へて嫣然として入り來れり、青年は心安らかに交代して立別れたり。



二度目に訪問せし時老人の熱は次第に減じて最早譫言も口走らずなりぬ、渠は遭難の狀況を家人より語り聞かされて少からず感謝の意を表したり、去れど青年は己れの爲せし總ての骨折は既に少女イチッズの一瞥によりて償はれたれば今この老人に感謝を受けんは無要なりき。

アントニオは其日一日煉金者の家庭にありて老人を看護しぬ。斯くて傷者は少からず其親切に感じ、アントニオも又老人の傷の癒り行くを見て太く喜びぬ。斯くするうちいつか心の隔てなくなりて竟にこの老人の素性を聞くことを得たり。

老人は學問に心を奪はれて產を治めず、思想散漫して世間の事を忘れ、唯何人も着手せざる一種の空想的研

究に浮身をやつしつゝある人なることを知りぬ。

アントニオも又空想の趣味に富みたりしかば興の來るに任せて時には天文、神學、さては奥妙なる哲學問題について熱心に老人と論じければ老人は恰もよき談し敵手を得たるを喜び、負傷の身を打忘れて臥床の上に起き上り、得意の問題に氣焔を吐くに至れり。

この老人名をヘンリックと呼び「カスチル」の古き門閥家に生れ「サルマンカ」の大學に入り哲學の妙味を感得して寢食を忘るゝまでに勉學しつゝありしが不幸にして災難にかゝりて妻を亡ひ家產を蕩盡し、終に一人娘を携へつゝ所々を遍歷し、彼處此處の圖書館に出入して古書を涉獵し又其向の學者を訪問なしつゝ煉金術の奥技を探尋しぬ、幸ひ此の「グレナダ」の圖書館には古來の貴重なる記錄今猶保存せられてあることを聞きしかば、暫らくこの地に足をとゞめて研究に從ひつゝありしなり。

老人は雨の日、風の日、何處へ行くにも其愛孃イチツズを携へざる事なかりき、されど微塵其身に厄介と思はざるのみならず而かも、其無邪氣にして笑ひ戯むるゝ一人の娘を見ては旅の身の上却つて慰藉の種となしたり。

（九）

アントニオは獨り工場に在る時、往時に受けたりし女の頰笑み、秋波を憶ひ起して、凡ての戀人が陷るべき運命に弄ばれて自惚れ、半ば夢、半ば現、或は喜び、或は窘みて其日を過せるなりき。

渠が日夕身を置く四圍の光景は、渠が情思を發動せしむるの材ならざるはなし、眼も醒むるばかりなる幽邃なる「ダロウ」の谿間に茂れる樹々の梢よりも高く、矗然として立てる一個の高塔は、冷徹なる泉水、淸冽なる瀧の流れに氣も澄み心も淸く、香り深き橘樹の茂れる「ヴエガ」の沃野を瞰下す時は身はさながら畫中のものゝ如く、「ゼチルとダロウ」の二ツの河は、平野を縫ふて銀の帶を敷くばかり。近き丘は葡萄園にて圍まれ、遠き山は雪を戴きて碧空に聳ゆ、塔のあたりを

包める大氣は、花橘の香り床しく、終日囀づる鷺鳥の聲、耳に不斷の音樂をきゝ寂しき野路に馬追ふ童べの眠氣なる唄、樹蔭に踊る少女等の奏でる絃の音のかすかに聞ゆるとも有けり、かゝる光景は感情深き青年の胸に如何に受取られしぞ、渠はおのれの弱點をもよく知り拔きたれば、時々我れと我が心を勵まし、心の裡にまとへる戀愛の網を拂ひ除けんとは力めたり。されど其の奮發心と其の覺悟とは無益なりし、彼れが、かゝる決心を爲せる時には生憎其戀人イチツズが奏でる琵琶の音、唄ふ絃音、塔の裡より、漏れ來たりて僅かに定まらんとせる渠が心を掻き擾しぬ、彼女が奏樂の技はさして優れるにはあらざりしも、戀せるアントニオの耳には天上天下また之に增したる美妙の音はあらざりしなり。實に彼女がゆるやかに聲震はしつゝ歌ふさまは、巧みなる魔術を施こすにも似たらんかし。若し一たび之を聞きなば、魂は飛むで遙か「ダロー」の堤のあたり「アルハム」の城のほとりにさまよふなるべし。

凡そ戀愛と修養とは世に兩立すべきものにあらず。

今しも戀愛の夢に遊べる渠が、煉金者の工場に入りて藥品を扱ひ、坩器を運び、朝夕、火と水との中に身を置かんとするは殃なるかな。かゝる工場の仕事は一意に心を専らにするも猶過失の多かるべきを、況してや身工場に在るも心は天外に飛びつゝあるをや。渠れ青年學生は錬金の研究につきて屢々過失を襲ねぬ、かくとも知らぬ師の老人は、圖書館より還り來りて見れば學生は其日任かせられたる仕事を誤り、狼藉たる工場の裡に太息吐きつゝあるなりき。去れども師の老人は怒りもせで、常に心は平和なりき。

老人は曰へり『人は決して一躍して成功するものではない。何事も忍耐が肝腎だ。ナニ先輩も皆さうであつた。人間が事業を企つる時には失敗もあらうし、不慮の災殃もあろう、豫期だ通りに事は運ぶものでない。是は一般の約束だ、ナニ左様に失望するとはないぞ。看玉へポンタナスは二百度も失敗して、漸やく一事を成功したではないか。フラメルは第一等の支配人にならうと思つて十六年の間憂き艱難を爲

たてはないか。バーチナーは思ふ存分修養した後、倘三年も熟考したてはないか。大器晩成とは眞理だ、だから君もそう急ぐには及ばない。が一體君がかう不慮の災殃にかゝつたのは、眼にこそ見へね皆敵の陰謀に因るのである、敵は坩堝の底にも居り又蒸溜器の中にも潜んで居る、我々が眞理を發見しやうと思ふ時に妨碍を加えるものはそれぢや、我々は兎に角俗な情を離れて此惡魔を排斥する覺悟がなくてはならんよ。」

老人の訓戒は專ら技術上の事を言ひしなれども弱點ある青年の心にはさながら針にて刺さるゝ如くに感じぬ。

錬金者の家にては毎日同樣の事を繰返せり。學生が齎らせる金貨は毎日鎔鑛爐の裡に投せられたるが、そは何時も唯だ烟筒に蒸氣を送るに止まり鎔鑛爐より吹く煙は秘術を發見する途に一歩も進めずして却つて次第に渠を貧しくするのみ。されどアントニオは一言の不平を呟やくとなしに、一片一片次第に金貨の消散し去るを看過し行けり。アントニオは日に此家の愛孃イヂッズを見るの機會に接せり。渠は彼女の一顧盻が金貨に勝り、彼女の一笑が實に一百磅に値するを感じたり。

（十）

夏の暑き夕まぐれ、涼を納れむとて、工事の閑散なる時に、青年學生は老人と與に、その昔し此邸に屬せしといふなる苑囿を散歩することあり苑囿はいたく荒涼びたれとも、倘昔かしの面影失せやらで、平庭や望樓の跡が歷々として殘り、此處彼處に大理石の壺や、四肢をもぎとられたる偶像の萋々たる雜草や淋しげに咲ける野花の中に散亂し、或は埋沒したる樣も哀れなりき。此處は老ひたる錬金者の爲めに、特に供へられたる休憩場なるべし、老人は倦み疲かれし時に、毎時も此處に來りて氣を養ひ、幻の如き理想を縦にするを常例とはなしぬ。

係くてアントニオの逍遥ひける時、老人はあまりに

この青年が緊密なる事に身を委ね、且は塔内に絶へず其身を蟄居することの健康に不利なるを恐れつ。故さらに常よりは多くの休養時間を與へぬ。老人は年少なるこの助手の非凡なる熱心と忍耐とを深く感じ、是ぞ我が技術の光を發揚すべき者なればとていたく喜びぬ。

アントニオは渇仰の念を以て、師の老人の講義を聞けり。渠か此く隨喜の念を以て講義を聽けるは、講義以外に渠の好む者ありしが故なり、そは此園苑は獨り老人の休養場たるに止らずして、又イチッズの休養場にてもありき。彼女は時々園内を逍遙して自から



其心を娯ましめたり。常に塔内に幽居せる彼女にとりては、唯一の運動場にて在りしなれ。アントニオは老人に隨行ひて其講義を聽きつ、歩行く時に、柔らかなる日光を浴びて、物思はしげに、谷間を漫歩きする彼女を見、時としては想ひかけざる邊にて顔見合はすこともありき。かゝる時にはアントニオの心胸は靖からずして、いつも波立ちけるが、イチッズも同じく心安からざるにや、頬に紅を潮しつゝ直に別かれて去るが常なりき。

一夜渠は老人と與に、例の休養をなしつ、夜の更くるも知らでありき。此夜は晝の暑

さに引代へて、涼しさ得もいはれざるに一入興深く、園苑の空氣は、床しき花の香りを籠めて滑らかなるに疲れし心も蘇生りぬ。老人はやをら休息ひ、一端に腰打ちかけて、南方の暗き大空に一點の星の光を打ち眺めつゝ、地球の特性天體の運動星の勢力、杯に就て種々なる物語をなしぬ。

かゝりしほどに月は高くさし昇りて、森の中にその光をおとしぬ。老人は尙も其講義と繼けり、アントニオは耳傾けぬ。されど其内心はむしろ他の方面に向ひ樹立少なき彼方の林中に、琵琶かきならしつ、謠ふイチッズの嬌喉に醉ひぬ。渠は黄鸝の如く嬌喉を弄する美人を偸み見むとの心しきりに動きて堪ふべからずなりしかば、空想に耽りつゝある老人を獨り殘して忍びやかに其場を去りて谷間に下り行きぬ折から琵琶の音はぴたりと止みて、他より入來りし樣の人の氣勢するを認めぬ。渠は胸うち噪ぎつゝ尙も忍びて大理石にて飾られたる小亭の傍らに寄添ひ森の陰に潜めば今しも皎々たる月は冴へ渡りて、光を其場一面に溶せぬ。さて月の光にすかし視れば、こはそもいかに、戀ひ慕へるイチッズの膝元に仇し男ぞ侍べりたり、仇し男は今しも怪し氣なる手つきにて彼女を抑へ留むる樣なりけり。ハッと呼吸のはづむを覺へし時、敵は驚きて飛び退ざりつゝ腰間の一刀引きぬきぬ。契り果てざりしイチッズは驚て己が家にと遁れ去りぬ。

（十一）

アントニオの嫉妬は絶頂に上り猜疑と恐怖との念は更に又加はりぬ渠は戀の敵手と、決闘せむともせで打しほれたるまゝ其場を立ち去りぬ。イチッズが他人を愛せるを視て、渠は如何に悲しく感じたるか。されど又渠はイチッズが婦人の體面を汚がして、不義をなししを思ひ來りては『あの顏で、とかげ喰ふのか、杜宇』とて、心から身顫ひして恐れぬ。彼れは滿身の愛を傾けつゝある親切にして且つ眞面目なる其父を想ふと同時に彼女を蔑視し、嫌忌するの情を起すを免かれざりき。

(十二)

老人は此時まで倘月を觀空想に耽けりつゝありしがアントニオの歸へり來れるを見るや、例の熱心なる口調にて呼び留めたり。

『ハヽア歸つた乎、行處へ行き居つたかと思つた。マア來たまへ、そしてこの造化が造つたこの博物書を讀み玉へ。』

アントニオは熱心なる師の爲めに此大發明をなさむとの念今や頓に挫折しぬ。渠は考へぬ。いかにあはれなる老人よ、老人の苦學は一生何の益する所かある。彼は天體の觀測に心を使役す、然れども彼は己れか幸福を害する隱謀者の身邊にあるを知らざるなり。ア、イチッズよ、汝は正直なりと想ひ居りしに、汝に予は欺かれたり、我等は何處に向つてか眞理を探らむ何處に向つてか邪氣なき平和の家を覓めむ。而して何れの婦人に向ッてか信用を措かむ。

アントニオの發したるこの言葉は眞に心の奥底より出でたる怒聲にてありき。渠は心快々として樂しまず家に還りての後も茫然として何事も手付かざりき。今は塔内の作業も廢せむと思ひ決し、且は今日迄僅かに呪にて鎮められたる戀愛の心を追い拂はんには、寧ろ此處より己が身を退くに如かじと決心したり。

渠は此家を退き去らむと決心せしものゝいつも其心堅からずして、再び枕に落ち、翌朝思ひ返しては心を新にしたり。かゝりし間に渠がイチッズを見るの機會はいよゝ少なくなりゆきぬ。彼女は最早庭園のそゞろ歩きも廢して、其室にのみ屏居たり。かくて一日珍らしくも途にて相逢ひけるに此時には以前にもまして顏赧らめ、何かものいひたげなる風情にてためらひ、暫時が程は心もだへて見えしが、更に顏赧らめ、眩しげに打ち見やりて過ぎ去りぬ。アントニオはこは必定彼女か自ら良心に責めらるゝの致す處ろならんと、直ちに其擧動によりて了解しぬ。『彼女は、如何なれば我に言葉を交はさむとせしぞ。余か秘事を知れるを恐れて言ひ譯せむとてか。余は彼女と何の關係もなきに』渠は何

中無限の煩悶を懐きたれば、そを排せむが爲めに、永久此地を立ち退かむとの決心を起しつゝ激せるまゝ獨り心に斯く叫びぬ。

(十三)

渠は此く殊勝にも決心して塔を遁れ出で、獨り異夜中頃其家に歸らむとして途を急ぎけるに、樹蔭はの暗き路の傍にて、怪しき男の摺り違ひさまに通り過ぐるを見たり。渠はその男の身の丈けの長く大きなると、其風采とによりて先夜の戀の敵手なる事を認めたり、振顧りて見送ればかの男は一意に塔を指して急ぎ行けり。此時アントニオは思へり『彼女は果して彼漢を愛するや否や今はそれを見定むべき好機會なりと斯くて渠はその若武者の後を逐ふて行きぬ。

若武者は塔に近づくに從ひて、一入四圍りに心を配りつゝ、足音偸みて窺ひ寄れり、忽ち一人ありて茂れる樹蔭の裡より身を顯はし、何事か私語き合ふ樣なりき。想ふに此は共謀人にやあらむ。今しもイチフズの室は燈明く照らして、窓帷は垂られたれども、窓扉は開かれたるまゝ、鎖さゝでありき。見る〳〵燈火は光を增し來りぬ。若武者は暫らく木の下蔭に佇みしがやがて歩を移して、塔に近寄り、此處にて連なる漢より、遠眼燈を受取り、着け居たる上衣を脫せば他の男は樹蔭より何ものをか取り出しぬ。確にそは塔に登るべき繩梯子なるべし。果然彼漢は之を壁に架け渡し、若武者は直に之を攀ち登り行くなり。アントニオ今は早や默しがたし、怒氣心頭に上り、握れる拳は石のごとく渠は塔に還らむとの念を止めて、躊躇する刹那。何事ぞ、イチッズ室より苦しき叫喚の聲を聞けり。

アントニオ驚て馳せ付くれば、此時迄階下に佇みたりし男は驚きて地上に伏しぬ。渠は此漢の手より短刀をもぎとり、急ぎ繩梯子をかけ上り、窓より闖入すれば、折しもイチッズは戀の敵手と想ひたる彼若武者に抑へられて苦しみ悶へつゝありき。斯くと見るより若武者は怒りて遠眼燈とりあげ、光明の口をアントニオにさしむけつ、腰なる劍を拔て無二無三に切り駈かり

ぬ、此方は闇を負ふて立てる敵を燈明に透かしつゝ身をかはして切り結ぶ爭闘は激しく續きぬ。不運なるはアントニオなり、渠は全身に燈明を浴びせ掛けられたれば、働らきを爲すに不利なるのみか、己れが持てるは僅かなる短劍にて敵の持てるは鋭利なる長劍なれば勢ひ叶はず、敵は無二無三と衝き入る此方は辛く防ぐのみ、さればこの場合敵と組み合ひて其劍を奪ふに非ずは、己の身を救ふ方便なきを見て、縦横無盡に身を轉し、軈がて運よく短刀もて敵の身上に大打撃を加へたりと思ふ時反響は敵の刄より來りて一大痛撃を蒙り哀はれや渠は朱に染みて床上に仆れぬ、其後の事は如何になりけん、人事不省に陷りし事とて知るよしなかりき。



（十四）

時しもイチッズの叫喚に、驚かされたる父と下婢とは等しく此室に驅け來り見れば、こはいかにアントニオは、氣絶して血に染み居たり、こは底事ぞと二人は驚き呆れて、手のつけ様もなかりしが、兎も角もとて介抱して別室に運びぬ、此際老人は種々の事を識れるが中にも、外科術の心得淺からざりしかば、直に手當をなし、先づ其の傷口より出血をと

ゃめ、繃帯をなしたりしが、仔細に點檢すれば、想ひし程の深痍にも非ざりしかば、身命に別條はなかるべしとて聊か安堵の思をなしぬ。

老人はこの手負へる學生を視ると宛がら我子の如く常に父たる愛情を以て渠れが身をおもひやりぬ、老人は自己の爲め、はた其娘の爲め、アントニオに對して救命の恩を擔へり。されば渠は此恩人たり且秀才たる有望の化學者を失ふに至るべきかをいたく悲しみたりき。

學生の傷痍が治せしは、十分なる介抱の故とは知られたれども、分けても之を平癒せしに與りて力ありしは、イチッズの容姿と、彼女がいひ交はす言葉の中に含める鎮痛劑にてありき。彼女は其身の微傷だも負はざりしを太く喜び這は專ら渠の賜なりとなしつゝ「命の親」として渠を呼べり。

されど是にも増して渠の回復を助けたるは、渠が誤想して獣の敵となせし、かの若武者に關せる彼女の說明なりき。抑もこの事の次第をいへばかの若武者が始めて彼女を見たるは或る寺院に於ての事にて、そは既に久しき前の事なりとか渠は其後種々に自からも心を勞しつ、且つ彼女を苦しめたるとも一方ならざりき。彼女が散歩すれば、何時も渠は來りて彼女に遇れり。故に彼女は父と共ならでは一歩も外出するとを得せずなりて、はては空しく其家に幽居するの餘儀なきに到れり。かくて彼女が外出せざるに至りしかば、或は艶書もて、或は奏樂もて、或は其他有ゆる手段をもて、其情を挑發せむと試みたり。

されど前きの夜、園中にて起りしとの如きは、アントニオは元より彼女も亦意外として駭きたる事なりしとぞ。さてもかの迫害者は何處にてか、唄ふ彼女の聲をきゝけむ。破れかゝりし塀を排して入り來り、直に彼女を掩抑して、聞くも汚らはしきとをかき口說きしとぞ、彼女はあまりの腹立たしさに振り放たむとあせりしも、纖弱き女の手に餘り、苦しみ悶へ居たりしに恰かもよし學生の出現に、危ふき處を助かり彼女をして逃れ得せしめき。去れど彼女は渠が殺さむ迄も、か

ゝるとをば決して父に告げ、又學生に知らしめて、無益に心を勞せしめざらむと、さては誰にも語らざりきとなり。

アントニオはいへり、然らば御身はその戀慕者の名を知り玉ふかと、彼女はいへり、渠が名はドン、アムプロシオといふものなりと語りき。

アントニオは夙に其漢が、グレナダ市中に於て陰險邪惡なる無頼漢なるを聞き居たり。渠がきゝ知れる所によれば、かの漢は邪行を爲すに最も巧にして、又最もよくそれに成功し、其情は烈しく執念くして、思慮分別もなく、其情を縦まゝにし人を戕ふこと多し、渠はこれをきゝていたく當時の立場の危險なりしを憶ひ慄然として恐れたり。

されど敵も隨分痛手を負ひたるらし。碧血は小森の中に濺がれて縄梯子より、みち／＼程遠くまで傳はり居たり。

（十五）

學生は其傷痍も既に癒えて、今はイチッズと共に日々會談するに至れり。彼等が日常會談する室は、前朝時代の客室と覺しく、床は一面に大理石をしきつめ、四壁は處々花氈の斷片を以て掩はれ、美麗に彫刻せられたる椅子は、歳と共に古びて、今は光澤も失せ去り、處々裂けたる錦襴の打ちかけられたり、壁に對して置かれたる、細長き劍は塵埃をかぶりたれど、猶祖先の武士氣質の面影を留めし唯一の紀念なるべし、失敗によりて隱遁したる一ト風變れ哲學者は、此凄涼なる墟址に住ふを以て中々に嬉しき事と思へり。さあれ天の成せるイチッズの麗質に至つては、此荒廢せる邸宅をして一段壯麗に見せしむる装飾にて在りしなり。

學生にとりては今程心樂しき時はあらざりき。イチッズも最早内氣に顔のみ赧めては居ずなりぬ。彼女は曩きに無體の戀慕者より迫害せられて、一時は人を見て猥りに疑ひ警戒めもしたれ。今その人の恩に感じては横溢し來れる感謝の波に漂はされて、其人の眞率と

德望とを深く信じ、渠に會ふ每に其眼は自から情の念を表して輝きぬ。さればアントニオの胸中今はいよ々々其思の遂せむことをのみ望めり。

（十六）

邸内にて日々會ひ見るも、アントニオは眼もて言はすの外、いまだ切なる情を口づから訴ふるの機には接せざりしなり。アントニオの心と錬金者の心とは自から異なれり、錬金者はアントニオも亦己の如く熱心に身を錬金術に委ぬる者と想ひければ、傷の回復するに及びては、其無聊を慰さめむとて、特に此術に關して長き談話を爲し、曾て渠が火焰の中より取り出したる半は燒け損じたる幾干かの書籍など持ち來りて、種々の章句を讀みきかせつゝ今日之を保存することを得たるは皆御身の德なりとして謝し且つ錬金の爲めに力を盡したるフラメルの大事業を說き錬金の秘技に關せる深奥なる理論を話し聞かせぬ。

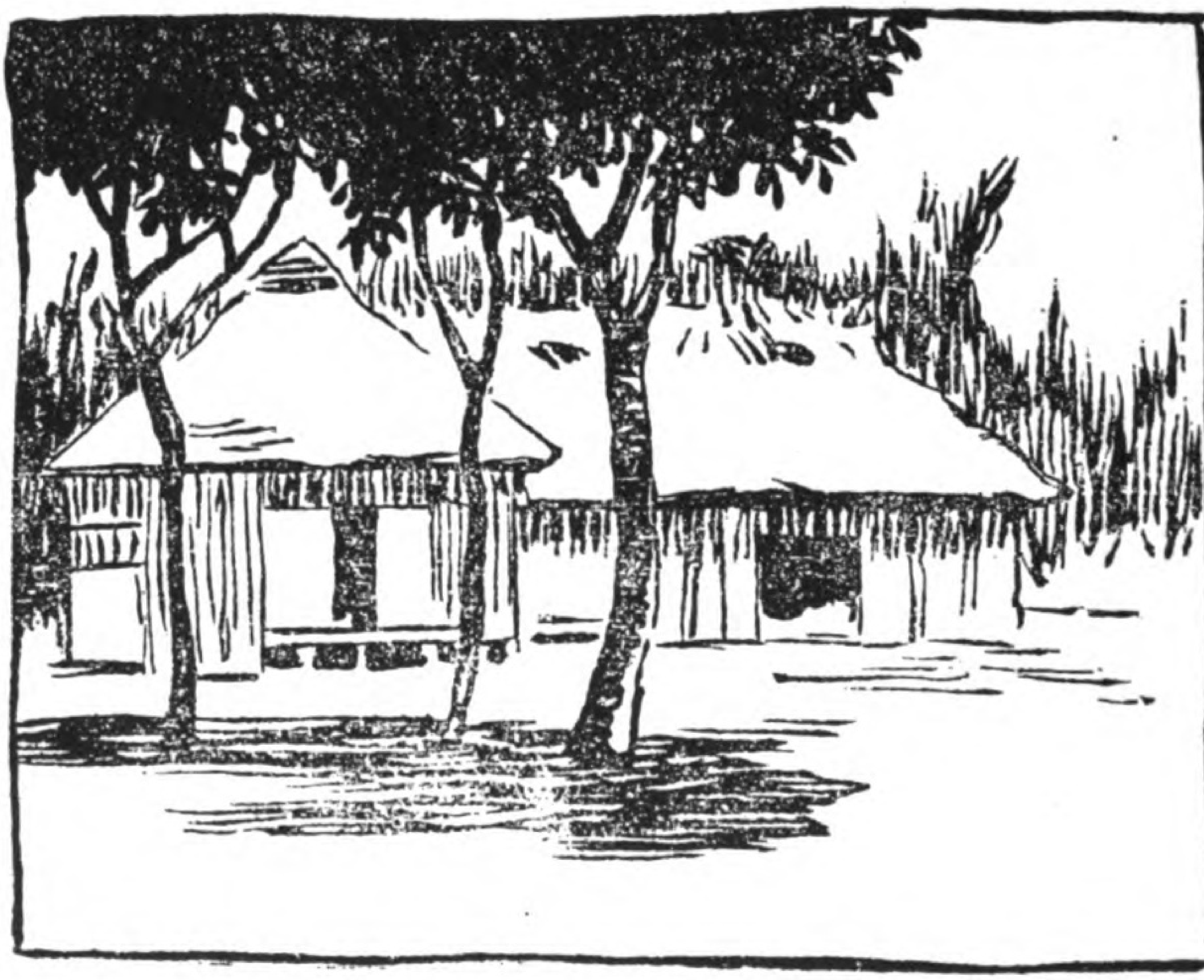
渠は老人の談話を喜び聞くと同時に美はしきイチッズのことを思ひ續けぬ。

やう〳〵物の哀を知りそめしばかりなるイチッズも、我家に寄宿する學生を見ること嬉しく、日ましに燃えゆく樂しき心の焰に燒かれつゝ、はては深き物思ひの淵に沈みぬ。何の故もなきに愛らしき兩頰の邊りにさす紅の潮さては壓付たる如き吐息、いづれ心に悩みあればなるべし。彼女が唄へる謠歌は、前日と變らねど、其の節は前にもまして一入物の哀れを感ずる樣なりき。

アントニオは科學を好める外に、又いたく音樂をも好めり。さればイチッズが唄ふ時には共に和して歌ひぬ。渠が聲の昂れる時は烈火の如く、緩かなる時は咽へる泉の如なりき。もし渠が唄ふ時に方り、彼女が之に對して無限の嬌媚を呈するを觀る時は若き男は若き女の耳元に己が情を愬へつゝありとや見む。又安樂椅子に凭りて半は身を傾ふけ、同じ樂譜の書を覗きて打ち誦し聲を合して歌ふ時は日耳曼の輪環二人舞蹈もこれには若かじとぞ思はれけり。

（十七）

物外に超然たる錬金者は、二人の間に生ぜる秘密の關係を知らざりき抑も老人の心は我が多年の宿望たる大發明に關係なき他の事は、一事をも考ふるの餘裕なき人なり、されば、年少なる我が助手も亦己れと等しく發明に全身を投じたるものとのみ想ひ詰めたるなり渠の老人は戀を知るの點に於ては恰も小兒と同樣なりき勿論渠といへどもむかし一度は戀愛の經驗なきにはあらざりき。されど今は其心枯木のごとく世に戀愛の如き痴戯の存することを全く忘れ果てたるなり。斯くて渠は何事も知らで打過ぐる間に、二人の間には相思ふの情通じて、いよ〳〵深くなり行きぬ閑靜にして幽邃なる此境は、如何に此痴情を發達せしむるに與りて力ありけん戀愛の嫩芽は、暴き妬風にも遭はずして次第に生ひ茂りぬ。二人の間の戀情は、他人の忠告や嘲笑の爲めに冷むるものにあらざりき。



かくて二人の情は、相纏綿して離れず、心は心と互に相倚り相信じぬ。かくて渠等は大膽にも幾百尋の深さも測り知られぬ水の上に、暗礁の亂れ立つとも心付かで、戀の潮流に身を投せしなり。

嗚呼これ、果して幸か、將た不幸か神ならぬ身の知

るよしもなし。

（十八）

程經てアントニオの健康は、「グレナダ」に行くも差支なき迄に快癒したり。されど渠は己れの去りたる後、防禦の備なき此家に、如何なる不虞の事あらんも計り難しとて塔を去ると心安からず思ひぬ。渠は實にアンプロウシアが傷痍の癒えて再擧を計るべきを恐れたり。是れ渠が以前聞ける所より考へ合して、アンプロシオの性質として、失敗の辱を雪がずして止む者には非らず。若し其手段を過まり、目的を遂げずして、其儘に打ち過ぎんには、彼は執拗く、猛く且つ大膽な。性質の漢にて、必らず何時か復讐を企つべきを知りたればなり。扨てアントニオは錬金者と其娘に己れが思ふところを語れり、此危難を避けむ爲には「グレナダ」の近傍を立ち去るの頗る安全なるべきを慫慂めたり渠はいへり。

「ヴアレンチアの村は貧乏には相違ないが、人の心迄貧乏ではない、私の親戚の者があります、茲處で私が何程善いと申しても、信用もされますまいが、行つて御覧になれば判ります。ハイ決して後悔なさるやうな事はありません。其處へ行きますと人夫も幾干か使役ふことが出來ますから、何角につけて便利です」

渠か國自慢の心は未來の樂土として、田野の光景、葡萄園の有様の美しさ抔口を極めて賞揚し、其他の美景を説きたれば渠か雄辯はイチッズの身の上を感る老人の心を動かし得て、竟にアントニオの健康の回復するを待ちて、住馴れし塔を立退き、「ヴアレンチア」に移らんと一決しぬ。

斯くてアントニオは工場の作事を廢め、「グレナダ」附近の小河に別れを告げむものと、出發前に五六日を費やしぬ。渠は小山の邊を漫歩きして新鮮なる空氣を吸ひ、健康と勇氣とを回復したるを感じぬイチッズは渠が散策せる時には、しば〳〵其伴侶となりて隨ひたりき。母方の血筋によりて古代の「ムール」人の血縁

をひける彼女は物に對して温和なる趣味を感じぬ。彼女はあたゝかき情をもて寂しき墓碑を眺めつ、「ムール」人の傳說史歌の記臆もて其胸を充たしぬ。彼女がこれまで送りし幽しき屛居と其父の幻想的なるとは、近頃に至り、彼女の性格の上に影響して、今は何ともいひ得ぬ心の樂しさを感じけるが、此の樂しさは新に人の情を知りてより、いよ〳〵ふかくなりまさりぬ。思ふにこは戀の初峯入とかいふものなるべし。

（十九）

少年少女は相拉へて或る日「ゼタラリツフ」の離宮の建てる太陽山に上りぬ。時は既に黄昏なりき離宮はむかし「ムール」全盛の時代に建てられし遊戯の場所なりしが幾星霜の榮枯の跡は今いぶせき「キアプシーン」教徒の癈寺と化し去りぬ。彼等は上りて閣内に進み入り、橙や、橘や、蜜柑や、佛手柑の暗き迄に茂れる中を逍遙へば、此處には清冽水迸りて瀧をなし、きらめく泉は水晶のごとく、新鮮なる空氣は松籟となりて快よき樂を奏せり。二人は暫らく其美に見惚れてありしが、感慨あまりて坐に物悲しきを覺へたり、



そもこの遺跡といふはその昔し霓裳羽衣の三千の後宮に侍册かれたる、グレナダの女王が最も愛で給ひたる離宮にして、千萬の花さける薔薇もて造りし凉亭

の中にて女王の不德を讒訴し榮へに榮へし「アベセンレーヂ」の系統に最後のとゞめを刺したりし、讒者の出でし處にてありき。

園は一面に荒果て、泉の所は水枯れぬ。堤は破れ、水は大理石の堤を洩れて、今雜草に堰き止められし風情廢寺の鐘は無常の響をきかせ、睡た氣なる和讃の聲のみ耳にひゞきぬ。

アントニオは此廢園を去らんとする時、始めて勇氣を鼓しこれまで久しく包みたる切なる情をその戀人に告ぬ。イチッズは俯視して渠の言葉を聞きけるが、その双眼には、濕へる輝きありき。かくて渠は彼女の初々しき微笑と嬌羞との中に、温しき心を運ぶべき承認をば得たるなりき。

彼等は幸多き二人の外、未だ誰も解し得ざる心の樂しさに醉ふて、園中を逍遙したるが、彼等の四圍は總て現在の世にあらぬ一の仙境なりき。

（二十）

時しもあれ歌舞伎女の一群は、園内の樹立の蔭にて二人の愛人が彈せる琴の音に和して踊舞しぬ。その舞踏はなか〳〵に華やかなるものにて一しほ興味深かりき。

踊舞の終れる時、二人の樂手はイチッズとアントニオの傍ら近く來り、一人が鼓弓を弄くにつれて、やさしき「ムール」の俗謠を唄ひぬ。これをきけるイチッズは坐ろに物悲しく、涙は双眼に銜き溢れぬ。一人の唄女はいよ〳〵イチッズに近傍れり。イチッズはその容姿を覩るに美しき黑き瞳をは〳〵せる顏憂色を帶べる若き美人なりき。唄女は物悲しげに、何か語らまほしき風情にてイチッズを瞻つめてありしが、イチッズは此時別に心にも留めざりき。

アントニオは此時樹蔭の暗がりに、密にさゝやき合へる一團の人あるに氣付きたり。一團の人は皆廣やかなる帽子を戴き、西班牙風の大なる衣服をかつぎ我等兩人に眼を注けつゝありし、されど兩人は元より何人とも知る由なかりき。然るに渠が小山を下りて楡の林

を過ぐる時、又もや一團の人の我等に跟き來るを見たり、渠は疑ひて懼れたり、されど徒らに恐怖の念を起さしめむを恐れて、イヂッズには此事を語らざりき。かくして渠は唯獨り此塔内に住ふ頼み少なき人に向つて、企つる陰謀を如何にせば打破るべきかに就て、心私かに憂ひぬ。

渠は胸に憂のかず〳〵を疉みつ、夜更に別れを告げて立ち出て、古壘をこゆれば、何者にや塀の蔭にかくれて、我が擧動を窺ふものあるを見ぬ。さては胡亂の奴と影を追ふて足を速むれば、忽ち消へて廢址の裡に身を隱くしぬ。暫らくして程遠からぬ邊りに低語の聲きこえぬ。渠は此時既に身にふりかゝる危難の足下に起れるを覺りしかば急ぎ塔に引き返して一家の人々を守護せんと決心せしが、此時遲く、渠は大力の男に後背よりむんづと抱き付かれぬ。驚きて振り放さむともがけば、堅固に身を固ためる數多の者共現はれ來りて渠を取り圍み、頭より布のやうなものを被ぶせて猿轡を箝められ電光石火の間に何處ともなく運び去られぬ。

錬金者の家にては終日アントニオの影も見ず。翌日も又その翌日も、何の消息もあらざりしかば、こゝに至りてイヂッズは前日、小山の上にて危難を諷したる唄女の擧動の怪しかりしを憶い起しつ、坐ろに驚き恐れて、測り知られぬ憂慮に其心胸を塞ぎぬ、階前の風聲、戸外の微音皆悉く懼れを增すの材料ならぬはなし彼女は心寂しきまゝに琵琶をとり出して、掻き鳴らさむとせしが、それさへ得せず、胸裡には疑惑の波瀾立ち騒げり。彼女は是まで獨り家に在るもさまで物淋しさを感せざりしに今は堪へ難き淋しさと悲しみとを覺へぬ。

老人も亦其娘と等しくアントニオの失踪にいたく心を病ましぬ。

（二十一）

老人は默想につゝまれつ、凄涼しき一夜眠りもせでありき。夜はいたく闌けぬ、時しも誰やらむ背後の戸

を明け放しぬ老人は驚ろき見ればいとも荒々しき錆聲なり、老人は愕然として驚き惑る間もあらせず、はや既に雙の腕をとられぬ。振向き見れば雲突ばかりの漢三人、這は何事ぞと聲暴らかに罵れば面憎くし、渠等惡漢は老人を尻眼にかけて嘲笑ひぬ。

『神妙にしろ老耄奴どたばた騒ぐと身の爲めにならぬぞ。オイ皆の者引き立てゝ仕舞へ』

イチッズは獨り悲しく物淋しき宵の間を過ごして庭に面せる窓に凭りそひ、深碧の空に輝ける星を打眺め涙せきあゑぬまでに情人の身上を案じ、胸一杯憂愁の雲に閉されぬ。此時彼女は遠き彼方より、邸をさして近寄ると覺しき人の叫の聲、物の響あるに心づきしが咄嗟といふ間もあらせずまたも數人の者、足音荒々しく闖入しぬ、今は魂も消えなむばかり怖れて戰慄ぎ居たりしに、下婢は喘ぎ〳〵此室に轉ろげ入り、父が武裝せる一群の人に捕はれ去りしことを戰へながらに告げぬ。

イチッズは聞より早く父を取り戻さむとて、階段を飛び下れば一群の者共闖を踰へて入り來る、彼女は怒れる眼に彼等を睨みつ、

『退け!、退け!、邪魔するな。父上を何處へ伴れて行つた返せ。』

中の一人は丁寧に言へり。

『仰やるまでもありません。我儕は貴女を父上の許へ案内しようとて參りました』

『父上は何處に居らつしやるか』

『今グレナダにお在です、不意の事が起りまして、父上を彼處へ御留め申さねばならぬことゝなりました。が決して御心配なさいますな、御友人と御一緒で御座いますから』

『グレナダには一人も友人はない筈』イチッズは此く言ひ放ちたるが、乍にしてアントニオの其處に在るべきを想ひ起しつ、もし渠が何事か所要ありて父上を呼び迎へしにはあらざるかと思ひ亂れて、彼女は問ひぬ。

『それではアシトニオ、デ、カストロ様も御一緒か

い」

「エ、御一緒です、さア参りませう、」

「それでは兎も角も行かう」

欺かるゝとは知らずして彼女は行きぬ。其處には一頭の驢馬ありて、疾くより彼女を待てり。一行は否むらしめ、徐々市を指しき行きぬ。

グレナダは此夜、市民挙つて奇しき牛飲馬食の會を催ふすの習慣にして、古代武士の雄々しき風を長へに維持せむとて、貴族は集ひて種々の可笑しき戯を催ふすなり、市中の廣場には擬戦の遊戯あり、町々には騒がしき若者等が、打ち鳴らす太鼓の音、喇叭の響、絶々に聞えぬ。市民は嚴そかに古代騎馬武者の装をなし、許多の郎等從者を從へてそこ等を練り歩ぬ、イチッズの警護者は人々に心付かれむことを恐れてか成可く群集の居らざる處ろを擇びて行きぬ程なく彼等は聲張り上て唄うたひつゝ練り行く一隊の樂人を避け得で、その行途を避ざられぬ。此時群衆の一人が高くさし上げたる炬火の光明に照らされしかば、驢馬に乗りたる美人の姿は、髮の後れ毛風に戦きて吹きかゝり、いひ知れぬ心の悩みは群集の人に讀まれたり。

群衆の中より唄うたふ一人の女は、イチッズの傍り近く進み寄りて一入急はしく鼓弓かき鳴らし、不吉の出來事眼の前に迫まれる由を歌にて諷じぬ。此はイチ



ツズが前の夜、「ゼヂラツサフ」の園中にて或る唄女が歌ひしものと、節も調も意味も同じきものなりければ、彼女はいよ〳〵危難の來るべきを察し、いたく心に驚きぬ。

須臾にして一行は大なる邸宅の門前に至りて駐まれり。從者の音訪へる聲に、門は内より開きぬ。彼等は一面に石を敷き詰めたる庭に入れり。イヂツズは心落付かずして問ひぬ。

「何處へ行くのかね」

「御友達の家は、此階梯を上りますると、直に父様に御眼通りが出來ます。サア御昇りなさい、御案内致しませう」

彼等は壯麗なる高殿の階梯を上り、幾室かを通り過ぎて、いと奥まりたる一室に進み入りぬ。戸は内より開て人は近きぬ。イヂツズは愕然としぬ。それも理りなり、近けるはなつかしき父と思ひの外、久しく厭ひに厭ひたりしドン、アムブロシオ即ち過日我れを脅かせし惡漢にてありしかば。

（二十二）

錬金者を捕へし惡人等は、いふまでもなくアムブロシオの股肱にてありき。錬金者は捕へらるゝと共に直に恐ろしき牢獄の裡に投げ込まれぬ。牢獄はいふまでもなく、人の快樂を滅却し人の希望を塞ぐ構造にて未來にありといふなる惡鬼の隱宅、地獄の底にも等しき恐るべき建物にてありき。

老人は幾夜眠りもせで物思ひに暮れて悲しみけるが、何時しか疲れて眠りぬ渠が夢は何處に漂ふやらむ恐らくは渠を工場に運びて再び蒸溜器や坩堝の間に立たせ、身を役しつゝありと想はしむるなるべし。錬金の企計はいよ〳〵熟し、熱せる火は貴きエリキシルとなりて管より吹き上げつゝ鎔鑛爐より捲き上ぐると想はしむるなるべし。されど渠は其獲物を攫まむとする前、その樂しき夢よりさめ果て、其身は果なく牢獄に繋かれ居るを見出すなるべし。

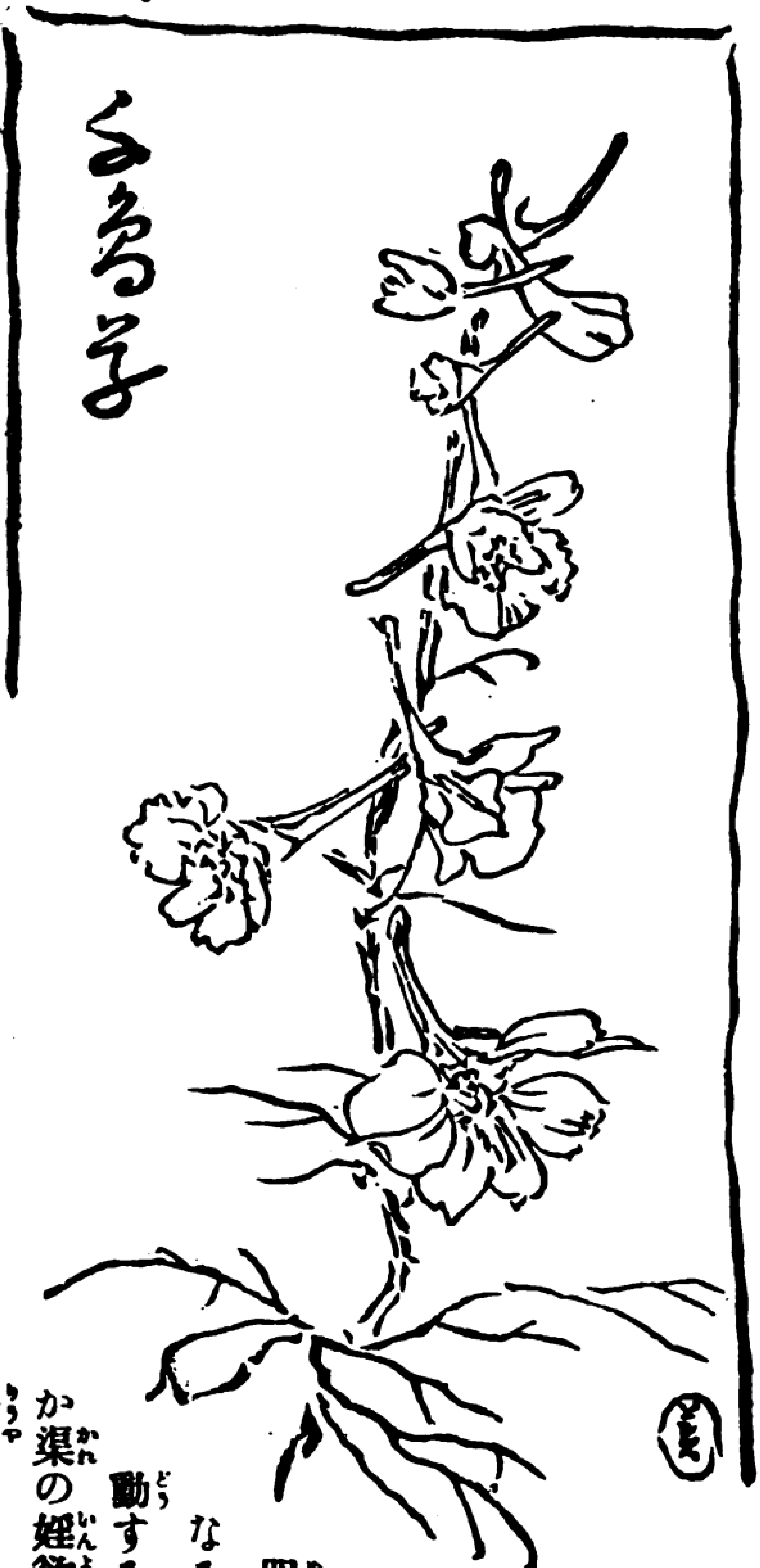
糺問者は巧なる糺問の術計を施こしつゝ老人をつりこ

みぬ、老人は錬金に托して魔術を行ひし事、禁制を破りて星を占ひし事、などを罪に問はれたり。渠が平素その寂寥なる塔内に住ひて世間と交通せざりしはいつれか善からぬ企てを爲したるものとして論告せられたり。

（二十三）

イヂッズの父は魔法使ひ、邪神論者といふ罪名の下に捕縛せられて、暗澹たる牢獄に投せられ、厳しき糺問を受くる事とはなりぬ、其の間に愛女イヂッズも又驚くべき迫害に身を曝されたり、彼女を囚へし、アムブロシオは「グレナダ」の市中に於て最も慓悍なる無頼者にてありき。渠が猛烈なる情慾は雲深き殿上より、賤が伏家に至るまで、手を伸ばし擴げて色を漁りぬ。渠が夜な／＼奏づる樂は「グイナダ」市氏の耳を如何に驚かしけるよ。

イヂッズが蒼ざめたる頰寶玉のごとく輝ける内に、憂愁を含める眼、さては質素なる胸當の下に鼓動する心臟。いづれか渠の淫慾を滿すべき材料たらざるべき。



渠はこれまであまり易々と勝利を得たるに倦みき。渠は今まで絶へず榮華の夢を貪ぼりぬ。去れどイヂッズをして我意に從はしめむ迄には、尙幾何の困難を嘗めずばあるべからず。

イチッズが渠に會ひたる時、渠は彼女を驚かさんとを氣遣ひて、極めて鄭重に接しぬ。渠は今網に罹かりし鳥を獲むには、餘りは謹愼の態度なりき。渠はイチッズの訊問に對して、穩やかに説明し、且ついふ樣、父上は今所用ありて不在なり、程なく歸り來たまふ可ければ、暫らく待ち玉ふべしといひ。溫和なる禮容もて挨拶しその塲を立ち去りぬ。

イチッズは今や悶絕せり。ドン、アムブロシオが禮儀ある會見は、意外にも彼女の唇頭を衝き破らむとせし詰問をせき止めたり。彼女は迷へり。若し渠にして我身に危害を加ふる者ならんには、斯の如く寛大なる扱いをばなすまじ。されどもアントニオの踪跡の不思議に判らずなり行きしも、或は渠の仕業には非ざるかかく思ひの紊れたる際、一條の疑問は乍ち其胸に閃めきぬ。アントニオは二度ひドン、アムブロシオと遭遇して決闘し、負傷して死に瀕せるにはあらざるか。父の行きしといへるも其處にはあらざるか。我身がかく此に囚はれしは、アムブロシオがアレトニオの要求を容れて、生死の際に其心を安めむとしたるにはあらざるか。」など彼女は千々に思ひ亂れぬ。

イチッズは其夜終宵、取とめもなく、怖ろしきおもひに明かしぬ。嗚呼如何にせん、逃れんか。將た留まらんか。那邊を目的に父を尋ぬべきか。嗚呼如何にすべき一夜明け離れて、渠女の心の憂慮はいよ〱增さり行きぬ。時しも父の許より使者來りて、急用あれば早く來れとの事なりき。

心熱し胸轟ける彼女は、急き警護者に護られて出發しぬ。可憐や彼女は欺かれしなり、抑も惡漢等は久しく彼女をグレナダの邸に置く時は、人に知らるゝに至らむことを恐れたるなり。彼女は「グレナダ」を距る二里ばかりある近山の寂しき別墅に運び去られたるなり。彼女は此別墅に來りて、父やある、アントニオやあると尋ね見たれども、二人は更らにあらざるのみか見慣れぬ顏のみ其眼に映りぬ。

（二十四）

彼女が到着する間もなく、ドン、アムブロシオは出て、面會せり。渠が擧動は鄭重を欠きたれど、尙盡くせる限りの懇切と保護とを盡くす樣なりき。されどイネッズの憤は解けざりき。

ドン、アムブロシオは頗る當惑の面地にて、幾度か言はむとして躊躇へる後、

『貴女は今私の情の主宰者です貴女に對しては指一ッさす者もありません私は貴女に對して胸の中に煮え返るやうなものがあります、併し私は決して不躾な事は致しません、又お嫌ならば止むを得ませむから御眼に懸からないやうにしませうが苟且にも貴女に疑はれてこの儘に御別れするのは如何ばかりつらい事でせう、私にとりては死よりも辛いです。私は決して惡い者ではありません。隨分情もつよく、親



切もある者です」

イヂッズは己れの身の上を思ひ、父の身の上を思ひ、心は兩端に分れて憂き思に沈みたりしが、先刻父が安全なりしといへる保證を得て、まづ一方の安心を得、さて今は己れが身の如何になり行くべきかに心を痛めぬ去れどアムブロシオは彼女をして成るべく恐怖を懐かしめざらんとて、巧に其機嫌をとりぬ。彼女は今自から囚人たるを覺りたれども、援の來るべき機會とては見へざりき。彼女は唯徒らにアムブロシオが、時經なば己が希望の邪まなるを自覺して、家に送り還すに至るべしと憑みがたきとを憑みて獨り自から心を慰さめぬ。

（二十五）

ドン、アムブロシオは實に巧妙なる誘惑の企計者にてありき。此屋は人をして恍惚たらしむるまでに快よき空氣を以て充されぬ。渠が時々身を潛めて快樂を縱にするは、實に此の香ばしき柑橘の森に埋もれたる、薄暗き客室、朦朧げなる密室の裡にあればなり。

室房は何れも華美なる上に、人の心を醉はしむべき樣に設けられぬ。絹製の床はふつくりとして敷き心よく、指もて輕く押せば直に陷ち凹みぬ。壁上に掛けられたる繪畫肖像は、皆戀愛の昔物語をなすものに非ざるはなかりき、蓋し人の心を蕩かし、情をいどみ激まさむ爲めに作られたる詭計なることいふまでもなし。此中には眉目秀麗なるアドニスが獵を罷めて花冠を戴ける天女と相擁して恍惚たる樣の圖なり。縹渺たるシヽリア海を見渡たせる物蔭に、アンズカがガラチアンに媚びつゝあるの圖あり。或は夏の夕、涼しき阿屋に打ち臥して清亮なる笛の音に耳傾ふけつ、馴鹿と遊べる山林の女神の圖あり。或は好色を形どれる半人半獸の怪しき神が、山林女神の晝寐の夢を驚かすの圖あり。又古事を印せる毛氈には、月夜を忍びてディアナが今正に眠りに落ちんとしつゝあるエンデイミオンに接吻せむとする圖あり。粧飾に用ひたる大理石にはキユピッドとサイクとが接吻せるの圖ありけり。

強き日光も此の床しき家にはさし入らず。唯見へざる物蔭にて樂手が奏でる、節おもしろき音樂は、滿園に笑へる花より發する暗香を誘ひて浮動し、夜に入りてさやかに照り渡る月光、相思の樂は戶外の亭より起り、澄みたるドン、アムブロシオの唱和せる聲は一しほ際立ちて聞こえ。又限りなき戀人の切なる情を吹き込める笛の音に、山の彼方よりほのかに聞へぬ。



禁錮せられたる彼女の無聊を慰さめ、憂鬱を散せしめむとて、種々の遊興は企てられたり。「アンダルシア」の舞妓の一群は、華麗やかなる客室にて種々の國風を踊り、時には琴に和して、炎ゆる如き情思のたけを、聲震るはせつゝ唄へるもありき。四園の狀境は斯して彼女の心を蕩かし紊さんとぞなしぬ。されどイ子ッズはかゝる謀計に乘らざるのみか、深くそれを蔑しみつ、却つて久しく棲みなれたる我が平和の家庭を思ひて、悲哀やる方なく、涙せきあへざりき。間々音樂の魔術に慰められたるが如く、心恍惚として見ゆる時あるも、此は心の落

付き居るにはあらで、アントニオの事を思ひ居るなりき。去ればドン、アムブロシオが此心落ち付けるが如き機に乘じて、其情念を私語むとせば、彼女は忽ち夢の覺めたる如く、戰慄して狂ひ廻はりたりき。

（二十六）

イチッズは悲しさに得堪へで、永き一日を經過しけるが、夜に入りて舞妓の一群は、盛んに打興じて吹奏舞蹈しぬ、こはこの幽棲の佳人を慰めん爲めにとて連れ來りしものにぞある、彼等が客室の高き天井に反響せる吹奏の音と、大理石の床板を蹴だてゝ輕々と舞ふ舞蹈の響とは相應じて興は起れり。されど、可憐なるイチッズは凭かゝりし絹の蓐に顏を埋めて、妙へなる音聲も却つてうるさしと耳を塞ぎぬ、かゝりし間に端なくもそこに、以前聞き覺へたりし人の聲するに心付きけり。彼女は遽かに顏を擧げつ、客間の下端に舞蹈せる一列を眺めやれば、中より一人列を離れて、我が前に進み來れる者あり、こは身に牧人の假裝をなしてありしが、見れば疑ひもなく、曩に二度までイチッズの通路を遮ぎりて、我れに危難のある事を知らせ呉れたる唄女にてありけり。やがて曲罷みし時、その唄女は鼓を高くさし上げて鼓ち、これに和して踊りつゝ次第に進み入りて蓐に凭れるイチッズの側りに近づき、一聲高く鼓うつ機に、手早く一葉の紙片を投げ與へぬ、さてはとイチッズは直に受け取りてこれを懷中しぬ。程なく歌舞も終はりて人は悉く立ち去りぬ。後にて件の紙片を披き見れば、

「御身よ、自から愛し玉はれかし。種々の奸計は御身を圍繞してあり。ドン、アムブロシオが縱令いかばかり御身を欵待するとも、御身は決して渠に心を許し玉ふな。若しも心を許るし玉はむには其時こそ最後畢竟御身は渠が餌食となるを免れざるなり。何を隱そう妾も一度は彼が邪惡なる犧牲となり果たる者なり、されば御身を惜しむあまり斯くは知らせ參らすなり、御身は倘種々の危難に圍まれ居れり、御身の父上は既に囚はれて囹圄の裡にある事を。

この怖ろしき報示を讀みし時、イチッズの心は顚倒し、氣は狂亂せり。彼女は己れの身の上にふりかゝれる災難よりも、父の身の上の禍災を更に案じわづらひたり。程なくドン、アムブロシオは入り來りぬ。彼女は躍りて其足下に身を投げつ父を安全に解放せむことを哀求せり。ドン、アムブロシオは秘密の露はれしに驚きたる面地なりしが、須臾にして氣を落ち付け、まづ甘言もて父の安全を保證して、すかし容めたれど、彼女は容易に承引せざりき、ドン、アムブロシオは暫時眉を顰めてありしが、何とか一時を晦まさんとて、

『成程御身の父上が囚人となられたことは知つて居ま



すがそれを隱くして居たのは、別に意味のあることではない。唯御身の悲歎が甚からうと思つての事。がもうそれを御承知の上からには、私が御身の自由を束縛して此處に留め置いた眞意も御合點でせう。私は實に御身を保護致したのです、申すも御氣の毒ですが、論告せられた父上の罪跡は中々重いので、種々救解の途もつけて見ましたが、全く無罪放免といふ樣なことには參りますまい。」

かくて渠は尙附言ぬ、

『けれど實際其救解は私の掌中にあります、私の點頭の振り方一つでどうにもなります。私は勢力もあり、方便も持つて居ます。けれど如何にも罪が重過ぎるので救解も一通りでは出來ませむ、究竟は私の面目を損する樣になるのでせう。併し該に魚心あれば水心とや、もし御身が私の宿志を叶へて下さるならば、名譽も面目も要つた譯ではない、如何樣にもして救解ひませう。」

斯に至つて、渠の眼先は俄かに光りを增しけるが、更に熱心なる口調にて言へり。

『何とか御返事はありませむか。父上の生命を救ふと救はないのとは、御身の御返事一つに在るのです。是非何とか一言親切の言葉を聞かせて下さい。」

イチッズは今全く欺かれたるを知りて、最早渠が言葉を聞くまでもなしと、且つは蔑すみつ、且つは怒りぬ。

『我が父上に限つて罪を犯かすやうな方ではなし。むしろ潔白すぎる人です。それを罪を犯かした抔と仰しやるのは、何といふ謀計でせう。」

アムブロシオは猶も父の重罪を犯かして到底救解すべからざるを繰り回しつゝ且つしば〳〵怪かることを言ひ寄れり。されど這は徒らに彼女を憤懣せしむるの外なかりし、此くて彼女は嚴かなる威儀を示しぬ。惡漢は辟易して悄然として立ち去れり。

不幸なるイチッズは最も恐ろしき謀計の餌食となり了りぬ。アムブロシオはこれまで着け來りし假面を剝がれて今は其計畧を施すの地なきに窮しぬ。

（二十七）

トン、アムブロシオは竟に彼女を苦しめて、其意に從はしめむと欲し、直に其父の處置さるべき火刑の宣言書を示せり。是には刑せらるべき罪人の名前列記せられてありき。イチッズは眼を定めて其書を見まもればこはイカニ妖術の犯罪にて火柱に張つけらるべしとの父の名前、歴々と讀まれぬ。

彼女は宛かも水を浴びせかけられたるが如し、ドン、アムブロシオは透さず、其機につけ入り、甘たらしき口調もて言へり。

『よく考へて御覽、父上の生命は御身の心一ッです。』

イチッズは俄かに我に返りて叫びぬ。

『悪魔め。是は皆んな汝の細工ではないか大切な親を虐殺する悪人め。』

邪心なる、アムブロシオはイチッズが非常に心を苦しめ、悶へ居るを見てとり、如何にもして之を宥め和らげむとて心を配りぬ。哀れむべきはイチッズなり。彼女の心の裡にはそも幾度の浮沈ありしぞ。或る時はドン、アムブロシオの膝下に跪きて、切なる情に愬へて救解を求めつ、又或時には渠が近接り來るを忌み避けて戰きつ。

刑日はいよ〳〵來たれり。ドン、アムブロシオは其夜イチッズを訪ひ、さま〴〵に挑みて、さて別れきわにのぞみ、

『明日は愈よ火刑の日です。明朝八時になると父上の死を弔ふ鐘の音をお聞きになるでせう、御身はそれでもよいですか、まアとつくりと今夜お考へなさいよ。』

此夜はイチッズにとりて如何ばかり悲しかりつるよ。父の死、其身の汚辱。二者は兩立せず。父を死より救はんと欲せば、其身を辱しめざる可からず。其身を全くせんと欲せば、父を殺さゞるべからず。『あゝ神も見放しけむ、そも我等は前世如何なる罪あれば、今日かかる憂き目を見ることにや』と、彼女は悲嘆にくれぬ。

イチッズは此夜逃亡を企てたり、まづ扉をこぢ明け

むと試みしも囹圄の身の悲しさ、纎弱き手に明け放たむ事叶ふべくもなかりき。兎角して、呼吸ははづみ舌は乾き顳顬は烈しく鼓動せり。彼女の腦は今火の如く熱したり。嗚呼惠み深き神よ、大慈大悲の眼を以て此恐ろしき刹那に危難を救ひ玉はれかしと祈りぬ。

時しも夜は深更なりき、誰やらむ室の外面に鍵もて靜に戸を明けむと試むる者ありけり。イチツズはさてはドン、アムブロシオが又しても來たるものと想へり。されど意外なりき。戸を明けて入り來りしは外套もて覆面せる裝ひ鄙しき一婦人にてありき。婦人は足音偸みて入り來り四邊に眼を配りつゝやがて覆面を脱ぎ棄てたり、見れば、前夜彼の紙片を與し伎女にてありき、イチツズは事の意外に驚きて、聲立てんとしければ、婦人は之を押し止め手招きしつ我に從ひ來よとて導きぬ。イチツズは急ぎ覆面なして尾行たり。二人は急げり。されど力めて足音を偸み、對面の室を過ぎ、壯麗なる廣間を經、廻廊に沿ふて走りぬ。四圍は闃として聲だになし。夜の番人は尚ほ未だ眠りを貪ぼり居りぬ。

二人は相携へて戸口に至れば歌妓は鍵もて戸を開かむとせり、イチツズは此時始めて疑ひを生じ、またもや我を苦しめんとせる新らしき詭計にはあらずやと思ひたれば、冷かなる手をかの婦人の腕にかけつ問へり。

『貴女は妾を何處へ連れて行くのですか。』

『貴孃を御救い申さむ爲め。』

『貴女は此邊の道を悉しく御存じですか。』

『ハイ隨分悉しく。』

彼女の顏には眞實の意顯はれたり。既にして門は開かれて二人は廣場に遁れ出でぬ。伎女はいへり、

『サーお急ぎなさい、急がぬと追手が來ますから。』

（二十八）

二人は足を爪立てゝ戸外に滑り出で、北園に下り息をもつかで直走りに走り、とある塀の木戸口に來る。木戸は錆びたる鐵の栓もて堅く鎖されたりしかば、彼等の弱き力もて明けん事叶はざりき。

『如何したものでせう。緩々すれば直見つかります。』

此く言ひつゝ彼女は小石を拾ひ上げて、二三度打ちけるに鐵栓は難なく外れて戸は開かれき。二人は是より直に狹き路に出でぬ。

『さア是からは急げる丈、急ぎませう。速く急いで「グレナダ」に行つて居る丈安心です。路も此處からはよく知て居ますから。』

直にも追手や來むとの恐れは彼等への脚に驚くべき速力を與へられたり。間もなく夜は全く明け離れて、地平線の端に深紅色をぼかしたるは、朝暾のさし上らむとするにぞある。西



の空には浮雲かゝりて黄金色と紫色とを打ち混せたる色もて彩どられたり。美はしき「ヴェッカ」の曠野は今しも彼等の眼前に開かれたれども、尚朦朧なる靄にて蔽はれたりき。イチッズ今は氣力も盡き果て、疲れに勞れて、そこに憩ひぬ。

『何だか足が重くなッて仕舞ひました。口惜しい、何うしたのでせう、もう一歩も歩行けませむ。』

伴侶の婦人は奬まして、

『少しの辛抱ですから我慢をなさいよ、それ御覽遊ば

せ、彼處の谷間に見へるのが「グレナダ」の町です。最う少しで直ぐ廣い往還に出ます。其處へ出ますと旅人も往來して居ますから、追手が來ても加勢を藉る事が出來ます何分此處では不安心さア〳〵早く。』

此くて幾許の苦しみを嘗めて二人は漸やく一叢の森に達しぬ。此處には一條の瀑ありて、珠の如き泉は岩に激して飛び散れり。其下に瀧壺ありて幽邃の處ろなり、こゝまで來れるイチッズは、全く力竭きて其處へ打倒れぬ。伴侶なる婦人は驚きて介抱し泉を掬びて、イチッズの蒼ざめたる口にそゝぎやれば、ハアと眼を開きて僅かに生氣づきたり、イチッズは蘇りしと同時に深くこの婦人の恩義に感謝したりしが、今まで如何なる人とも知らざりしかば、今改めて其の素性を聽かんことを求めぬ。

『申すまでもムいません、妾が未だ幼い時、アムプロシオは妾を兩親の手から奪ひとッて仕舞ひました、それ彼方に見える靑い山、あの山の麓に邑があります、それが妾の生れました處ですよ。ハイ、矢張り貴孃と同樣に連れて行かれまして、それから讀み書きの敎育、音樂の稽古、いろ〳〵と敎はりましたが是が彼人の惡い點で、彼人は輕薄でそして多情で極く飽きぽい人なのです。それ故一時は妾でなければ夜も日も明けないといつた樣な工合でしたが少し時が過ぎると飽いて仕舞ッてそれから妾は棄物にされて仕舞ました。

（二十九）

彼女が語りつゝありし間に、日は朧かに輝やき渡り、山の巓より、次第に低く照りそひて、はては樹の間を透して脚下に見下せる「グレナダ」の市中の家々の屋根と寺院や塔にその光をなげかけぬ、時しも、朝のつとめの鐘の聲森を掠めて寂しき反響を傳へたり。此鐘の聲をきくと等しくイチッズの顔色は、忽ち變じて土の如くなりぬ。抑も彼女はこの鐘の音を以て、異教徒を火刑に處する最後の合圖として撞かれたる、禮拜堂の鐘なりと思ひたればなり。

『行きませう、最う少も猶豫はなりませむよ妾は。』

とイチッズと立ち上りぬ。

『マア御待ちなさい、あの向ふの山の阻路を御覧なさい大勢馬で驅けて來るではありませむか。若しやあれはドンアムブロシオの追手かも知れません、ア、慥かに左樣です。どうしませう、此樣して居れば屹度見つかつて殺されますよ。ア、何樣しませう。』



と言ひつゝ暫時、沈思の體なりしが、やゝあつて

『まア貴孃の外套とその覆面とを妾に下さい。そして貴女は早く此私しの外套を御着遊ばせ。妾は貴孃とあの小山の上でお分かれ申しませう、そして私は獨り山路を指して追手の中へ驅け込んで故意と捕まへられませう、すると必度貴孃だと思つて、詮義をするでせうから。貴孃は其暇に此途を一筋にお遁げ

なさい。へー貴孃は寶石の指環を御所有で在らつしやるね、では途中馬追ひに遭ひましたらね。その指環を與らせて落ちる工夫をなさいませ可う御座ますか。」

急ぐ時とて息つく間もあらせず着衣の交換も瞬く間に濟みて、かの伎女は鬱々たる叢の中に白き覆面を振り動かしつゝ山路を駈け上る間に、イチッズは恐ろしさに襲はれて物をも辨へず、直走に大道さして走り下りぬ。

(三十)

グレナダ市中は今、混雜一方ならざりき。禮拜堂の鐘は、やがて刑場の露と終らん罪人の最後を知らさん爲めに、撞かれて市中の隅々に響き渡りぬ。罪人の行路に當れる街々は人の群集もて塡められ、家々の二階の窓より、屋根の上より顏を出して雜閙言はん方なかりき、刑場は、劇場の如く、橢圓形に形造りたる大なる棧敷を打ち建てたり。這は罪人に對する宣告文の朗讀や、高僧の說敎を試むるに都合よき樣にしたるなり、場の中央には罪人の登るべき叉柱は用意せられて、其周圍には幾千百の觀覽者の坐席として設けられぬ。

あはれなる鐘の音は今しも囚人が、刑場に曳かれ行くを知らせぬ。唯見れば嚴なる旗を朝風に靡かせつ、懺悔を聽く僧侶に導びかれ、獄丁に護られて、首低だれたる囚人、今正に市の大通を過ぎ行くなり、囚人の衣は罪の性質によりて區別せられ、死刑に處せらるべきものは、煙と惡魔とを描ける怖ろしき模樣ある衣服を着け居たりぬ。

囚人は皆顏色蒼褪めて悄然たり。是も理りなり。或者は久しき禁錮の爲めに、衰弱してよろぼい、或者は種々の責苦の爲めに不具者となりしあり。何れも皆慘憺たる歷史を持たざるはなく、獄中に於ける苛き生活の狀態は、皆彼等の顏面にて讀まれぬ。されど獨り死刑を宣告されたる囚人の顏には、猛々しき相の浮びて見へけり。思ふに渠等が苦痛は旣に過ぎ去り、今は旣

に死を決したるものゝ如く、無限の發憤を抱けるなりき、中に就て一人殊れたるものこそありたれ。渠が容貌は憂はし氣に、其眼は悲しげに見へたれども、其心は何處までも平和に落ち付、其腰は齡の爲めに屈めり。言ふまでもなくこれは錬金者なり。群集は一齊に惻隱の情を此四人に起しぬ間もなく渠は魔術を修せし罪人なりしといふを聞くに及びで、忽ち皆冷笑せり。

一行は既に廣場に達しぬ、四人の愈よ近き來たるを見るや、人波はどッと打ち寄せ來りぬ此時一聲凄まじき悲鳴は群集の裡より聞こへたり。只見れば顏の色やつれ蒼ざめて、髮も蓬にかき亂したる一少女は群集を掻き分け〳〵進み出で、胸一杯に聲張あげて『父上』と呼びぬ。



此の一語は萬人の心胸を貫き通せり、互に顏見合せて惻隱の情にや堪へざりけん、我も〳〵と身を片寄せて彼女の爲めに途を開きぬ。

哀れなる老人！首うな垂たる

哀れなる老人、彼は天を信じて、其心甚だ平和なりき。故に心中一點の魔念はなかりき。されど今しも我身を呼べる懷かしの少女の聲をきくに及びて、再び

雜念は萌し初めぬ。渠は首をあげて聲のしるべをたよりて眼をやりぬ。少女は等しく飛んで其傍に至りぬ二人の感情は只顔と顔を見合すのみ、彼等兩人言葉を交へんには餘まりに太く激したり。二人は抱付きて只泣くのみ何事の起りしぞと驚き周章てる僧侶、獄丁等、此悽婉なる狀態に少からず心を動かされ、又群集の中より洩るゝ惻隱の情は、この一瞬間、廣き天地も濕す樣なりき。

　さりながら刑場に親子の名殘を惜しむは國法の禁ずる處ろなり、鬼の如き獄丁今は容赦も成り難しと、少女を其父より斥けて、群集の中に歸らしめぬ、此時イチッズはドン、アムブロシオが我々眼前に現はれしを看たりしかば、おのれ惡魔めよくも我父上を斯くなせしぞと言はんとすれば冷笑ひ

「エ、お轉婆め、何故無斷に家を出た」

かく言ひて巡査を顧み

「お轉婆めを邸宅へ連れて行つて呉れたまへ、此娘の世話は俺がするのだ。」

郎等は彼女を捕へむとして馳け寄れり。イチッズは今更の如く恐ろしく覺へて寄り來る巡査を拂ひつゝいへり。

「汝等は私の父上を謀殺する恐ろしい惡魔の手下だな」

巡査等は心迷ひぬ。群集は物珍らし氣にこれを眺め居れり。アムブロシオは群集を追退つゝ叫へり。

「其處退かんか」

又もや巡査を顧みつゝ言葉優しく

「萬望諸君其娘を僕に渡して呉れ。女心の淺墓さに些細事を喋り立つるのだ、少々今日は氣が狂つてると見へる、だから少し息ませて、落ち付けさせたら直に回癒らうから」

巡査は狂ひ騷ぐイチッズを捕へんとせり。

此時遲し、群集の中より一と際鋭き聲きこへぬ。

「惡魔を退治せよ、少女を助けろ」

是は擬ふ方なきアントニオの聲なりき、アントニオは群集を押し分けつゝ馳せ來りぬ。

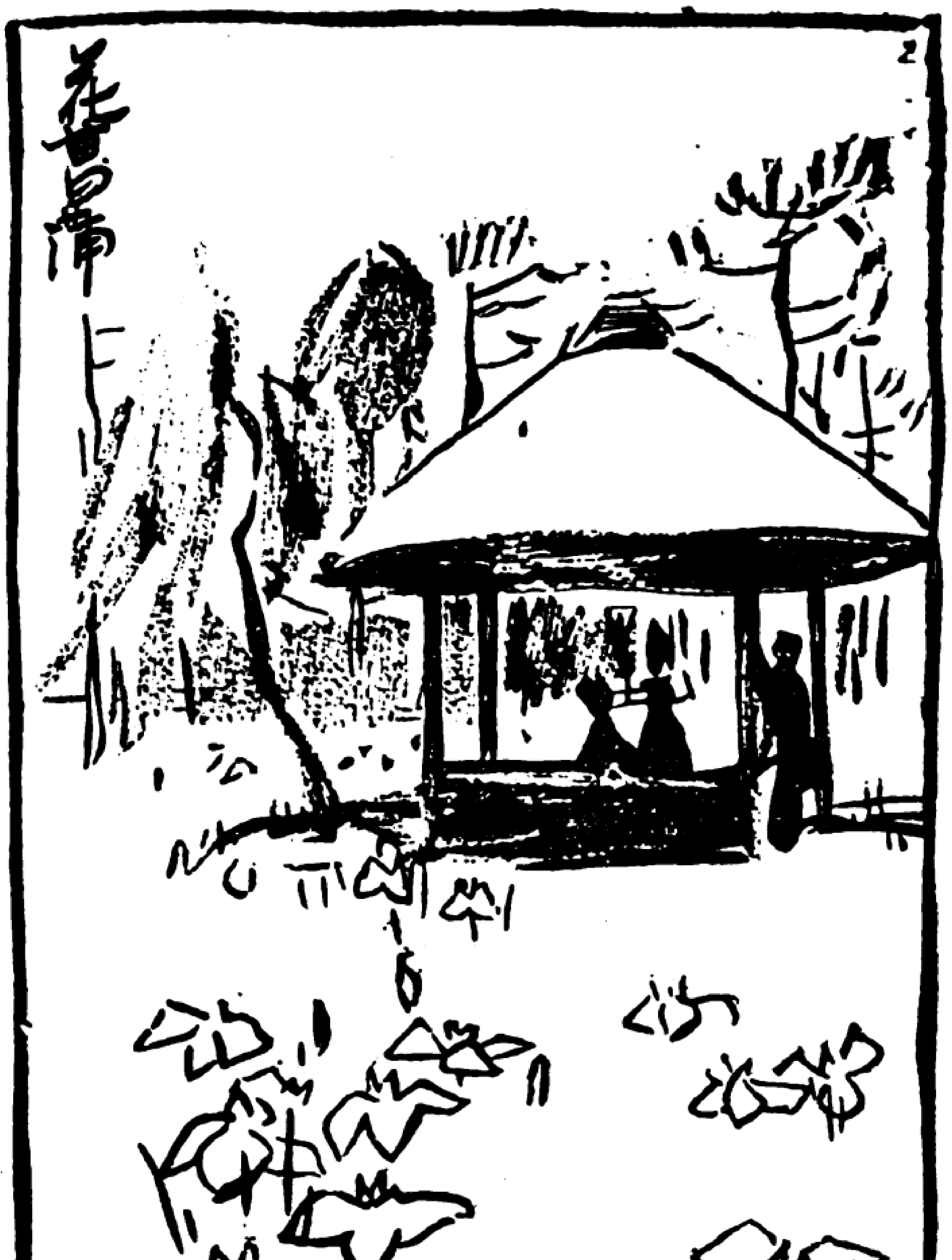
ドン、アムブロシオは大聲にて探偵に云へり。

「ヤ、彼奴を引捕へろ、彼奴こそ妖術者の連累じやぞ」

アントニオは右左に群集を掻き退け、偵吏を蹴飛ばしつゝ漸やく其場に至りて罵れり。

「何妄語を吐かすな」

ドン、アムブロシオの佩劍は、直に鞘を拂つて閃めけり、心得たりとアントニオも同じく劍を抽て身構へたり。双方の刄は閃々として群集の中に輝けり。群集は、あはや決闘の始まらむとするに辟易して一時はサツと散亂したりしが、堵のごとき人數は再び寄せ來りて黒山のごとく立ち塞がりぬ。双方の對戰如何なりしか暫時の間は混雜して、何事も知るよしなかりき。間もなく見物人の中より鋭き一聲の叫びを聞きぬ。只見ればそこに血に塗みれてアントニオは立ち居たり。



この有様を群集の中より見居たるイチッズは忽ち眩暈みて其儘撞と打倒れぬ。

（三十一）

數日を經てイチッズは稍々人心地つきぬ彼女は宛ながら、苦しき悪夢より醒たる如く、眼を開きて四邊を見れば、こは什麼に其身は、玲瓏たる姿

見の前、さては黃金白金を鏤めたる美麗なる卓子のほとり、心地よき臥蓐に橫はり居るなり、四壁は美しき花氈もて覆はれ、其窓際などは金色燦爛として光り輝けり。彼女はやをら頭を擡げて明け放ちたる戶の外を透かし見れば、そこには幾多の肖像繪は懸け連らねられ、又幾多の美麗なる卓に珠を鏤めたる燭臺は樹て並らべられたり猶その向ふにも又向ふにも壯麗の客室ありて、善美を盡したる裝飾、得も言はれぬ花の香は馥郁として、庭園より薫らし來る。窓の開くると共に泉の響と、喈々たる紅鳥の聲とは相和して妙なる音樂を奏づる如くなりけり。

侍婢は足音立ずと室內を步めり。されど、夢より覺めて、又夢見るごとき心地のイヂッズは猶もアムブロシオの邸內に在るものとおもひ、この善美を盡せる裝飾は又例の誘惑の材料ならんかと疑ひ惑る折りしも、圖らざりけり曩の日刑場にて一期の訣れをなせし其父が今しも我身のほとりにあらんとは、其父は憂はしげに其娘を打見やりつ牀頭に立ち居たり。二人の喜悅や如何なりけん、先立つものは只淚なり、程なく入り來りしは擬ふ方なきアントニオなり。イヂッズは夢かとばかり驚ろきぬ。而かも其人は今美麗に裝へる一貴族の扮裝なり。彼女の不審は又もや加はりぬ。

前に卑き一學生となりてイヂッズの歡心を得んと欲ひたりしアントニオは、ヴアレンチアの有力なる公爵の一粒種にてありけり、數年前サラマンカの大學に入學せしが、生得好奇心と、冒險心とに富める渠は父の承諾をも得ずして大學を出奔し、西班牙の各部を遍歷して僅かに其心を滿足せしめたり。それに就て父の怒り烈しかりければ渠は自ら修め自ら鑽きて、身の信用を回復し、父に對せる過失を償はん爲にとて、さてこそ一時身をグレナダの地に忍ばすことゝなりしなれ。

渠が如何に堅忍し苦學したるかは知に由なし、されど唯面白きは塔中冒險の事にこそあれ。そも渠が初め此險を冒せしは、只美人を一瞥したるが動機となりしなり、そは靑年の一時の出來心に過ぎざりしも、一度

金者の弟子となるに及びては、イチツズを慕ふ心の次第に深く、其他には何事も手に付かざるに至り竟に愈愈深く知れるに及びて、全く相思の情投合するに至りしなり。故に渠はイチツズと其父をばウアレンチアの地に伴ない、父の賛同を得て共住せんことを企てたるなれ。

かゝりし間に渠は晦ましたる蹤跡を捜索せられたり。渠の父は渠が妖術者と其女との罠に陷り、今や全く其女の嬌態に心を鎔かし、魂を褫はれつゝありとの報を得たりしかば、父公爵は大に駭き、いそぎ腹心の者に命じ腕力に訴へても渠を捕へて、邸に拉れ歸るべきよしを含ませたるなり。

かくて邸に拉れ還へられたる渠は父の前にて、錬金者の身の上の說明をば爲したり、父公爵は最初のほどは容易に靑年の言を聞くべくもあらざりしが、元來理性の强き人なりしかば、話の分明になるに隨ひて如何にもとおもい、それよりグレナダに歸り、イチツズを當地迄伴ひ來りて、花嫁となすべき由を承諾したり。

嬉しき内に多少の懸念もありて心胸の安からざりしアントニオは取あへずグレナダに赴きぬ、勿論渠は今や公爵家の公達として己れが生家に出入の自由を得たれども、尙其風變りなる學生の扮裝を廢せんとはせざりき。そは一介の書生としてイチツズの意を獲たる後俄かに彼女と其父とをして富貴光榮の地位に上せたらむには、如何ばかり驚くべきか、そして其驚く狀態はいかに面白かるべきかを想像したるなりき。

來て見れば何んぞ計らん、塔の主人は既に何れへか去りて人影なく晝猶ほ淋しく門は鎖され居らんとは。渠は事の意外に驚き、只管不在中の消息を知らむと力めたれども、不思議や其蹤跡は掩はれて更に知るよしなかりき。然るに或日圖らずも其戀ひ慕へる老人の名前が罪囚の中に見出されたり、而かも火刑に處せらるべき宣告を讀むに及びて、渠は宛かも落雷に打たれしもの丶如くに驚きぬ。

アントニオが其を讀みしは恰も處刑の執行當日にて囚人の一行は今方に刑場に赴く途中にてありき。今は

寸刻も猶豫成り難しと、直ちに當地の大法官の許に驅け行き、言葉短かく己れの身分を打明かし、我身が好奇心より、流浪したる事、美人を塔中に垣間見たる事、美人の父が哲學者にして世に珍らしき學術の研究者なりしこと、我身が弟子となりし事、扨てはその美人に戀慕せしこと、又美人に兇行者のありし事、其他一切有りし事共打明かして、其老人の冤罪を主張し、歴々くの證據を示したれば。法官も之れに耳を傾け、終に刑の執行を猶豫すべき令狀を其手に渡したれば、渠はこれを握りて現場へ驅けつけたるなり。

斯くて渠はドン、アンブロシオと決鬪して、首尾よくこれを仆し、老人を獄丁の手より受取り、氣絶せるイナッズを助け起して。ブアレンチアの邸に伴れ歸りしなりけり。

（をはり）

煩悶

朧月夜にあこがれて
　匂ふは月かはた花か
ゆかしの君よ今も尚
　花は昔の昔に咲けり
霞こめたる春の夜に
　在りし昔を忍ばれて
くりては返すおだまきの
　いとぐち知れぬかなしさよ

君は何地の旅衣
　身にはまとへど折々は
告げこし給へいざさらば
　花は散れども何の其
高嶺にすめる月を見て
　君みこゝろのかゞやきと
心にたゝへ人知れず
　無限の樂しみ味ひつゝ

やよやまて雁がれよ
　なれの翼に言傳てん
君は何ちにかほれども
　香をばしたひてとぶ胡蝶
切なき胸の思ひをば
　告こし給へ雁金よ



貞女料

邑井一

此度は操正しい婦人のお話しを一席申述べます。美人魔多しといつて、どうも衆人に勝れた美人には不運の者が多いかと思ふ、豊太閤秀吉の政所は、種々說もあるが、我々共が弘くやつて居るのは、織田殿家來、藤井又右衛門の娘、お八重といつて古今の美婦である前田犬千代丸が執心をいたして、勢ほひに任せ、又右衛門と相對で結婚の儀を申入れた處、信長公お氣に入りの利家に娘をやれば、仕合せであるから又右衛門が承知をして、其の趣むきを申聞けると、どういふものかお八重が美男の犬千代を嫌つて承知をしない。茲で又右衛門が當惑をした時に、秀吉がまだ孝吉といつて藤井又右衛門の組下に、足輕中村藤吉郎と云つた時分お頭の心配を氣の毒に思つて、ぢやア私が行つて破談にして來ませうと藤吉郎が前田利家の處へ來て、固より才子であるから、種々に企んで、是を破談にしやうとした處が、利家がどうしても承知をしない、仕方がないから孝吉が、實は那のお八重殿には密夫があります、さういふ者をお貰ひなすつたら、お耻になりませうからお止しなさいといつた。之を聞いて利家も後に秀吉が天下の後見にお撰みなすつた位ゐの器量人であるから、忽ち思ひ返して、其れは飛んだ事だ、さういふ女と知らずに迷つたか、左樣な淫奔者と知つては貰へない、併し親父の又右衛門と一旦約束をした、其の藤井の許へ乃公から遣つた結納を其密夫へ結納に遣はして、乃公が媒妁人をして表向いて添はしてやらう、何者だと問ひ掛けられて孝吉が困つて、何も關係のない人を、其處へ引合ひに出して、どんな間違が出來るかも知れない、寧そ自分が引被つて了はふと思い 孝「左

様なれば申上げますが、實は其のお八重殿と不義をして居るのは私でございます」利家可笑さをジッと怺えて 利「其れは倘更氣の毒なことをした、では乃公が媒灼人をしてやらう、早々婚禮の式日を定めるが宜い」先づ前田樣の婚禮はチャ〳〵ムチャにしたけれども、サア此の跡が困つた。大變な事をやつて了つたと孝吉立歸つて來て藤井又右衞門に此の始末を話す、又右衞門も膽を潰し 又「八重は犬千代でさへ嫌ふ位ゐだから貴公では迚も往くまい」又右衞門のお連合も 女「其れを話したら娘が眼を廻しませう」何にしろ話さなければならないから、お八重を呼んで 母「お前シッカリして、氣付けでも吞んで氣を落付けてお聞き、飛んだことになつた、といふは藤吉郎が前田殿へお前の婚禮の斷はりに行つた、時の機會から斯ういふ事にして來た困つた事だが、お前にも是は承知は出來まいねへ」と阿母さんがいふとお八重殿が何處に見所があつたか、美男の犬千代殿を嫌つて、醜男の藤吉なれば私が身體を任せとうございますゆゑ、御安心なさひまし」と落付いて答へた。スルとお八重殿の顏を見詰めて居た阿母さんがウーンと眼を廻した、ソレ醫者よ藥よといふ騷ぎ。けれども此の緣は忽ち定つたが、前田樣へ嫁付けば德川の御代になつても、百萬石の諸侯頭、今も目出度く治まる加賀樣の御緣中、是を嫌つて關白太政大臣秀吉公の大政所となつたのは誠に目出度い事であつたが、其代り大阪落城をして了つて京都所司代の板倉伊賀守が、家康公の仰せを受けて、お世話をしたやうなものゝ、元の勢ひとは大層に變つて了ひ、御逝去の時は御葬式なども誠に淋しかつたといふ。お年を召してからも此お八重殿が身體が弱く、トンと女隱居のやうに別館へ住ゐ、一說には秀吉公へお願いなすつて切下げ髮になつて、後家樣のやうに孔月尼公と申上げたといふが、太閤御繁昌の時分に尼君になつたといふは不思議な話し此の時分に秀吉公は淀の方、松の丸殿を專ぱら御寵愛をなすつた。けれども昔しをお忘れなさらんで、時々政所の方へお入來になつて、お八重殿と昔し話し、中村藤吉郎の時分の話しが出て、笑つて

お歸りなさる。今日も太閤がお八重殿のお館へお出でになつて、いろ〳〵の話しの中に、秀『薄茶を一ぱい願いたいものだ』八『畏こまりました。誰ぞ上樣へお茶を』と仰しやると、ハイと優しい聲で答へる、軈てお襖が開いて、其れへ薄茶を持つて出て來た女が平伏をして退つて行く樣子に圖らずお目が付く〳〵と年頃二十三四、薄化粧をして居る古今の美人である。ア、濃艶なものだと見送つてお在なさると、徐々と右の美人は退いて了ふ。殘念なことをした、モウ少し見たかつたと思召して 秀『今一ぷくお茶を所望いたす』八『上樣が今一ぷく御所望である』女『ハイ』と答いがあつて、軈て又襖を開ひて徐々と出て來から、扨は今の婦人であらと太閤が御覽じると、番が變つて、今度は女が違つて、以前の姿の好い美人とは全然で反對、背比べなれば横に來といふ、一丈二尺の帶を二重廻してチヨツキリ結び、土俵入でもをしやうといふのが、お茶を持て出て來た。お茶碗をお取なすつたが、何だかお茶が不味いやうた 秀『ア、お前、先にお茶を持つて來た女は何といひますな』八『ハイ、那はさじと申します』

秀『さじ、珍らしい名だ、彼は何者の娘でござる』八『ハイ仔細あつて彼の氏素性は申上げ兼ねます』秀『仔細あつ氏素性を云へんといふのも不思議だ。何か明智光秀の緣故でもあるものか』八『イエ左樣なものは私の側へは必らず差置きません』秀『それなれば素性のいへんといふ筈はない、どうか話して貰ひたい』八『イエ、彼が身元を申上げますれば、容貌が優れて居りますから、萬一お手付御中老にとでもいふお望みがございました時に、迚も此のお望みに從がはれませんから、却つて身元を申上げん方が宜らうかと存じます』少し太閤極りが惡い、身體が惡くつて、居所も別にして居る位であるが、女には悋氣といふものは附いて廻るものか……秀『イヤどうか是非聞かして貰ひたい』八『左樣なればお話しをいたしますが、彼の者は上へお茶匙のお直しをして居りまする、千の利休の娘、十六歳にして、百舌鳥屋治右衞門へ嫁付き、十八歳の時に夫治右衞門病死をして、親共へ立歸つて參りました。何が

扨那の容貌でございますから、諸方から再縁を申込みますが、一旦夫に別れた上は、必らず兩夫に見えんと申して、其の言葉に從はず、親の手許に居りましたが何分再婚を申込まれるが五月蠅さに、當人より望んで私の手許へ參つて奉公いたして居ります。當年二十二歳でございます」秀「ウーム後家か」とお呻んなすつた。妙なもので、婦人が後家になると又チョット返花が咲くもの、其れも六十位ゐの後家では仕樣がないが○「どうだ横町の後家が來た。全體美い女だが、亭主が亡くなつてから殊に此節美くしくなつたやうだ。どうも女は後家に限る、乃公の嬶アも早く後家にしてやりてえ……」などと髪結床邊りで噂さをするものだ。秀吉公が秀「お前、那のおさじを一寸茲へ呼んで貰ひたい、シテお前は次席へ遠慮をして下さい」貴人方になると必らず我儘が出る。迷惑ながらお八重樣が立上る。入れ替つて其處へ徐々とおさじが入つて來て、低頭平身をいたす秀「さじか、苦しふない、近う、遠慮に及ばん、是へ〳〵……。其方の身の上政所から承知いたした、二十二歳ださうぢやな。今から後家を立るといふは、至つて變屈な事だ。予の側へ來つて寢起の世話をいたして呉んか父利休も重く取立て遣はす、四邊に人はない、遠慮に及ばん、直に答へろ」おさじは赤面をして漸やうに面を上げさじ「恐れながらお答へを仕つります。身分卑しき私へ、日本開闢以來、例しのない御名君が、有難き仰せを下し置かれまするは冥加至極に存じまする。さりながら夫治右衛門亡き後は決して兩夫に見えずと思ひ込みましたもの憚かりながら此の儀は御辭退仕つります。お側仕へはいたしますが、命を召されましても、御寢起のお世話は御免を被むります」とキッパリ御斷はりを申上げる秀吉公苦笑ひをなすつて秀「ア、さうか、嘸相果てた何右衛門とやらも滿足であらう、用はないから退れ」おさじを退げて御自分も御本殿へお歸りになつた。けれどもその美人の顏が目先にチラ付いて忘れ兼ねる、煩惱というものは年を老つても起る、屢々政所へお出でになつてさじを呼んでいろ〳〵承知をさせやうと遊

ばしたがいつかないかな、肯入れず、例も同じ御挨拶を申上げる、ソコデ太閤が、乃公は男は醜いのは自分でも知つて居るが、なれども彼等に嫌はれる身分ではない。乃公は若年の時分から、斯うと思つた事は貫ぬいた。今に至つてさじが我が心に從がはんのを此儘にいたしては、身の威勢が衰ろへたやうだ。色情は別として予の望みを貫ぬかんといふは誠に殘念。彼は命を抛つても覺悟をして居るが、何か又外に策があるだらう、まだ大阪へ詰めて居る諸侯をズラリと並べたことがない。貞女の操を破らせるといふ評定をして見やうと、秀吉公も隨分瓢輕者で、お奉行の月番、名束大藏太夫正家から、御登城總出仕といふことを諸家へ觸れ出した。サア皆な驚ろいた、今評定のあるやうなことはないが、どうも朝鮮の和睦が變な工合に治まつて居るから、再たび朝鮮へお手でもお出しなさる思召しではないか、第一に德川内大臣家康公、前田利家公、上杉黄門景勝公、是は御大老、五奉行三中老、虎の間詰の荒大名、兩加藤、黒田脇坂糟谷、其他御譜代大名

我も〳〵と難攻不落の名城へ集まり、大廣間に綺羅星の如くに居流れた。中に福島正則などは、戰爭がないと身體を持扱かつて居るから正「どうだ加藤、又朝鮮お手入れかも知れん、十五貫二百目の金才棒が世に出るか」清「さうさ、又帝釋栗毛の足を借れる時節が來たな」此の人達は戰が商賣のやうだから喜こんで居るが、家康公のお顏の色がどうも其日は酷く惡い。秀吉公が腹に魚鱗鶴翼の備へを立つて、何かあつから德川家を討つて了はふといふ、お面には少しも其樣子がないが、心中にどうも其氣を含んで居る。其れを家康公は御存じだ、今までは何事もなかつたが、諸侯列座の前で此家康に何か不審の廉があるのか知らん、言ひ開きが出來なければ忽まち家にも及ぼし身體に崇るとソコで御出仕にならない中からお顏の色が惡い。軈て警蹕が掛つて、此上段の唐紙がスーッと開いて、其處へ秀吉公がお立出でになつた。怖る〳〵お姿を拜見すると薄紅の廣口を召して丸括をお締め遊ばし。御佩劍はなく、脇差を差て懐ころ手をして上段へお立出でにな

り、安座をおかきなすつて 秀「一同大儀」家康公が總名代家「御機嫌麗はしく大慶に存じます」數多の大名低頭平身をする 秀「今日一同を集めたるは容易ならん相談である。最とも一大事なるに依て、酒肴を遣はすゆゑ、酒宴に及んで後評定に及べ。酒肴を持て〳〵」といふ、ハッと答へて御表だから女ッきれはないが、若侍、若衆、酒肴を其れへ持つて來て、殿下お盃をお取り遊ばし 秀「遠慮に及ばん、一同盃を遣はす、心ある大名は顔を見合せ、ハテ大事な事を話すのなら、シラフでなければ往かん。酒宴の上で相談をしやうとは如何なる思召しか、酒を呑むと大膽になつて治まることも直ぐに打毀れて了ふ。併し下し置かれる御酒だ、頂戴をしやうと。戰國の時分には下戸は少ない。今敵の寄せて來るといふ時に、勇氣を付ける爲めに、グタ〳〵に醉て終つては働らけないが、少しは酒氣がある方が宜い。下戸も其れに誘はれて、自然上戸の仲間入りをするやうになる。尤とも戰場では突ッ立ち呑み、却々猪口や何かで飲つては居られない。向ふから敵が來るといふ處で呑むのだから、酒舖の店で下下の者が桝で引掛けるやうな鹽梅、ガブリ〳〵大きなもので傾むける、大概酒が廻つた時分、秀吉公が、

秀「茲に一大事といふは他の儀でもないが、此間政所へ參つて薄茶の無心をした時に、侍女當番が予に茶を持つて來た。其の者が古今の美人であつて、何者の娘かと尋ねし處、利休の娘さじと申し、十六歳で嫁付き、十八歳の折に夫が病死をして、其れより八重の手許に勤めて居る。最早二度の夫には見えんと申して再縁を申込まれるが五月蠅に奉公いたして居るといふ事ぢや。實に美なる者であるから、老後の樂しみに、予が寵愛をいたさうと所望いたした處、却々彼承知いたさん、さま〳〵に言葉を掛けて見たが、いつかないかな予の望みに從がはん。一人の婦人さへも、予の望みが貫ぬけんといふは何となく身の權威の衰ろえた如く思はれ、心外であるに依て其の貞女の操を破らせる妙計があるまいかと今日一同を集めたる次第、良い策略があらば遠慮なく申して呉れろ」勇氣が張つて居た加

藤肥後守淸正が、がックり勇氣が脫けて終つて、長いお髯を垂れて太閤樣のお顏を見詰めて居たが、フーッフッ〳〵〳〵と、お笑ひなさると、福島正則が大きな聲を揚げて　正『此の正則が御供仕つれば、一人にて事足ります否應いはせず引捕へて動かしませんから、御本懷をお遂げなさるやう』秀『本懷を遂げろといふ一言は良いが否應いはせず引捕へるといふは穩やかでない、全たく從がはせなければ妙でない、其他に妙策は



ないか……』處が軍の計略なればあるか知れんが一同そんな事は不得手だと見えて石田三成大谷吉隆始め俯向てばかり居る。秀吉公少しジレ氣味になつて、お側の徳川樣を御覽なさると、家康公のお顏の色が大分最前よりは良くなつた　秀『江戸殿、徳川殿』家『ハーッ』秀『どうでござるな、策士の其の許能き計略はござらんか、イヤどうも其許の釆の執方には、

今だに秀吉が身の毛が慄立つ。忘れぬぞよ、思ひ返せば天正十二年、鰥寡孤獨の北畠信雄を助け、小牧山に本陣を取つて、此秀吉の軍勢を喰止め、少勢を以て討ち惱まし、長久手の戰ひには我左右の腕と賴んだる池田勝入齋、森武藏守を御身の采に討たれ、無念腸に泌み渡り、己れ汝、德川の首を切らざれば此鬱憤は晴れやらぬと、一時は立腹に及んだが、扨月日の經つに從がつて、其怒りも自然に消え、昨日の敵は今日の味方、輪回の絆切れては忽ち一蓮托生、當時は緣者となり、水魚の交はり、併し凡夫の身なれば時々思ひ出す、イヤ之は飛んだ愚痴になつた。御身の策略で何とか此貞婦を手に入れる妙計はないかどうぢや」此時に家康公が

家「是は大政所を、嚴しくお叱り遊ばしたら望みが足りやふかと存じます」秀「其れはどういふ譯だ」家「さじが予の心に從がはんは、畢竟其方が蔭へ廻り、其の心に從がふなと脅して置くと見える、夫の望みを邪魔するは不貞である、老ての悋氣は片腹痛い、手討にいたす覺悟いたせと息卷荒くお面へ怒りを現はし、御佩刀をお拔き遊ばし、お手討にと仰せになれば、夫に操正しきものは兩親に孝、主に忠なるもの、其體を見ればさじと申する者、政所のお命に關はつてはならじと、脊に腹は代られず、之までの覺悟を打破つて上のお心に自然從ふかと家康は存じます。此儀如何にござりまするや」秀「旨い、如何さま之に上超す妙計はなかろうア、御身は面白いことを企む人だ。サア〳〵跡は何もいはんが宜い、此上の計略はない、無禮講だ、吞め吞め」サアモウ唄を謳つても何でも構はん」大醉賑やかな酒宴、其れが濟むと名々思ひ〳〵に退散に及ぶ。

秀吉公早速其計略をやりたい。翌日政所へお出でになつて　秀「コレ八重、ズッと前へ出ろ」大層御不興であるから　八「ハイ」秀「コレ豫て執心のさじが予の心に從はんのは、其方が蔭へ廻つて我が心に從がふなと申付ける事があると思ふ、老ての悋氣は片腹痛い、夫の妨たげをする不貞の女、勘辨罷りならん、手討にいたすから覺悟をしろ」とお佩刀の柄に手を掛ける。お八重樣は是は亂心なすつたのかと思召した。長い間の御亭

主、怖いほど悧巧者、殊に忍耐の强いお方安土の城内で、諸侯列座の中で、柴田勝家が昔しの藤吉、久しぶりで肩腰を揉んで呉れろと橫はつた其折に中國探題、播磨國姫路の城主羽柴筑前守秀吉、怒りの色も現はさず、昔しの藤吉になつて諸人の見て居る前で勝家の足腰を揉み、お歸りの後久しぶりで元老の足腰を擦つて見たが、ア、取るまじきものは歳、織田の



家臣に瓶割柴田といはれた豪傑も今日肩へ障つて見れば骨だらけ、ア、斯うも衰ろえるものかと勝家の老衰を泣いて御自分が諸人の前で足を擦り腰を撫で丶お怒りにならないお心の中、嘸お辛かつたらうと、其時には妾は涙を流した、其名將が斯うも變るものかとお驚ろきなすつたが、貴人方がお手討になさると仰しやれば其處を逃げる事は出來ない、尋常に切

られなければならないから兩手を仕いて抑えて居る、其中にキラリとお佩刀をお拔きなすつたから、女中は八方へ散つて、大變だ〳〵といつて觸れて歩く。其をおさじが聞いて、バラ〳〵と駈て來て見ると、片手上段にヤッと切下ろせば政所の首は前へ落ちる。されば忙がはしく駈て來てお止め申上げると思ふと、悠々と其席へ入つて來て、さじ『恐れながら、先づ〳〵暫らく御短氣をお愼しみ下さるやう』太閤の振上げたお刀の下へ身を入れる、秀吉公おさじを御覽なすつてニヤリと氣味惡くお笑ひなすつた。成程是は德川殿のいふ通り、斯うも彼の計略が當るなれば、乃公が存命の中に兵を向て家康を討たなければ、秀頼の不爲めとまで思召し

秀『さじ、其方が手討を止るは予が意に從う心か……』さじ『先づ〳〵お佩刀をお納下さいまし』一度刀は鞘に納めドッカリ其れへ秀吉が胡坐をかいて 秀『是より我側へ來つて奉公をするか』さじ『仰せにございまするが、此末は知らず日本開闢以來今日までの御名將は貴君樣に留めを差しまする。其貴君樣が私一人が御心に從はん位の事で、年來お睦まじき御夫婦の仲でありながら、政所樣をお手討などの御短氣はあるべき筈はございません。之は表向きのお手討騷ぎ。其實は私の操を破らせやうといふ御計略にございませう。全たくお怒り遊ばした事なれば、お眼は血走り、お耳の色は赤く相成り、怒氣お面に現はれまするものを、餘外ながら御尊顏をお見上げ申せば、お言葉にこそお怒りはあれども、お眼の色清々として、別に變る事もなく、お耳の色さへ變りはございません。是私の初心を破らせやうといふ御計略、惡い御串戲はお止し遊ばせ』ニッコリ笑つた。太閤頭をお搔きなすつて 秀『イヤ策略を看破られたか、モウ少し兩眼に怒りを持ち、何とか仕樣もあつたらうに、赤面〳〵、併し其方は古今無双の貞女だ。予は醜男なりといへども其方に嫌はれる身分でない。夫にも屈せず能う之まで操を立てた、彌よ冥土に居る何某が喜こぶであらう。此上は命あるまで此覺悟を亂さぬやう、今日より貞女料二百石遣はすであらう』流石は秀吉公、可愛さ餘つて憎さが百倍など〻

いふ無理な事は仰しやらない。飽まで固きさじの決心を御感心になり、貞女料二百石を遣され、以來さじとは、お呼び遊ばさず、貞女〳〵と仰しやるやうになり此のさじが茶の湯は家元で固より能く出來るが、繪を大層能くいたし、大坂城內にも此のおさじが畫いた繪があつたさうだ。處が美人薄命とは茲をいふか、折角秀吉公が思ひ諦らめたおさじに、又々三好秀次が戀慕をいたし、心に從がはん所から、遂に之を手討にいたした。之から太閤と秀次公との仲が惡くなる、淀殿は秀頼を跡に立てたいから、陰に秀次を亡き者にいたしたい。政所も又秀次の暴逆を怒つて之を訴たへる。石田治部少輔は太閤亡き後は自分が秀頼の政權を手の內に握らうといふ野心があるから、其れには秀次があつては邪魔になる、那方からも此方からも訴へがあるので、遂に關白の位を取上げ、秀次は高野山へ登山をさせ、其れでも秀吉公のお怒りが解けず、遂に切腹、京都の三條小橋に畜生塚といふ不名譽の古蹟を殘した。其事に就てはいろ〳〵申上げる事もあるが、此度は只さじが貞節を貫ぬいて、二百石の貞女料を秀吉公から頂戴いたしたといふ一節だけに止め置きます。

（今村次郎速記）

△氣を輕く持つものは長生す。

△貧乏は健康の母なり。

△人を感せしむる能はざるは皆誠の足らざるなり。

△德を行ふて生活するにあらざれば安樂に生活すること能はざるべし。

△過を掩はん爲めに僞る人は過を重ぬるなり。

△人の誹りを止めんとせば辯ずる勿れ。

△淸き水は淸き源より流る。

△習ふよりは慣る方よし。

△人は木石にあらず皆情あり。

前號小説「虹の橋」の作者有明女史の住所姓名至急報知あれ。

新刊紹介

△家庭百科全書第一篇 新家庭訓　三輪田眞佐子女史著

三輪田先生が女子教育界の巨擘なる事は人皆是れを知る、されど其の文章の雄偉なる事と思想の博大なることは又僅に今の思想界に於て第一流の地歩を占むべき大家と稱すべし。本書新家庭訓は現今の女子をして浮世の怒濤に乘出す舟師の指針たらしむべき用意を以て編まれたる者なり、まづ女性の根元より說きて女學の要旨、結婚の意義に及び一轉して家庭の趣味より人生の福利に普及し凡そ婦人と家庭に關する千百の疑問は恰も快刀を以て亂麻を解くがごとく極めて明瞭なる解決を與へ懇切なる指導を與へしは流石に老女史の用意といふべし。（價四十五錢　博文館發行）

△小說 折れ櫛　正岡秋子著

作者は閨秀作家中才筆の聞へ高き人なり、萬子といへる薄命美人の心中の煩悶を描きたるものなり、境遇の變化、人情の反覆を會話の間に寫し行くの技倆、有髯作家を凌駕するの慨あり。（價四十五錢　也奈義書房）

△五十三次草鞋日記　伊藤銀月著

今の世、今の文士中にありて好んで奇辯を弄し好んで快腕を揮ふもの伊藤銀月の右に出づるもの尠し。此の篇著者が膝引脚袢に身を固めて東海道五十三驛を旅行したる草鞋日記なり、讀者乞ふ明治の膝栗毛が如何の狀態によりて滑稽を演じつゝあるかを……。（定價五十錢　文淵堂發行）

△島の秘密　德田秋聲著

前號に紹介せし「黄金」の後篇なり、前篇の雲は後篇の雨となり、前篇の霆は後篇の雷となりて活動せり。（價四十五錢　吾妻書房發行）

△富と愛　柳川春葉著

實に奇拔なる表題なり、この表題の文字の意味は如何にしても世の中に一致せぬものなり、而かも世の中に富と愛か一致せぬところに浮世の慰藉はこもるなり、此の篇よく這般の消息を描きたり、夙に家庭の事を描くに、妙を得たるこの作者は此篇に於て一段の妙な風を凝らしたり。（價七十錢　鮎文社發行）

△新派講談 舶來乞食　原霞外著

著者は日本に於ける社會主義者にして又浪花節の藝人なり、さればこの書も又或る主義を講談に仕組みて讀者社會に社會主義を鼓吹するの意なるかとおもへど、それほどの大抱負にはあらじとおもはる、小說にあらず、講談にあらず、何にせよ一と風變りたるものなり。（定價三十錢　京華堂發行）

福引抽籤披露

附り當籤者心得

本誌は豫告の通り本月三日博文館營業部構内に於て警官立會の上いよ〳〵福引の抽籤を執行したり。其の結果は別表の通り。

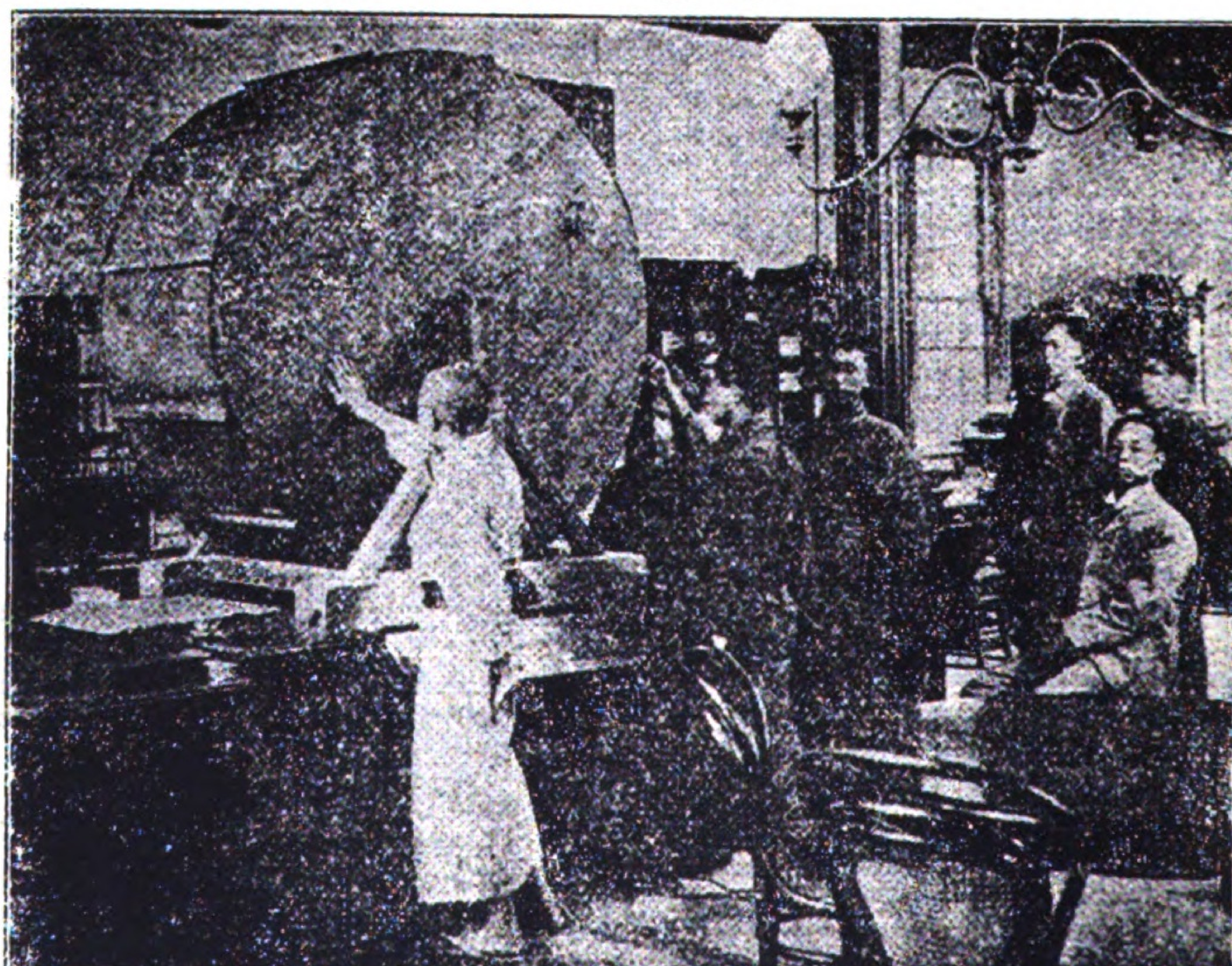
△愛讀者諸君は別表「當籤番號」表を前々號の福引箋と照し合せて若し數の符合したるものあれば當籤したるものと心得られたし。

△當籤の方は右福引番號箋を切取り表面數字の上に「第何等」と朱書して送られたし。

△當籤者希望の景品は前々號に豫告せし通り等級の範圍内にて適宜の品物を御撰びの上番號箋の裏面「品物記入」の個所へ記入して送られたし。

△當籤の方は成可く至急當り札を送られたし（但し一二等の方は成可く書留郵便の方よろし）

△景品は當り札の到着次第調達して便宜送呈致し候



六月三日抽籤執行の實況

七月號記事豫告

七月五日發行

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内〔定刊數……十二冊
　〔増刊四回…一、四、七、十月價格同一

郵税 一冊 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	五十八錢	五十錢	四十二錢
半頁（卅二行）	二十圓	十七圓	十四圓五十錢	十二圓
一頁（六十四行）	四十圓	三十三圓	二十八圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年六月十五日發行　第七卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番／千十八番
本局　二千六百二十番／三千二百二十九番

五二二〇八	五二二二一	五二三四八	五二五六一	五二八一〇
五四〇二七	五四七四八	五六二〇七	五六三九五	五六四六三
五八一一八	六六〇四七	六八三一六	六八四七六	七〇五四〇
七二〇六一	七二四四七	七三一二九	七三四四九	七三七九一
七四三六二	七四七六五	七四七八五	七四九〇四	七六一八二
七六六四五	七七二九八	七九七五七	八〇二〇四	八〇二九四
八一一五一	八一九六二	八三一九四	八三一九六	八三三九五
八三六〇二	八三六二四	八四八一〇	八五三六六	八五六三八
八五七二三	九〇四一七	九三七八〇	九四〇二三	九四〇五七
九四二五四	九四三二九	九五五七六	九五九二七	九六一〇〇
九七五〇六	九七五六四	九七九四九	九八一八〇	一〇〇一四二
一〇一六〇〇	一〇一六六四	一〇三五九四	一〇四二六七	一〇四四一八
一〇四七三六	一〇五一六四	一〇五三三六	一〇六五六六	一〇六八三六

九等 (百五拾本)

一八四一	二九七七	三五七〇	五三三四	六〇九九
七三三四	一一一九一	一二八四七	一三四五九	一四九六〇
一五〇七四	一七三五五	一七四六〇	一七六九〇	一八一八八
一八三五九	一九四七八	一九八九七	一九九八三	二二三四五
二二三五三	二二六七三	二二八七八	二二八九三	二三五三〇
二三五九八	二三七三五	二三八五〇	二四二一一	二四二二一
二四三五九	二四四二〇	二四六三二	二四六三六	二七〇三一
二七二〇一	二七三四四	二七九〇九	二七六九六	二八〇四三
二八〇六二	二八一六一	二八二六三	二八三五四	二九七四六
二九七九一	二九九八六	三二一五四	三二一七二	三二三八〇
三三〇七三	三三二七一	三三三〇九	三四〇三八	三四〇三九
三七五四八	三七五五五	三七七五一	三八四九〇	三八九七七
三九三七一	三九四一四	三九六六五	三九七八一	四五一八〇
四五四九七	四五八〇四	四五八一〇	四五九一四	四七二〇七
四七四五二	四七七二二	四七七九九	五〇〇四四	五〇一七五
五〇六九四	五二〇七九	五二二〇九	五二三三九	五四〇二二
五四二五九	五四八七八	五六二二四	五六六四〇	五六六六八

二七二四二	二七二八七	二七三一五	二七五四一	二七五七五
二七七〇四	二八〇〇五	二八一九三	二八二四五	二八七六〇
二八七七一	二八九七五	二八九八一	二九二八四	二九三六四
二九三八八	二九三九八	二九四七四	二九六一六	二九七七〇
二九八一五	二九八六四	三二四二九	三二六一三	三二六七七
三二六八〇	三三一一九	三三一六九	三三三三三	三三四六一
三三四七七	三三六〇二	三三六六七	三三七六三	三三七六四
三三八四四	三四一七六	三四三二三	三四七五八	三四七七二
三四八四一	三七四一四	三七六五〇	三七七二一	三七一九四
三八四一一	三八六二一	三八九六四	三八九九一	三九二八六
三九三〇一	三九八一〇	四五〇二四	四五〇八七	四五四二八
四七一五九	四七二五八	四七七七二	四七八一四	五〇六五三
五〇四九五	五〇五四九	五〇七五九	五〇二六七	五二一七七
五二三七二	五二五七二	五二一九六	五二二七四	五四四二八
五四八六三	五四九一七	五四一六五	五四一九七	五六三三七
五六四五〇	五六七〇四	五六七〇九	五六七二八	五八〇〇六
五八三三七	五八三五四	五八五三二	六四〇九六	六四二七六
六四四〇一	六四六六七	六六〇四六	六六三七三	六六七〇二
六六七七五	六六九九四	六八二九二	六八四八五	六八〇二六
六八九六五	七〇六五四	七〇九七六	七一〇〇〇	七一〇一二
七一〇七五	七一一七八	七一二三一	七一四四〇	七一四八四
七二二〇九	七二四三三	七三〇四一	七三一四三	七三三三一
七三五一五	七三六〇一	七三七一三	七三九八七	七四四八七
七四五三七	七六四三三	七六五四三	七六八八五	七六七六一
七六九〇二	七七〇四二	七七二六〇	七七四三〇	七七五〇七
七七五一九	七七八九一	七九一六九	七九二二五	七九四二五
七九五六九	八〇〇二三	八〇二五四	八〇七七四	八〇八三七
八一〇五三	八一三八五	八一三八九	八一四二二	八一五五二
八一八七三	八一九七二	八三二〇九	八三二五三	八三五三二
八三三四〇	八三四七一	八三四九一	八三七〇九	八三八三七
八三九五四	八四二〇〇	八四二八二	八四六七九	八五〇九六
八五六五三	八五七二五	八五八九〇	八七二八五	八七六四三
八七六六四	八七七〇三	八七七〇七	八七九〇九	八七九七九

五八三九六　六六五四三　七一三六二　七三五二四　七七八七六　八〇五八七　八四四六七　八五九七八　八九五七〇　九三七八七　九九七八四　一〇二三〇二　一〇五二六六

五八五七八　六六六二〇　七二〇七二　七三六五三　七九三五四　八一二二五　八五六七二　八七一一一　九〇三五九　九三九四五　一〇〇二六三　一〇二三七七　一〇五四三六

五八六三六　六八一〇六　七二二三〇　七四五六四　七九四四〇　八一三四五　八五七九四　八七二七一　九一七二八　九五五八五　一〇〇二六六　一〇二四一九　一〇六六一〇

五八七四七　六八九七一　七二二四九　七六三三六　七九七五〇　八四二四〇　八五八七二　八七四五二　九二四一三　九六三四二　一〇一七二七　一〇四七八三　一〇九四〇四

五八七五〇　七〇九三一　七三三一三　七七六八九　八〇〇〇一　八四二六八　八五九二六　八七八九九　九三六九三　九八二四九　一〇二三二七　一〇五一三四　一一四八八四

拾等（參百本）

二八　七八四　二五六六　三六七六　六一九八　八七〇三　一〇七五五　一二七四二　一四七〇六　一五二六九　一七五一九　一八六四五　一九三六八　二二三六九　二三四五二　二三九七三　二四九三〇

六一　一五六九　二六五五　三六八二　六二七六　九〇二五　一〇八四六　一二七四六　一四七七〇　一五三〇六　一七六六二　一八七一九　一九五一一　二二四一九　二三四七六　二四一一七　二七〇四三

六五〇　一八四八　二九〇九　五〇三二　七二二三　九一五三　一〇九〇三　一三一五五　一四七五八　一五四四四　一七七三七　一八八九一　二二〇一五　二二八八五　二三五四一　二四三九七　二七〇六六

六九四　一八七八　二九七二　五〇八二　七四七七　九四六七　一二五四一　一三三三八　一五二三九　一七二四三　一七七六〇　一八九五九　二二三〇〇　二三三二九　二三八四四　二四四二七　二七一四五

七〇五　一九一四　三五〇六　五二六二　八五四七　一〇五九四　一二六四一　一三三六三　一五二六六　一七二五一　一七八一〇　一九三四八　二二三六四　二三三五九　二三九三八　二四七八五　二七一八一

八九五三五　九一八八六　九二二八〇　九五五七九　九七八五五　一〇一七四三　一〇一九八八　一〇三九五四　一〇五〇八七　一〇九一七八

八九九四六　九一九五八　九二四三二　九五六二五　九八二九五　一〇一七四六　一〇二一五九　一〇三九七二　一〇六六五一　一〇九一八五

九〇四一三　九一九七八　九三六三三　九五九六七　九九五七一　一〇一八六一　一〇二四二五　一〇四三一四　一〇六八〇九　一〇九二九九

九〇一一八　九二二一三　九三六四五　九六〇三九　一〇〇一八九　一〇一八八七　一〇二四八二　一〇四三三七　一〇六九六一　一一四九七四

九一六二五　九二二三七　九三八二一　九七六四〇　一〇一六五九　一〇一九六六　一〇三五九二　一〇四八三一　一〇九一〇八　一一四九七八

以上　壹等より拾等まで　總計壹千本



女（後付の一）

史傳地理書類



▲歴史傳記書類

●大日本通史　東京帝國大學教授文學博士萩野由之君編（全三冊…中下卷近刊）
上卷大判一〇〇〇頁　背皮上綴　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

●大日本歴史　法學博士文學士有賀長雄君著（全二冊…下卷近刊）
上卷大判一〇五〇頁　背皮上綴　正價貳圓　小包料拾六錢

●帝國史略　法學博士有賀長雄君著
全一冊大判一〇三〇頁　背皮上綴　正價壹圓參拾錢　小包料拾貳錢

●新撰日本外史　落合直文君　池邊義象君共著（諸伯數名家畫揷入）
全一冊大判一一〇二頁　背皮上綴　正價壹圓貳拾錢　小包料拾貳錢

●中等教育日本歴史　文學博士萩野由之君著　沿革地圖揷入（文部省檢定濟）
上下二冊背皮上綴中判六七五頁　正價各五拾五錢　郵稅各八錢

●日本歴史　文學士木寺柳次郎君著
全一冊洋並綴大判三七六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●新撰大日本帝國史　松井伯軒君著
全一冊洋並綴大判五六四頁　正價四拾錢　郵稅拾貳錢

●新撰日本小歴史　文學博士栗田寛君校閲　增田于信君著（西洋木版畫揷入）
全一冊洋並綴大判二一七頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●通俗日本歴史　足立栗園君著
全一冊洋並綴大判三三四頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

●通俗明治歴史　坪谷善四郎君著
全一冊洋並綴大判三五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

●通俗德川十五代史　岸上操君著
全一冊洋裝並綴大判三三四頁　正價貳拾錢　郵稅八錢

●增補西南戰史　川崎紫山君著
全一冊洋布上綴大判一三五〇頁　實價八拾錢　小包料拾六錢

●平壤包圍攻擊　陸軍大將野津道貫君序　藤野房次郎君著（寫眞版揷入）
全一冊洋布上綴大判七八二頁　正價七拾錢　小包料拾貳錢

●黃海大海戰　海軍大將伊東祐亨君題辭　平田勝馬君著（寫眞版揷入）
全一冊洋布上綴大判八三八頁　正價九拾錢　小包料拾六錢

●東洋通史　文學士久保天隨君著
全部十二冊割引金五圓　小包料五拾錢
全部十二冊和裝大判一冊三百頁　正價一冊五拾錢　郵稅一冊八錢

●第一卷より第二卷……………漢族生育時代
三皇五帝の世より楚漢の角逐迄

●第三卷より第六卷……………漢族繁榮時代
前漢の世より唐の中世迄

●第七卷より第九卷……………蒙古優勢時代
唐の末世より朱元間の人文迄

●第拾卷より第拾貳卷……………歐人東漸時代
明の初世より最近東洋事局迄

女（後付の四）

從軍知名記者共編 **日露戰史** 全部十六冊（大判三二〇〇頁） 正價一冊參拾錢 郵稅一冊參錢宛
▲全部割引金四圓貳拾錢 郵稅四拾錢

法學士山本信博君著 **北米合衆國史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三一〇頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

巖谷小波君 金子紫草君共編 少年世界讀本 **英吉利** 全一冊洋並製 正價貳拾錢 大判一四〇頁 郵稅四錢

同 少年世界讀本 **支那、朝鮮、暹羅、波斯及東洋諸國** 全一冊洋並製 正價貳拾錢 大判一四〇頁 郵稅四錢

文學士木寺柳次郎君著 中等教育 **東洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟） 全一冊脊皮上製 正價八拾錢 大判二八八頁 郵稅拾貳錢

文學士幸田成友君著 **東洋歷史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三二四頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

以太利馬加威里著 日本男爵林董君譯 **羅馬史論** 全一冊洋布上製 正價壹圓八拾錢 大判六六〇頁 小包料拾貳錢

法學士須崎芳三郎君著 **現代露西亞** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判四二六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

法學士須崎芳三郎君著 **露國侵略史** 銅版地圖挿入 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判二七八頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士木寺柳次郎君著 中等教育 **西洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟） 全一冊脊皮上製 正價七拾錢 大判二六六頁 郵稅拾貳錢

文學士吉國藤吉君著 **西洋歷史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三四八頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士（史學專攻）阪本健一君著 **世界史** 上卷 洋裝脊皮上製 正價壹圓六拾錢 大判一〇八〇頁 小包料拾貳錢

同 **同** 下卷 洋裝脊皮上製 正價貳圓 大判一四五四頁 小包料拾六錢

長谷川天溪君著 **通俗世界歷史** 全一冊洋並製 正價貳拾五錢 大判三三四頁 郵稅八錢

文學士久保天隨君著 **日本歷史寶鑑** 全一冊洋布上製 正價參圓 大判一六〇〇頁 小包料貳拾錢

文學博士萩野由之君譯述 **日本歷史評林** 全一冊洋布上製 正價壹圓八拾錢 大判一九一二頁 小包料拾六錢

文學士常盤大定君著 **印度文明史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三四七頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士高山林次郎君著 **世界文明史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三七六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士大町桂月君著 **日本文明史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三〇二頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士白河次郎君 國府種德君共著 **支那文明史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三二六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士久保天隨君著 **朝鮮史** 全一冊洋裝 正價四拾錢 大判三三六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

國友重章閱 恒屋盛服君著（地圖挿入） **朝鮮開化史** 全一冊洋布上製 正價壹圓 大判五六六頁 郵稅拾四錢

文學士阪本健一君著（密畫挿入） **日本風俗史** 全一冊洋並製 正價四拾錢 大判三四二頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

女（號付の六）

●世界風俗志（各國風俗寫眞廿三個入）
重田勘次郎君著
全一册 洋並製 中判 四六三頁 正價五拾錢 郵税八錢

●世界殖民史
法學士山内正瞭君著
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 洋並製 中判 三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢

●中等教育日本歷史要解
文學博士萩野由之君編述
法學博士阪谷芳郎君編
全一册 洋布上製 中判 四二四頁 正價五拾錢 郵税六錢

●靑淵先生六十年史
▲一名近世實業發達史
全二册 洋布上製 大判二二二〇頁 實價壹圓五拾錢 小包料貳拾四錢

●親鸞聖人
文學博士前田慧雲君述
全一册 大和製 大判 一二五頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

●明治人物小觀
太陽評論記者 鳥谷部春汀君著
全一册 紙皮上製 中判 四二八頁 正價參拾八錢 郵税八錢

●世界富豪の表裏
長田秋濤君著
全一册 洋並製 大判 二六二頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●明治人物評論
太陽評論記者 鳥谷部春汀君著
全一册 紙皮上製 小判 四二三頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

●續明治人物評論
同
全一册 紙皮上製 小判 四四八頁 正價參拾錢 郵税六錢

●上杉謙信
松井柏軒君著
全一册 紙皮上製 小判 一三四頁 正價貳拾錢 郵税四錢

●子ルソン傳
海軍省敎育本部大島貞益君譯
英國水師提督
全一册 洋布上製 大判 一三二〇頁 正價壹圓六拾錢 小送料拾貳錢

●基督觀
豫言者宮崎虎之助君著
全一册 洋並製 大判 二四八頁 正價四拾錢 郵税六錢

▲地理紀行書類

●中等國史地圖
文學博士文學士原秀四郎君著
全一册 洋布上製 大判 頁 正價 錢 郵税 錢

●大英貴賓の日本觀
英國リーズデール卿原著 水田榮雄君譯述
全一册 洋並製 中判 頁 正價 錢 郵税 錢

●大日本地誌
理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著
全部拾册大判背皮上製
總紙數約一千頁

第壹卷―關東
都市彩色地圖拾葉
寫眞銅版貳百餘圖
相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島及小笠原島
紙數九百三十頁
◉正價貳圓五拾錢
◉小包送料拾貳錢

第貳卷―奥羽
石版彩色地圖八葉
寫眞銅版百七十圖
盤城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七ヶ國
紙數九百六十頁
◉正價貳圓五拾錢
◉小包送料拾貳錢

第三卷―中部
石版彩色地圖九葉
寫眞銅版二百圖
尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛驒、信濃、
紙數千五十餘頁
◉正價貳圓五拾錢
◉小包送料拾六錢

第四卷―近畿
石版彩色地圖拾葉
寫眞銅版九拾四圖
山城、大和、河内、和泉、攝津、伊賀、伊勢、近江、丹波、丹後、播磨、紀伊、淡路、
紙數千三百餘頁
◉正價參圓
◉小包送料拾六錢

第五卷 北陸

若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、

都市彩色地圖四葉 寫眞銅版百六十圖 紙數七百五十頁 ●正價貳圓五拾錢 ●小包送料拾貳錢

理學士佐藤傳藏君著
●日本新地理 全一冊 洋裝 大判 三一四頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

大和田建樹君著
●通俗日本地理 全一冊 洋裝 大判 二九六頁 正價參拾錢 郵税八錢

野崎左文君 田山花袋君 島田定知君 藤本藤陰君共著
●日本名勝地誌 全十二冊 洋裝 中判五一〇〇頁 正價一冊參拾錢 郵税一冊六錢

入木柴三郎君著 (關東の部)
●學生必携修學旅行案内 全一冊 洋布上製 三六判 六九二頁 正價四拾五錢 郵税八錢

中村士德君 大久保千濤君共著
●本邦地理詳説 全一冊 洋布上製 大判 七〇〇頁 正價壹圓八拾錢 小包料拾貳錢

理學士佐藤傳藏君著 (上卷日本ノ部)(下卷外國ノ部)
●中等教育地理學教科書 全二冊 背皮上製 大判 四二四頁 正價一冊五拾錢 郵税一冊八錢

理學士佐藤傳藏君著
●萬國新地理 全一冊 洋裝 大判 三三八頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

理學士吉田弟彥君著 進江保君著
●通俗世界地理 全一冊 洋裝 大判 三四〇頁 正價參拾錢 郵税八錢

●地文學 全一冊 洋裝 大判 三二八頁 正價四拾錢 郵税拾錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

法學士山本信博君著
●政治地理學 全一冊 洋裝 大判 三三〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

理學士佐藤傳藏君著
●地質學 全一冊 洋裝 大判 三三六頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

文學博士文學士原秀四郎君著
●日本國史地圖 全一冊 洋布上製 大判 本文一九二頁 正價壹圓七拾錢 郵税拾四錢
▲大判着色地圖二十四枚▲細圖百餘枚挿入

麻生鐵三君著 (五二一共進會銀牌受領)
●全國鐵道線路 名所古跡明細 旅行案内地圖 麻生式新案折本 正價四拾五錢 郵税四錢

理學士佐藤傳藏君著(統計表及寫眞版三十二葉入)
●中等教育日本地圖 全一冊 洋上製 大判 七〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著(統計表及寫眞版四十葉挿入)
●中等教育萬國地圖 全一冊 洋上製 大判 八〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

理學士吉田弟彥君著 大判縱一尺二寸橫八寸八分附録重要統計四十圖
●改訂日本商業地圖 全一冊 洋上製 大地圖十一圖 正價壹圓 小包料拾貳錢

法學士勝部國臣君著
●清國商業地理 全一冊 洋裝 大判 三五八頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

文學士田淵友彥君著
●韓國新地理 全一冊 洋裝 大判 三五〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

松永聽劍君編纂
●樺太及勘察加 全一冊 洋裝 大判 三六〇頁 正價五拾錢 郵税八錢

河口慧海君著 (石版地圖ヲ寫眞銅版挿入)
●世界の秘密國 西藏旅行記 全二冊 洋布上製 大判 八九〇頁 正價一冊壹圓 郵税一冊拾貳錢

女(續付の七)

博文館編輯局主幹坪谷善四郎君著
●日本漫遊案内　全二册　洋布上製頗美本　中判一三〇〇頁　正價一册壹圓　郵稅一册拾錢
（上下共）府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖、全國兩半部彩色刷大地圖添附

野崎左文君　田山花袋君共著
●改訂増補漫遊案内　全一册洋布上製　小判六二六頁　正價五拾錢　郵稅八錢

大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
●増補千山萬水　全一册洋布上製　小判七〇二頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
●續千山萬水　全一册洋布上製　小判六五〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

文學士久保天隨君著
●檜木笠　全一册紙皮上製　小判五〇〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大町桂月君著（寫眞版八葉挿入）
●一蓑一笠　全一册紙皮上製　小判三七六頁　正價參拾錢　郵稅六錢

大橋乙羽君著（彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入）
●歐山米水　全一册特別上製　大判一七〇頁　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢

大橋乙羽君著（寫眞版挿入）
●歐米小觀　全一册洋布上製　小判二六二頁　正價四拾錢　郵稅四錢

鎌田榮吉君著（寫眞版挿入）
●歐米漫遊雜記　全一册紙皮上製　小判四二四頁　正價四拾錢　郵稅六錢

水田榮雄君著（寫眞版挿入）
●大英國漫遊實記　全一册紙皮上製　小判七〇〇頁　正價七拾錢　郵稅拾錢

松井廣吉君著（寫眞版十六葉挿入）
●米國漫遊雜記　全一册紙皮上製　小判二八六頁　正價參拾八錢　郵稅六錢

安部磯雄君著
●北米の新日本　全一册洋並製　中判二二三頁　正價參拾五錢　郵稅四錢

飯島榮太郎君著（寫眞版挿入）
●米國渡航案内　全一册紙皮上製　小判三七二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

木村芳五郎君　井上胤文君共著
●最新正確布哇渡航案内　全一册洋並製　大判二三六頁　正價參拾八錢　郵稅六錢

西園寺侯爵題辭　香川悅次君著
●支那旅行案内　全一册洋並製　三六判六〇〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢

森次太郎君著
●歐米書生旅行　全一册洋並製　三六判三二〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

石倉重繼君著（寫眞銅版三十四葉挿入）
●本派本願寺名所圖會　全一册洋並製　大判三九四頁　正價六拾錢　郵稅拾錢

石倉重繼君著（石版密畫及寫眞銅版十六葉入）
●大谷派本願寺名所圖會　全一册洋並製　大判二二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢

石倉重繼君著（寫眞銅版十六葉挿入）
●佛光寺名所圖會　全一册洋並製　大判一〇八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

石倉重繼君著（寫眞銅版二十二葉挿入）
●日蓮宗各本山名所圖會　全一册洋並製　大判三五六頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

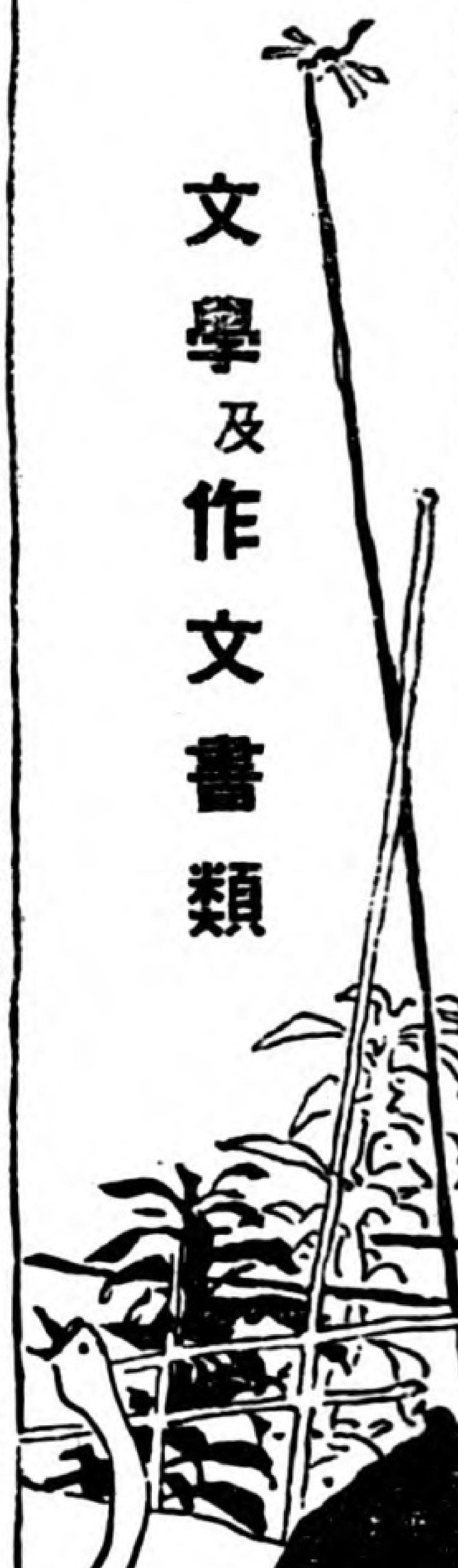
石倉翠葉君著（寫眞銅版廿三葉挿入）
●成田山名所圖會　全一册洋並製　大判一五八頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

石倉翠葉君著（寫眞銅版數多挿入）
●善光寺名所圖會　全一册洋並製　大判二七六頁　正價四拾五錢　郵稅八錢

高野山座主原心猛大僧正題辭　石倉翠葉君著（寫眞銅版三十餘枚挿入）
●高野山名所圖會　全一册洋並製　大判三四二頁　正價六拾錢　郵稅拾錢

石倉翠葉君著（寫眞銅版二十四葉挿入）
●日光名所圖會　全一册洋並製　大判五一〇頁　正價六拾五錢　郵稅拾貳錢

文學及作文書類



●文學博士高山林次郎君著　姉崎博士　齋藤學士共輯（全部六卷）
樗牛全集第一卷　美學及美術史　全一册洋布上綴　大判五五二頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

●同　樗牛全集第二卷　文藝及史傳上　全一册洋布上綴　大判一〇〇〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾六錢

●同　樗牛全集第三卷　文藝及史傳下　全一册洋布上綴　大判七七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

●同　樗牛全集第四卷　時論及思索　全一册洋布上綴　大判一一一八頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾六錢

●同　樗牛全集第五卷　想華及消息　全一册洋布上綴　大判六七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

●文學士太田善男君編
文學概論　全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●文學士林森太郎君著
日本文學史　全一册洋並綴　大判三五二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●文學士久保天隨君著
日本儒學史　全一册洋並綴　大判二九二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●文學士笹川臨風君著
支那文學史　全一册洋並綴　大判三二二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●奧村[illegible]太郎君著
日本文學汎論　全一册洋並綴　大判三二六頁　實價貳拾錢　郵稅八錢

●文學士小川銀次郎君編
世界美術史上下　全二册洋並綴　大判六四八頁　正價一册四拾錢　郵稅一册八錢
▲特製本　洋布上綴　正價一册五拾五錢　郵稅一册拾錢

●文學士小川銀次郎君著
近世美術史　全一册洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅一册拾錢

●文學博士高山林次郎君著
近世美學　全一册洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●文學士石倉小三郎君著
西洋音樂史　全一册洋並綴　大判三一五頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●文學士白河次郎君　國府犀東君共著
支那學術史綱　全一册洋並綴　大判一三八頁　正價拾五錢　郵稅四錢

●文學士有馬祐政君著
藝術論　全一册洋並綴　大判三二〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●太陽記者長谷川天溪君著
文學訓　全一册洋並綴　小判三五〇頁　正價金參拾錢　郵稅六錢

●世界文學史　文學士橋本忠夫君著　全一冊洋並製 大判二八六頁 正價四拾錢 郵税八錢　▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

●英國文學史　栗原文學士 藤澤文學士共編　全一冊洋並製 大判三一四頁 正價四拾錢 郵税八錢　▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

●日本文章史　文學士大町桂月君著　全一冊洋並製 大判二九二頁 正價四拾錢 郵税八錢　▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

●時代管見　文學博士高山林次郎君著　全一冊紙皮上製 小判五二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

●文藝評論　文學博士高山林次郎君著　全一冊紙皮上製 小判四八〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

●文藝小品　内田不知庵君著　全一冊紙皮上製 小判六一〇頁 實價貳拾五錢 郵税六錢

●龍吹鶴語　國府犀東君著　全一冊紙皮上製 小判二六四頁 實價拾五錢 郵税四錢

●大絃小絃　文學士大町桂月君著　全一冊紙皮上製 小判四二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

●みだれ箱　齋藤綠雨君著　全一冊紙皮上製 小判三九八頁 正價貳拾八錢 郵税四錢

●あられ酒　齋藤綠雨君著　全一冊紙皮上製 小判四六五頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

●うもれ木　與謝野鐵幹君作　全一冊紙皮上製 小判二六八頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

●雅三俗四　石井研堂君著　全一冊紙皮上製 小判二〇〇頁 實價拾五錢 郵税六錢

●雜木林　文學士大町桂月君著 桂月文集　全一冊洋並製 小判三〇〇頁 正價貳拾八錢 郵税四錢

●小文章　紫山川崎三郎君著 古人今人孰是孰非 風雲月露大殊小殊　全一冊紙皮上製 小判三〇四頁 實價拾錢 郵税四錢

●新文林　大和田建樹君著　全一冊洋並製 中判四三二頁 正價貳拾四錢 郵税六錢

●文章組立法　大和田建樹君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●書簡文作法　大和田建樹君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●美文作法　田山花袋君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●商業作文法　天城安政君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●支那時文軌範　青柳篤恒君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●紀行文作文　西村醉夢君著 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●寫生文範　福田琴月君著　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●論説記事文範　河井醉茗君編 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●女子消息文範　西田敬止君編 通俗作文全書　全一冊洋並製 中判三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●學生作文寶鑑　内山幻堂君著 中等　全一冊洋布上製 中判六二〇頁 正價七拾五錢 郵税拾貳錢

文學博士重野安繹君序　石崎篁園君編述
●國民作文軌範　全一冊紙皮上製　三六判五六〇頁　正價四拾錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
●袖珍實用作文寶典　全一冊洋布上製　小判一〇二〇頁　正價六拾五錢　郵稅六錢

百東持中君編
●作文熟語字典　全一冊洋布上製　小判九八〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢

文學博士萩野由之君著
●中等教育作文法　全一冊洋並製　中判五〇〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

宮川鐵次郎君著
●通俗文章學（美麗寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

上村左川君編
●記事論說文範　全一冊洋並製　大判二四四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●女子作文の栞（彩色木版寫眞銅版挿入）　全一冊和並製　大判二三六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

岸上操君編
●作文自在　全一冊洋並製　大判二七四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
●作文組立法　全一冊洋並製　大判一六九頁　正價拾五錢　郵稅六錢

池田一倒君著
●今驗作文六大秘訣　全一冊紙皮上製　小判三二二頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

堀江秀雄君著
●學生必携作文資料　全一冊洋並製　小判二一六頁　正價拾五錢　郵稅四錢

井上敏夫君著
●國語熟語作文錦囊　全一冊紙皮上製　小判四三〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

文學士武島又次郎君著
●修辭學　全一冊洋並製　大判三〇六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢

博文館編輯局編纂
●祝辭演說法（彩色木版寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

中島氣崢君著
●演說活法　附演說法名家談　全一冊洋布上製　小判二二六頁　正價參拾錢　郵稅四錢

宮田修君著
●通俗言語學　全一冊洋並製　大判三五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

文學博士金澤庄三郎君、後藤朝太郎君共譯
●言語學　上下　全二冊洋並製　大判　頁　正價一冊四拾錢　郵稅一冊八錢
▲特製本　洋布上製　正價一冊五拾五錢　郵稅一冊拾錢

石橋思案君校　星野參人君編
●紅葉書翰抄　全一冊洋並製　大判橫綴　一三九頁　正價五拾錢　郵稅六錢

幻堂內山正如君著
●實用普通作文寶鑑　全一冊洋布上製　中判五〇〇頁　正價七拾錢　郵稅拾四錢

神戶高等商業學校教授中川靜君著
●書翰文研究　全一冊紙皮上製　中判長形　四五三頁　正價六拾五錢　郵稅八錢

中村秋香君著
●書翰文大成　全一冊洋布上製　大判三四八頁　正價壹圓　小包料拾貳錢
▲和裝箱入　正價壹圓　小包料拾六錢

內山幻堂君著
●明治書翰文大全（寫眞版八葉挿入）　全一冊洋並製　大判四六〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

大和田建樹君著
●書簡組立法　全一冊洋並製　大判一六〇頁　正價拾五錢　郵稅六錢

樋口一葉女史著
●通俗書翰文（彩色木版寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判二四六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

物集文學士　長文學士共編
●散文韻文美文辭彙　全一冊洋布上製　三六判九七〇頁　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾錢

國文和歌書類

第二高等學校教授岡澤鉦次郎君著
●新式日本文典原理 一名理論的日本文典
全一册洋布上綴 大判七三二頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

文學士岡田正美君著
●解說批評日本文典
上下二册洋並綴 大判六〇八頁 正價各四拾錢 郵稅各八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵稅一册拾錢

落合直文君著
●中等教育日本文典（文部省檢定濟）
全一册脊皮上綴 中判四八八頁 正價六拾錢 郵稅拾錢

落合直文君著
●中等教育文法教科書
全一册脊皮上綴 大判一二六頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

學習院女子部長下田歌子女史著
●女子普通文典
全一册和並綴 大判二四六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

文學士鈴木暢幸君著
●日本口語文典
全一册洋並綴 大判三一六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲洋布特製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

內藤恥叟君校閱 大宮宗司君校註
●校註神皇正統記
全一册洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

中村秋香君校訂
●吉野拾遺詳解
全一册洋並綴 大判一五二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君删定
●中等教育删定徒然草（文部省檢定濟）
全一册洋並綴 大判一一二頁 正價拾八錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
●校註徒然草
全一册洋並綴 大判二〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君校註
●標註枕草子
全二册洋並綴 大判五三四頁 正價一册參拾錢 郵稅一册六錢

佐々木信綱君校註
●校註竹取物語
全一册洋並綴 大判七六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

同
●校註土佐日記
全一册洋並綴 大判五〇頁 正價拾錢 郵稅貳錢

同
●校註方丈記
全一册洋並綴 大判六〇頁 正價八錢 郵稅貳錢

同
●校註伊勢物語
全一册洋並綴 大判一〇六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

同
●校註更科日記
全一册洋並綴 大判九四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君 落合直文君 池邊義象君校註
●日本文學全書
全部廿四册 中判一册約四百頁 正價一册廿五錢 郵稅參錢宛

●第一編
○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記

●第二編
○土佐日記 ○枕草紙 ○更科日記

●第三編
○方丈記 ○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨內侍日記

●第四編
○とりかへばや物語 ○堤中納言物語 ○四季物語

●第五編
○中務內侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記

●第六編
○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

女（後付の一二）

●第七編
○宇治拾遺物語
○多武峰少將物語

●自第八編至第十二編
○源氏物語 五册に分本

●自第十三編至第十五編
○榮花物語 上、中、下三册

●自第十六編至第十八編
○太平記 上、中、下三册

●第十九編
○保元物語
○平治物語
○秋夜長物語
○鶴鷺合戰物語

●第二十編
○平家物語

●第廿一編
○古今著聞集

●第廿二編
○公事根源
○十訓抄

●第廿三編
○水鏡
○大鏡

●第廿四編
○增鏡

大和田建樹君選
●古文讀本
全六册和並綴 大判七五六枚 正價壹圓六拾錢 郵稅各四錢
▲正價一卷ヨリ五卷迄貳拾五錢 六卷參拾五錢

國學院編纂
●名文評釋
全一册洋並綴 大判四五二頁 正價五拾錢 郵稅拾錢

落合直文君編
●中等教育國文軌範
全一册洋並綴 中判三八〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
●新撰假名遣活法
全一册洋並綴 小判一七〇頁 正價拾五錢 郵稅貳錢

大和田建樹君著
●歌まなび
全一册洋布上綴 中判一〇三八頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

佐々木信綱君著
●增補詠歌自在
全一册洋布上綴 中判七八〇頁 正價壹圓 郵稅拾貳錢

落合直文君著
●新撰歌典
全一册洋並綴 中判六一〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●詠歌の栞
全一册和並綴 大判二一〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君著
●詠歌辭典
全一册洋布上綴 小判一三七六頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

宮澤春文君著
●作歌自在（彩色木版寫眞版挿入）
全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

文學士武島羽衣君著
●竸賞歌話
全一册紙皮上綴 小判三四〇頁 正價貳拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君校註
●賀茂眞淵翁全集
全二册洋並綴 中判一〇〇〇頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●本居宣長翁全集
全一册洋並綴 中判五四二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●香川景樹翁全集
全一册洋並綴 中判一〇二三頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●小澤蘆庵翁全集
全一册洋並綴 中判五二二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●近世名家々集
全二册洋並綴 中判一〇七二頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●近世長歌今樣歌集
全一册洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●桂園門下家集
全一册洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●明治名家々集
全二册洋並綴 中判一一五四頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

加茂眞淵翁編
●賀茂翁家集
全五册木版刷 中判二百廿三枚 正價六拾錢 郵稅拾錢

黒澤翁滿翁編
●むぐらね集
全三册和本綴 大判木版刷 正價八拾錢 郵稅拾錢

佐々木信綱君校註
●校註明倫歌集
全一册洋並綴 大判二二二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

女（後付の一三）

佐々木弘綱君 佐々木信綱君校訂

日本歌學全書

全部十二冊 正價一冊廿五錢
中判 毎冊約四百頁 郵稅六錢 完

●第一編
○古今和歌集 ○躬恒家集 ○友則家集 ○貫之家集 ○忠岑家集

●第二編
○後撰和歌集 ○元輔家集 ○順家集 ○能宣家集 ○天德歌合

●第三編
○拾遺和歌集 ○紫式部家集 ○公任家集 ○清少納言家集

●第四編
○後拾遺和歌集 ○相模家集 ○經信卿母集 ○高陽院歌合

●第五編
○金葉和歌集 ○詞華和歌集 ○堀川百首

●第六編
○千載和歌集 ○永久百首 ○忠度朝臣集 ○後京極自歌合

●第七編
○新古今和歌集 ○自讃歌

●第八編
○鴨長明集 ○林下集 ○從三位頼政集 ○山家集 ○金槐集

●自第九編至第十一編
○萬葉集上中、下三冊

●第十二編
○悦目抄 ○無名抄 ○歌がたり ○にひまなび ○新學異見 ○歌ぶくろ ○[illegible]の直路

●校註古今和歌集
學本宗愼君校註
全一冊洋並製 中判二四八頁 正價拾五錢 郵稅四錢

●百人一首講義
佐々木信綱君校註
全一冊洋並製 中判三〇〇頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

●おもひ草
佐々木信綱君著
全一冊洋布上製 中判一五二頁 正價五拾錢 郵稅六錢

●竹柏園集
佐々木信綱君編纂
全二冊紙皮上製 小判一〇七〇頁 正價一冊卅五錢 郵稅一冊六錢

●庭の摘草 附歌話記
子爵黒田清綱君、税所敦子女史共撰
村松今朝太郎君編
全一冊和上製 中判二六二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●冠詞例歌集
從五位末松房泰君著
全一冊紙皮上製 小判二一〇頁 實價拾五錢 郵稅四錢

●新體詩歌自在
中郡秋香君著
全一冊洋布上製 中判八三四頁 正價壹圓 郵稅拾貳錢

●新體詩學
大和田建樹君著
全一冊洋並製 小判二二四頁 正價拾五錢 郵稅四錢

●美文韻文 花紅葉
鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著
全一冊洋布上製 小判四二二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●美文韻文 黄菊白菊
文學士大町桂月君著
全一冊紙皮上製 小判四〇二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

●天地有情
文學士土井晩翠君著
全一冊洋布上製 小判二三〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

●美文韻文 霓裳微吟
文學士武島羽衣君著
全一冊紙皮上製 小判三六八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●美文韻文 暗香疎影
文學士鹽井雨江君著
全一冊紙皮上製 小判三七四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

●美文韻文 磯馴松
佐々木信綱君、印東昌綱君合著
全一冊紙皮上製 小判四一二頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢

●散文韻文 雪月花
大和田建樹君著
全一冊紙皮上製 小判六二六頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●散文韻文 深山櫻
大和田建樹君著
全一冊紙皮上製 小判七〇二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

●散文韻文 藻鹽木
大和田建樹君著
全一冊紙皮上製 小判五九〇頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

●美文韻文 創作要訣
[illegible]著
全一冊洋並製 中判二〇六頁 正價拾貳錢 郵稅六錢

小說書類



故尾崎紅葉君著、小波君思案君校訂

●紅葉全集

全部六册洋裝大判總クロース金字金模樣附……堅牢美本

▲正價一册壹圓八拾錢全部金拾圓小包料拾貳錢宛

▲紙數一册約九百餘頁總紙數五千六百頁

第一卷 ●色懺悔 ●巴波川 ●戀の蛻 ●關東五郎 ●猿枕 ●二人むく助 ●風雅娘 ●南無阿彌陀佛 ●此ぬし ●男色懺悔 ●わかれ蚊帳 ●二人女房 ●新桃花扇 ●枯華薇笑 ●夏痩 ●文ながし ●七十二文命の安賣

第二卷 ●伽羅枕 ●紙きぬた ●おぼろ舟 ●夏小袖 ●むき玉子 ●戀の病

第三卷 ●三人妻 ●心の闇 ●俠黑兒 ●袖時雨 ●男ごゝろ ●むらさき

第四卷 ●隣の女 ●三箇條 ●青葡萄 ●不言不語 ●冷熱 ●八重襷 ●靈料理 ●浮木丸

第五卷 ●多情多恨 ●千箱の玉章 ●安知歇貌林 ●寒牡丹

第六卷 ●金色夜叉前編 ●續金色夜叉 ●煙霞療養 ●金色夜叉中編 ●續々金色夜叉 ●紅葉山人傳 ●金色夜叉後編 ●紅葉著作年表

元祿娘さん著 現代生活裏面觀察

●呪はれたる女

全一册洋装上製 大判 二一〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

巖谷小波君著 和田英作君畫 伯林土産

●戀の畫葉書

▲一名 留學生氣質

全一册洋布上製 中判 四六〇頁 正價壹圓 郵税拾錢

同君著

●洋行土産

全二册洋布上製 中判菊形 八四〇頁 正價一册壹圓廿錢 郵税一册拾貳錢

同君著

●笑の國

小波休暇之友

全一册洋布上製 中判 三七七頁 正價金六拾錢 郵税八錢

海軍主計中監窪田重弌君著 日露戰役紀念

●彈片

全一册洋装上製 三六判 五〇〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

千葉紫草君纂譯

●最近外交秘密

全一册洋装上製 小判 三一七頁 正價參拾錢 郵税六錢

泉鏡花君外十四名合作

●換菓篇

全一册新形美本 中判 三〇〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

村井弦齋君著

●女道樂

（木版彩色寫眞插入）

全一册和裝上製 大判 四六六頁 正價八拾錢 郵税拾貳錢

村井弦齋君著

●酒道樂

（木版彩色寫眞插入）

全二册洋布上製 大判 五五四頁 正價一册八拾錢 郵税一册八錢

江見水蔭君著 軍事小說

●武裝の卷

（極彩色木版畫口繪插入）

全一册石版表紙 大判 二四八頁 正價貳拾五錢 郵税八錢

理學士綠依軒主人著 社會主義新小說

●文明の大破壞

全一册洋装上製 大判 四五四頁 正價四拾錢 郵税八錢

内田不知庵君著 ●社會百面相 全一册洋並製 大判五五四頁 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

樋口一葉女史著 ●一葉全集 全一册洋並製 大判四八六頁 正價四拾錢 郵稅拾錢

大橋乙羽君著（彩色大版密畫挿入）●花鳥集 全一册洋布上製 中判一二〇八頁 正價壹圓 小包料拾貳錢

大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入）●初子集 全一册洋布上製 小判五九六頁 正價四拾錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入）●風月集 全一册洋布上製 小判四二二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

大橋乙羽君君（彩色木版密畫挿入）●若栄籠 全一册和本製 小判三二〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

大橋乙羽君著 政治小說 ●累卵の東洋 全一册洋並製 小判二〇六頁 正價拾八錢 郵稅四錢

幸田露伴君著（木版彩色密畫挿入）●ひげ男 全一册洋並製 大判三四八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

饗庭篁村君著 ●聚寶盆 全一册紙皮上製 小判四九二頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

巖谷小波君著（寫眞銅版挿入）●女波男波 全一册紙皮上製 小判六二二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

巖谷小波君著（寫眞銅版挿入）●笑 全一册紙皮上製 小判五三八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

江見水蔭君著（寫眞銅版挿入）●戀 全一册紙皮上製 小判三八二頁 正價參拾錢 郵稅四錢

江見水蔭君著（寫眞銅版挿入）●星 全一册紙皮上製 小判六八四頁 實價貳拾五錢 郵稅八錢

怒濤庵江見水蔭君著並畫 實地探檢 ●捕鯨船 全一册洋並製 大判二〇〇頁 正價參拾五錢 郵判六錢

若松賤子女史譯述（肖像入）●小公子 全一册洋並製 大判三七四頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

森田思軒君譯述（寫眞版密畫入）●十五少年 全一册洋並製 大判二九六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

露國レオ、トルストイ伯著 田山花袋君譯 ●哥薩克兵 全一册洋並製 大判二三〇頁 正價拾八錢 郵稅六錢

高橋光威君譯述 ロビンソン ●絶島漂流記 全一册洋並製 大判四九八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

櫻井鷗村君譯述 勇少年冒險譚 ●初航海 全一册紙皮上製 小判三一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

押川春浪君著 ●海底軍艦 全一册紙皮上製 小判三九八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同 英雄小說 ●武侠の日本 全一册紙皮上製 小判四八二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

同 海國冒險奇譚 ●新造軍艦 全一册紙皮上製 小判三五一頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同 英雄小說 ●武侠艦隊 全一册紙皮上製 小判三三二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同 英雄小說 ●新日本 全一册紙皮上製 小判三七二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

同 傳奇小說 ●銀山王 全一册洋並製 小判三二七頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同 海島探險 ●塔中の怪 全一册紙皮上製 小判三三二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

櫻井鷗村君譯

●世界冒險譚

正價一冊參拾錢　郵稅六錢宛

全部十二冊中判　每編一冊二百四十餘頁

一編　●金掘少年
二編　●遠征奇談
三編　●二勇少年
四編　●續遠征奇談
五編　●決志少年
六編　●漂流少年
七編　●殖民少年
八編　●航海少年
九編　●不撓少年
十編　●朽木の舟
十一編　●俠勇少年
十二編　●絕島奇談

●帝國文庫

正價（●壹冊金六拾錢　●拾冊以上五分引　●參拾冊以上壹割貳分引）

▲小包料拾貳錢（小包送二百廿匁許）

全部五十冊　一冊約千頁　洋裝中判總布背皮金文字入

一編　眞書太閤記卷一
二編　眞書太閤記卷二
三編　眞書太閤記卷三
四編　眞書太閤記卷四　▲附　太閤記朝鮮軍記
五編　源平盛衰記
六編　南總里見八犬傳上
七編　南總里見八犬傳中
八編　南總里見八犬傳下
九編　東海、奥羽、木曾、江の島　道中膝栗毛
一〇編　梅曆春告鳥
一一編　通俗三國志上
一二編　通俗三國志下
一三編　三馬傑作集
一四編　柳澤、越後、黑田、加賀、伊達　騷動實記
一五編　京傳傑作集
一六編　種彥傑作集
一七編　星月夜鎌倉顯晦錄　北條九代記
一八編　通俗十二朝軍談　通俗武王軍談　通俗明清軍談
一九編　甲越軍記
二〇編　通俗吳越軍談　通俗漢楚軍談
二一編　楠廷尉秘鑑
二二編　風來山人傑作集
二三編　西鶴全集上（禁實）
二四編　西鶴全集下（禁實）
二五編　滑稽名作集上
二六編　滑稽名作集下
二七編　其磧自笑傑作集上
二八編　其磧自笑傑作集下
二九編　人情本傑作集上
三〇編　氣質全集
三一編　珍本全集上
三二編　珍本全集中
三三編　珍本全集下
三四編　人情本傑作集下
三五編　赤穗復讐全集
三六編　水滸傳上
三七編　水滸傳下
三八編　忠臣藏淨瑠璃集
三九編　四大奇書上
四〇編　續氣質全集
四一編　四大奇書下
四二編　近松時代淨瑠璃
四三編　大岡政談
四四編　佛教各宗高僧實傳
四五編　仇討小說集
四六編　馬琴傑作集
四七編　淨瑠璃名作集
四八編　俠客傳全集
四九編　續仇討小說集
五〇編　近松世話淨瑠璃

●續帝國文庫

正價（●壹冊金六拾錢　●貳拾冊以上八分引　●參拾冊以上壹割貳分引）

▲小包料壹冊拾貳錢（小包送二百廿匁內外）

▲全部五十冊　紙數壹冊千頁以上洋裝中判　クロース背皮金文字入美本

一編　眞田三代記　▲附日本武士鑑
二編　近世說美少年錄
三編　日本歌謠類聚上
四編　日本歌謠類聚下
五編　偐紫田舍源氏
六編　竹田出雲淨瑠璃集
七編　朝夷巡島記
八編　兒雷也豪傑譚
九編　江戶作者淨瑠璃集
一〇編　前々太平記　▲附　前太平記

女（後付の一七）

一一編　太平記
一二編　紀海音淨瑠璃集
一三編　續近松淨瑠璃集
一四編　近松半二淨瑠璃集
一五編　後太平記　▲附　北條五代記
一六編　脚本傑作集上（絶版）
一七編　京山全集
一八編　校訂落語全集
一九編　並木宗輔淨瑠璃集
二〇編　紀行文集
二一編　一九全集
二二編　漂流奇談全集
二三編　部郷都國物語　續稀彥傑作集
二四編　校訂續紀行文集
二五編　續水滸傳
二六編　傾城水滸傳
二七編　文耕堂淨瑠璃集
二八編　白縫譚上
二九編　白縫譚下
三〇編　北雷英談時代鏡

三一編　常山紀談
三二編　萬物滑稽合戰記
三三編　續一九全集
三四編　校訂黄表紙百種
三五編　校訂俳優全集
三六編　校訂俗曲大全
三七編　續々紀行文集
三八編　續馬琴傑作集
三九編　脚本傑作集下
四〇編　續京傳三馬傑作集
四一編　釋迦八相倭文庫上
四二編　釋迦八相倭文庫下
四三編　種彥短編傑作集
四四編　俊傑神稻水滸傳上
四五編　俊傑神稻水滸傳中
四六編　俊傑神稻水滸傳下
四七編　校訂近世奇談全集
四八編　校訂名家短編傑作集
四九編　佛教各宗高僧實傳
五〇編　校訂名家漫筆集

曲亭馬琴翁著（木箱入）
●南總里見八犬傳
全五十冊和本製　大判三〇五一枚　正價九圓五拾錢　運賃五拾錢

文學博士坪内逍遙君序文　胄々園伊原敏郎君著
●日本演劇史
全二冊洋並製　大判七八五頁　正價一冊八拾五錢　郵税一冊八錢
▲特製合本　洋布上製　正價壹圓八拾五錢　小包料拾貳錢

文學博士坪内逍遙君著
●新樂劇論　緒論
全一冊洋並製　大判九八頁　正價弐拾錢　郵税四錢

同君著　新曲
●浦島
全一冊洋布上製　中判五四頁　正價八拾五錢　郵税六錢

同君著　新曲
●かゞや姫
全一冊和本製　大判五四頁　正價八拾五錢　郵税六錢

福地櫻痴居士新作　肥後武士江戸櫻者
●花盛劇楓葉
全一冊洋並製　大判一一八頁　正價弐拾五錢　郵税四錢

福地櫻痴居士作（密畫挿入）
●山中平九郎
全一冊洋並製　大判一六八頁　正價參拾錢　郵税六錢

福地櫻痴居士作（密畫挿入）
●芳哉義士の譽
全一冊洋並製　大判一五二頁　正價參拾錢　郵税六錢

依田學海君著　脚本
●小御門
全一冊洋並製　小判一八二頁　正價五錢　郵税弐錢

石橋思案君校訂
●落語全集
全二冊洋布上製　中判一〇九二頁　正價六拾錢　郵税拾四錢

博文館編輯局編　新撰
●落語大全
全一冊洋並製　大判三二〇頁　正價弐拾五錢　郵税弐錢五厘

博文館編輯局編纂
●軍談大鑑
全一冊洋並製　大判三二〇頁　正價弐拾五錢　郵税弐錢五厘

依田學海君序文　松林伯圓翁講演　伯圓講演
●菅公
全一冊洋並製　大判二五四頁　正價參拾五錢　郵税六錢

松林伯圓翁講演　御前講演
●中山大納言
全一冊紙皮上製　小判三七四頁　正價弐拾五錢　郵税四錢

談洲樓燕枝...

女（號付の一八）



歌舞音曲書類



大和田建樹君著
●増補謠曲通解
全一册背皮上製　大判一七八六頁　正價壹圓八拾錢　小包料拾六錢

大和田建樹君著
●謠曲文粹
全一册紙皮上製　小判五三〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

幸田露伴君校訂
●校訂狂言全集（上卷狂言記、中卷續狂言記、下卷狂言記拾遺）
全三册和紙橫綴　中判一三〇〇頁　正價一册五拾錢　郵稅一册八錢
▲上帙入合本　正價壹圓六拾錢　小包料拾貳錢

大和田建樹君著
●謠と能　彩色木版及寫眞銅版挿入
全一册洋並製　大判二七六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著（毎編密畫挿入）
●能のしをり
全六册洋並製　中判一二九〇頁　正價一册四拾錢　郵稅一册六錢

芳賀文學博士　三上文學博士序文　山本九馬亭君著
●浄瑠璃通解
全六册和上製　大判約一三〇〇頁　正價一册卅五錢　郵稅一册六錢
▲全部正價金貳圓　小包料貳拾錢

水谷不倒君校訂
●義太夫百番
全一册洋布上製　小判六七六頁　正價壹圓　郵稅拾貳錢

水谷不倒君編
●竹本攝津大椽（寫眞銅版挿入）
全一册和上製　大判二三〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢

博文館編輯局編纂
●聲曲自在（彩色木版及寫眞銅版挿入）
全一册洋並製　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

博文館編輯局編纂
●琴曲獨稽古　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並製　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

鶯亭金升君著
●都々逸一千題
全一册紙皮上製　小判五六〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

鶯亭金升君著
●風雅文庫
全部六册小判洋裝紙皮上製　金文字入紙數各約三百頁
正價　●一册金貳拾錢　●六册金壹圓拾錢　▲郵稅一册金四錢
【一】都々逸の栞　【二】冠句の栞　【三】狂歌の栞　【四】狂句の栞　【五】狂體句の栞　【六】雜俳の栞

博文館編輯局編
●琴曲獨稽古
全一册洋並製　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

百足登君著
●胡弓の栞
全一册洋並製　中判一〇〇頁　正價拾錢　郵稅四錢

大阪五行
●義太夫本
上等半紙木版摺　正價壹枚參厘五毛の割
▲大功記外百十六種あり

◉帝國文庫續帝國文庫中歌曲浄瑠璃集少なからざるも右は文庫として小說中に編入しあれば觀客其心して覧玉へかし



家庭書類

● **家政學** 學習院女子部長下田歌子女史著
全二册和 並綴 大判 四三〇頁　正價一册參拾錢 郵税一册六錢

● **家政案內** 岸上操君著（彩色木版寫眞銅版挿入）
全一册洋 並綴 大判 二五六頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **家事要訣** 學習院女子部長下田歌子女史著
全一册和 並綴 大判 二八二頁　正價參拾五錢 郵税八錢

● **家庭の模範** 中村鈴子女史編
全一册洋 布上綴 中判 四二四頁　正價參拾八錢 郵税六錢

● **最新家計簿記** 曾我部純一君著
全一册洋 並綴 大判 一三四頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **女子手藝要訣** 學習院女子部長下田歌子女史著
全一册和 並綴 大判 二六二頁　正價參拾五錢 郵税八錢

● **實用裁縫全書** 飯田呉服店裁縫部主任小岩井規太郎君 同副主任鹽田直三君合著
全一册和 並綴 大判 二六六頁　正價五拾錢 郵税八錢

● **實用刺繡術** 刺繡術專門 磯村大次郎君著
全一册洋 並綴 大判 一二四頁　正價貳拾五錢 郵税四錢

● **實用造花術指南** 山田興松君著
全一册洋 並綴 大判 一〇〇頁　正價貳拾五錢 郵税四錢

● **裁縫と編物** 吉田詷子君著 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入
全一册洋 並綴 大判 二六二頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **新家庭訓** 三輪田高等女學校長三輪田眞佐子女子著
全一册和 上綴 大判 三一〇頁　正價四拾五錢 郵税八錢

● **應用家庭美術** 家庭百科全書 森田洪、鈴木古拙、牧野等君共著
全一册洋 並綴 中判 三四〇頁　正價四拾錢 郵税六錢

● **衣服と流行** 博文館編輯局編纂 木版刷錦繪及寫眞版挿入
全一册洋 並綴 大判 二三六頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **增訂日本女禮式大全** 坪谷善四郎君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入）
全一册洋 布上綴 大判 五九二頁　正價九拾錢 小包料拾貳錢
▲蒔繪函入特製 和上綴 正價壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢

● **女子普通禮式** 學習院女子部長下田歌子女史著
全一册洋 並綴 大判 二六二頁　正價參拾五錢 郵税八錢

● **和洋禮式** 大橋乙羽君著（木版刷錦繪及寫眞銅版挿入）
全一册洋 並綴 大判 二四八頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **新撰小學女禮式** 中島義式君著 密畫挿入
全一册洋 並綴 大判 二二〇頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● **家庭百科全書 四季料理** 大日本割烹學會長石井泰次郎君著
全一册和 上綴 大判 三〇〇頁　正價四拾五錢 郵税八錢

● **紳士の顧問** 米國法律學士宮本桂仙君著
全一册洋 並綴 三六判 二三〇頁　正價參拾錢 郵税六錢

● **家庭衞生訓** 千葉勝泉君 鹿島喚菴君共編
全一册洋 並綴 小判 四〇八頁　正價參拾五錢 郵税六錢

女（後付の二〇）

● 女子衛生學　海軍大軍醫隱岐敬治郎君譯　全一册 小判 洋並綴 三二〇頁　正價參拾錢 郵稅四錢

● 育兒と衛生　西田敬止君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入）　全一册 大判 洋並綴 二四四頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 婦女家庭訓　學習院女子部長下田歌子女史著　全一册 大判 和並綴 三六二頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

● 家庭教育　泰西所見　同　全一册 大判 和並綴 二五二頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 日本家庭節用　實驗問答　報知新聞家庭記者中村木公君編　全一册 三六判 洋布上綴 一二七四頁　正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢

● 家庭の心得　學習院女子部長下田歌子女史著　全一册 大判 和並綴 二六八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 母親の心得　同　全一册 大判 和並綴 二六八頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

● 學校の心得　同　全一册 大判 和並綴 二三〇頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 女學生訓　文學士大町桂月君著　全一册 小判 洋並綴 二五六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 女學生の栞　松原岩五郎君著　全一册 大判 洋並綴 三三〇頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 女訓評釋　千河岸櫻所君評釋　全一册 大判 和上綴 四一六頁　正價六拾錢 郵稅拾錢

● 下女讀本　輪入　村井弦齋君著　全一册 大判 洋並綴 一一〇頁　正價拾五錢 郵稅四錢

● 女子職業案内　近藤正一君著　全一册 三六判 洋並綴 四七〇頁　正價四拾五錢 郵稅六錢

● 日本女子立志編　千河岸櫻所君編（木版錦繪口繪挿入）　全二册 大判 和並綴 七三六頁　正價一册六拾錢 郵稅一册八錢

● 外國少女鑑　學習院女子部長下田歌子女史著　全一册 大判 和並綴 二三八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 內國少女鑑　同　全一册 大判 和並綴 二二八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 庭訓お伽噺　同　全一册 大判 和並綴 二三四頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● お伽噺教艸　同　全一册 大判 和並綴 二四二頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 女子遊戲の栞　濱本義顯君著（木版錦繪挿入）　全一册 大判 和並綴 二三〇頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

● 明治姫鏡　婦女教育　讀賣新聞記者關如來君著（寫眞版十三葉三十九孃挿入）　全一册 大判 和紙刷 三一四頁　正價六拾錢 郵稅八錢

● 明治の令孃　治庖會第四敎場主幹龜井まき子女史著　全一册 中判 洋並綴 一八二頁　正價參拾錢 郵稅六錢

● 家庭料理法　學習院女子部長下田歌子女史著　全一册 大判 洋並綴 二三〇頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

● 料理手引草　藤本藤隆君著（木版刷錦繪及寫眞銅版挿入）　全一册 大判 洋並綴 三三〇頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

● 實用料理法　佐々木季君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入）　全一册 大判 洋並綴 二八四頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 西洋料理法　全一册 大判 洋並綴 二五四頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 料理早指南　醍醐山人編　全二册 中本 和紙刷 和裝　正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 衛生食物調理法　阪本隆哉君著　全一册 大判 和並綴 一五四頁　正價參拾錢 郵稅六錢

● 病者の食餌　阪本隆哉君著　全一册 中判長形 紙皮上綴 一五六頁　正價貳拾錢 郵稅四錢

俳諧書類



●俳諧美學　中川[illegible]君著（[illegible]）　全一册洋皮製 大判 二五〇頁　正價參拾錢 郵税六錢

●俳諧提要　雪中庵雀志宗匠校閲 五乳人约雪君編　全一册和本横綴 中判 三五五頁　正價五拾錢 郵税八錢

●俳諧自在　老鼠堂永機君編　全一册洋布上製 小判 一二三〇頁　正價壹圓 郵税拾貳錢

●俳諧獨學　三宅青軒君著（彩色木版寫眞銅版挿入）　全一册洋皮製 大判 二五六頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

●和歌俳諧節用集　廣田精知君著　全二册和紙銅刻 小判 二九二枚　正價參拾五錢 郵税四錢

●付合作法全集　伊藤松宇君校訂（名家手蹟寫眞銅版挿入）　全一册洋皮製 大判 三六三頁　正價參拾錢 郵税八錢

●明治壹萬句　内藤鳴雪君閲 今井柏浦君編　全一册和裝横綴 中判 四四〇頁　正價參拾五錢 郵税六錢

●芭蕉全集　老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂（寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 三〇四頁　正價參拾錢 郵税八錢

●其角全集　老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂（寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 二八〇頁　正價參拾錢 郵税八錢

●嵐雪全集　雪中庵雀志君校訂（名家手蹟寫眞版入）　全一册洋皮製 大判 二九〇頁　實價貳拾錢 郵税八錢

●支考全集　老鼠堂永機君 其角堂機一君校訂（名家手蹟寫眞挿入）　全一册洋皮製 大判 三四〇頁　實價貳拾錢 郵税八錢

●許六全集　大野洒竹君校訂（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 三〇〇頁　實價貳拾錢 郵税八錢

●也有全集　岡野知十君校訂（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 二八四頁　實價貳拾錢 郵税八錢

●麥太全集　不白軒梅年君 雪中庵雀志君 雪袋人宇貫君校訂（寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 三二二頁　正價參拾錢 郵税八錢

●素堂鬼貫全集　大野洒竹君校訂（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 二八八頁　正價參拾錢 郵税八錢

●蕪翁句集　角田竹冷 佐藤紅緑人 大野洒竹三君校訂　全三册木版 美濃判和紙刷　正價壹圓 郵税拾錢

●蕪村曉臺全集　大野洒竹君校訂（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 三〇〇頁　正價參拾錢 郵税八錢

●一茶大江丸全集　大野洒竹君校訂（名家手蹟寫眞版挿入）　全一册洋皮製 大判 三二〇頁　正價參拾錢 郵税八錢

女（後付の二二）

老鼠堂永機君 晉雪庵柳涯君校訂
●蕉門十哲集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三〇二頁 正價參拾錢 郵税八錢

大野洒竹君校訂
●芭蕉以前俳諧集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋裝 大判六三〇頁 正價一冊參拾錢 郵税一冊八錢

大野洒竹君校訂
●元祿名家句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判二八六頁 正價參拾錢 郵税八錢

角田竹冷君校訂
●俳諧句合全集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判二一八頁 正價參拾錢 郵税八錢

犀崎紅葉君校訂
●俳諧類題句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋裝 大判七二〇頁 正價一冊參拾錢 郵税一冊八錢

俳諧社寺中校
●一茶句集
全二冊和裝 木版和紙刷 正價貳拾五錢 郵税六錢

竹村秋竹君編
●明治俳句
全一冊紙皮上製 小判五〇〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

內藤鳴雪翁題句 高濱虛子君序文
●俳句資料解釋
峯青嵐君編著
全一冊和裝 小判三〇〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

幸田露伴君序文 華堂得知君解
●略解時代狂句選
全一冊洋裝 三六判三五〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

芭蕉翁編
●掌中俳諧七部集
全二冊和裝小本 正價貳拾貳錢 郵税四錢

一葉舍仙兎翁輯
●俳諧玉葉集
全一冊和裝長本 正價拾五錢 郵税四錢

北村季吟君撰 高井蘭山君訂
●俳諧增山の井
全二冊和裝中本 正價貳拾貳錢 郵税六錢

不木園主人輯
●俳諧今人發句集
全二冊中本橫綴 正價參拾錢 郵税拾錢

巖谷小波君校訂
●俳諧文集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三二八頁 正價參拾錢 郵税八錢
目次（●本朝文鑑●和文藻●芙蓉文集●新編俳諧文集●秋風庵文集●雛口集）

巖谷小波君校訂
●俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三三〇頁 正價參拾錢 郵税八錢
目次（玉くしげ●俳諧●南北新話●俳諧耳底記●三草紙●俳諧串抄●蕉門俳諧語錄●俳諧參話●柿晉問答●山中問答●湖東問答●俳諧或問俳諧七草）

巖谷小波君校訂
●讀俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三〇六頁 正價參拾錢 郵税八錢
目次（芭蕉二十五ヶ條●俳諧有也無也關●俳諧十論●俳諧十論爲辨抄●續五論●片歌二夜問答●十二話●白雄夜話●俳諧雪おろし●俳諧七草）

大野洒竹君校訂
●俳諧珍本集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三一八頁 正價參拾錢 郵税八錢
目次（立圃句集●梅翁宗因句集●兩吟一日千句●俳諧破邪顯正●丙寅紀行●俳諧爪作●脊すだれ●新三百韻●のぼり鶴●節文集●俳諧古選●春泥句集●涼袋獨吟集●花見次郎●舍利風語）

佐藤飯人君校訂
●俳諧紀行全集（大判古俳人手蹟寫眞入）
全一冊洋裝 大判四〇〇頁 實價貳拾錢 郵税八錢
目次（發凡七則●俳諧紀行全集提要●日本行脚文集●野洒紀行●翁圖抄●奥細道菅菰集●奥細道拾遺●椎の葉●陸奥千鳥●廢諧菴入日記）

鴨澤四丁君校訂
●俳諧逸話全集（名家眞蹟寫眞版挿入）
全一冊洋裝 大判三三二頁 正價參拾錢 郵税八錢
目次（滑稽太平記●行脚怪談袋●蕉翁消息集●俳家奇人談●俳人百家選●歌俳百人選●續俳家奇人談●名家叢談）

角田竹冷君校閲 星野麥人君 牧野望東君合著
●俳諧年表
全一冊和上製 大判二八六頁 正價六拾錢 郵税八錢

辭典書類

- 石川鴻齋君校訂 鼇頭音譯 康熙字典（銅刻上帙入）▲桐函入上製 正價五圓五拾錢 全六冊 中判一五二二枚 和紙刷 正價四圓五拾錢 小包料貳拾錢 小包料四拾錢
- 市河清流君 三音四聲 字貫 高井思明君校訂（銅刻上帙入）▲桐函入上製 正價六圓 全五冊 中判一六一〇枚 和紙刷 正價五圓參拾錢 小包料貳拾錢 小包料參拾錢
- 石川鴻齋君校訂 篆文詳註 日本大玉篇（銅刻上帙入）全三冊 中判七二八枚 和紙刷 正價貳圓六拾錢 小包料拾貳錢
- 土生柳平君校正 明治大廣益 會玉篇大全 木村品太郎君編輯（銅刻上帙入）全三冊 中判六六四枚 和紙刷 正價貳圓六拾錢 小包料拾貳錢
- 石川鴻齋君著 新撰日本字典（銅刻上帙入）全二冊 中判一〇一〇頁 和紙上綴 正價壹圓 郵稅八錢
- 干河岸貫一君撰 作文演說 格言辭典 全一冊 小判五八四頁 洋布上綴 正價五拾錢 郵稅八錢
- 靑木輔淸君編 廣益中字典 全一冊 中判八三〇頁 洋布上綴 正價八拾錢 郵稅拾錢
- 戶田翠香君著 文章字典（銅刻上等和紙刷）全一冊 中判五八二頁 和上綴帙入 正價七拾錢 郵稅六錢
- 大田淳軒君著 新撰歷史字典（銅刻上等和紙刷）全一冊 中判四九五頁 和上綴帙入 正價六拾錢 郵稅六錢
- 石川鴻齋君補閱 增補和漢 歷史文章字引 川田孝吉君編輯 銅刻和並綴 中判二〇四枚 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

- 大田淳軒君著 新撰明治字典 銅刻和紙上綴 小判四七〇頁 正價參拾八錢 郵稅四錢
- 齋木寬直君著 明治文選字引 銅刻和紙上綴 小判二一六枚 正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 棚橋廣君著 新撰漢語字引 銅刻和紙上綴 小判一三八枚 正價貳拾五錢 郵稅貳錢
- 大和田建樹君著 日本大辭典 全一冊總皮上綴 大判一八〇〇頁 正價貳圓貳拾錢 小包料拾貳錢
- 大和田建樹君著 日本小辭典 全一冊洋布上綴 小判一一八〇頁 正價七拾五錢 郵稅八錢
- 大宮宗司君編纂 日本辭林 ▲特製本洋布上綴 正價四拾錢 郵稅八錢 全一冊洋並綴 小判七二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢
- 棚橋廣君著 日本いろは新字典 全一冊銅刻和綴 小判二二〇頁 正價參拾錢 郵稅四錢
- 大月曙四郎君編 懷中玉篇 銅刻洋布上綴 小判三三六頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 文學士大町芳衞君 文學士久保天隨君 大田淳軒君共編 新式いろは引節用辭典 ▲總革特製本 正價貳圓五拾錢 小包料拾五錢 全一冊洋布上綴 三六判二三〇〇頁 正價弍圓 小包料拾貳錢
- 博文館編輯局編纂 傳家寶典 明治節用大全 彩色美麗木版畫挿入（事物節用）全一冊脊皮上綴 大判一二三二頁 正價壹圓六拾錢 小包料拾六錢

女（後付の二四）

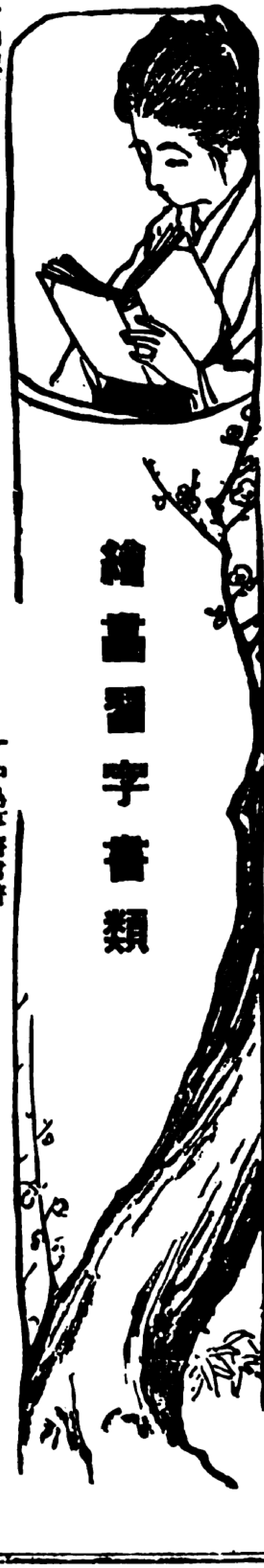
立志及受驗書類



- 文學士大町桂月君著 ●軍國訓 全一册洋並綴 小判三三六頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢
- 文學士大町桂月君著 ●學生訓 全一册紙皮上綴 小判二四八頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 文學士大町桂月君著 ●續學生訓 全一册紙皮上綴 小判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 文學士大町桂月君著 ●青年訓 全一册洋並綴 小判三一八頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢
- 文學士大町桂月君著 ●處世訓 全一册洋並綴 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 慶應義塾教授菅綠陰君著 ●成功要錄 全一册紙皮上綴 中判二二〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢
- 慶應義塾教授菅綠陰君著 ●言行要錄 全一册紙皮上綴 中判二六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢
- 文學博士中村正直君譯述 ●改正西國立志編 全一册洋並綴 中判六〇八頁 正價貳拾七錢 郵稅八錢
- 東京女學館教授西田敬止君編 ●益軒十訓 全一册脊皮上綴 中判一一〇二頁 正價壹圓 小包料拾貳錢
- 大町文學士序文 讀賣新聞記者田村逆水君著 ●成功と人格 全一册洋並綴 大判一八〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢



- 文學士杉原朝之助君著 ●帝國修身軌範 全四册和並綴 小判三六九頁 實價一册拾錢 郵稅一册四錢
- 高等師範學校教諭本田增次郎君著 ●處世要訓 全一册洋並綴 中判二四〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢
- 法學士田中次郎君譯述 ●學生立身策 全一册洋並綴 小判一七六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢
- 米國ジョン、トット氏原著 吉田巳之助君譯述 ●成功遂志勤學要訣 全一册洋並綴 中判四七〇頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢
- 法學士丸尾雄君著 ●日常行爲法則（彩色木版密畫寫眞版挿入） 全一册洋並綴 大判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 法學士桐生政次君著 ●勤學と處世（彩色密畫挿入） 全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 澁江保君著 ●世界格言大全 全一册洋布上綴 小判一三七二頁 正價四拾錢 郵稅四錢
- 文學博士井上哲次郎君 文學士有馬祐政君共編 ●武士道叢書 全三册洋裝 大判約一六〇〇頁 正價一册五拾錢 郵稅一册拾貳錢 ▲下卷に限り郵稅拾四錢
- 秋山悟庵君編纂 ●現代大家武士道叢論 全一册洋並綴 大判約四百餘頁 正價五拾錢 郵稅拾錢
- 文學士有馬祐政君 秋山悟庵君共編 ●武士道家訓集 全一册洋並綴 大判三三六頁 正價四拾五錢 郵稅八錢



繪畫習字書類

- 海軍省御認可 日露戰役 **海軍寫眞集** 第一輯 太陽判寫眞五十枚 正價貳拾五錢 郵税六錢 ▲特製木光澤紙刷 正價七拾五錢 郵税八錢
- 同 **同** 自第二輯至第四輯 太陽判寫眞各五十枚 正價一册參拾錢 郵税一册六錢 ▲特製木光澤紙刷 正價一册八拾錢 郵税八錢
- 毛筆畫研究會編 **初心毛筆畫譜** 全五册和裝木版 和紙彩色刷 正價一册拾貳錢 郵税一册四錢
- 小林永濯君畫 **子供遊び畫帖** 全一册和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓五拾錢 郵税貳拾錢
- 瀧和亭翁畫 **花鳥畫譜** 全一册和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓 郵税拾四錢
- 酒井抱一畫伯編 **光琳百圖** 全二册和紙木版 大判七二枚 正價五拾錢 郵税四錢
- 狩野探幽畫伯筆 **探幽百富士** 全四册和紙木版 大判一一〇頁 正價壹圓 郵税拾四錢
- 狩野康信君編 探幽縮圖 **聚珍畫譜** 全三册和紙木版 本書大判六九枚 正價貳圓 郵税拾四錢
- 谷文晁畫伯筆 谷文晁 **本朝畫纂大全** 全四册和紙木版 大判一一〇枚 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢
- 西川祐信君著 **祐信畫鑑** 全三册和紙木版 大判五三枚 正價四拾五錢 郵税拾錢

- 中島亭齋君著 **亭齋畫譜** 全二册和紙木版 大判四二枚 正價參拾錢 郵税六錢
- 市河米菴君著 **楷行薈編**（上等和紙木版刷） 全十五册和上製 大判六二五枚 正價參圓 小包料拾六錢
- 瀬尾鴎齋君編纂 **草叢**（上等和紙木版刷） 全十二册和上製 美濃判七〇〇枚 正價參圓五拾錢 小包料拾六錢
- 河村槑森君著 **十體千字文** 全一册和紙木版 中判一八二頁 正價貳拾參錢 郵税四錢
- 柳澤小陽君書 **三體千字文** 全一册和紙木版 中紙刷七五枚 正價四拾錢 郵税四錢
- 巖谷一六君書 **一六蘭亭帖** 全一册和紙刷 半紙判二七枚 正價貳拾錢 郵税貳錢
- 日下部鳴鶴君書 **鳴鶴蘭亭帖** 全一册和紙木版 半紙判二五枚 正價貳拾錢 郵税貳錢
- 大和田建樹君著 巖谷一六居士書 **明治書翰文** 全一册和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾錢 郵税四錢
- 依田學海君著 巖谷一六居士書 **新撰應用書翰** 全一册和紙木版 大判八五枚 正價參拾五錢 郵税四錢
- 河村吉之輔君著 **初學手紙の文** 全二册和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾五錢 郵税六錢

理科及數學書類



理學士福井政一君著
●普通物理學
上下二册洋並綴 大判 六三〇頁 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢

岐阜縣師範學校教諭蒔田宗次君著述
●中等教育 新撰物理學楷梯
全一册洋布上綴 中判 三八八頁 正價五拾錢 郵稅八錢

理學士龜高德平君著
●有機化學
全一册洋並綴 大判 四〇〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士眞島利行君著
●無機化學
全一册洋並綴 大判 三五四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

福岡東筑中學教諭松村吉之助君著
●受驗適用 新撰化學參考書
全一册洋布上綴 中判 二六〇頁 正價四拾八錢 郵稅六錢

仙臺醫學專門學校教授須崎勝三郎君著
●應用定量分析
全一册並綴 大判 三四四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

▲右四種共各洋布特製一册正價五拾五錢 郵稅拾錢宛

藤野修吉君 花井七三郎君 草野堅藏君共著
●通俗理化一斑
全一册洋並綴 大判 三三〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

池上泰次郎君著
●受驗必携 物理學演習
全一册洋並綴 小判 一五〇頁 正價拾五錢 郵稅四錢

理學士須藤傳治郎君著
●星學
全一册洋並綴 大判 三三二頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

農學博士稻垣乙丙君著
●農藝物理 氣象學
全一册脊皮上綴 大判 五四〇頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

理學士岡田武松君著
●近世氣象學
全一册洋並綴 大判 三三八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士一戸直藏君著
●高等天文學
全一册洋並綴 大判 三二四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

▲右二種共各洋布上綴一册 正價五拾五錢 郵稅拾錢宛

理學士蘆野敬三郎君編
●科學藝術 純正寫眞術
全一册洋布上綴 中判 三五八頁 正價壹圓 郵稅八錢

藥學得業士金澤廢君著
●寫眞及幻燈
全一册洋並綴 大判 二三二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

第二高等學校教授理學士安田篤君著
●增補訂正 植物學汎論（密畫挿入）
全一册脊皮上綴 大判 六四八頁 正價貳圓 小包料拾貳錢

理學士飯塚啓君著
●植物學新論
全一册洋並綴 大判 三一四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理學士遠藤吉三郎君著
●日本有用 海產植物
全一册洋布上綴 大判 二二八頁 正價壹圓廿五錢 郵稅八錢

理學士會田龍雄君著
●新撰動物學
全二册洋布上綴 大判 五六〇頁 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵稅一册拾錢

川村守義君著
●通俗動物學（密畫入）
全一册洋並綴 大判 三〇〇頁 正價貳拾錢 郵稅八錢

理學士飯島啓君著
●海產動物學
全一册洋布上綴 大判 六八〇頁 正價貳圓 小包料拾貳錢

女（後付の二八）

東京帝國大學助教授理學士飯塚啓君著
● **動物發生學** 全一册洋並綴 大判三五〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

腹卷助太郎君編
理學士大築佛郎君 理學士八谷彪一君共著
● **實用鑛物及地質** 全一册洋並綴 中判二五九頁 正價參拾錢 郵税六錢

● **鑛物學** 全一册洋並綴 大判三六四頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

農學博士稻垣乙丙君著
● **農學校用氣象學教科書** 全一册洋布上綴 大判一四六頁 正價六拾錢 郵拾八錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
● **新式算術講義** 全一册洋布上綴 大判四七〇頁 正價壹圓 郵税拾貳錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
● **新撰算術** 全一册洋並綴 大判三〇六頁 正價四拾錢 郵税八錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
● **新撰代數學** 全一册洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢

京都帝國大學教授理學士林鶴一君著
● **新撰幾何學** 全一册洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
● **新撰解析幾何學** 全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
● **新撰三角法** 全一册洋並綴 大判二八二頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
● **新撰微分積分學** 全一册洋並綴 大判三五六頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲右四種共各洋布特製一册 正價五拾五錢 郵税拾錢宛

理學博士坪井正五郎君著
● **學藝叢書 人類學叢話** 全一册洋並綴 大判二三六頁 正價四拾錢 郵税六錢

理學博士三好學君著
● **學藝叢書 植物學叢話** 全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價四拾錢 郵税六錢

工學士重見道之君著
● **工業叢書 工業數學** 全一册洋布上綴 中判四三〇頁 正價九拾錢 郵税貳錢

第六高等學校教授松尾哲太郎著
● **新撰中等用器畫教科書解說** 全一册洋布上綴 大判一七三頁 正價五拾錢 郵税八錢

同
● **新撰中等用器畫教科書圖式** 全一册厚表紙綴 太陽判石版摺 正價五拾錢 郵税六錢

理學士林鶴一君著
● **初等平面三角法教科書**（文部省檢定濟） 全一册洋布上綴 中判一二〇頁 正價四拾錢 郵税四錢

理學士藤田外次郎君著（上卷算術代數の部 下卷幾何學の部）
● **文部省檢定受驗用新撰數學講義** 全二册洋並綴 中判五七八頁 正價一册卅八錢 郵税一册六錢

佐久間文太郎君著
● **中等教育算術教程** 全一册洋並綴 大判二二三頁 正價四拾錢 郵税六錢

理學士松村定次郎君著
● **代數學難問解義** 全一册洋並綴 中判四三〇頁 正價六拾錢 郵税拾錢

竹貫褧文君補 竹貫直人君編
● **實用新式速算法** 全一册洋並綴 中判二九四頁 正價參拾五錢 郵税六錢

竹貫登代多君編
● **算術手引草** 全一册脊皮上製 中判四七六頁 正價五拾錢 郵税六錢

三山暉信君著
● **實用數學一萬題** 全一册洋並綴 中判五一〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

竹貫直人君著
● **數學遊戲** 全一册紙皮上綴 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

竹貫直人君著
● **少年算術遊戲** 全一册洋並綴 中判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

時事新報速記主任熊崎健一郎君著
● **最新速記術** 全一册洋並綴 中判三二〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

遊戯及技藝書類



●新案 福引種本　石橋思案君序文　加野孤雁君編
全一册 新形美本 中判 一六〇頁　正價拾八錢 郵稅四錢

●征露紀念 續福引種本　石橋思案君序文　加野孤雁君　有田鐵笛君共編
全一册 新形美本 中判 一四六頁　正價拾八錢 郵稅四錢

●福引集　安藤謙吉君著
全一册 洋裝 小判 一四四頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

●模範運動會法 附 新式舞踏遊戯　日本遊戯研究會編纂
全一册 洋裝 中判 三〇〇頁　正價參拾錢 郵稅六錢

●最近野球術　早稻田大學野球選手橋戸信君著
全一册 紙皮上製 三六判 二七五頁　正價參拾錢 郵稅六錢

●理論實驗 競技運動　前山口縣知事法學士武田千代三郎君著
全一册 洋布上製 大判 六七八頁　正價壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢

●心身鍛錬 少年競技運動　津田素彦君著
全一册 洋裝 小判 一五四頁　正價拾八錢 郵稅四錢

●ベースボール クリケット　同
全一册 洋裝 小判 一二六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

●庭球術　野田圭園君著
全一册 洋裝 小判 一五〇頁　實價八錢 郵稅貳錢

●少年遊戯 奇術種本　竹貫直人君著
全一册 洋裝 三六版 二五〇頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

●玉突術　三宅鐵骨君著
全一册 洋裝 小判 一六〇頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

●室內遊戯法　志岐守二君著
全一册 洋裝 小判 二三二頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

●全國兒童遊戯法　太田才次郎君著
全三册 洋裝 大判 四五〇頁　正價一册拾錢 郵稅一册四錢

●武道根本 劍武術　神刀流擊劍館武術開祖日比野雷風君著
全一册 洋裝 中判 二四二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

●征露伐國 劍舞獨習圖解　適心齋井口義爲君著
全一册 洋裝 中判 二四六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

●夢判斷 附 夢占法　血達磨鶴飼貞君編
全一册 洋裝 中判 一一四頁　正價貳拾錢 郵稅四錢

●西洋秘傳 魔術　澁江保君著
全一册 洋裝 大判 三五〇頁　正價參拾錢 郵稅八錢

●名家實談 銃獵案內　戸田主獵局長校閲　報知新聞記者高橋迎月君著
全一册 洋上製 三六判 二四六頁　正價參拾錢 郵稅六錢

●銃獵案內　佐野信三郎君　內藤健行君合著
全一册 洋裝 小判 一九六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

●鳥獸狩獵法　志岐守二君著
全一册 洋裝 小判 一四八頁　實價八錢 郵稅貳錢

●諸鳥飼養全書　川口清五郎君著　全一册洋布上綴 大判二一九頁　正價九拾錢 郵税拾錢

●金魚飼養法　前田閑亭君著　全一册洋並綴 大判一六二頁　正價貳拾八錢 郵税四錢

●釣遊秘術 釣師氣質　石井研堂君著　全一册洋布上綴 大判七〇〇頁　正價九拾五錢 小包料拾貳錢

●漁魚術　滿尾藤次郎君著　全一册洋並綴 小判一二〇頁　實價八錢 郵税貳錢

●最新游泳術　加藤進君 向井正治君合著　全一册洋並綴 中判二六二頁　正價參拾錢 郵税四錢

●弓術新書　田邊蓮舟翁閲 内山勗君著　全一册洋並綴 大判九八頁　正價貳拾八錢 郵税四錢

●射的術及弓術　津田素彦君著　全一册洋並綴 小判一二〇頁　正價八錢 郵税貳錢

●圍碁全集　故七段 小林鐵次郎君遺稿 男二段 小林鍵次郎君編述　全部拾貳册 和裝中判 一册八十有餘頁

正價（壹册金拾五錢 六册金八拾五錢）拾貳册壹圓六拾五錢 郵税一册ニ付金貳錢

【一】圍碁入門　【二】圍碁初歩　【三】圍碁定石　【四】圍碁詰方　【五】圍碁布石法　【六】評釋古今名家打碁集

【七】互先定石集（上）　【八】同（中）　【九】同（下）　【十】近古名人打碁集　【十一】近世名人打碁集　【十二】今代名人打碁集

●圍碁大鑑　中川龜三郎君 小林鐵次郎君 巖崎健造君合著　全二册和紙上綴 大判二〇〇頁　正價六拾錢 郵税六錢

●新撰圍碁錦嚢　本因坊土屋君校訂 山田橘平君著　全三册和紙上綴 小判三一八頁　正價五拾錢 郵税四錢

●絶妙秘訣 圍碁獨習案内　方圓社員六段大澤銀次郎君編　全二册和紙上綴 小判二〇一枚　正價參拾五錢 郵税四錢

●新撰定石 圍碁獨稽古　方圓社員六段大澤銀次郎君編纂 田村君補輯　全三册和紙上綴 小判一〇七枚　正價參拾五錢 郵税六錢

●圍碁と將棊　平田純一郎君編述　全一册洋並綴 大判二三八頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

●各傳比較 點茶活法　岡崎淵沖君著　全四册和上綴帙入 大判六〇〇頁　正價貳圓五拾錢 小包料拾六錢

●茶の湯大全　江刺家協一君著　全一册洋布上綴 中判五〇八頁　正價六拾錢 郵税八錢

●茶の湯と生花　博文館編輯局編纂　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋並綴 大判二五八頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

●挿花盆石 四時の詠（優雅木版畫）　吐月齋惠一烏君編纂　全三册和紙上綴 大判一四〇枚　正價五拾錢 郵税六錢

●挿花盆石 正風花鏡（優雅木版畫）　秀貫齋月一向君編纂　全三册和紙上綴 大判二〇二枚　正價五拾錢 郵税六錢

●新撰活花圖式　大露庵河村一洗君選　全二册木版刷 美濃紙　正價四拾錢 郵税六錢

●挿花大樂抄圖會　榮雲齋先生編　全二册木版刷 美濃紙　正價四拾錢 郵税六錢

●盆景、盆山 盆石、盆庭 秘訣圖解　江原春夢君著　全一册洋並綴 大判二二〇頁　正價參拾錢 郵税六錢

●盆山百景圖　順石軒翁編　全一册大判 木版刷　正價壹圓 郵税拾四錢



幼年
少年
書類

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今滿天下の貴婦人介孃佳人爭ふて之を用ひ賞賛の聲を囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

一本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す

◉美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり◉



紀念增刊 現代婦人成功立志談
明治四十年六月十五日發行 毎月一回五日發行
第七卷第九號
明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可

(定價金貳拾錢)